橋本多佳子全句集

附やぶちゃん注

［やぶちゃん注：底本は一九八九年立風書房刊「橋本多佳子全集」を用いるが、彼女は戦前から活動した作家であることから、私の特に俳句のテクスト化ポリシーに従い、恣意的に敗戦前の句を含む句集分の漢字を概ね恣意的に正字化して示してあるので注意されたい。底本の字空け等は再現していない。

本ＰＤＦ化に際しては、ルビ化とポイント修正などに手間取り、本文の全校訂は行っていない（一部の発見したミス・タイプは補正した）。しかも私のＰＤＦソフトはリンク加工が可能なだけの限定版であり、万一、本文や注に誤りがあった場合、一から総て作り直さなければならないため、今回はこの頁のみのリンクを有効化させ、本文内のリンクは加工を施していないβ版として公開することとした。一見、リンクしているように見えているが、それらは機能しないので、悪しからず。リンク先の閲覧が必要な場合は、お手数であるが、ブログ版の当該箇所を探して、クリックされたい。御迷惑をお掛けするが、御寛恕願いたい。句その他で誤植や疑義を発見・意識された方は是非、御指摘を乞うものである。

最後に。私の電子テクストをこまめに読んで下さる見知らぬ方に「名も無きしづ」という、私の注での疑問への見解や誤植を御指摘下さる方がおられ、先に「この國の夏天の銀河濃ゆかつし」について目から鱗のメールを戴いた折り（本句集内の当該句の私の追加注を参照されたい）、『銀河は無意識に吟歌を喚起しますが、作為でなくこのひとの裡では自然な音樂だったと想ひます』と附記され、『このひとは琴に馴染み、この國の東西のことばや異郷の吟のしらべを言葉に乗せてよんだとしか思えない句がとても多いと感じられます』とその御感懐を添えられておられた。私はこの御言葉に強く共感を覚えた。全句一括版を公開する際には、ここに以上を引用させて戴く旨の御許諾を頂戴している。ここに掲げさせて頂き、「しづ」さまに、さらなる御謝の意を表しておきたい。

●二〇一四年　一月　一日　ブログ版始動

●二〇一五年十一月二十三日　ブログ版完結

●二〇一六年　一月二十七日　本ＰＤＦ縦書版（β版）公開　藪野直史］

橋本多佳子句集　藪野直史選　六十一句へ

やぶちゃんの電子テクスト集：俳句篇へ

句集「海燕」

［やぶちゃん注：昭和一六（一九四一）年一月十日交蘭社刊。昭和二（一九二七）年から同十五年（多佳子二十八歳～四十一歳）までの作品四百十七句を収録する。序文は山口誓子。誓子の序文は著作権存続中のため、省略する。］

昭和十年以前

春日神社蹴鞠祭

公卿若し藤に蹴鞠をそらしける

［やぶちゃん注：「春日神社蹴鞠祭」不詳。この普通の書きぶりからは奈良の春日大社としか思えないが、調べた限りでは春日大社に現在、蹴鞠祭と称する祭はない。また蹴鞠祭で最も知られている奈良県桜井市多武峰の談山（たんざん）神社は春日神社とは言わない（因みに談山神社の蹴鞠祭は現在は毎年四月二十九日の「昭和の日」と十一月三日の「文化の日」に行われている）。識者の御教授を乞う。本句はこの位置から見て、大正一四（一九二五）年夏以前の句である。］

曇り來し昆布干場の野菊かな

［やぶちゃん注：大正一四（一九二五）年の恐らく八月、当時の樺太の国境直近にあった炭鉱の村、西柵丹村安別（にしさくたんむら）（現在のロシア連邦サハリン州ボシュニャコヴォ）での句。橋本多佳子（明治三二（一八九九）年一月十五日～昭和三八（一九六三）年五月二十九日）満二十六歳。

この句は一読、北原白秋の知られた一首、

いつしかに春の名殘となりにけり昆布干し場のたんぽぽの花

を想起させるが、実は何と、この句をものしたその時その場には白秋本人がいた。底本年譜によれば、この年、夫豊次郎の仕事（土木建築業大阪橋本組北九州出張所駐在重役。この当時は満三十七歳頃。）の関係で小倉にいた多佳子は七月末より八月にかけて約二週間、鉄道省主催の「樺太・北海道旅行」に身重（四女となる美代子。十二月十五日生。）の身で夫とともに参加、客船高麗丸で安別・敷香（しすか）（現在のロシア連邦サハリン州ポロナイスク市附近）・海豹島（現在のチュレーニー島）等に旅した（以下の引用で見るように同行者の中には北原白秋と吉植庄亮（よしうえしょうりょう）（後注参照）がいた。船中の音楽会で多佳子が白秋作詞の「あわて床屋」をピアノを弾き、白秋は殊の外満悦で親交が深まったという）。本句について多佳子は、『俳句』（昭和三三（一九五八）年一月刊）に載せた「自句自解」の冒頭で以下のように語っている（底本全集第二巻を用いたが、ここは発表年を考え、新字のママとした）。

＊

昔、日ソ国境だつた樺太安別の作。

前夜から海は荒れてゐましたが、上陸するときになつても、雨が横なぐりに降つてゐて、本船からランチに乗り移るのに暇がかかり、甲板に集つた私達は、（北原白秋、青梅庄亮氏もその中にゐました）これから登る国境標のある丘を眺め、上陸の順番を待つてゐました。

安別の町は、荒涼として校倉造りの郵便局が印象的でした。数へるほどの家並の尽きた

所に、骨を組立てたやうな柵が幾段も見えましたが、近づくと、それが昆布干場でした。

雨後の照つたり曇つたりする昆布干場には、樺太蟹の真赤な殻などが打寄せられてゐて、それこそ北の渡の風景でした。思ひがけずそこに咲いてゐた野菊を見て、この句はするする出来ましたが、北原白秋の「昆布干場のタンポヽの花」の歌の影響が多分にあります。

この句を見ると、多くの故人の顔が浮みます。亡き夫の長身、北原白秋の太い丸い背など。

＊

当時、白秋は四十歳。吉植庄亮（明治一七（一八八四）年～昭和三三（一九五八）年）は歌人で政治家。東京帝国大学法科大学経済学科卒業後は父の経営していた中央新聞の記者となった。号は愛剣。明治三九（一九〇六）年から金子薫園に師事、大正一〇（一九二一）年に歌集「寂光」を刊行、翌十一年には歌誌『橄欖（かんらん）』を創刊した後、大正十二年には北原白秋・田夕暮・古泉千樫・石原純・木下利玄らとともに歌誌『日光』を創刊した。大正十四年から十年間、父の遺志を継いで千葉県印旛沼周辺の開墾に従事、当時としては画期的な大型トラクター導入による農業の機械化や有畜農業を進め、その生活を詠った歌集「開墾」を発表した。この後の昭和一一（一九三六）年に衆議院議員となった（当選三回。政友会）。戦後は公職追放を受けて農地改革により所有する農園をも失った。後、印旛沼・手賀沼の土地改良区設立運動に携わって、昭和二六（一九五一）年になって追放解除となった。白秋とは特に親しかった。以上は講談社「日本人名大辞典」及びウィキの「吉植庄亮」に拠った。彼の短歌数首を示しておく。

小波（さざなみ）を見てゐるよりも忙（せは）しなき小禽（ことり）の頭みなみな啼き居り

あしひきの山のきはらのゆふつく日光となりてちる木の葉あり

開墾機（トラクター）エンヂンとどろかし過ぎにけり働きてゐる大地をゆする

新墾（あらき）田の四五十人の一隊の打つ鍬先に光があがる

あかあかと股の下より照りかへす夕日の光顔にあつしも

むら肝の心をゆする土の香のみなぎらふ野となりにけるかも

ありがたく飯(いひ)いただきてあけくるるいまのおのれを思い見ざりき

ひとつ潰れひとつ癒りて掌(てのひら)にかたまりのこる肉刺(まめ)のあと五つ

いささかの傷には土をなすりつけて百姓われの恙もあらず

引用はネット上の信頼し得る複数サイトより。但し、恣意的に正字化してある。」

わが行けば露とびかかる葛の花

硬き角あはせて男鹿たたかへる

鹿啼きてホテルは夜の爐がもゆる

わがまつげ霧にまばゆき海燕

［やぶちゃん注：本第一句集の標題句である。「海燕」という場合、通常は鳥綱ミズナギドリ目ウミツバメ科 Hydrobatidae に属する鳥を指す。全ての和名が「〇〇ウミツバメ」の形をとるが、スズメ目ツバメとは近縁ではない。参照したウィキの「ウミツバメ科」によれば、全長は十三～二十五センチメートルで上面は暗褐色や黒色の種が多く、嘴の上に管状の鼻が目立つ。嘴は鉤状に尖っている。非繁殖期は海上で過ごし、『海面すれすれを飛びながら、海面近くの小魚やイカなどの軟体動物、プランクトンなどを嘴でつかみとって捕食する』。『コロニー（集団営巣地）を形成して繁殖する。地上に１個卵を産み、抱卵期間は４０―５０日である。卵は体に比べて大きい（雌の体重の２５％にも及ぶことがある）』とある。グーグル画像検索「ウミツバメ」をリンクしておく。但し、「後記」（後掲）には、『「海燕」は、夫との最後の旅行となった上海行の途次、霧に停船してゐる宮崎丸にあまたの燕が翼を休めたことが忘れ難く、それを句集の名としたのである』とあり、この叙述から見ると、これは真正のスズメ目ツバメ科ツバメ *Hirundo rustica* の南方での越冬からの帰りと

も思われる。]

海彦のゐて答へゐる霧笛かな

[やぶちゃん注：「海彦」船旅の際の夫橋本豊次郎を喩えたもの。後に「海彦」は多佳子の第四句集（昭和四〇（一九六五）年刊）の書名ともなる。]

アベマリア秋夜をねまる子がいへり

昭和十年

春日若宮御祭

枯芝に萬歳樂は尾をひけり

陵王に四方の庭燎のもえさかる

[やぶちゃん注：「春日若宮御祭」は奈良市春日野町春日大社で年間に亙って行われる水神を祀る行事。以下、参照した春日大社公式サイトによれば、現在は「おん祭」と表記する。この二句はその「おん祭」の中のクライマックスである十二月十七日に行われる「お渡り式」の嘱目吟である。お渡りとは神霊が多くの供奉を従えて御旅所の行宮へ遷する行事であるが、「おん祭」の場合は神霊の行列ではなく、既に行宮へ遷られた若宮神の元へ芸能集団や祭礼に加わる人々が社参する行列のことを言う。

一句目の「萬歳樂」はその日の午後二時半頃に始まる「お旅所祭」の奉幣・祝詞奏上・

拝礼の後、午後三時半頃から神楽が舞われ、その後に田楽・細男・猿楽（能楽）・舞楽などが午後十一時近くまで奉納されるが、その後半の舞楽の中の左舞で舞われる萬歳楽（まんざいらく）を指す。この左舞は中国・印度支那方面から伝えられたもので赤色系統の装束を着用する（対する右舞は朝鮮・渤海国等から伝えられたもので緑色を基調とした装束で舞われる。左舞は唐楽、右舞は高麗楽とも呼ばれて演奏は通常は左舞・右舞を一対（番舞と呼ぶ）とし、その何組かが舞われるが、「おん祭」では五番十曲が舞われるとある）。公式サイトの「舞楽その1」によれば、万歳楽は『隋の煬帝が楽正自明達に作らせたもので、鳳凰が萬歳と唱えるのを舞に表したものといわれている。慶賀の際には必ず舞われる荘重閑雅、気品の高い曲である。舞人は四人、赤の常装束に鳥甲を冠っている』とある（別の日の春日大社での萬歳楽の動画映像）。

二句目の「陵王」は雅楽の曲目の一つ「蘭陵王」。左舞（唐楽）に属する一人舞で、華麗に装飾された仮面を被る勇壮な走り舞。番舞の右舞は納曽利（なそり）。林邑（りんゆう）（現在のベトナムにあったチャンパ王国）の僧仏哲が本邦に齎したとされ、中国風の感じが残ると言われる美しい曲である。北斉の蘭陵武王高長恭の逸話に因んだもので眉目秀麗な名将蘭陵王が優しげな美貌を獰猛な仮面に隠して戦に挑み、美事大勝、兵らが喜んでその勇士を歌に歌ったのが由来とされる。武人の舞らしい勇壮さの中に、絶世の美貌で知られた蘭陵王を偲ばせる優雅さを併せ持つ（ここまではウィキの「蘭陵王（雅楽）」に拠る）。公式サイトの「舞楽その2」によれば、『舞人は竜頭を頭上にし、あごをひもで吊り下げ金色の面をつけ、緋房のついた金色の桴をもち、朱の袍に雲竜を表した裲襠装束をつけて勇壮に舞う』とある。こちらの todorokinooka 氏の撮影になる同祭（平成二〇（二〇〇八）年）の陵王の舞は、全体が暗いものの、本句の多佳子の感じた雰囲気をよく伝えるもののように感じられる。なお「庭燎」は「にはび（にわび）」と読み、庭火で庭で焚く火、特にこのような神事の庭や宮中の御神楽（みかぐら）で焚く篝火を指し、柴灯（さいとう）とも言う。冬の季語でもある。」

志摩

春潮を着きけり志摩の國に來し

春潮のさむきに海女の業を見る

若布(め)は長(た)けて海女ゆく底ひ冥(くら)かりき

［やぶちゃん注：「若布」二字で「め」と読ませている。二句後のそれも同じ。「底ひ」は万葉以来の古語で、至り極まる場所、涯、窮みの謂いで、「涯底」「底方」などとも表記するが、その語源は「そきへ」「そくへ」（孰れも「退き方」と表記し、遠く離れた所、果ての意）と同語源かとするものの、はっきりはしない。この二つの「へ」は「辺」、接尾語でそちらの方、辺りの謂いであろうから、ハ行同行でイ段に転訛したということか。］

わがために春潮深く海女ゆけり

若布(め)の底に海女ゐる光り目をこらす

海女の髪春潮に漬じ碧く垂る

［やぶちゃん注：「漬じ」は「つかじ」と読む。カ行四段自動詞「漬(つ)く」で、本来は水に浸る、濡れる、浸かるの謂いであるが、私はここは、未だ寒き海から上った海女の春潮に濡れた髪が、少しもそれに侵されることなく、碧に輝いているという海女という過酷な業をものともせぬ女の、ヴァイタルなシンボルとしての黒髪への手放しの讃歌と読む。］

東風(こち)さむく海女が去りゆく息の笛

［やぶちゃん注：「息の笛」言わずもがなであるが、海女が浮上した際に行う激しい呼吸で

口笛のように鳴る磯笛である。こちらで（中学の修学旅行で私もただ一度だけ実際に聴いたことがあるが、その如何にも淋しい音色が何故か今もずっと耳を離れずにある）鳥羽のミキモト真珠島での実演中の磯笛が聴ける。］

東風さむく海女も去りたり吾もいなむ

國境安別

霧の港北緯五十度なり着きぬ

船航（ゆ）く港といへども蕗繁り

樺を焚きわれ等迎ふる夏爐かな

フレツプの涯なき野に雲流れ

フレツプの實はほろにがし野に食ぶ

［やぶちゃん注：本句群は本句集巻頭「昭和十年以前」の注で示した、十年前の大正一四（一九二五）年の七月末より八月にかけて約二週間、鉄道省主催の「樺太・北海道旅行」に身重の身で夫とともに参加、客船高麗丸で安別・敷香・海豹島等に旅した折り（旅当時の多佳子は二十六歳であった）を、追懐した回想吟である。

「フレツプ」双子葉植物綱ビワモドキ亜綱ツツジ目ツツジ科スノキ属コケモモ *Vaccinium vitis-idaea*。フレップとは英語ではなく（コケモモ類の英名は「cowberry」或いは「lingonberry」）、アイヌ語で「赤いもの」を意味する本邦北海道以北でのコケモモの呼称である。ウィキの「コケモモ」によれば『果実は非常に酸味が強いため、通常は砂糖などで甘みを加えて調

理し、ジャムやコンポート（砂糖煮）、ジュース、シロップなどとして食用にする。コケモモのコンポートは肉料理の添え物とすることがある』とある。麝香鹿爺（じゃこうしか）さんのブログ「昭和ひとケタ樺太生まれ」の「フレップ（コケモモ）の実」に『樺太の代名詞にも使われるほど樺太には沢山自生し秋の野は赤く染まった』、『実は甘酸っぱく、お土産品としてフレップワイン・ジャム・ソーダ・羊羹などがあった』とあり（アイヌ語源記載もこちらを参照した）、また、「私の花物語のページ」の第二回の三土とみ子さんの「フレップ（こけもも）」の頁に、かつてのサハリン（樺太）での追懐とともに印象的にフレップのことが語られてある。なお、言わずもがなであるが、「食ぶ」は「たうぶ（とうぶ）」と訓ずる。」

南風と練習船

［やぶちゃん注：「南風」はここでは「はえ」で、特に四月頃から八月頃にかけて吹く南から吹く夏の季節風を指す。］

積雲も練習船も夏白き

南風（はえ）つよし綱ひけよ張れ三角帆

百千の帆綱が南風にみだれなき

帆を統べて檣は南風の天に鳴る

白南風や練習船は舳にも帆を

練習生帆綱の上ぞ南風に堪へ

南風の船並(な)み帆の上に帆を張れる

練習船白南風の帆を並めて航く

［やぶちゃん注：「白南風」は「しらはえ」又は「しろはえ」と読み、先に注した南風(はえ)の中でも梅雨が明ける六月末頃から吹き始める南風を指す。］

若人等幾日ぞ南風鳴る帆の下に

月見草

巻き雲が尾をひき並び夕焼けぬ

月見草地の夕焼が去りゆきぬ

月見草雲の夕焼が地を照らす

高波のくだくる光り月見草

月見草闇馴れたれば船見ゆる

［やぶちゃん注：これらの「月見草」は、他対照とのパースペクティヴを句の眼目とする四句の内でも、特に「高波の」と「月見草闇馴れたれば」の二句の視線の高さから見て、黄色の知られた双子葉植物綱フトモモ目アカバナ科 Onagroideae 亜科 Onagreae 連マツヨイグサ属 *Oenothera* のマツヨイグサ *Oenothera stricta* 又はオオマツヨイグサ *Oenothera erythrosepala* 以外には考えられないが（グーグル画像検索「*Oenothera stricta*」及び「*Oenothera*

erythrosepala])、私は秘かに私の偏愛してやまない白いツキミソウ *Oenothera tetraptera* 以外に多佳子に最も相応しい花はないと、かねがね秘かに思っていることをここに告白しておきたい（[グーグル画像検索「*Oenothera tetraptera*」]）。そうして……そうして私は白い月見草といったら、これを書かずにはいられないのだ……[「鬼城句集　夏之部　宵待草の花」]でも書いたが、やっぱり書かずにはいられない……私の古い家の猫の額ほどの庭にはかつて、この真っ白なツキミソウ *Oenothera tetraptera* の群落があって、夏、十数輪の花を咲かせては独身の頃の孤独な泥酔した僕を待っていてくれたものだった……しかし……ある夜、彼女に逢うのを楽しみに帰ってみると……群落そのものが移植ごて綺麗に根こそぎ（明らかに根を傷つけぬように計算された緻密で丁寧な一定の深さに抉られてあった）、何者かによって一茎も残さずに持ち去られていたのであった（それが何処の誰であるかは実は知っている。私の家の前の道は本来は私道で、その頃、限られた人物しか通らなかったから。山を越えた向こうに住んでいる、その後の私の家の庭に難癖をつけた園芸通を気取っていた、あのむくつけき中年女に違いないのだ）。……私はユリィデイスを失ったオルフェのように地べたに膝をついて号泣した――」

櫓山日記

山荘やわが來て葛に夜々燈す

花葛の濃きむらさきも簾（す）をへだつ

ひぐらしや絨毯青く山に住む

［やぶちゃん注：「櫓山」は小倉市中原（なかばる）（現在の小倉北区中井浜）にあった夫豊次郎自ら設計建築になるが大正九（一九二〇）年に完成した三階建和洋折衷西洋館櫓山荘のこと。堀内薫氏の底本年譜によれば、この櫓山（やぐらやま）と呼ばれた小山は『旧藩時代に、小倉の小笠原藩の

黒船見張所として櫓が建てられた御番所跡で』、『海に突き出た岩礁を「境岬」、その近くを流れる川を「境川」とい』い、『海岸に突き出た丘の上に建つ櫓山荘の居間の窓から海原が展望出来』た。『玄海の波濤が近くまで押し寄せ、東方に響灘、関門海峡、前方に巌流島、彦島、六連』（むつれ）の島々『が見える』という絶景の地にあった。『どの階の窓も大きくて』（下記リンク先の当時の写真で確認出来る）、『ステンドグラスに趣向をこらして』あった。『このステンドグラスも、玄関の白と濃い茶の市松模様の敷石も全て英国からの特別注文』製で、『庭にはテニスコート』もあるという、驚くべきオリジナリティに富んだモダンな別荘で、『ロマンチスト豊次郎の自画像とも言うべき個性ある夢多い建築だった』とある（残念ながら建物は現存しない）。なお、山荘の方は「ろざんそう」と読む。但し、この頃は夫の父橋本料左衛門（大阪橋本組創立者）の逝去に伴って小倉から大阪帝塚山（てづかやま）に転居しており（昭和四（一九二九）年十一月）、ここはその後、昭和一四（一九三九）年まで別荘として使用していた（その間に昭和一二（一九三七）年の豊次郎の死去を挟む）。北家登巳氏のサイト「北九州のあれこれ」の「櫓山荘跡」は豊富な現在の画像とともに洒落たロマンティクなかつての櫓山荘の面影が詳しく載る。必見必読である。]

波

白波の沖よりたてり波乗りに

波乗りに青き六連嶋（むつれ）が垣なせり

波に乗れば沖ゆく船も吾に親し

波に乗り陸（くが）の青山より高し

波に乗れば高波空を走るなり

波乗りに暮れゆく波の藍が濃き

［やぶちゃん注：二句目「六連嶋」で「むつれ」と読ませている。これは「垣なせり」とあるから明らかに山口県下関市の響灘（ひびきなだ）諸島に属する六連島（むつれじま）一島のみでなく、周囲の馬島（うまじま）・片島・和合良島（わごらしま）などの島影を一括して言っている。なお、この内、馬島以下は福岡県北九州市小倉北区に属する。］

日輪と龍舌蘭

龍舌蘭咲きて大きな旱り來ぬ

龍舌蘭灼けたる地（つち）に葉を這す

高き葉ゆ蜥蜴の尾垂り龍舌蘭

龍舌蘭の花日輪を炎えしめぬ

龍舌蘭旱天の花驕り立つ

龍舌蘭旱天の花驕り立つ

龍舌蘭夏天の銀河夜々濃ゆし

磯

月照りて野山があをき魂送り

月の砂照りてはてなき魂送り

わが袂磯砂にある魂送り

月光にもゆる送り火魂送り

おぼえなき父のみ魂もわが送る

［やぶちゃん注：多佳子（本名山谷多満）の父山谷雄司（公務員）は明治四二（一九〇九）年七月四日に亡くなっているが、この時、多佳子は満十歳である。父の記憶がないというのは、何か解せない気が私にはする。この謂いには、現在知られている多佳子の年譜的事実以外の何かが隠されているような気がしてならない。］

浦人の送り火波に焚きのこる

送り火が並び浦曲を夜にゑがく

［やぶちゃん注：「浦曲」「うらわ」「うらま」と読む（浦廻とも書く）。上代語で「み」とよむべき「廻」の字を旧訓で「わ」と慣用読みしてしまったために生じた語で、元は浦廻（うらみ。浦回）。「み」は動詞「廻（み）る」の連用形が名詞化したもので、曲がり廻（めぐ）ること、また、そのようになっている地形、主に海岸の湾曲した箇所を指す語である。なお、「万葉集」では舟で浦を漕ぎ巡っていくことの意でも用いられている。］

曼珠沙華

曼珠沙華咲きて日輪衰へず

曼珠沙華折りたる手にぞ火立(ほだち)もゆ

曼珠沙華火立の花瓣うづまける

野路ゆきて華鬘つくらな曼珠沙華

［やぶちゃん注：「華鬘」は「けまん」で花鬘とも書く。仏前を荘厳(しょうごん)するために仏殿の内陣や欄間などに掛ける仏具。金銅製・牛革製で、円形又は楕円形の形のものに唐草や蓮華を透かし彫りにし、下縁に総状の金物や鈴を垂らしたもの。］

曼珠沙華折りて露草わすれたる

曼珠沙華日はじりじりと襟を灼く

曼珠沙華日は灼けつつも空澄めり

みとり

莖高く華もえ澄めり曼珠沙華

曼珠沙華みとりの妻として生きる

［やぶちゃん注：この二句目は恐らく大方の読者は多佳子自身を詠んだものと思うであろ

うが、この「妻」は他者である（誰かは不詳であるが、私は多佳子の育ちの良さなどから多分に近親者に対する悼亡句であるような感じがする）。多佳子の夫雄次郎の死は、この二年後の昭和一二（一九三七）年であり、発病も同年一月のことである。しかし何か不吉な感じである。また、そうした確信犯として句集を編む際に多佳子自身が配したとしか思われない。」

醍醐寺路

里びとは北しぐれぞいひつ濡れ

北しぐれ野菊の土はぬれずある

野をゆきつ吾にも馴れし北しぐれ

京都島原

冬の燭遊び女に吾にまたたかず

冬の燭見て吾を見しにあらざりし

ひと日臥し

ひと日臥し庭の眞萩もすでに夕べ

青き蛾の飛びて夜が來ぬひと日臥し

［やぶちゃん注：多佳子の句の重要なアイテムである蛾の公的な初出である。］

秋の蚊帳枕燈ひくくよみて寝ず

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字である。］

昭和十一年

凩

凩の白雲ひとつ光（て）りてゆけり

凩は地に鳴り路を白らめたる

凍てし燈（ひ）の光の尾さへ風が奪ふ

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字である。］

凩の天鳴り壁の炉が鳴れり

吾子そろひ凩の夜の炉がもゆる

［やぶちゃん注：二句とも「炉」は底本の用字を採用した。］

六甲山上

スケートの面（おもて）粉雪にゆき向ふ

スケートの手組めりつよき腕と組めり

スケートの手組め り體はたえずななめ

スケートの汗ばみし顔なほ周（めぐ）る

スケートに青槇雪をふきおとす

雪去れりスケートリンク天と碧き

［やぶちゃん注：こちらの「六甲山のスケート場」というＰＤＦ資料（地図附）によれば、このスケート場は、元は明治時代より六甲山上にあった天然氷を切り出すための複数の製氷池であった。昭和になって冷蔵庫の普及に伴い見捨てられたが、昭和七（一九三二）年に六甲山観光によって六甲山上までのケーブルカーが開通すると、親会社である阪神電鉄株式会社は山上一帯の開発を展開、製氷池は水深も浅いために結氷し易かったため、これをスケート場に転用した。最初にオープンしたのはケーブル山上駅に最も近い、つげ池スケート場」でここには貸し靴の用意もあった。続いて新池・八代池・三国池の各スケート場もオープン、それ以外にも多くの製氷池が転用されて六甲山には至る所にスケート場が出来たという。昭和四七（一九七二）年の地図には「新池スケート場」が記載されているものの、昭和四〇年の始めには既に利用できなくなっていたとある。先立つ昭和三九年に六甲山人工スキー場がオープンしており、それを期にスケート場は見捨てられたものらしい。この記事を書かれた方はとてもこのスケート場に思い入れのある方らしく、最後の方

には国土地理院昭和四九（一九七四）年の地図に基づく昭文社「六甲山」の地図には「新池」にのみスケート靴のマークが入っているという。『この新池の横に“新池遊園地”（現、オルゴールミュージアム）があったため最後まで存続したものと思われ、新池スケート場を最後に六甲山からスケート場が消えた』と擱筆されておられる。こういう拘り、私はとても好きだ。

なお、言わずもがな乍ら、知らない方のためにここで断っておくがが、多佳子の意味深な句の殆ど総ての相手は夫雄次郎である。イメージを広げるのはご自由乍ら、才媛の多佳子に淫らなあなたの邪推は禁物である。」

二月

煖爐たき吾子抱き主婦の心たる

煖爐もえ末子（まつご）は父のひざにある

［やぶちゃん注：「末子」は四女美代子（大正一四（一九二五）年十二月十五日生まれ）で、当時、満十歳。］

書をくりて風邪の憂鬱ひとり默す

［やぶちゃん注：「憂鬱」の「鬱」は底本の用字。］

ひとりゐて落ちたる椿燻べし爐火

［やぶちゃん注：「煖爐」の「爐」は底本では総て「炉」。］

地下の花舗

凩は遠き地に鳴り地下をゆく

落葉あり地下の掃除夫路を洗ふ

ひとを運ぶ階は動けり地下凍てず

地下の花舗温室(むろ)の白百合路にあふれ

地下の花舗汗ばむ毛皮肩にせり

ひと待ちぬ約せし花舗に毛皮ぬぎ

[やぶちゃん注：どこのデパートの地下街かは特定出来ないが、小倉近くでは門司港の中心商店街の栄町地区（現在の門司港レトロ地区）に昭和九（一九三四）年末に開業した、北九州最古の百貨店である山城屋百貨店が営業していた（この情報はウィキの「山城屋（百貨店）」に拠る）。]

葬

雪しまきわが喪の髪はみだれけり

わが眼路の柩かくしぬ雪しまき

雪の野ははるけしここに人を焼く

葬(はふり)の炉火が入りしまく天鳴れり

吹雪きて天も地もなき火の葬り

［やぶちゃん注：これも夫の死ではない。但し、慟哭甚だしく、近親の葬儀の様と思われるが年譜的情報はない。］

野火

葛蔓(くづ)帯の阿蘇のくにびと野火(ぬ)かくる

［やぶちゃん注：「葛蔓(くづ)帯」とは葛を図柄とした帯のことを指しているか。グーグル画像検索「葛　帯　柄」を参照。

「野」を「ぬ」とするのは本来的には上代の東国方言であった。但し、上代特殊仮名遣、所謂、万葉仮名に於いて、「の」の甲類音を表すとされる「努」「怒」「弩」などを主に江戸時代の国学者が「ぬ」と訓(よ)んだことから「野(の)」の義に解して「野火(ぬび)」「野辺(ぬべ)」などと読んだ結果、それが慣用化してしまったものである。］

火の山の阿蘇のあら野に火かけたる

霾(よな)が降る阿蘇の大野(ぬ)に火かけたる

［やぶちゃん注：「霾」は音「バイ」で、黄砂現象の古名。モンゴルや中国北部で吹き上げられた黄土（粒子の大きさは十分の二から十分の五ミリメートル程）が季節風に吹き流されて浮遊し日本まで飛来、空を黄褐色に覆いながら徐々に落下してくる現象を指す。太陽

も赤みを帯びる。歳時記では春の季語とする。「霾」一字で「つちふる」とも読む他、「霾曇」「霾晦」で「よなぐもり」と読んだり、音読みして「霾風（ばいふう）」「霾天（ばいてん）」と読んだりもする。他にも「よなぼこり」「つちかぜ」「つちぐもり」「胡沙（こさ）」「黄塵万丈」「蒙古風」など黄砂に関する言葉は多数ある（別称の部分は「Wikipedia 日英京都関連文書対訳コーパス」による自動英文和訳を参照した）。]

火かければ大野風たち風驅くる

火の山ゆひろごる野火ぞ野を驅くる

[やぶちゃん注：「ゆ」言わずもがなであるが、名詞に付く上代の格助詞で、①動作・作用の起点を表す。「〜から」。②動作の移動・経由する場所を表す「〜を通って」。③比較の基準を表す。「〜に比べて」「〜より」。④動作の手段・方法を表す。「〜によって」「〜で」。ここは無論、①の意であるが、この「ゆ」、俳諧俳句での使用例はあまり多くないものと私は思う。]

野にをらびくにびと野火とたたかへる

[やぶちゃん注：「をらぶ」上代からある古語「叫（おら）ぶ」としか思えないが、だとすれば歴史的仮名遣は「を」であって「お」は誤りである。]

天にちかきこの大野火をひとが守る

草千里野火あげ天へ傾けり

野火に向ひ家居の吾子をわが思（も）へり

當麻

［やぶちゃん注：底本は「当麻」。「たいま」と読む。当時は奈良県北葛城郡當麻村一帯の地名で、現在は葛城市當麻。本尊として祀られている當麻曼荼羅で知られる七世紀創建の二上山當麻寺（にじょうざんたいまでら）で知られる（現在、同寺院は高野山真言宗と浄土宗の並立寺院）。］

牡丹照り二上山（ふたかみ）ここに裾をひく

牡丹照り女峰男峰とかさなれる

［やぶちゃん注：金剛山地北部の奈良県葛城市と大阪府南河内郡太子町に跨がる二上山（嘗ては大和言葉による読みで「ふたかみやま」と呼んだが、現在の正式な読みは「にじょうざん」である）は北方の雄岳（五一七メートル）と南方の雌岳（四七四メートル）の双耳峰である。］

牡丹照り厨の噴井（ふきゐ）鳴りあふる

薔薇を贈る

花舗くらく春日に碧き日覆せり

薔薇欲しと來つれば花舗の花に迷はず

薔薇を撰り花舗のくらきをわすれたり

花舗いでゝ街ゆき薔薇が手にまぶし

病院の匂ひ抱ける薔薇のにほひ

薔薇にほひあさきねぶりのひとがさめぬ

上海

［やぶちゃん注：この前年の昭和一〇（一九三五）年五月、多佳子は夫豊次郎とともに上海・杭州方面を旅行している。第一次上海事変（昭和七（一九三二）年）から三年後で抗日運動が激しい高まりを見せていた頃で、底本の堀内薫氏に年譜によれば、多佳子は『身の危険を感じ』たとある。同年譜には、この昭和十一年の項に、『一月、豊次郎は、淳子、国子を同伴して上海、香港、マニラに旅行。』とあるが、この書き方は明らかに多佳子は連れ立っていないことを意味しているから、以下の句はやはり前年の回想吟である。］

四川路

激戰のあと夏草のすでに生ひぬ

旅を來し激戰のあと燕とび

草青く戰趾に階が殘りたる

［やぶちゃん注：三句ともに第一次上海事変の爪痕を描く。第一次上海事変は昭和七（一九三二）年一月～三月に上海共同租界周辺で起こった日中両軍の武力衝突。以下、平凡社「世界大百科事典」及びウィキの「第一次上海事変」の記載に拠って見る（『　』の直接引

用部分はウィキのもの)。当時の上海市には英、米、日、伊などの国際共同租界及びフランス租界からなる上海租界が置かれており、日本は北四川路及び虹江方面に約二万七千の在住民を有していたため、居留民警護の名目で海軍陸戦隊千人を駐留させていた(この頃の共同租界の防衛委員会は義勇軍・市参事会会長・警視総監の他に、英・米・日・仏・伊各軍司令官によって構成されていた)。一九三一(昭和九)年九月十八日の柳条湖事件を契機に満州を舞台として日華両軍は一触即発の状態にあったが、その直後から上海では激しい抗日運動が展開されていた。上海公使館付陸軍武官補佐官田中隆吉少佐らはこれを制圧するとともに満州国樹立工作から列国の目を逸らさせるための謀略として、翌一九三二年一月十八日買収した中国人に日本人托鉢僧を襲撃殺傷させ、日中間の対立を一挙に激化させた。村井倉松上海総領事は呉鉄城上海市長に対して事件について陳謝・加害者処罰・抗日団体解散などを要求、第一遣外艦隊の武力を背景として、同月二七日に最後通牒を発した。翌二十八日午後に最初の軍事衝突が発生、『翌日にかけての夜間に戦闘が続いた。その詳細は、「北四川路両側の我警備区域の部署に著かむとする際、突然側面より支那兵の射撃を受け、忽ち９０余名の死傷者を出すに到れり。依て直に土嚢鉄条網を以て之に対する防御工事を施せり。元来此等の陸戦隊を配備したるは、学生、労働者等、暴民の闖入を防止するが目的にして、警察官援助に過ぎざりき。然るに、翌朝に至り前夜我兵を攻撃したるは、支那の正規兵にして広東の１９路軍なること判明せり。」』(枢密院「上海事件ニ関スル報告会議筆記」大角海軍大臣発言)。『日本側資料によると、日本側からの先制攻撃ではなかったこと』が強調され、『「今回の上海事変は反政府の広東派及び共産党等が第十九路軍を使嗾して惹起せしめたるもの』で『斯の如く支那特有の内争に基き現政府に服して居らぬ無節制な特種の軍隊が軍紀厳粛なる帝国陸戦隊に対し、国際都市たる上海に於て挑戦し租界の安寧を脅かして居ることは、実に世界の公敵と云ふべきであって、我は決して支那国を敵として戦って居るものではなく、此第十九路軍のやうな公敵に対して自衛手段を採って居るに過ぎないと云ふべきである』(日本海軍省「上海事変と帝国海軍の行動」昭和七(一九三二)年二月二十二日)と専ら正当性を訴えている。この軍事衝突発生を受けて日本海軍は第三艦隊の巡洋艦四隻・駆逐艦四隻・航空母艦二隻及び陸戦隊約七千人を上海に派遣

（一月三十一日現着）、犬養内閣はさらに二月の二個師団の派遣を決定、これに対し、国民党軍は二月十六日に上海の作戦に参入した。二月十八日、日本側は更なる軍事衝突を避けるため、列国租界から中国側へ十九路軍が二十キロメートル撤退すべきことを要求したが、これを十九路軍軍長蔡廷鍇（さいていかい）が拒絶、同二十日を以って日本軍は総攻撃を開始した。日華両軍の戦闘は激烈を極めた（混成第二十四旅団の工兵らの所謂、「肉弾三勇士」が知られる）。二十四日に日本陸軍二個師団からなる上海派遣軍が進発し、三月一日にその内の第十一師団が国民党軍の背後に上陸、十九路軍は退却を開始、日本軍は三月三日を以って戦闘の中止を宣言している。日本側の戦死者は七百六十九名、負傷二千三百二十二名。中国軍の損害は一万四千三百二十六人。三十六日間の戦闘によって上海全市は凡そ十五億六千元の損害を被ったとされる。中国側住民の死者は六千八十名、負傷二千名、行方不明一万四百名と発表された。戦後日・中及び英・米・仏・伊四ヶ国による停戦交渉が上海で開始されたが、上海を始めとする中国での列国の利権が脅かされたため、英米列強の反応は満州事変に比べ、遙かに強硬であった。五月五日、日本軍の撤退及び中国軍の駐兵制限区域（浦東・蘇州河南岸）を定めた停戦協定が成立したが、この停戦交渉中の四月二十九日、上海日本人街の虹口公園で行われた天長節祝賀式典に際し、朝鮮人尹奉吉（ユンポンギル）が爆弾を爆発させて白川義則大将・河端貞次上海日本人居留民団行政委員長が死亡、野村吉三郎中将・植田謙吉中将・村井倉松総領事・重光葵公使らが重傷を負った上海天長節爆弾事件が起こっている。停戦協定により、上海租界を含む外国人居住地域の北・西・南へ十五マイルを非武装地帯となった。その後、一九三七（昭和一二）年には大山勇夫海軍中尉殺害事件が起き、『それに続く中国政府軍による上海攻撃で日中両軍は全面戦争に突入する第二次上海事変が勃発することとなる』。」

佛蘭西租界

春曉の路面かつかつと馬車ゆかす

春曉の街燈ちかく車上に過ぎ

幌の馬車春曉の街の角に獲し

［やぶちゃん注：「獲し」は「えし」と読ませるのであろう。］

春曉の外套黑き夫と車上

春曉のひかり背がまろき馭者とゆけり

春曉の靄に燐寸の火をもやす

霧の停船

サドル島沖にて

［やぶちゃん注：「サドル島」戦前の中国に於いて欧米列強が幅を利かせていた頃に付けられた島名と思われ、英文サイト「American Merchant Marine at War」（戦争中の米国商戦の資料サイト）のこちらのページに載る上海の地図（右手）で（当該ページは教え子が「saddle island shanghai」の検索で発見して呉れた）、上海の中心から西南西へ凡そ百キロメートル、長江河口左岸南東尖端の巨大な砂嘴の先から七十キロメートルほどの位置に、東シナ海に浮ぶ「Saddle Island」を認めることが出来る。海上の島の形が馬の鞍に似てでもいたのであろう。ここは現在の地図で確認すると彩旗島という島に相当する。］

霧はさびし海の燕がゐて飛ばす

押ならぶ海燕さへ霧はさびし

海燕霧の停船夜ともなりぬ

海燕するどき尾羽も霧滴(た)りつ

海圖ありこもれる霧に燈(ひ)をともす

霧はさびし水夫(かこ)の手燈(たひ)さへもの照らさず

霧笛しきりわだなかにして波をきかず

わだなかのこのしづけさに霧笛きゆ

海燕われも旅ゆき霧にあふ

［やぶちゃん注：それにしても「海燕」本句集の題名でもあり、多佳子はウミツバメが殊の外好きだったようだ。グーグル画像検索「ウミツバメ」を再掲しておく。］

潮路

船長も舵手も夏服よごれなき

羅針盤しづけき雷火たばしるに

涼しき地下

地下涼し炎日の香は身に殘り

電氣時計（シンクロン）涼しき地下の時を指す

［やぶちゃん注：「電氣時計（シンクロン）」は少し手間取ったが、神戸大学附属図書館のデジタルアーカイブの「新聞記事文庫　機械製造業」の『中外商業新報』昭和九（一九三四）年十二月の記事に漸く発見出来た。その「（下ノ一）掛時計から置時計へ　需要層は拡大する」によれば（恣意的に正字化して引用した。それ以外はママ（歴史的仮名遣ではない点）である）、大正一四（一九二五）『年頃から早くも東京電氣時計會社では横山氏發明の交流式電氣時計を製造して斯界に先鞭をつけ、同時計をシンクロンと名附けたのである、しかし當時は復興事業に追われ、停電も多いので兎角不正確となり勝であり、宣傳も不十分であったので世人の認識を喚起するまでには至らずその進歩も遲々たるものであり、同社もやや經營の困難を感ずる始末であった、また一方それに前後してアメリカのG・E製品たるテレクロンを輸入發賣していた東京電氣も同品の國産化を實現せんと計畫していた、しかし昭和六年東京電燈は率先してタイム・サービスを企圖し發電所にマスター・クロックを設備して周波數の統制を期したので交流式電氣時計進出の機運を漸く熟成し得たのである、かくて先ずこれに呼應したのがシンクロンである』。『他方東京電氣でも前述せるテレクロンの日本國内における製造販賣權の讓渡を受けてから同品をマツダと改稱して國産化を實現した、さて純國産と誇るシンクロンの製造會社たる東京電氣時計は東京電燈の助力を得て着々とその製品の充實を期し、シンクロン、マツダの兩電氣時計は逐次その需要層を開拓したのだ、昭和七年春には周波數も關西六十サイクル、關東五十サイクルと統一したことは既述せるところであるがこれに依って發展の基礎工作が全く成り一層その進出を早めた譯である、斯界の舞臺にも兩電氣時計を初めとして三菱のサイクロン（目下製造中止）日本周波電氣時計のニホン周波電氣時計、次いで八年十一月には精工舍のA・B式電氣時計が發賣される等陸續として交流式電氣時計が登場し、更に來春早早には東京時計製造會社もこれ

に一枚加わろうとしているからますます斯業は前途多事である』『またこの東京時計の進出は手捲き時計製造家の注目するところであって如何に同品への製造熱が横溢しているかが窺えよう、しかも最早世人は電氣時計の眞價を認め、その需要は逐年増加を示しかつ從來の掛時計に止まらず更に置時計をも各社競って製造して家庭内にもその需要を擴大せんの勢いである、目下市場活躍している製品は

東京電氣時計會社(東電電氣商品會社)＝シンクロン・バイクロン

東京電氣會社(本社直賣)＝マツダ電氣時計

日本周波電氣時計會社(日本電氣會社)＝ニホン周波電氣時計

精工舍(服部時計店)＝セイコー(括弧内は販賣會社名)

等である』とある。また、この記事の前の部分で名称の「シンクロン」は当時（一九三〇年代）既にアメリカで普及していた同期式電気時計「synchronous clock」（シンクロナス・クロック）とアメリカのジェネラル・エレクトロニック社製の「Telechron」（但し、この名は一九一二年にヘンリー・ウォーレンが造った電気時計会社が濫觴である）を捩ったネーミングであることも推測される。]

走輪去り地下響音を斷ちて涼し

[やぶちゃん注：存在を確認出来ないが、私はこの電気時計を備えた地下室は「櫓山荘」にあったものと確信するものである。]

鵜簪

闇に現れ鵜簪並(な)めて落し來る

[やぶちゃん注：「落し來る」は「らつしくる」と私なら読む。]

鵜のあはれ鵜縄の張ればひかれたる

篝もえ舳（へ）のつかれ鵜を片照らす

闇を翔くる

あぢさゐの夕焼天にうつりたる

蝙蝠は天の高きに飛びて焼けぬ

蝙蝠は夕焼消ゆる地を翔くる

蝙蝠の飛びてみとりの燈も濃きよ

蝙蝠を闇に見たりきみとる夜半

［やぶちゃん注：くどいが、これも夫雄次郎ではない。不詳。しかし、前の「みとり」「葬」句群同様、極めて近親者の「みとり」としか読めない。］

六甲ホテル

［やぶちゃん注：兵庫県神戸市灘区六甲山町南六甲一〇三四番地、六甲山山上に現在も営業する阪急阪神第一ホテルグループの六甲山ホテルのことであろう。昭和四（一九二九）年に宝塚ホテル分館として開業した（後に独立）。古塚正治設計による開業当時の建物は現存しており、二〇〇七年に国の近代化産業遺産に登録されている（以上はウィキの「六甲山ホテル」に拠る）。］

霧あをし紫陽花霧に花をこぞり

霧ごもり額(がく)の濃瑠璃が部屋に咲く

［やぶちゃん注：「濃瑠璃」は「こきるり」と読むと思われるが、「額の」「咲く」という二語からはどうみても具体な花を指しているとしか思われない。しかし「濃瑠璃」と通称する植物や花はない。しかし「瑠璃草」はある。シソ目ムラサキ科ルリソウ *Omphalodes krameri* は落葉林のやや湿った場所に植生し、花期は五～六月で花弁は五枚。花の形や色は同科のムラサキ科ワスレナグサ（勿忘草）属 *Myosotis* とかなり似ている。グーグル画像検索「*Omphalodes krameri*」及び「*Myosotis*」をリンクしておく。］

炉火すゞし山のホテルは梁をあらは

［やぶちゃん注：「炉火」の「炉」は底本表記字を用いた。］

霧にほひホテル夕餐燈(ひ)がぬくき

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。］

髪

百合にうづみ骸の髪生きてゐる

百合匂ひ看護婦は死の髪を梳く

百合そへしなつかしき死の髪に触る

なげきの友に

若人の葬そ炎ゆる日をかゝげ

母に遺す一高の帽白き百合

葬

曼珠沙華身じかきものを燒けぶり

曼珠沙華多摩の翠微をけぶらしぬ

曼珠沙華はふりのけぶり地よりたつ

曼珠沙華灼熱の骨を灰にひらふ

曼珠沙華はふりの車輪(わ)をふれぬ

昭和十二年

蒼光

夜光虫星天海を照らさざる

夜光虫火星が赫く波に懸る

夜光虫垂直の舳(へ)を高く航く

夜光虫夜の舷に吾は倚る

［やぶちゃん注：中句は「よのふなばたに」であろう。］

夜光虫さびしさや天の星を見る

［やぶちゃん注：「夜光虫」は底本の用字のままとした。「蟲」としなかったのは一つの可能性として多佳子はこの「蟲」の字を好まなかった可能性（結構高いと思う）を配慮した。これは例えば芥川龍之介などに顕著に見られる傾向であるが但し、例えば多佳子の場合、寧ろ好まなかった故に「蟲」を用いた方が効果的と考えて使用した場面もあったかも知れない。序でに申し上げておくと「垂」の字も多くの近代作家は旧字の「垂」を書かないし、活字にも用いない傾向が強いことから正字表記していない。］

北風を航く1

船室(キャビン)より北風(きた)の檣(マスト)の作業みゆ

煖房に闇守(も)る水夫(かこ)の瞳(め)を感ず

浴槽(バス)あふれ北風航くことをわすれたり

北風を航く2

北風(きた)の扉(と)がひらかれ煌と吾を照らす

無電技士わかく北風航く夜をひとり

北風を航くその搖れにゐて無電打つ

わが電波北風吹く夜の陸(くが)よびつ

聖母學院

見さくる野畑なりここなる園も枯れ

枯園に聖母(マメール)の瞳碧をたたへ

ただ黑き裳すそを枯るる野にひけり

枯園に靴ぬがれ少女達を見ず

學び果てぬ日輪枯るる園に照り

［やぶちゃん注：「聖母學院」現在の大阪府寝屋川市美井町にある私立女子校、大阪聖母女学院中学校・高等学校であろうが、多佳子との関係は年譜上の知見では不詳。多佳子のいた大阪帝塚山とは直線距離でも二十一キロメートルを越えるので近隣ではない。学校法人

聖母学院は大正一〇（一九二一）年にフランスの「ヌヴェール愛徳及びキリスト教的教育修道会」より創立者メール・マリー・クロチルド・リュチニエはじめ七人の修道女が来日、大正一二（一九二三）年に大阪市玉造に於いて聖母女学院を創立、同年四月に開校、大正一四（一九二五）年開校の聖母女学院高等女学校は昭和七（一九三二）年の大阪府寝屋川市校舎（現在、香里（こおり）キャンパスと呼称）の落成によってここに移転、また同年四月には聖母女学院小学校開校していた（聖母女学院中学校の発足は戦後の昭和二二（一九四七）年の学制改革による。以上は「学校法人聖母学院」公式サイトの「沿革」に拠る）。同公式サイトの「建物について」によれば、『香里キャンパスの校舎の建築は、一九三一年三月十二日、創立者メール・マリー・クロチルド・リュチニエの「鍬入れ」に始まり、翌年（一九三二年）の年明けに完了しました。設計に当たったのは、軽井沢夏の家（現ペイネ美術館）、東京女子大学、聖アンセルモ教会など、多くの名建築を日本各地に残し、日本の近代建築の発展に大きく寄与したことで有名な建築家アントニン・レーモンド氏です』。『当時、レーモンド氏は自ら、東京から汽車に揺られて何度もこの地に足を運び、この小高い香里の丘の上に、アーチを多く使った、この白く華やかな校舎を完成させました』とあって、現在、国登録文化財（有形文化財建造物）に指定されているとある。行ったことも見たこともなく、句には枯れたその庭園のみが描かれるのであるが、かの多佳子（当時三十八歳）を歩まするに如何にも相応しい景観という気がする。

「見さくる」「見放（さ）く」（他動詞カ行下二段活用）は、はるかに見る・遠く見やる・みはるかすの意の万葉以来の古語。

「マメール」フランス語「Ma mere」。「私の母」。］

櫓山荘

夫の手に壁炉の榾火たきつがれ

［やぶちゃん注：「炉」は底本の用字を採った。「櫓山荘」については既注。］

首夏雑草

捕虫網子等は穂わたをかゆがれる

捕虫網草原に且つ青かりき

捕虫網草原の日に出て燒くる

樹々にほひ更衣のあした嵐せり

［やぶちゃん注：「首夏」は「しゆか（しゅか）」で初夏の意。陰暦四月の異称でもある。］

向日葵

向日葵に天よりあつき光來る

向日葵の萼たくましく日に向へり

向日葵は火照（ほて）りはげしく昏れてゐる

向日葵に夜の髪垂りてしづくせる

［やぶちゃん注：この四句、凝っと見ていると、何かドキッとする。それは詠唱する主体たる観察者の姿が全く消失して描写客体即主体即多佳子と読めるように、これらは確信犯で創られてあるからであると思う。……即ち――向日葵に――多佳子の身に「天よりあつ

き光」が「來る」のであり――多佳子の肉体の「萼」が「たくましく日に向」っているのであり――多佳子「は火照りはげしく」「昏れ」た宵闇の中にその肉身を佇立させ「てゐる」のであり――多佳子の「夜の」ほの白き身に、夜の闇たる「髪」が静かに「垂」れて来、そしてそのしっとりとした「しづく」が髪から落ちるからであろう……これはもうタルコフスキイではないか！……」

天神祭

渡御まちぬ夕の赤光河にながれ

渡御の舟みあかしくらくすぎませる

［やぶちゃん注：大阪天満宮の天神祭であろう。同宵宮は七月二十四日、本宮は七月二十五日であるが、船渡御（ふなとぎょ）の景であるからこれらの句は昭和一二（一九三七）年七月二十五日に特定出来る。］

月光と菊

颱風過しづかに寝（い）ねて死にちかき

死に近き面（も）寄り月の光（て）るをいひぬ

月光にいのち死にゆくひとと寝る

月光は美し吾は死に侍りぬ

夫(つま)うづむ眞白き菊をちぎりたり

菊白く死の髪豐かなりかなし

［やぶちゃん注：昭和一二（一九三七）年、一月に小倉の櫓山荘へ一家で避寒したが、その帰阪後に夫豊次郎は発病、同年九月三十日に享年五十歳で逝去した。底本の堀内薫氏の年譜によれば、『療養していた数か月間、多佳子は、病弱の夫に付ききり、妻、秘書、看護婦、母と、虚弱な一身に数役を背負うて大任を果す。豊次郎は生前に墓を作り、自分と多佳子との戒名を刻み、年月日を入れればよいようにしておいた。葬後、ノイローゼによる心臓発作つづく』とある。］

忌籠り

忌に籠り野(ぬ)の曼珠沙華ここに咲けり

曼珠沙華咲くとつぶやきひとり堪ゆ

曼珠沙華あしたは白き露が凝る

露のあさ忌にゐてをみなは髪を梳く

露のあさ帶も眞黑く喪の衣(きぬ)なり

曼珠沙華けふ衰へぬ花をこぞり

寒夜

駅に降(お)り北風(きた)にむかひて家に歸る

北風つよく抗(あらが)ひ來るに身をかばひ

寒(かん)の星昴(すばる)けぶるに眼をこらす

北風吹けり夜天あきらかに雲をゆかす

枯木鳴り耀く星座かかげたる

星天は嚴(いつ)しく霜の地を照らす

壁炉を焚く

壁炉(へきろ)もえ主(しゅ)のなき椅子の炉にむかひ

吾子とゐて父なきまどゐ壁炉もえ

壁炉照り吾子亡き父の椅子いゐる

吾子いねてより海鳴るを炉にきけり

夜の濤は地に轟けり壁炉もゆ

われのみの夜ぞ更けまさり炉火をつぐ

壁炉もえ白き寝臺（ベッド）に人を見ず

［やぶちゃん注：カタカナのルビの拗音表記の問題については、先行する句で本文「フレップ」を「フレツプ」と表記していることに鑑み、しばらく拗音化しないこととする。以下、この注は略す。］

惜しみなく炉火焚かれたり雪降り來る

あさの炉がもえたり旅裝黑くゐる

［やぶちゃん注：これは夫亡き後の昭和一二（一九三七）年の暮れ、避寒した檜山荘での吟と思われる。当時、彼らの四子はそれぞれ以下の年齢（満）であった。長女敦子十八、次女国子十六、三女啓子十四、四女美代子十三。］

荒るゝ關門

機關止みふぶける船に艀を寄す

黑き舷船名もなく雪に繋る

［やぶちゃん注：「舷」はふなべり・ふなばたの謂いであるが、音で「ゲン」と詠んでいよう。私の恣意的正字化へ異義を持たれる方へお訊ねしたい。――この「繋（つなが）る」の「繋」の字は底本のママである。あなたはこの字を普段書きますか？　いやさ、書けますか？――と――］

舷側の十字を紅く吹雪の中

雪の航水夫(かこ)垂直の階を攀づ

雪を航き朝餐のぬくきパンちぎる

［やぶちゃん注：「朝餐」は「あさげ」と訓じているか。］

航海燈かがやき雪の帆綱垂る

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。］

雪を航きひとりの船室(キャビン)燈をともす

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。カタカナのルビの拗音表記の問題については、先行する句で本文「フレップ」を「フレップ」と表記していることに鑑み、しばらく拗音化しないこととする。以下、この注は略す。］

昭和十三年

果樹園

二月

農婦マヤわが泊つる夜の炉を焚きに

くちそそぐ花枇杷鬱として匂ひ

洗面器ゆげたち凍てし地に置かれ

農婦の瞳霜の大地のひかりあふれ

六月

地の籠に枇杷採りあふれなほ運ばる

枇杷のもと農婦とあつき枇杷すする

栗の花日に熟れ草に農婦等と

草に寝て栗の照花額にする

［やぶちゃん注：栗の花の匂いには、男性の前立腺から分泌するスペルミン$C_{10}H_{26}N_4$というポリアミンが含まれている。栗の花はしばしば精液の匂いと同じだとされる。私に高校生の時、このことをちょっとはにかんだ笑顔で教えてくれたのは、理科の先生でも、ませた友人でも、なかった。私の母であった。］

波野

大阿蘇の波なす青野夜もあをき

子がたてりこの野の螢掌にとぼし

螢籠子等が匂はせ地にも飛ぶ

螢火が掌をもれひとをくらくする

莨の葉螢をらしめ列車いづ

［やぶちゃん注：「波野」は地名。熊本県阿蘇市波野大字波野。阿蘇外輪山に広がるなだらかな平原地域。この年の八月、多佳子が三女啓子と四女美代子を連れて阿蘇・雲仙・長崎に旅行した際の嘱目吟。］

青き阿蘇

青草の草千里濱天さびし

［やぶちゃん注：「草千里濱」熊本県阿蘇市永草草千里ヶ浜のこと。烏帽子岳中腹に広がる草原で阿蘇の代表的な景観。ここ草千里ヶ浜には二つの池があり、渇水期には水がないが、梅雨時や雨が降った後などには暫らく水が溜まり池となり、その折りの景を浜と擬えたものであろう。］

驅くる野馬（やば）夏野の青にかくれなし

［やぶちゃん注：草千里ヶ浜では馬の放牧が知られ、現在も引き馬に乗っての乗馬が楽しめる。］

青牧に中岳(なかだけ)霧を降ろし來る

［やぶちゃん注：「中岳」阿蘇山を構成する山の一つで標高一五〇六メートル（高岳の一五九二メートルに次ぐ阿蘇二番目の高峰）で阿蘇山のメインである第一及火口及び第二火口の他、第七火口まで大きな火口（跡）が砂千里浜のある南東方向に分布している。］

日輪に青野の霧が粗(あら)く降る

霧ゆきて炎(も)ゆる日輪をかくさざる

夏雲に胸たくましき野馬驅くる

夏雲に昂る野馬が野を驅くる

第一火口

溶岩(らば)を攀ぢ夏草山を四方に見ず

［やぶちゃん注：「溶岩(らば)」の「らば」は日本語ではない。火山国イタリアの「流れ」という意味のイタリア語「lava」に基づき、溶岩流及び流出後に固まった溶岩などを指す語である。］

霧卷くに炎(も)ゆる日輪懸りたる

岩燕泥濘たぎち火口なり

［やぶちゃん注：「岩燕」スズメ目スズメ亜目ツバメ科ツバメ亜科 *Delichon* 属 *Delichon urbica*。アフリカ大陸・ユーラシア大陸・インドネシア・日本・フィリピンに分布し、夏季にアフリカ大陸北部やユーラシア大陸で繁殖、冬季になるとアフリカ大陸やインド北部・東南アジアへ南下して越冬する（中華人民共和国南部などでは周年生息する）。日本には亜種イワツバメ *Delichon urbica dasypus*（これをを独立種とする説もあり、その場合には標準種である *Delichon urbica* の和名はニシイワツバメとなる）が繁殖のために夏鳥として九州以北に飛来するが、西日本では渡来地は局地的。温暖な地域では越冬することもある。全長一三～一五センチメートルで尾羽はアルファベットのV字状を呈し、嘴は黒い。趾は白い羽毛で覆われている。*Delichon urbica dasypus* は全長一三センチメートル、体形は細く、尾羽の切り込みは浅い。上面は光沢のある黒褐色で下面が汚白色の羽毛で覆われ、腰は白い羽毛で覆われている。平地から山地にかけて生息し、食性は動物食で、群れで飛行しながら口を大きく開けて獲物である昆虫を摂餌する。卵生で海岸や山地の岩場に泥と枯れ草を使って上部に穴の空いた球状の巣を作り、日本では四～八月に一回に三～四個の卵を産む。岩場に集団で営巣することが和名の由来である（以上はウィキの「イワツバメ」に拠った）。］

火口壁灼くるに人を見し驚き

［やぶちゃん注：阿蘇山の火口は新旧大小取り混ぜて数多く存在するが二〇一四年現在では活発に活動を続けているのは中岳のこの第一火口だけである。火口の直径は約六百メートル、深さ約百三十メートルで、吹き上がる溶岩の温度は一〇〇〇度～一二〇〇度に達する。静穏時には雨水が溜まって五〇～八〇℃の湯となっている。火口の池は周囲の岩石から溶かし出された鉄（緑）と銅（青）の色によって青緑色を呈する（観光情報サイト「阿蘇阿蘇！　ドットコム」の「阿蘇観光一番の人気スポットは大噴火口、地獄の釜を覗いてみませんか」の記載に拠った）。］

第二火口

火噴くとき夏日を天に失へり

噴煙は灼くる天搏ち巻き降(くだ)る

神の火に對ひ炎日を忘れたり

噴煙の熱風に身を纏かれたり

［やぶちゃん注：「第二火口」第一火口の南東直近にある。昭和初期までは盛んに活動していたとあるので、まだ多佳子が訪れた頃にはこうした光景が見えたものらしい。……最後の句など、多佳子をそこに配しただけで、一転、妖艶な句となる。まさに多佳子マジックである……］

旅雜草

神戸港

新樹荒れタクシー水漬(みづ)きつつ驅くる

新樹荒れ埠頭の鐵路浪驅けり

蓬萊丸

夏潮の青さ絨毯をふみて船室

銀河濃し無電の部屋へ階をのぼる

船檣に夏夜の星座ゆるる愉しさ

夏曉（あけ）のオリオンを地に船着けり

［やぶちゃん注：「蓬萊丸」は台湾航路で使用された大阪商船所属の大型客船蓬萊丸（九二〇五トン）のことであろう。］

雲仙

夜の輕羅硬きナプキンを手にひらく

［やぶちゃん注：「輕羅」は「けいら」と読み、紗・絽などの薄い絹織物。また、それで作った単（ひとえ）。薄物のこと。無論、多佳子の装束である。］

長崎

遠花火夜の髪梳きて長崎に

峽港

［やぶちゃん注：この標題は地形的に見て長崎港を指しているように私には思われる。］

海燕歩廊に青き海曉けたり

連絡船峡の青嶺が灼け迫る

青林檎嚙みつつひとは海に向へり

夏潮に航送の貨車車輪あらは

貨物船油流しつつ朝焼くる

船繋り夏潮段(きだ)をなして落つ

昭和十四年

大浦天主堂

雷をきき聖なる燭のもとにわれ

雷雨去り聖歌しづかなりつづく

虹ひくく天主の階を降(お)りんとする

［やぶちゃん注：年譜上ではこの年に九州地方への旅は認められない。一見、前年八月の三女啓子と四女美代子を連れての阿蘇・雲仙・長崎に旅行した際の嘱目吟の再考句か追想吟とも思われるのだが、後に出る「九州への旅」を読むとクリスマスを詠んだ句が見いだ

され、多佳子は前年かこの年の末にも九州へ再び船旅をしたものか？　しかしまた、ここは「雷雨」で十二月の景とも思われぬ。識者のご教授を乞うものである。」

雲仙

野馬（やば）しづか吹き來る霧に尾を飜し

霧がゆき群れゐる野馬を野にのこす

風邪

風邪に臥す遠き機銃音とぎれ

［やぶちゃん注：この一首、異様。この機銃音は実際の外界の音ではなく、多佳子が熱に魘されて見た夢の中の機銃音と詠むと私は腑に落ちるのである。もしかすると、四年前に上海・杭州を夫豊次郎と旅した際（前述したように抗日運動が盛んで身の危険を感ずるようなことがあった）の何かの記憶が夢の素材としてあったか？　この句、西東三鬼の知られた「水枕ガバリと寒い海がある」（昭和十一（一九三六）年作）をインスパイアしたもののように私には詠める。］

九州への旅

鴨緑丸

海雀を北風（きた）に群れしめ解纜す

［やぶちゃん注：「鴨緑丸」「おうりょくまる」と読む。ウィキの「鴨緑丸」によれば、大阪商船が所有し運航していた貨客船。大阪商船の大阪大連線（大連航路）用として建造され、実際に航路に就航した船としては最後の船であった。太平洋戦争中は船舶運営会管理下で貨客船としてのほか、陸軍及び海軍の配当船としても行動した。連合国側からは、いわゆる「ヘルシップ（地獄船：連合国の捕虜をフィリピンやシンガポールから輸送するために使用した船の連合軍側の呼称。）」の一隻として認知されている。大連航路の最新鋭船として内装も華麗を極め、秋草模様のエッチングガラスなどで装飾されていた。竣工（昭和一二（一九三七）年九月三十日）後の十月二十日に処女航海のため神戸港を出港、以降十二日間隔で就航した。昭和一九（一九四四）年十二月、フィリピンからの最後の引揚げ徴用船としてルソン島にいた日本人・遭難船員及び約一六〇〇名の捕虜合わせておよそ三五〇〇名を乗せ、駆逐艦「桃」と駆潜艇に護衛されてマニラを出港するも艦載機からの銃爆撃を繰り返し受けて応戦したが（当時の「鴨緑丸」は砲三門と機銃十二基を装備していた）、遂に被弾し火災が発生、スービック湾内オロンガポに退避して捕虜や便乗者などを上陸させた後、火に包まれた末に横転、沈没した。

「海雀」チドリ目ウミスズメ科ウミスズメ亜科 Alcinae の一種と思われる。多くが北方種で、特に和名のウミスズメ *Synthliboramphus antiquus* は冬鳥としてならば九州での観察はある（以上はウィキの「ウミスズメ科」及び「ウミスズメ」を参照した）。先の注で示したようにこれらは以下の句（四句目及び五句目、さらに後の「炉」や「凩」）からも十二月末の景としか読めず（だからこそ全句の通奏低音としての「北風」の切れるような痛さが生きる）、それならば真正のウミスズメ *Synthliboramphus antiquus* と採ってよい。

「解纜」は「かいらん」と読み、纜（ともづな）を解く意で、船が航海に出ること。船出。出帆。］

港遠く海雀北風になほとべり

北風を航き陸（くぶ）の探照燈に射られ

［やぶちゃん注：「探照燈」の「燈」は底本の用字。］

七面鳥皿に灯ともり聖夜航く

［やぶちゃん注：二句後に「冬雲」ともあり、前に複数回注したようにこれらの句群は前年の八月の九州への船旅ではない。「昭和十四年」の頭に入れているところを見ると、前年の十二月下旬に船で九州に向い、船中でクリスマスを祝い、櫓山荘で年越しをしたように読める。］

北風の中水夫綱（かこ）を降り驅けて去る

冬雲に甲板短艇（デッキボート）を支へ航く

北風の浪汽艇にうつる腕をとられ

［やぶちゃん注：「汽艇」は所謂、ポンポン蒸気の艀（はしけ）のことである。］

石垣原

枯るる野に温泉（ゆ）突きの車輪まはるまはる

［やぶちゃん注：「石垣原」は「いしがきばる」と読む。大分県別府市の中央部鶴見岳東麓に広がる扇状地で扇端部は直接に別府湾に接している。「鶴見原」ともいう。この春木川・境川・朝見川の形成する扇状地及びその周辺には別府八湯があり、日本最大の温泉地帯を成している。ここは慶長五（一六〇〇）年に大友義統（よしむね）が黒田孝高に敗北して大友氏が滅亡することとなった古戦場としても有名（以上は平凡社「世界大百科事典」に拠った）。

「温泉突き」湯突き。バーチャル博物館である「別府温泉地球博物館」公式サイト内の「別府温泉事典」にある由佐悠紀氏の「湯突き」の記載を引用させて戴く。

《引用開始》

人力と孟宗竹の弾力を動力源にして、先端に鉄製のノミを付けた竹ヒゴで地層を突き崩しながら掘り進む、小口径の井戸掘り技術「上総掘り」で温泉井を掘ることを、別府では湯突きと言いました。出来上がった井戸は「穿湯」とも言いましたが、「突湯」というのが一般的だったようです。この湯突きは、明治・大正・昭和と長く受け継がれ、別府の温泉開発を支えました。湯突きによる井戸数は２０００以上、最も深いのは３６０ｍもあったそうです。

しかし、太平洋戦争後、機械力による近代的な井戸掘削技術が導入されると、またたく間に取って代わられ、昭和２８年頃を最後として、湯突きは姿を消してしまいました。

しかし、幸なことに、実物の４分の１の湯突き櫓の模型が別府市美術館に展示されています。美術館の隣には、人気の高い「別府海浜砂湯」があります。

《引用終了》]

櫓山荘にて

炉によみて夫（つま）の古椅子ゆるる椅子

ひとりの夜よみて壁炉（へきろ）の椅子熱す

凩の天ダイナモも鳴りとよむ

[やぶちゃん注：次の句からはこの「ダイナモ」（発電機）は鉄道の電気機関車のそれかと思われる。]

北風(きた)昏れて熔炉の炎(も)ゆる驛を發つ

由布高原

風車(ウインドミル)寒き落暉を翼にせり

風車由布の雪雲野に降りる

［やぶちゃん注：大分県由布市湯布院町川北湯布高原は別荘地として知られる。「風車」「windmill」のある（あった）光景については同地の郷土史にお詳しい方のご教授を乞いたい。］

貯炭場

トロツコを子が驅り北風(きた)の中を來る

子の凧があがり索道よりひくかり

塊炭を投げあひ凧をもたざりき

霧さむく火を焚く船へ子はかへる

［やぶちゃん注：「貯炭場」は一般には炭鉱の出荷まで貯めておく石炭置場や、火力発電所が燃料としての石炭を備蓄する場所をいう。推測に過ぎないが、福岡県大牟田市及び三池郡高田町（現在のみやま市）と熊本県荒尾市に広大な坑口を持っていた三井三池炭鉱のそれか。］

妙高高原

鐵路

夜の鐵路乗りかへてより雪深き

寢臺車眞夜雪ふかき驛を見たり

寢臺車手洗場（トワレ）に雪原曉けてゐる

［やぶちゃん注：「トワレ」はフランス語「toilette」。］

雪原を焚きけぶらして鐵路守る

月ひかり雪原曉くる驛に降（お）る

子が遊び雪原の雪驛にも敷く

除雪車のプロペラ雪を噛みてやすむ

信号手青旗に除雪車をゆかす

日輪に除雪車雪をあげてすすむ

［やぶちゃん注：以下の「橇行」及び「赤倉觀光ホテル」句群とともに、昭和一四（一九

三九）年一月七日からの長女淳子と四女美代子を連れての妙高高原赤倉観光ホテルでの嘱目吟。年譜によればホテルまでは雪上車に乗車したとあり、橇やスキーを楽しんでいる。］

橇行

雪原をゆくとまくろき幌の橇

橇驅けり雪原にくろき點となる

雪原の昏るるに燈（ひ）なき橇にゐる

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。］

雪原に橇驅り吾子と昏れてゐる

雪原の極星高く橇ゆけり

橇の馭者昴（スバル）を帽にかがやかす

橇がゆき滿天の星を幌にする

ひくき星橇ゆく方の燈と見ゆる

［やぶちゃん注：「燈」は次句もともに底本の用字。］

雪原に遭ひたるひとを燈に照らす

［やぶちゃん注：「橇行」は音ならば「けうかう（きょうこう）」である。橇（そり）で行くこと。］

赤倉観光ホテル

ホテルあり鐵階を雪の地に降ろし

ラヂエター鳴りて樹氷の野が曉くる

樹氷林ホテルのけぶり纏（ま）きて澄む

熱湯の栓あけ部屋に雪ごもる

雪原のしづけさ部屋の窓ひらき

スキー靴ぬがずにおそき晝餐をとる

雪深くして厨房の音こもる

月が照り雪原遠き驛ともる

月が照り雪原の面昏しと思ふ

雪眼鏡雪原に日も手も碧き

［やぶちゃん注：「赤倉観光ホテル」は創業が昭和一二（一九三七）年であるから、当時は

開業後二年目。帝国ホテルを創業した大倉財閥が上高地帝国・川奈に次いで建てた高原リゾート・ホテルの草分け的存在。公式サイトはこちら。]

万燈

春日神社

万燈（まんとう）のしづかなひとのながれにゐる

万燈の裸火ひとつまたたける

油火の火立（ほだち）しづかに霜が降る

[やぶちゃん注：現在の奈良の春日大社（春日神社は昭二一（一九四六）年に春日大社と改称している）の二月の節分の日（二月四日頃）に行われる節分万燈籠であろう（夕刻六時頃に全灯）。公式サイトの節分万燈籠の解説よれば、同神社の燈籠は石燈籠約二千基、釣燈籠約千基の合計約三千基あり、中でも全国で二番目に古い石灯籠とされる伝関白藤原忠通保延二（一一三六）年奉納とする「柚木燈籠」や伝藤原頼通長暦二（一〇三八）年寄進とする「瑠璃燈籠」を始めとして平安末期より今日に至るまでその大半は春日の神を崇敬する人々から家内安全・商売繁盛・武運長久・先祖の冥福向上等の願いをこめて寄進されたもので、特に室町末期から江戸時代にかけては一般庶民や春日講中からのものが多いとあり、『昔は燈籠奉納時、油料も納められ、その油の続くかぎり毎夜灯がともされていましたが、明治時代に入り神仏分離や神社制度の変革で、一旦中断したものの、節分の夜は同２１年、中元の夜（８月１５日）は昭和４年に再興され、現在の万燈籠の形となりました。しかし、もっと古く室町時代や江戸時代に、奈良町の住人が春日参道で、雨乞い祈祷として万燈籠を行っていました。記録には、興福寺大乗院の尋尊僧正の日記で、今から５００

年余り前の文明7年7月28日、「祈雨のため、南都の郷民、春日社頭から興福寺南円堂まで、燈籠を懸く」とあり、当時は木の柱に横木をつけ、それに行燈か提灯の様な手作りの仮設の燈籠を懸け行っていたと考えられます。故に浄火を献じて神様に様々な祈願をすることが万燈籠です』とある。]

小豆島

春日没り鹽田昏るる身のまはり

[やぶちゃん注：老婆心乍、「没り」は「いり」と読む。「鹽田」底本の用字は「塩田」。]

魚ひかり春潮比重計浸せり

春日昏れ鹽屋の裡（うち）にベルト鳴り

[やぶちゃん注：「鹽屋」底本の用字は「塩屋」。このベルトは何だろう？　夜間作業のための自家発電のモーターか？　それとも海水を汲み上げるモーターか？　凡そベルト・コンベアを装備した多量生産の塩屋というのもこの時代の小豆島の造塩業では考えにくいように思われる。識者の御教授を乞うものである。年譜上ではこの年の小豆島行は確認出来ない。]

墓地

室（むろ）櫻手にせりひとの葬にあふ

[やぶちゃん注：「室櫻」御室桜（おむろざくら）であろう。桜の名所仁和寺の桜には特にの名で呼ばれる。]

閼伽汲むと春の日中(ひなか)に井を鳴らす

墓地をゆき春の落暉に歩み入る

春日暮れ掘られし墓地の土をふむ

長崎にて

長崎の暗き橋ゆき遠花火

港見るうしろに青き蚊帳吊られ

青き蚊帳熟睡(うまぬ)の吾子とならび寝む

青き蚊帳ひとの家にも吊られぬる

［やぶちゃん注：三句目「熟睡(うまぬ)」は「熟睡」「味眠」などの字を当てる上代語であるが、歴史的仮名遣は「うまい」が正しい。「うま」（甘）は造語の成分でここでは「快い」の謂いを添える。気持ちよく熟睡すること（なお、「大辞林」によれば古くは「安寝(やすい)」が単に安眠であるのに対して、男女が気持ちよく共寝することをいったとある）。これはもう明らかに前年夏の九州行の回想吟である。］

霧を航く

埠頭の燈(ひ)去りゆき霧の航につく

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。本歌群内では以下同じ。］

あかつきの舷燈よごれ霧をゆく

霧を航き汽笛の中を子が驅くる

霧を航き船晩餐の燈を惜しまず

船室（キャビン）も霧寝臺（ベッド）の帳ひきて寝る

稲妻

いなづまを負ひし一瞬の顔なりき

［やぶちゃん注：芭蕉の名句「稲妻や顔のところが薄の穂」のインスパイアに見えるが、並べてみると不思議にこちらが自然、女性の句だと印象され、しかもそう感じた時に芭蕉のそれとは異なる凄絶さが読むものを襲うところが如何にも多佳子の句らしい。］

いなびかり想ひはまたもくりかへす

吉田火祭

火のまつりくらき燈火を家に吊り

火祭の道よりひくく蚊帳吊られ

火まつりの戸口にちかく子がねまり

火のまつり子等は寝(い)ねしか町に見ず

火祭の戸毎ぞ荒らぶ火に仕ふ

湖(うみ)をへだて火まつりの火がおとろふる

火祭のその夜の野山月に青く

［やぶちゃん注：山梨県富士吉田市上吉田(かみよしだ)（かみよしだ）地区で行われる日本三奇祭の一つとされる鎮火大祭。同地区の北口本宮冨士浅間神社と境内社（摂社）諏訪神社の両社の秋祭りで、毎年八月二十六日と二十七日に行われ、通称「吉田の火祭り」と呼ばれる。現在、重要無形民俗文化財。二十六日の午後に本殿祭・諏訪神社祭が催行され、大神輿・御影は参拝者で賑わう氏子中に神幸、暮れ方に御旅所に奉安されると同時に高さ三メートルの筍形に結い上げられた大松明七十余本、家ごとに井桁に積まれた松明が一斉に点火され、街中は火の海と化して祭りは深夜まで賑わう。二十七日の午後に二基の神輿が氏子中を渡御、夕闇迫る頃に浅間神社に還御する。氏子崇敬者が「すすきの玉串」を持ち、二基の神輿の後に従って高天原を廻るこの時を本祭りのクライマックスとし、二十七日を「すすき祭り」とも称している（ここまで「ふじよしだ観光振興サービス」の「吉田の火祭り」公式サイトの記載に拠った）。私は残念ながら実見したことがなく、例えば二句目などは実際に祭りを体験すればもっとすんなり腑に落ちる句なのであろうなどと感じている。ただ、ウィキの「吉田の火祭」に載るところの、「火祭の伝承と変遷」と、特に「祭礼をとりまく風習と伝承組織」パートの中の、前年の祭りから一年間の間に身内に不幸のあった死の穢れにある者を「ブク（忌服）」「ブクがかかる」とする禁忌、ブクのかかった者は祭礼の期間

中、上吉田地区以外へ出ることになっていてそれを「テマ（手間）に出る」と表現するという一連の記載は、総じて祭りが苦手な私でさえ非常に興味深く読んだ。このウィキの記載は詳細を極め、筆者の火祭りへの正に熱い思いが伝わってくる非常に素晴らしい必読ものである。なお、六句目の「湖（うみ）」は山中湖と思われる。この年の一夏、多佳子は健康すぐれず、七月から山中湖畔の「ニューグランドロッヂ」（現在の山梨県南都留郡山中湖村平野にある「ロッヂ花月園」は跡地に建つ）に一家で避暑している。年譜には滞在を終えての『帰路は村人の曳く木箱の橇であった』とある。]

湖畔雜章１

霧昏れて落葉松（からまつ）にゐし吾よばる

いなづまに落葉松の幹たちならぶ

郭公は野の富士青き夜を啼ける

寂しさの極みなし青き[illegible]とぶ

[やぶちゃん注：「[illegible]」は通常通りの「ばつた（ばった）」と読んでいると採る。]

湖畔雜章２

熔岩野（らばの）來て秋風の中に身を置ける

秋空と熔岩野涯なし歩みゐる

熔岩の原薊を黒く咲かしむる

富士薊日輪に翳するものなし

熔岩の砂熱きを掬び掌をもるる

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「掬び」は「むすび」と読む。両手を合わせて（本来は水を）すくう・掬（きく）するの謂い。］

地を翔くる秋燕ひとりの道をかへる

［やぶちゃん注：両章ともに、前注の通り、避暑した山中湖畔の「ニューグランドロッヂ」滞在時の吟詠である。］

昭和十五年

回想の壁炉

壁の外（そと）海鳴り壁に炉がもゆる

壁炉もえ吾が寝る闇を朱にしたり

回想の炉がもえひとを炉に映えしめ

筑紫なるかの炉かなしみ炉を焚ける

［やぶちゃん注：諸データによって櫓山荘はこの前年の昭和一四（一九三九）年まで別荘として使用されていたとあるから、この時すでに多佳子の手を離れ、売却されていたものと思われる（年譜にはそうした記載はない）。］

枯るる墓地

わが手向冬菊の朱を地に點ず

閼伽の水豐かに冬の日とも思へず

墓地をゆき黑き手套をぬがざりき

［やぶちゃん注：「手套」は「しゆたう（しゅとう）」と読む。無論、手袋のこと。］

南紀

貝ひかり冬の薊の濃きを得ぬ

わが眉に冬濤崇（たか）く迫り來る

冬濤のうちし響きに身を衝たる

子が驅り吾驅り北風（きた）の波うてり

眞夜の雛われ枕燈(まくらび)をひくゝとぼし

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。］

女(め)の雛描かれて男の袖に倚り

［やぶちゃん注：この句では「雛」は「ひひな／ひいな」と読んでいよう。］

雑愁

發車する列車と歩み春日面(も)に

春落暉歩廊に列車の尾も疾くなり

渺砂航く朱の一輪の月一夜

日覆ふかく疲れ港の照るを瞳に

［やぶちゃん注：「日覆ふ／かく疲れ港(かう)の／照るを瞳(め)に」と私は読む。大方の御批判を俟つ。］

島への旅

面を過ぐる機關車の灼け旅はじまる

潮騒を身ちかく火蛾と海渡る

［やぶちゃん注：多佳子マジックの呪文「火蛾」の初出である。］

ひとの家に實櫻熟るる一夜寢し

玫瑰に紅あり潮騒沖に鳴る

［やぶちゃん注：「玫瑰」は「はまなし」又は「はまなす」と読む。バラ目バラ科バラ属ハマナス *Rosa rugosa* 。和名は「ハマナス」であるが、元来は「はまなし」が正しい。砂地の海浜に生えていて果実がナシに似た形をしていることが和名由来で、それが「はまなす」と訛ったものであるからである。なお、この「島」とは直後に鳴門の嘱目吟が続くことから、淡路島若しくはその周辺の瀬戸内海の諸島と考えてよいであろう。年譜上の記載はない。］

羅針盤

短艇甲板（ボートデッキや）燬くる靜けさ日も航けり

［やぶちゃん注：「燬」は音「キ」で、原義は（つくり）の「毀」（潰す）から焼き尽くすの意である。焼くこと・焼き払うことの意の「焼燬（しょうき）」以外ではあまり見かけない字であるが、烈火などの意もあり、じりじりと焼ける甲板のイメージとして特異的に表現するに相応しい効果的な用字を多佳子は選んでいる。］

羅針盤平らに銀河弧（こ）をなせり

羅針ともり天球銀河の尾を垂らす

海晦くいなづま船橋を透かせり

いなびかり船橋にひくき言いかはす

［やぶちゃん注：二句の「船橋」はルビを振っていないので、一応、「せんけう（せんきょう）」と読んでおくが、一句目からは「ブリツジ（ブリッジ）」又は「ブリツヂ（ブリッヂ）」という読みの可能性も排除は出来ない。特に船旅を多く経験している多佳子は「船橋」を「せんきょう」とは呼ばず、「ブリッジ」と呼称していた可能性の方が寧ろ強いと私は思う。］

雷鳴下匂ひはげしく百合俯向く

湖畔日記

郭公を曉にきゝそれより寢き

言とぎれ面夏雲たゞ照るのみ

林中（りんちゅう）夕燒よめる書には來ず

夜草刈蠍（さそり）の星はしづみたり

天昏れて草原いつまでも蒼き

富士薊野のいなづまにかくれなき

寢られねばのいなづまを顏にする

月照りて野の露人をゆかしめず

ひとを送り野のいなづまに衝(う)たれ立つ

虫の聲かさなり四方(よも)の野より來る

露けくて富士は朝燒野にうつす

曼珠沙華吾が疲るゝに炎(も)えつきず

落葉松(からまつ)の散る野の椅子をたゝみて去る

［やぶちゃん注：昭和一五（一九四〇）年七月から八月にかけて多佳子は山中湖畔に避暑した。これらはその折りの詠。］

裾野

青野來し砲車の車輪湖荒るる

車輪の中遠き青野の山が移る

夏草野砲車の車輪川渡る

砲車ゆく青愛鷹山(あをあしたか)を野にひくく

［やぶちゃん注：昭和一五（一九四〇）年夏当時、多佳子が避暑していた山中湖の直近、西五キロ圏内に陸軍の北富士演習場があった。現在の北富士演習場は富士山北麓の山梨県富士吉田市・山中湖村・忍野村に跨る演習場で総面積四千五百九十七ヘクタール。この四年前の昭和一一（一九三六）年十一月に旧日本陸軍により開設されていた（参照したウィキの「北富士演習場」によれば、昭和二〇（一九四五）年十月に敗戦により米軍が接収、昭和三三（一九五八）年に日本に返還され、昭和四八（一九七三）年四月に自衛隊管理の演習場に使用転換されている）。

ここに出る「砲車」とは砲架に車輪をつけたものの謂いであろう。

「愛鷹山」は静岡県の富士山南麓にある標高一一八七・五メートルの山。広義には愛鷹山塊・愛鷹連峰の総称として愛鷹山（あしたかやま）と呼ばれる。愛鷹山塊の最高峰は標高一五〇四・二メートルの越前岳であるが狭義にはこの山の南端にあるピーク、愛鷹山峰のことを指す（以上はウィキの「愛鷹山」に拠る）。「青」は美称。］

強羅

夕焼くるかの雲のもとひと待たむ

夕焼雲鐵路は昏るる峽に入る

ひととゐて露けき星をふりかぶる

ひとの肩蟋蟀の聲流れゐる

鵙啼けりひとと在る時かくて過ぐ

［やぶちゃん注：「鵙」は「もず」鳥綱スズメ目スズメ亜目モズ科モズ属モズ *Lanius*

bucephalus。以上を以って「海燕」の句本文は終わる。底本全集の句末尾には編者によるものと思われる『(昭和一六年一月十日発行　交蘭社刊)』という附記がつく。」

後記

俳句を作り初めてから、既に十數年の歳月が過ぎたが、本當に勉強をしはじめたのは昭和十年「馬酔木」に據つてからのことである。

思へばこの間常に勵まし、導いて下さつた山口誓子先生、又いつも温情を以てお目守り下さつた水原秋櫻子先生の下に今日迄歩みをつづけて來られた自分の作家としての幸福をつくづく勿體ないものに思ふのである。この度兩先生からのお勸めに從ひ、今迄の貧しい作品を纏めることになつた。私はこの句集を生前いつも私の句作をはげまして貫つた夫の靈前に捧げようと思ふ。多くの作品が夫と共にした旅行から生れたことも今はなつかしい想ひ出となつた。

この句集の刊行に當つては、水原先生から題字を賜り、裝幀まで種々御配慮を戴いた。尚御病中の山口先生をもお煩し申上げ、その上序文まで賜つた。ここに厚く御禮申上ぐる次第である。

美しい表紙繪を頂いた富本憲吉先生、私の我慮をすべて快く入れて御迷惑を顧られなかつた交蘭社主飯尾謙藏氏の御厚志にも深く感謝するものである。

「海燕」は、夫との最後の旅行となつた上海行の途次、霧に停船してゐる宮崎丸にあまたの燕が翼を休めたことが忘れ難く、それを句集の名としたのである。

昭和十五年十二月

帝塚山にて

橋本多佳子

［やぶちゃん注：「俳句を作り初めてから、既に十數年の歳月が過ぎた」多佳子の最初の俳句との出逢いは大正一一（一九二二）年三月二十五日の櫓山荘での高浜虚子を迎えての俳句会で、年譜上の記載からは恐らくはその年のうちに杉田久女及び吉岡禪寺洞の薫陶を受けているから、昭和一五（一九四〇）年までは足掛け十八年、「十數年」という表現と一致する。

『昭和十年「馬酔木」に據ってからのことである』底本年譜によれば、昭和三（一九二八）年に発足した大阪在住の『ホトトギス』の同人クラスのメンバーからなる勉強会『無足会』に、昭和四、五年頃に入会、山口誓子の指導を受けるようになっており、この昭和一〇（一九三五）年四月には誓子の勧めによって、既に同人となっていた『ホトトギス』を離脱、『馬酔木』に入会、これによって『虚子を離れ、誓子に師事、俳句を積極的本格的に勉強する』ようになったとある。

「山口誓子」（明治三四（一九〇一）年～平成六（一九九四）年）は昭和一〇年に発表した句集「黄旗」を契機として『ホトトギス』を離れ、同じく『四S』の一人であり、盟友でもあった水原秋桜子の主宰していた『馬酔木』に同人として参加、ともに新興俳句運動の中心的存在となっていた。昭和十五年当時、満三十九歳。「御病中の山口先生」とあるが、彼が学生時代から胸部疾患（諸データは結核とは記していない）を患っており、勤務していた住友合資会社（主に労務関係を担当）をこの昭和十五年に休職していた。翌年には伊勢富田に転地し保養に努めたが、昭和十七年に病状が悪化して退職、その後は文筆活動に専念するようになった（以上は主に神戸大学研究推進部研究推進課の「山口誓子記念館」の「誓子について」を参照した）。

「水原秋櫻子」（明治二五（一八九二）年～昭和五六（一九八一）年）は先立つ昭和六（一九三一）年に主宰誌『馬酔木』の昭和六年十月号で『『自然の真』と『文芸上の真』』を発表、『ホトトギス』から独立していた。これが契機となって青年層を中心とした反伝統・反『ホトトギス』を旗印とする新興俳句運動が起こった（以上はウィキの「水原秋桜子」に拠った）。昭和十五年当時、満三十八歳。

「富本憲吉」（明治一九（一八八六）年～昭和三八（一九六三）年）はバーナード・リーチの盟友としても知られる陶芸家。当時は帝国芸術院会員、後の昭和三〇（一九五五）年に人間国宝となった。昭和十五年当時、満五十四歳。

『「海燕」は、夫との最後の旅行となつた上海行の途次……』既注であるが、これはまさに前注の通り、多佳子が本格的に俳句に打ち込むようになって一か月後の、昭和一〇年五月の夫豊次郎との上海・杭州旅行を指す。「海燕」の同定については『句集「海燕」　昭和十年以前　八句』の私の注を参照されたい。」

句集「信濃」

［やぶちゃん注：昭和二二（一九四七）年七月五日臼井書房刊。昭和十六（一九四一）年から同二十一年（多佳子四十二歳～四十七歳）までの作品二百五十七句を収録する。戦前・戦中作が殆んどであるから恣意的に正字化した。］

昭和十六年

信濃抄一

［やぶちゃん注：処女句集「海燕」の刊行から四ヶ月後の昭和一六（一九四一）年五月に多佳子は別荘（年譜には『家』とある）を探しに、次女国子と信州野尻湖へ行くとあり、当該箇所に『作品「信濃抄一」』と附す。］

雪山に野を界（かぎ）られて西行忌

［やぶちゃん注：「西行忌」西行は建久元（一一九〇）年二月十六日に享年七十三歳で没した。但し、広く「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃」の詠歌に従い、西行が臨んだ前日の釋迦入滅の同日二月十五日を忌日とする傾向が強いから、これも十五

日であろうか（私はこの習慣を頗るおかしいと思っている。西行も後世のそのような風習を決して望んでいないと私は思う）。なお、旧暦だと昭和一六（一九四一）年の二月十六日は三月十三日（木曜）に相当する。］

翁草野の枯色はしりぞかず

［やぶちゃん注：「翁草」キンポウゲ目キンポウゲ科オキナグサ *Pulsatilla cernua* 。ウィキの「オキナグサ」によれば（アラビア数字を漢数字に換え、記号の一部を変更した）、『根出葉は二回羽状複葉で、長い柄をもち束生する。小葉はさらに深裂する。茎につく葉は三枚が輪生し、無柄で基部が合着し、線状の裂片に分裂する。葉や花茎など全体的に白い長い毛におおわれる。花茎の高さは、花期の頃十センチメートルくらい、花後の種子が付いた白い綿毛がつく頃は三〇～四〇センチメートルになる。花期は四～五月で、暗赤紫色の花を花茎の先端に一個つける。開花の頃はうつむいて咲くが、後に上向きに変化する。花弁にみえるのは萼片で六枚あり、長さ二～二・五センチメートルになり、外側は白い毛でおおわれる』。『白く長い綿毛がある果実の集まった姿を老人の頭にたとえ、翁草（オキナグサ）という。ネコグサという異称もある』。『日本では、本州、四国、九州に分布し、山地の日当たりのよい草原や河川の堤防などに生育する。アジアでは、朝鮮、中国の暖帯から温帯に分布する』。『かつて多く自生していた草地は、農業に関わる手入れにより維持されていた面があり、草刈などの維持管理がなされくなり荒廃したこと、開発が進んだこと、それに山野草としての栽培を目的とした採取により、各地で激減している』。本種は『全草にプロトアネモニン・ラナンクリンなどを含む有毒植物』で、『植物体から分泌される汁液に触れれば皮膚炎を引き起こすこともあり、誤食して中毒すれば腹痛・嘔吐・血便のほか痙攣・心停止（プロトアネモニンは心臓毒）に至る可能性もある。漢方においては根を乾燥させたものが白頭翁と呼ばれ、下痢・閉経などに用いられる』とある。］

曉けて來るくらさ愉しく燕となる

雪白きしなのの山山燕來る

櫻散るしなのの人の野墓よき

南風(みなみ)吹く湖(うみ)のさびしさ身に一と日

［やぶちゃん注：「湖」野尻湖であろう。この翌六月には、一家で野尻湖畔の「神山山荘八七番」に行き、十月まで滞在すると年譜にある。］

子を負へる子のみしなのの梨すもも

［やぶちゃん注：その韻律の可憐にして哀感に富んだ佳句である。］

野の藤はひくきより垂り吾に垂る

野の愁ここだの藤を身に垂らし

［やぶちゃん注：「ここだ」幾許(ここだ)。副詞。万葉以来の古語で数量の多いさまをいう。こんなにも沢山・こうも甚だしくの謂い。また、程度の甚だしいさまをも示し、大変に・大層の謂いもある。両義を持たせてよかろう。］

五月野の雲の速きをひと寂しむ

辛夷に立ち冥き湖にも心牽かれ

愁なき瞳に落葉松（からまつ）の青つきず

父三十三回忌

想出は花火の空をふりかぶる

［やぶちゃん注：橋本多佳子・本名・山谷多満は明治三二（一八九九）年一月十五日、東京市本郷区龍岡町八番地で山谷雄司・津留夫妻の子として生まれた。底本年譜によれば、『祖父の山谷清風は、山田流箏曲の家元で、検校。旗本屋敷に出入りし、黒田家に琴を教える。御維新で没落し、まもなく死亡。祖母は女手で三人の娘を育てる。その長女が津留である。津留に家を継がすため養子・雄司を迎える。雄司は役人』であったが、多佳子十歳の明治四二（一九〇九）年七月四日に父雄司は逝去している。年譜上の父の記載はこれだけである（因みに多佳子は大正三（一九一四）年十五歳の時に故祖父山谷清風の後継として琴の「奥許」を受けている。師は中田光勢・萩岡松韻）。］

掌に熱き粥の清（すが）しさ夏やせて

機銃やみ一本の桔梗露に立つ

［やぶちゃん注：野尻湖周辺に軍の演習場でもあったものか（ネット上の検索では野尻湖周辺では見当たらなかった）。］

驟雨中ききそれし言そのままに

信濃抄二

霧降れば霧に爐を焚きいのち護る

霧の中おのが身細き吾亦紅

［やぶちゃん注：「吾亦紅」バラ目バラ科バラ亜科ワレモコウ *Sanguisorba officinalis* 。ウイキの「ワレモコウ」によれば、『草地に生える多年生草本。地下茎は太くて短い。根出葉は長い柄があり、羽状複葉、小葉は細長い楕円形、細かい鋸歯がある。秋に茎を伸ばし、その先に穂状の可憐な花をつける。穂は短く楕円形につまり、暗紅色に色づく』。『「ワレモコウ」の漢字表記には吾亦紅の他に我吾紅、吾木香、我毛紅などがある。このようになったのは諸説があるが、一説によると、「われもこうありたい」とはかない思いをこめて名づけられたという。また、命名するときに、赤黒いこの花はなに色だろうか、と論議があり、その時みなそれぞれに茶色、こげ茶、紫などと言い張った。そのとき、選者に、どこからか「いや、私は断じて紅ですよ」と言うのが聞こえた。選者は「花が自分で言っているのだから間違いない、われも紅とする」で「我亦紅」となったという説もある』。当否は別としてこれ、命名説としては素敵に神がかっていて面白い。『別名に酸赭、山棗参、黄瓜香、豬人参、血箭草、馬軟棗、山紅棗根などがある』。また、根は地楡（ちゆ：中国語。ディーユー diyú）『という生薬でタンニンやサポニン多くを含み、天日乾燥すれば収斂薬になり止血や火傷、湿疹の治療に用いられる。漢方では清肺湯（せいはいとう）、槐角丸（かいかくがん）などに配合されている』ともある。］

花賣りの擬宝珠ばかり信濃をとめ

十六夜わが寝る刻（とき）を草に照る

ひと去りしいなづまの夜ぞ母子の夜

しづめたる食器泉の邊に讀める

［やぶちゃん注：堀内薫のすこぶる抒情的な底本年譜によれば、十月までいた野尻湖畔の「神山山荘八七番」は、『松や白樺の林間にあって野尻湖を見下ろす位置にあ』り、氷室があり、近くには「海燕」の装幀を手掛けた『富本憲吉一家の借りている８９番の山荘があり、両家は日々交遊、娘たちはボートに乗せてもらった。九月になると、どの山荘も釘付けとなり、娘たちは学校へ行くために帰り、多佳子と国子』（当時二十歳の次女）『だけが淋しい山中に取り残され』、『きつつきが木を叩く、とみるみる湖から霧が湧き起こり、二人を閉じこめる』とある。］

日々手傳ひに來る子あり

ひとの子を濃霧にかへす吾亦紅

寂しければ雨降る蕗に燈を向くる

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。］

曉（あけ）殊に露けき蚊帳ぞ子のねむり

わかれ蚊帳母子に五位の聲つばら

［やぶちゃん注：「五位」五位鷺。コウノトリ目サギ科サギ亜科ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* 。］

露の楢夜はわが燈に幹ぬれて

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。］

母と子に夜も木の實の落ちしきる

黑姫も落暉負ふ山燕去る

數歩して狐のかみそり草隱る

白露や花を盡さぬ鳥かぶと

北陸線親不知邊り

虹消えて荒磯に鐵路殘りたる

［やぶちゃん注：私は列車で何度もここを往復したものだった。――夜行急行列車のドアを開けて闇夜に浮かぶ親不知子不知の空気を知る者だけが――この匂いを――嗅ぎ分ける――］

秋の蝶きりぎしのもといそぎつつ

夫の忌に

月光に一つの椅子を置きかふる

いわし雲忌日きのふに過ぎゆける

［やぶちゃん注：既に述べた通り、夫豊次郎昭和一二（一九三七）年九月三十日に享年五十歳で逝去しているから、この年は死後四年目に当たる。多佳子四十二歳。年譜から夫の祥月命日もこの野尻湖畔で過ごしていたことが分かる。］

さびしさを日々のいのちぞ雁わたる

鶏頭の花のみ視野にしてひさし

睡られぬ月明き夜のつづくなる

昭和十七年

紀州白濱

冬薊海界（うなさか）高くのぼり來ぬ

［やぶちゃん注：「海界（うなさか）」は「海境」「海坂」とも書く、古代語。海の境、海の果ての意。舟が水平線の彼方に見えなくなるのは、海に傾斜があって他界に至ると考えたことに基づく語とされ、従って原義は神話に於ける海神の国と人の国との境界を指す。］

冬の霧手套の黒き指を組む

霧ながら冬うつくしき夕べ得ぬ

明比ゆき子夫人に

燈ともして梅はうつむく花多き

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。「明比ゆき子」恐らくは『馬酔木』の俳人仲間と思われるが、詳細不詳。ネット上ではかろうじて、

柚子湯して厨に殘す柚子ひとつ　　明比ゆき子

の一句を見出せた。「明比」は「あけひ」又は「あけび」と読む。この女流俳人について情報をお持ちの方、御教授をお願いしたい。］

さびしさといふこと紅梅身邊りに

二月の雲象（かたち）かへざる寂しさよ

奈良春日神社節分宵宮

万燈籠たかきへたかきへ道いざなふ

［やぶちゃん注：「奈良春日神社節分宵宮」既注。］

万燈籠幽けしひとの歩にあはす

［やぶちゃん注：「幽し」老婆心乍ら、「かそけし」と読む。光や色のかすかで、今にも消えそうなさまをいう。］

身にさして万燈ほのかなるひかり

かぎろへる遠き鐵路を子等がこゆ

春月の明るさをいひ且つともす

伊賀芭蕉生家

蕗畑ひかり身にしつなつかしき

［やぶちゃん注：大正一一（一九二二）年、二十三の多佳子が俳句に導かれるその年の底本の堀内薫氏の手になる年譜中には、『今まで多佳子は俳句は古くさいものと思い、芭蕉の翁姿は嫌いであった』とあり、二十年後のこの句はまっこと、いろいろな感慨を感ぜしむるものではある。］

木曽馬籠　十一句

加藤かけい氏に御案内頂き、永昌寺に泊る

かけい氏は即日雨の中を歸へられた

牡丹にあひはげしき基礎の雨に逢ふ

ひとをかへすおだまきの雨止むまじく

薄荷の葉嚙んで子供等雨が降る

おだまきやどの子も誰も子を負ひて

入學の一と月經たる紫雲英道

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「紫雲英道」は「げんげみち」又は「れんげみち」と読む。］

薄荷の葉嚙みすてし唇(くち)巒氣ひゆ

［やぶちゃん注：「巒氣」は「らんき」と読み、山中で感じられる特有の冷気を指す。］

山吹の瓣の鮮らしや一夜寢し

牡丹照るしづけさに仔馬立ねむる

牡丹照り鷄は卵を抱きをり

吾去りて山は蠶飼の季(とき)むかふ

燕來ぬ山家の障子眞白に

［やぶちゃん注：昭和一七（一九四二）年の春、次女国子とともに木曽馬籠へ旅行した際の句群。

「加藤かけい」（明治三三（一九〇〇）年～昭和五八（一九八三）年）は俳人。名古屋生。少年の頃に大須賀乙字に師事し、その没後は高浜虚子に師事、実兄加藤霞村と『名古屋ホトトギス会』を結成したが、昭和六（一九三一）年に『ホトトギス』を離脱、水原秋櫻子の『馬酔木』に入り、更に昭和二三（一九四八）年には山口誓子の『天狼』に移って同人

となり、『荒星』『環礁』を主宰した。句集に「夕焼」「浄瑠璃寺」など（思文閣「美術人名辞典」などに拠る）。「俳句空間―豈weekly句」の冨田拓也氏の選句他から拾っておく。

青蘆や水の蟹江の鮒鯰

かはほりやわがふところに人の遺書

たましひのぬけゆくおもひ初螢

草競馬人生の涯まつさをに

凧の子に天の扉のいま閉まる

糞の上瑠璃絢爛の揚羽蝶

萬緑に青きラムネの白激す

くちなしのはなのねぢれのあぶな繪よ

菫掘るむらさきの時間に耽り

麥爛熟太陽は火の一輪車

うぐいすやわが絶命も妙なるかな

「永昌寺」岐阜県中津川市馬籠にある臨済宗妙心寺派西沢山永昌寺。島崎藤村の先祖島崎七郎左衛門が弘治四・永禄元（一五五八）年に開創したと伝えられている島崎家代々の菩提寺。本尊釈迦如来。藤村は多佳子が訪れたこの翌昭和一八（一九四三）年に七十一歳で大磯の自宅で亡くなって大磯の地福寺に葬られたが、分骨された遺髪と遺爪がこの菩提寺永昌寺に埋葬された（藤村の妻冬子と三人の娘もここに眠っている）。

「おだまき」「をだまき」が正しい。苧環（おだまき）。紡いだ麻糸などを内側を空にして球状に巻いた糸玉のこと。糸を順々に巻きつけて端から引き出す。糸を巻きつけてあってまたそこから繰り出すことから、静御前の和歌、

しづやしづ　しづのをだまき　くりかへし　昔を今に　なすよしもがな

で知られるように「繰り返し」の序詞のように用いられる語である。ここでは絶え間なく繰り返し降る、その木曽路の篠突く雨を、「おだまきの雨」「おだまきや」と転じて用いているものと思われる。]

花おふち梢のさやぎしづまらぬ

［やぶちゃん注：「花樗」は「はなあうち（はなおうち）」と読む。センダン、一名センダンノキの古名。ムクロジ目センダン科センダン *Melia azedarach* の花。初夏五～六月頃に若枝の葉腋に淡紫色の五弁の小花を多数円錐状に咲かせる。因みに、「栴檀は双葉より芳し」の「栴檀」はこれではなく白檀の中国名（ビャクダン目ビャクダン科ビャクダン属ビャクダン *Santalum album*）なので注意（しかもビャクダン *Santalum album* は植物体本体からは芳香を発散しないからこの諺自体は頗る正しくない。なお、切り出された心材の芳香は精油成分に基づく）。］

どくだみの白妙梅雨の一日昏る

美代子入試のため曉よりはげむ　二句

こがね虫吾子音讀の燈をうちうつ

學ぶ子に曉四時の油蟬

［やぶちゃん注：橋本多佳子の四女橋本美代子（大正一四（一九二五）年～）はこの後、母に倣って『天狼』に入会、同じく山口誓子に師事した。昭和三五（一九六〇）年に『天狼』同人となり、その後、『七曜』同人から堀内薫より主宰を継承（一九九一年）、現在、奈良県在住。年譜の昭和一七（一九四二）年の冒頭（？！）には『四女美代子、女学部入試のため午前四時ごろ起床し勉学』とあるが、この「女学部」とは彼女の卒業した帝塚山学院文学部高等科のことを指すと考えられる。この年譜は異様に饒舌な、拘りのある頗る特異な年譜なのであるが、ここも一読誰もが奇異に思われようところである。種明かしをすれば、この橋本多佳子年譜自体が美代子の師堀内薫よるものだからである。］

信濃抄三

はまなすの紅姥捨も霧に過ぎ

髪匂ふことも親しく螢の夜

きりぎりす日が射せるより露あつく

膝前（さき）に秋爐もえつく山の日々

硯洗ふ墨あをあをと流れけり

身の邊り狐のかみそり日日に立つ

草照りて十六夜雲を離れたり

青胡桃地にぬくもりて拾はるる

青栗にしなのの空がすき透る

いなびかりひとゐて爐火を更けしめず

わがひざに小猫がぬくしいなびかり

ひざ前（さき）に爐火が燃えつぐきりぎりす

朝刊のつめたさ蟻斯(ぎす)が歩み寄る

牛乳(ちち)飲みに日日や秋立つ切通し

母と子に落葉の盛すぐ盡きぬ

一茶終焉の土蔵にて

あさがほや家をめぐりて十數歩

[やぶちゃん注：小林一茶（宝暦一三（一七六三）年～文政一〇（一八二八）年）は放浪の後、信濃北部の北国街道柏原(かしわばら)宿（現在の長野県上水内郡信濃町大字柏原）の実家への帰還後、継母や弟と遺産相続係争の末、文政一〇（一八二七）年閏六月一日（グレゴリオ暦一八二七年七月二十四日）に柏原宿を襲った大火のために住んでいた母屋を失い、焼け残った土蔵に住んだが、同年十一月十九日（グレゴリオ暦の一月五日）にそこで三度目の脳卒中の発作のために亡くなった。享年六十五歳であった。復元された一茶終焉の土蔵は現在、終焉の地であった長野県上水内郡信濃町柏原の一茶記念館にある。但し、この一茶記念館は後の昭和三二（一九五七）年にこの土蔵が国史跡として指定された後、昭和三五（一九六〇）年に開館したもので、土蔵もその後二度に亙って解体保存工事が施されたもので、多佳子がこの時見たものとはかなり異なるものと思われる（以上は「一茶記念館」公式サイトやウィキの「小林一茶」その他信頼出来る複数の記載を参考に記した）。]

鳥兜花盡さぬに我等去る

[やぶちゃん注：「鳥兜」は「とりかぶと」で、かの有毒植物である。花はたいそう美しい

（私は好きである）。モクレン亜綱キンポウゲ目キンポウゲ科トリカブト属 *Aconitum* のヤマトリカブト *Aconitum japonicum* か。見「盡さぬ」うち「に」の謂いか。］

道の邊に捨蠶の白さ信濃去る

［やぶちゃん注：「蠶」は底本では「蚕」。「捨蠶」は「すてご」で、養蚕に於いては病気又は発育不良の蚕は野原や川に捨てられる。それを言う。］

日が射せる秋の蚊遣や忌を訪はる

［やぶちゃん注：「忌」九月三十日の夫豊次郎（昭和一二（一九三七）年逝去）の祥月命日、六回忌のことと思われる。］

昭和十八年

時雨月夜半ともなれば照りわたり

［やぶちゃん注：「時雨月」は陰暦十月の異名である。但し、ここは同時に事実、昼から宵に時雨れていて、夜半となって雲を払晴れ渡った夜空としっとりと濡れた大地の映像を想起すべきであろう。季語の病いはしたり顔で月の異名と述べるばかりで実景を見ぬ。］

山茶花のくれなゐひとに訪はれずに

武藏野の樹々が眞艸に母葬る

母葬る土美しや時雨降る

［やぶちゃん注：多佳子の実母山谷津留はこの昭和一七（一九四二）年十一月七日に多佳子の日々の看取りを受けつつ、東京で亡くなられた。享年八十二歳。浅草山谷堀端、東京都台東区浅草にある浅草寺子院の聖観音宗金龍山遍照院（へんじょう）に葬られた。リンク先は「白田（はくた）石材店」のサイト内の寺院案内であるが、このサイト、なかなか侮れない。］

枯萩を人焚き昏るる吾も昏る

枯萩の嵒ましろくすぐをはる

［やぶちゃん注：「嵒」は底本の用字。］

木枯のひととき夕燒つのり來る

ひばり野やあはせる袖に日が落つる

水打つてけふ紅梅に夕凍てず

［やぶちゃん注：「夕凍」は一般には「夕凍（ゆふし）む」（ゆうしむ）で、夕暮れ時、対象が氷結してしまうような寒さやその氷結してしまう、若しくはそうした感じに見える、感じることをいう語と思われるが、ここは「ゆふいてず（ゆういてず）」と訓じている。］

來し方や昏き椿の道おもふ

［やぶちゃん注：単なる直感に過ぎないが、この「野々宮」とは京都市右京区嵯峨野の野宮（ののみや）神社のように私には感じられる。］

冬雲の北のあをきをわが恃む

雨風の連翹闇の中となる

縫ひすすむ針よりも衣ひゆる夜ぞ

子とあれば吾いきいきと初蛙

信濃抄四

いづこにもいたどりの紅木曾に泊つ

一夜寝て晩ひぐらしを枕もと

足袋買ふや木曾の坂町夏祭

いなびかりつひに我灯も消しにけり

走り出て湖汲む少女いなびかり

秋燕にしなのの祭湖(うみ)荒れて

［やぶちゃん注：「秋燕」特に秋の社日(しやにち)（元来は産土神（社）を祀る日で春分と秋分に最も近い、その前後の戊の日を指す）である秋社(あきしや)の日に南へと渡り帰ってゆく燕を指す。例えば今年二〇一四年のそれは九月二十四日に当たる。］

草の中ひたすすみゆく秋の風

雀ゐて露のどんぐり落ちる落ちる

木の實落つわかれの言葉短くも

百日紅つかれし夕べむらさきに

曼珠沙華ひそかに息をととのふる

早稲の香のしむばかりなる旅の袖

筆洗ふ蜩とみに減りしよと

奈良二月堂に青衣女人の能を觀る

增面に八月の月の落ちかかる

［やぶちゃん注：「青衣女人の能」「青衣女人」は「しやうえによにん（しょうえにょにん）」

と読む。これは土岐善麿作になる喜多流の新作能。不比等氏のブログ「奈良」のこちらの記事に司馬遼太郎の「街道をゆく・奈良散歩」に、まさにこの昭和一八（一九三三）年十月六日に二月堂で喜多実により演じられたとある。私は見たことはないが、これは東大寺二月堂で三月一日から十五日（旧暦では二月）に行われる修二会の中の、古いエピソードに基づくものであろう。ウィキの「修二会」の「大導師作法と過去帳読誦」の項に、『初夜と後夜の悔過は「大時」といわれ特別丁寧に行われ、悔過作法の後に「大導師作法」「咒師作法」を』修し、『大導師作法は聖武天皇、歴代天皇、東大寺に縁のあった人々、戦争や天災に倒れた万国の人々の霊の菩提を弔うとともに』、為政者が『天下太平、万民豊楽をもたらすよう祈願する』ものとあり、『初夜の大導師作法の間には「神名帳」が読誦される。これも神道の行事で』、一万三七〇〇余柱の『神名が読み上げられ呼び寄せる（勧請）。お水取りの起源となった遠敷明神は釣りをしていてこれに遅れたと伝えられている』。そして三月五日と十二日の二回『過去帳読誦が行われる。過去帳では聖武天皇以来の東大寺有縁の人々の名前が朗々と読み上げられる』とあって、そこに以下のようなエピソードが書かれている。

《引用開始》

これには怪談めいた話がある。鎌倉時代に集慶という僧が過去帳を読み上げていたところ、青い衣を着た女の幽霊が現れ、

「など我が名をば過去帳には読み落としたるぞ」

と言った。なぜ私の名前を読まなかったのかと尋ねたのである。集慶が声をひそめて「青衣の女人（しょうえのにょにん）」と読み上げると女は満足したように消えていった。いまでも、「青衣の女人」を読み上げるときには声をひそめるのが習わしである。

《引用終了》

水墨画作家杉崎泉照（せんしょう）氏のブログ「水墨画作家　杉崎泉照の日常」の「青衣の女人考」の記事に、『ちなみに、あからさまに名前を呼べないがかなり高い位まていった人物「藤原薬子」をわたしは挙げたが、では、このころの「礼服」を「衣服令」に照らしてみるに、「緑色」を含む「青い色」の衣は「薬子」にふさわしからぬ、低位の色』。『薬子は死後「冠位」を

剥奪されているが、この「青衣の女人」という言葉が「恩赦」を表しているとすれば、「改めて低位の縹色」を身につけて修二会に参列してもおかしくないかもしれない』とある（最初の箇所の先行記事はこちら）。日本画家であられるだけに色の問題も語っておられ、興味深い。

「増面」「ぞうめん」と読んでいるか。能面の増女（ぞうおんな）のことであろう。「イノウエコーポレーション」の「能面ホームページ」の「増女」に解説と写真が載る。

さても私は奈良も能も不案内なれば、これまでと致す。」

角あはす雄鹿かなし道の端

木犀の香や縫ひつぎて七夜なる

後の月縫い上げし衣かたはらに

［やぶちゃん注：「後の月」言わずもがな乍ら、「のちのつき」とは陰暦八月十五夜の月を初名月というのに対する九月十三夜の名月。十三夜月。十三夜。秋の季語である。］

四日市に誓子先生をお訪ひする　五句

つゆじもや發つ足袋しろくはきかふる

ほのぼのと襟あたたかし石蕗も日に

濤うちし音返りゆく障子かな

［やぶちゃん注：「濤」は底本の用字。］

砂をゆく歩々の深さよ天の川

濤ひびく障子の中の秋夜かな

［やぶちゃん注：「濤」は底本の用字。］

朝刊に日いつぱいや蜂あゆむ

冬河に海鳥むるる日を訪へり

冬の月明るきがまま門（と）を閉ざす

昭和十九年

名古屋に加藤かけい氏を訪ふ

かすみ女様に初めておめにかゝる、そしてこれが最後となりし　三句

さめてまた時雨の夜半ぞひとのもと

臘梅のかをりやひとの家につかれ

枯るる道ひとに従ひゆくはよき

［やぶちゃん注：「加藤かけい」既注。

「かすみ女」不詳。女流俳人らしい名であるが、加藤氏の妻か？　識者の御教授を乞う。

なお、個人的はこの前書は好きになれない。明らかに作句時から時間が経った後、もしかすると数年後（『信濃』出版は戦後の昭和二二（一九四七）年七月）のこの句集出版に際しての編集作業の中でこの前書の特に「そしてこれが最後となりし」の部分がつけ加えられたものと思われるが（直後に亡くなったとしてもそれは明らかな句作の「後」であり、前書は明らかに句の時制から後の時制で書かれていることになるということである）、これは作者の思いの中にのみ込めておけばよかったものと私は思う。何故なら、この三句には、その邂逅が遂に「これが最後とな」ったことの感懐は、当然の如く、詠み込まれてはいないからである（この三句の中にそうした運命的出逢いの感懐や運命のミューズが潜んでいると言われる方は、この愚鈍の私に是非とも分かり易くご説明願いたいと存ずる）。私の謂いは決して多佳子に対して非礼ではないと信ずる。寧ろ私は、悼亡句でもない句で、その前書如きで人の死を遡って語ってしまい、その深い哀しみの感懐（その思いの深さは十全に分かる）を示しながら、しかも、はっきり言ってそれほど渾身の句とも思えぬ挨拶句三句を並べ立てるというのは、私には理解出来ないということなのである。因みにこの前書が、

名古屋に加藤かけい氏を訪ふ

かすみ女様に初めておめにかゝる　三句

（後日註　これがかすみ女様との最後となりし）

であったなら、私はたいした違和感も持たずに、この句を読んだであろう。死は、実際の人の死は、文芸の装飾如きには決してならぬ／すべきでないという立場を私はとる。この前書に関してのみ言うなら、私は多佳子こそが軽率で非礼であると信じて疑わないのである。

前書というのは余程注意しなければ（特に作後に附す場合には）、おぞましい亡霊となって逆に句に襲いかかり、遂には喰い尽くしてしまうものだと思うのである。］

鈴鹿に堀内三郎を送る　二句

雪嶺を空にし人はあひわかる

うしろより肩かけうけてわかるる刻

［やぶちゃん注：「堀内三郎」次女国子の婚約者。年譜によれば、堀内はこの昭和十九年冬に学徒動員によって三重県の鈴鹿航空隊に入隊していた。彼を多佳子は国子とともにその直後に訪ねている（当時国子二十三歳、多佳子四十五歳）。同年譜同年末の記載によれば、『終戦後、内地帰還の途次遭難。多佳子、国子に悲しみの日がつづく』とあって堀内は復員途中で行方不明（推定死亡？）となったものと思われる（後、年譜昭和二十二年六月の項に『次女国子は、小布施大三郎と結婚、多佳子安堵する』とある）。］

夫の墓地阿倍野にあり

事告げて歸へる萩むら風の中

［やぶちゃん注：「阿倍野」現在の大阪市阿倍野区。実はこの昭和一九（一九四四）年五月に多佳子一家は大阪の帝塚山（帝塚山は現在の大阪市阿倍野区南西部から同市住吉区北西部にかけての地域名である）から現在の奈良市あやめ池町南四丁目に疎開している（年譜に拠る）。「事」の内容は無論分からないが、前に次女国子の、婚約者堀内三郎との別れに際しての二句を受けるなら、その哀しい報告が「事」の一つであったことは間違いないと思われる。］

祖母の雛上野の戰火をのがれて今も吾と在り

古雛をみなの道ぞいつくしき

［やぶちゃん注：「古雛」は「ふるひひな」と訓じていよう。「いつくしき」は「美し／厳し」で、原義は「威厳を持っている」「堂々として立派だ」の謂いであるが、そこから容姿や態度が優れている、美しい、また、心が澄んで非の打ちどころがない、の謂い。「上野」とあるが、年譜を見ると多佳子は東京市本郷区鶴岡町で生まれており（明治三二（一八九九）年一月十五日生まれ、本名多満）、明治四三（一九一〇）年の項には明治三十八年に移住していた浅草区瓦町から『母の実家に近い本郷湯島天神下に母子三人で移住』（多佳子の父雄司は明治四十二年に逝去している）とあり、上野の直近であるから、この祖母とは「をみなの道ぞいつくしき」からも、母方の祖母のことかと思われる。］

菅原抄

住吉帝塚山より奈良西大寺の邊り菅原へ引移る　裏の松山へ登れば藥師寺の塔も見ゆ

鶯やかまどは𥫗をしみなく

［やぶちゃん注：「𥫗」は底本の用字。奈良市公式サイト内の「町の区域及び名称の変更について」によれば、多佳子の疎開先であった現在のあやめ池南四丁目は、旧西大寺町の一部・菅原町の一部・青野町の一部からなり、通称名あやめ池町南一丁目の一部であったことが分かり、さらにこのあやめ池町全域には必ず旧菅原町の一部が含まれていることも分かる。以上から、このあやめ池町全体が古くは菅原という名称で呼ばれていたと推定出来る。］

移り來て蕗薹のみ鮮しき

水仙のりゝと眞白し身のほとり

わが住みて野邊の末黑を簷のもと

［やぶちゃん注：「末黑」は「すぐろ」と読み、春、野焼きなどの跡で草木が黒く焦げていること、また、その草木をいう。春の季語。「簷」は「のき」と訓じていよう。］

月いでてわが袖の邊（へ）も朧なる

ほととぎす曉の闇紺青に

ほととぎす新墾に火を走らする

上京　四句

い寢さめて武藏野の穹合歡の穹

洋子生る

天の川今瀧なせり産聲を

［やぶちゃん注：「瀧」は底本「滝」。「洋子」不詳であるが、長女淳子の子であろうか。］

久々にて叔母に逢ふ

毛糸あむ掌のなつかしや事告げむ

［やぶちゃん注：非常に私的な句で「告げ」た「事」の内容など、意味をとることを憚られる感じの句ではある。］

車窓明け富士新雪の天に逢ふ

草の穂を走るいなづま字を習ふ

干大根人かげのして訪はれけり

干大根月かげにあり我家なり

［やぶちゃん注：底本全集年譜によれば、この昭和一九（一九四四）年には疎開先のあやめ池で、子供らのために家のそばの空き地を開墾して、麦・甘蔗・トマト・大根などを作り、モンペ姿で肥えを担いで畑仕事に熱中、自然と句作を休んでいたが、四日市にいた師山口誓子より、

句を見ねば君の遠さよ秋の風

という句を貰い、感激してまた俳句を創った、とある。また、『その当時、四日市に空襲があり、誓子は危険を感じて、作った句をまとめては橋本家へ送りつづけ』たともある。］

昭和二十年

礫うつ氷沼のひびきを愛(かな)しみて

時雨星北斗七つをかぞへけり

［やぶちゃん注：「時雨星」は「しぐれ／ほし」であろう。］

鹿の斑(ふ)の夏うるはしや愁ふまじ

啓子男子をあげる

みどり子もその母も寝て雁の夜

［やぶちゃん注：年譜に、『秋、お産のため母の膝下に帰っていた三女の啓子が男子を出産』とある。これが実質的な敗戦後の新生日本となった折りの多佳子の巻頭句と考えるとき、何かとても、大いなる『母』の優しさが伝わってくる佳句と感じられる。］

鰯雲旅を忘れしにはあらず

［やぶちゃん注：加藤楸邨の昭和一四（一九三九）年刊の句集「寒雷」に載る名句、

鰯雲人に告ぐべきことならず

の卑小なインスパイアで、句跨りの字余りを確信犯とした韻律も私にはよく響かぬ。］

秋風や耳朶を熱くしひとの前

曼珠沙華塔得し道の樂しさに

曼珠沙華海なき國をいでず住む

［やぶちゃん注：「海なき國」戦中の前年の疎開で移っていた奈良県（あやめ池町南）のこと。多佳子は亡くなるまでここに住んだ。］

曼珠沙華さめたる夢に眞紅なり

奈良飛火野

白露や穂草茫茫ちかよれず

［やぶちゃん注：「奈良飛火野」「とぶひの」又は「とびひの」と読み、奈良県奈良市街の東の春日大社に接する林野、春日野をいう。池や沢などがあって現在の奈良公園内に含まれる。七一二年に急を告げる烽（とぶひ）＝烽火（のろし）を焚く台が置かれた地で、万葉などの古歌に詠まれた歌枕である。］

病みて

秋簾訪ひ來し人の聲をきく

九州路

着きてすぐ別れの言葉霧の夜

門司と讀み海霧卷ける街に出る

夜の霧に部屋得て窓に港の燈

［やぶちゃん注：「燈」は底本の用字。］

筑紫路や鐵路も墓も石蕗（つは）さかり

波あがる崖そひの道石蕗の照り

宿ありて夜霧博多の町歸る

［やぶちゃん注：昭和二十年の年譜には、『冬、農地改革が行われるに当たり、九州大分にある農園の後始末のために次女の国子と行く。京都駅に配置された貨車に乗り、九州までの長旅を揺られて行』ったが、いざ着いてみると『夫の残した大分農場の荒廃に驚く』とある。当時、多佳子四十六歳であった。この大分農場とは、底本年譜の豊次郎と多佳子が結婚した大正六（一九一七）年の条に豊次郎の事蹟を載せる中に、『豊次郎は、結婚記念に大分農場（十万坪）を拓き経営。これは青年時代の夢の実現であ』ったと記すものである。……さても……私は山之口貘の詩の電子化をも行っているが……借金だらけの貧乏詩人（バクさんの方が四つ年下）と戦前の優雅な生活が次第に奪われてゆく寡婦多佳子（といっても転落でも斜陽でもないのであるが）と……それぞれにそれぞれの何かしみじみとした人生ではある、という気がする……］

舊より江夫人邸

秋蝶に猫美しく老いにけり

［やぶちゃん注：「より江」既にこの四年前に逝去していた先輩の女流俳人久保より江（明

治一七（一八八四）年～昭和一六（一九四一）年）。旧姓宮本。愛媛県松山生まれで夏目漱石や正岡子規に接して句作を始め、上京、東京府立第三高等女学校（現在の都立駒場高等学校）を卒業、日本耳鼻咽喉科学の先駆者久保猪之吉（いのきち）と結婚、夫が福岡医科大学教授となって福岡に住むと、夫とともに俳句は高浜虚子に、短歌は服部躬治（もとはる）（私のブログ記事「鞦韆のさゆらぎ止まぬ我が庭の芭蕉卷葉に細し春雨　萩原朔太郎」の注を参照）に師事、柳原白蓮・竹下しづの女・杉田久女らと交友、当時は福岡で「久保サロン」と呼ばれた。多佳子も寄稿している『花衣』（昭和七（一九三二）年に久女により創刊された俳誌）にも寄稿しており、年譜には特に名は出ないが、福岡の同じ文化的セレブでもあり、多佳子も親しくしていたものと思われる。]

秋雨にわかれの言葉まだいはず

船まつや不知火の海蝗とび

石蕗の照り爪切つてゐるひとの許

綿虫瞳を細めつつ海青き

[やぶちゃん注：「綿虫」雪虫。有翅亜綱半翅（カメムシ）目腹吻亜目アブラムシ上科 Aphidoidea に属するアブラムシ類の内、白腺物質を分泌する腺が存在するものの通称。体全体が綿で包まれたようになる。雪虫という呼び方は主に北国での呼び名で他にオオワタ（大綿）・シーラッコ・シロコババ（白粉婆）・オナツコジョロ・オユキコジョロ・ユキンコ・シロバンバ・ユキバンバ（雪婆）といった多彩な俗称がある。体長五ミリメートル前後。具体的な種としてはアブラムシ科 *Prociphilus* 属トドノネオオワタムシ *Prociphilus oriens* やリンゴの病害虫として知られる *Eriosoma* 属リンゴワタムシ *Eriosoma lanigerum* などが代表的な種である。アブラムシは通常は羽のない姿で単為生殖によって多数が集ま

ったコロニーを作るが、秋になって越冬する前などに羽を持つ成虫が生まれ、交尾をして越冬の為の卵を産む。この時の羽を持つ成虫が蝋物質を身にまとって飛ぶ姿が雪を思わせ、またアブラムシ類は飛翔力が弱いために風になびいて流れる雪をも思わせることから、かく呼称する。北海道では初雪の降る少し前に出現したりする（と感じられることが多い）ことから、冬の訪れを告げる風物詩ともなっている。雄には口が無く、寿命は一週間ほど。雌も卵を産むと死んでしまう。熱に弱く、人間の体温でも弱る（ここまでは主にウイキの「雪虫」に拠る）。大澤水牛氏の「水牛歳時記」の「綿虫」には、『今日ではワタムシとユキムシはごちゃまぜにされているが、本来は異なる虫である。ワタムシはアブラムシだが、ユキムシは早春二月、雪の上に夥しく出て来るカワゲラである』（この「カワゲラ」は襀翅目クロカワゲラ科セッケイカワゲラ *Eocapnia nivalis* を指す）。天保一三（一八四二）年に越後の鈴木牧之が著した「北越雪譜」『には「雪蛆の図」として「此虫夜中は雪中に凍死せるがごとく、日光を得ればたちまち自在をなす、又奇とすべし」と、雪虫の事が載っている』。『第２次大戦後もしばらくは「雪虫」は春（早春）の季語、綿虫は冬の季語として峻別されていたが、現在は雪虫もほとんど冬の景物として詠まれることが多い』。『水原秋櫻子に「横浜子安牧場」という詞書の下に「綿虫やむらさき澄める仔牛の眼」の句がある。現在の子安近辺は住宅や工場が密集する所だが、戦前は横浜に住む外国人やハイカラ人種の需要を満たすべく、乳牛、肉牛を飼う牧場があちこちに見られた。そして晩秋ともなれば綿虫が舞うのが見られたのである。しかし、地球温暖化の影響か、綿虫が取りつく草木も少なくなったせいか、東京、横浜あたりでは綿虫の舞う景色など滅多に見られなくなった。首都圏在住の俳句愛好者は遙か北国に思いを馳せて、冬の訪れを告げる虫の姿を脳裡に描く他は無い』と優れた博物学的記載がなされてある。」

旅の髪洗ふや夜霧町をこめ

窓あけて不知火の海ただ闇に

わが大分園藝場の荒廢に驚く

荒園の又美しやいわし雲

由布に雪來る日しづかに便書く

柚を垂らす秋刀魚筑紫の旅了る

冬の蝶いつしか旅の日をかさね

下關

冬の月いでて歩廊の海冥き

貨車の旅

寒星のひかりにめざめ貨車の闇

寒の闇體がくんと貨車止る

貨車とまる驛にあらざる霜の庭

貨車の闇小さき鏡に霜明くる

貨車の扉（と）の筑紫冬嶽みな尖る

［やぶちゃん注：既注であるが、再度注しておくと、この昭和二十年『冬、農地改革が行われるに当たり、九州大分にある農園の後始末のために次女の国子と行く。京都駅に配置された貨車に乗り、九州までの長旅を揺られて行』ったが、いざ着いてみると『夫の残した大分農場の荒廃に驚く』と底本年譜にある。当時、多佳子四十六歳であった。］

昭和二十一年

寒牡丹炭ひく音をはばからず

寒牡丹山家の日ざしとどめ得ず

山住みのしぐれぞよしや日日時雨

再び筑紫へ

わすれ雪髪をぬらして着きにけり

桃たへず雫してゐるわすれ雪

小倉櫓山荘にて　二句

廃園に海のまぶしき藪椿

杉田久女様御逝去を知る。小倉在住當時俳句

の手ほどきを受ける。毎日のやうに櫓山荘を訪づれられしを想ひ

春潮に指をぬらして人弔ふ

［やぶちゃん注：この昭和二一（一九四六）年初に前年冬の大分農場の後処理のための九州行とは別に再度、筑紫を訪れたという事蹟は実は年譜上にはないのだが、これらの前書及び以下に続く同年中の詠の中に、「久しぶりなるにしき丸にて九州へ」という前書のある「夜光虫」を詠み込んだ三句、また「由布嶽、鶴見嶽等園をかこめば」と前書のある夏の景を詠んだ句が含まれてあるから、この年は年初に福岡に（これは前年に引き続いての滞在の可能性もなきにも非ずだが、であるとしたら「再び」と前書はしないように私は思う）、また夏には大分に在ったと考えるしかない。なお、同年年譜の最後には農地改革によって『十万坪の大分農場は農地払下げとなる。坪八十銭』とのみある。

杉田久女はこの年の一月二十一日、入院先の福岡市郊外大宰府の県立筑紫保養院にて腎臓病の悪化により亡くなった。密葬で淋しいものであったと推測される。多佳子も無論、その後に知ったということである。この一句、多佳子の、久女への悼亡に、如何にも相応しい一句である。］

菜殼火のけむりますぐに昏るるなり

雨の天（そら）たしかに雲雀啼いてゐる

なかぞらに虻のかなしさ子の熟睡（うまゐ）

［やぶちゃん注：「熟睡（うまゐ）」万葉集にも出る古語であるが、歴史的仮名遣は誤りで「うまい」が正しい。快い眠りを指し、ここでもその用法であるが、万葉の用例では男女の共寝を指

すようである。]

田植季わが雨傘もみどりなす

[やぶちゃん注：老婆心乍ら、「田植季」は「たうゑどき」と読む。]

山吹や山水なれば流れ疾く

[やぶちゃん注：「山水」は「さんすゐ」ではなく「やまみづ」であろう。]

中空に音の消えてゆくつばな笛

[やぶちゃん注：：「つばな笛」「つばな」は単子葉植物綱イネ目イネ科チガヤ *Imperata cylindrica* を指し、その穂を除いた葉で作った草笛のことをいっているものと思われる。]

ほととぎす髪をみどりに子の睡り

ほととぎす夜の髪を梳きゐたりけり

灯のもるる蕗眞青に降り出しぬ

簾戸入れて我家のくらさ野の青さ

霧がくる一輪の日や沼施餓鬼

沼波の青沁むべしや施餓鬼幡

沼施餓鬼蟹はひそかによこぎりて

雨の沼螢火ひとつ光(て)りて流れ

［やぶちゃん注：「螢火」の「螢」は底本の用字。この沼施餓鬼（あやめ池であろうか）の句群はその妖しさに於いて私の偏愛するものである。］

金鳳華子らの遊びは野にはづむ

［やぶちゃん注：この佳句は「金鳳華」（キンポウゲ目キンポウゲ科キンポウゲ属 *Ranunculus*）の花が好きな人ならば文句なしに分かっていただけるものと存ずる。］

ひと日臥し卯の花腐し美しや

久し振りなるにしき丸にて九州へ　三句

夜光虫舳(へ)波の湧けば燃ゆるなり

高松へ寄港

枇杷買ふて舷梯のぼる夜の雨

仄かにも渦ながれゆく夜光虫

わが園藝場の栗畑伐りて畠とさる　八句

花栗の伐らるる音を身にし立つ

由布嶽、鶴見嶽等園をかこめば

樹々伐られ夏嶽園（ゑん）に迫り聳つ

月燦々樹を伐られたる花栗に

花栗の枝ふりかぶり斧うちうつ

生々と切株にほふ雲の峰

炎天の清しき人の汗を見る

炎天の清々しさよ鐵線花

雨の蚊帳花栗の香にい寝られず

［やぶちゃん注：前掲の同年年譜の最後にあった農地改革によって『十万坪の大分農場は農地払下げとなる。坪八十銭』の変容の只中を活写した嘱目吟。チェーホフの「桜の園」をインスパイアしてもいるが、それがやや見え透いてしまい、プチ・ブルでさえない私には今一つ感懐が伝わらぬ。悪しからず。］

紫蘇しぼりしぼりて母の戀しかり

［やぶちゃん注：先に記したように多佳子の母津留は、この四年前の昭和一七（一九四二）

年（多佳子四十三歳）十一月七日、多佳子の看取りを受けて東京で享年八十二歳で逝去している。この句は個人的に涙を禁じ得ない。］

もの書けるひと日は指を紫蘇にそめ

螢火のこぼれて小石照らさるる

珈琲濃しあさあがほの紺けふ多く

子が吹く蘆の笛の音面白ければ吾も吹きみる

蘆の笛吹きあひて音を異にする

［やぶちゃん注：前書及び句の「蘆」は底本では「芦」。］

子がねむり重さ花火の夜がつづく

罎に子に夕べながさよ子をよびに

濃き墨のかはきやすさよ青嵐

梶の葉の文字瑞々と書かれけり

七夕や髪ぬれしままに人に逢ふ

［やぶちゃん注：私の偏愛する句。］

病みて

いなびかり病めば櫛など枕もと

いなびかり醫師（くすし）の背よりわがあびぬ

いなびかり寝しまま髪を梳きくるる

うちそとに月の萩むら門を鎖す

銀屏に蛾の多き夜や病み臥して

頭のみ見えて雀が野分中

づぶ濡れて野分の雀われ覗く

青芒月いでて人歸すなり

病み臥して夜々のいなづま身にあびる

青萱に月さして尚雨はげし

蜂の巣にめつきり朝は秋日ざし

ひぐらしのしぶけるごとく湖（うみ）暮るる

［やぶちゃん注：野尻湖か。］

夜の障子木犀の香のとどこほる

われに來る木犀の香をひとよぎり

木犀のにほひの中に忌日來る

［やぶちゃん注：夫豊次郎（昭和一二（一九三七）年逝去）の祥月命日である九月三十日であろう。この昭和二一（一九四六）年のそれは十回忌に当たっていた。］

みじろげば木犀の香のたちのぼる

狐花かたまり咲きて翳なさず

狐花わが前に咲き沼に咲き

沼波のにごりいく日ぞ狐花

狐花莖瑞々と花失せし

［やぶちゃん注：「狐花」は曼珠沙華（単子葉植物綱クサスギカズラ目ヒガンバナ科ヒガンバナ亜科ヒガンバナ連ヒガンバナ *Lycoris radiata* ）の異名。ヒガンバナの異名については、私のブログ記事「曼珠沙華逍遙」を参照されたい。］

曼珠沙華忌日の入日とどまらず

［やぶちゃん注：「忌日」夫豊次郎の祥月命日九月三十日。］

曼珠沙華海を渡りてなほ鐵路

曼珠沙華けふは旅なる吾にもゆ

曼珠沙華驛々に咲き旅遠き

さそり座をかかげ余して露の宿

［やぶちゃん注：「余して」は迷ったが、底本の表記のママとした。後半に出てくる旅は年譜の昭和二一（一九四六）年の十月の項に載る、『戦後はじめて、汽車の混雑甚だしい中を、伊勢、天ヶ須賀海岸に誓子を訪う』とあるそれであろう。天ヶ須賀（あめがすか）は現在は三重県四日市市北部の地区名。ウィキの「天ヶ須賀（四日市市）」には驚くべきことに「山口誓子」の独立項があり、『三重郡川越町高松地区にある中小企業の谷口石油の南側の天ヵ須賀』二丁目に彼の邸宅があった。後、「かの雪嶺信濃の国の遠さもて」の句碑が『四日市市民の有志によって建立された。山口誓子は』昭和一六（一九四一）年『に病気となり療養のために四日市市の富田地区の住民となり』、平成六（一九九四）年に九十二歳で死去した。そこには昭和二一（一九四六）年に『天ヶ須賀の須賀浦海水浴場沿いに移住した。天ヶ須賀地区には須賀浦海水浴場があり、海水浴客が宿泊する旅館や別荘地として開発された観光地で天ヶ須賀で考えた俳句があり、天ヶ須賀は自然に恵まれた環境であった。天ヶ須賀は病気の治療や療養には良い土地だった』とある。多佳子の年譜によれば、この誓子の引越は同年六月（四日市市富田より転入）である。当時、誓子は四十五、多佳子、四十七歳であった。］

四日市

出水して町に秋燕啼き溜る

踏切を流れ退く秋出水

蟹の碧秋の出水の町に見る

秋燕や高き帆柱町に泊つ

山口波津女夫人に

夕焼中ともにをみなの髪そまり

［やぶちゃん注：「山口波津女」「やまぐちはつぢよ（やまぐちはつじょ）」と読む。誓子夫人で本名は梅子（明治三九（一九〇六）年～昭和六〇（一九八五）年）。昭和一三（一九三八）年の結婚後に本格的に句作を始め、『馬酔木』同人から夫の主宰する『天狼』同人となった。夫より五つ下であるから、当時、四十歳。多佳子より七つ年下である。］

尾を見せて狐没しぬ霧月夜

母と子のトランプ狐啼く夜なり

霧月夜狐があそぶ光のみ

［やぶちゃん注：以上で句集「信濃」は終わっている。］

句集「紅絲」

［やぶちゃん注：「こうし」と読む。昭和二六（一九五一）年六月一日交目黒書店刊。昭和二二（一九四七）年から同二十六年（多佳子四十八歳〜五十二歳）までの作品四百十三句を収録する。序文は山口誓子。誓子の序文は著作権存続中のため、省略する。なお、これ以降の句集は戦後の作であることから、底本通りの新字体とする。］

凍蝶抄

凍蝶に指ふるゝまでちかづきぬ

凍蝶も記憶の蝶も翅を欠き

凍蝶を容（い）れて十指をさしあはす

凍蝶のきりきりのぼる[illegible]かな

箸とるときはたとひとりや雪ふり来る

鴉過ぎ怺へこらへし雪ふり来る

［やぶちゃん注：「怺へ」は「こらへ」と読む。］

雪墜(づ)る音髪を洗ひて眼つむれば

雪はげし抱かれて息のつまりしこと

［やぶちゃん注：多佳子の代表句の一つ。しかし、不倫好みの昨今の風潮の中で、かの多佳子を誤解する向きはもっと多佳子の句を読まねばならぬ。最低でも次の句と並置されていることに気付かねばならぬし、多佳子にしてみれば、この句は独り歩きをさせずに「雪はげし」二句としてペアで読まれなければならないと感じていたはずである。この抱かれた相手は亡き夫豊次郎であり、それ以外には、ない、からである。普通ならば崖淵の危うさを持つ妖しい句が不思議に猥雑に堕すことがないというのも、これ、多佳子マジックなのである。句集上限の昭和二二（一九四七）年当時、多佳子四十八歳。］

雪はげし夫(つま)の手のほか知らず死す

［やぶちゃん注：「夫(つま)」は万葉以来、広義に夫婦や恋人が互いに相手を呼ぶ称でもある。従って事実に即せばこれは「知らず死す」という下五から亡き「夫」豊次郎のことを指した追懐句と読める句ではある。ところが、「夫」という文字と並置される前句の主観性によって導き出されるのはやはり、「つま」である多佳子を主体とした詠である。さすれば――「夫の手のほか知らず死す」ことを既にして決しているところの、凄絶な美しさを持った貞節なる未亡人が、激しく吹雪く雪を凝っと見つめている――という景が自ずと見えてくることになる。少なくとも私はそのようなものとしてこの組み句を読んできたということを申し添えておく。］

かじかみて脚抱き寝るか毛もの等(ら)も

鶏と猫雪ふる夕べ食べ足りて

猫歩む月光の雪かげの雪

みぞれ雪涙にかぎりありにけり

暮れてゆく樹々よこの雪は積らむ

［やぶちゃん注：やや読みが不詳。「くれてゆく／／きぎよ／この／ゆきは／／つもるらむ」と私は読むが、暫く御批判を俟つ。］

ねむたさの稚児（ちご）の手ぬくし雪こんこん

燃ゆる薪雪に置かれて盛止つ

牡丹雪さはりしものにとゞまりぬ

夫の兄料左衛門逝く、夫歿後何くれとなく
暖き手をのべらしれし思ひ悲しさに堪へず

肩かけやどこまでも野にまぎれずに

肩かけの裡（うら）に息して人の死へ

刈田の火赤し人亡しと思うとき

冬雲雀そのさへづりのみぢかさよ

拠るものゝ欲しけれど壁凍るなり

あふれいづる涙冬蝶ふためき飛び

掌(て)に裹む光悦茶碗凩堪へ

蕗の薹寒ゝのむらさき切りきざむ

寒念仏ひゞくやひゞきくるもの佳(よ)し

木樵ゐて冬山研さけびどほし

冬の森若人にすぐ研して

空林や流れのあれば紅葉しづめ

沼

水鳥の沼が曇りて吾くもる

沼氷らむとするに波風たちどほし

頭(づ)勝ちなる鳩の身すぐにくつがへる

凍(い)て死にし髪吾と同じ女の髪

金色の焚火一炷二人の死

置かれある情死の天の寒き晴れ

［やぶちゃん注：二句目の「一炷」は「いつしゆ（いっしゅ）」と読み、一般には香をひと炷(た)きくゆらせること及びまたその香、又は一本の灯心を指すが、ここは情死の現場検証であろうか、そこでたく焚火の火を手向けの香や灯心に擬えたものであろうか。但しこの三句、あまり上手くは詠めていない。素材負けしている。］

冬の日を鴉が行つて落して了ふ

風の中枯蘆の中出でたくなし

子を思ふとき詩を欲るときを枯木立つ

枝交へ枯れし柘榴と枯れし桜と

威し銃おどろきたるは吾のみか

威し銃おろかにも二発目をうつ

［やぶちゃん注：これら一連の句群には明らかに今まで多佳子が用いたことのない口語的発想や新しい表現方法を模索しようとしている跡がありありと見えるが、未だうまくはいっていない。］

久々にて洋子、博来る。父亡き後も健かに成長せしを喜びて　二句

童女童子来てすぐ枯れし崖のぼる

童子寝る凩に母うばはれずに

［やぶちゃん注：「洋子、博」多佳子の孫（長女敦子の？）と思われ、年譜上の記載からはある程度の推測は可能であるが、不詳としておく。］

ラヂオ大きく枯山のふもとに住む

裏山に狐が出て、我鶏舎を襲ふことあり

枯れはてゝ遊ぶ狐をかくすなき

枯れし木が一本立てり狐失せ

［やぶちゃん注：三句とも昭和一九（一九四四）年五月に大阪帝塚山から疎開のために移り住んだ奈良市あやめ池町四丁目（現在は南九丁目）の家の裏山。底本の昭和十九年の年譜記載によれば、『裏の松山に登ると、薬師寺の塔が見える』とあり、これは地図上で見る限り、現在の奈良国際ゴルフ倶楽部のある場所にあったものと推測される。］

事ありて

手繰れど手繰れど海に頭(づ)向けて凧落ちゆく

せめて瞋(いか)りあらばやすけし冷ゆる蹄

寒星ひとつ燃えてほろびぬ海知るのみ

何をか待つ雪着きはじむ松の幹

［やぶちゃん注：意味深長な前書であるが、年譜上から如何なる「事」であったかは全く知り得ない。］

炉火

風邪髪の櫛をきらへり人嫌ふ

風邪髪に冷き櫛をあてにけり

つひに来ず炉火より熱(あつ)き釘ひらふ

泣きしあとわが白息の豊かなる

［やぶちゃん注：「白息」は「しらいき」と訓じているか。］

心見せまじくもの云へば息白し

渦巻く炉火ともすれば意志さらはるゝ

許したししづかに静かに白息吐(は)く

いぶり炭悲しくてつい盃とつ

激しき心すでに去りたる炉火の前

死ぬ日いつか在りいま牡丹雪降る

忘られし冬帽きのふもけふも黒し

鶏しめる男に雪が殺到す

鶏の臓剝してぬくし雪ふりをり

［やぶちゃん注：上五は「けいのわた」と読んでいよう。後に「河豚の臓(わた)」とルビが出る。］

鶏の血の垂りて器に凍むたゞこれのみ

咳が出て咳が出て羽毛毟りゐる

毟りたる一羽(は)の羽毛寒月下

寒月に焚火ひとひらづゝのぼる

凧

歌かるたよみつぎてゆく読み減らしゆく

敵のかるた一つの歌がわが眼牽(ひ)く

羽子の音(ね)つよし丈のさわげる風の中

安定なき凧にてのぼる意の旺ん

鳴らず鳴らさず箏の冷えゆくとゞまりなし

いまありし日を風花の中に探す

五位(ごい)鷺飛びて寒の茜をそれてをり

水車の音絶えてはならず霧濃き中

聖夜讃歌吾が息をもて吾瀆る

燭の火と炉火が燻る聖歌隊黙し

層見せて聖夜の菓子を切り頒(わか)つ

冬の旅

九州路

わが農園、国家に買上げとなる、九州へ赴くこと度々

冬霧ゆる船笛やわが在るところ

冬の航はじまる汽笛あふれしめ

海渡る黒き肩かけしかとする

大綿は手に捕りやすしとれば死す

［やぶちゃん注：「大綿」は「おほわた（おおわた）」で綿虫（わたむし）の俗称。綿虫は半翅（カメムシ）目腹吻亜目アブラムシ上科アブラムシ科 Aphididae に属する綿油虫類の総称で、白い綿のような分泌物を体に附着させた状態で弱々しく飛ぶ。体長は二ミリメートル程で大種でも四ミリメートル程度。　北国ではこの虫が飛ぶと雪が近いとし、また舞う様が雪のようでもあることから雪虫の俗称を持つ（この北方系種は *Prociphilus* 属トドノネオオワタムシ *Prociphilus oriens* ）。］

真青な河渡り終へ又枯野

河豚を窒ぐ男や道にうづくまる

河豚の血のしばし流水にまじらざる

河豚の皿燈下に何も殘らざる

ジヤズに歩の合ひゐて寒き水たまり

河豚の臓(わた)喰べたる犬が海を見る

林檎買ふ旅の足もと燈に照らされ

星空へ店より林檎あふれをり

（一九四七、一）

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和二一（一九四六）年の条の最後に、『十万坪の大分農場は農地買い上げとなる。坪八十銭』とある。単純計算で計八万円、物価指数から現在の価値で約三百二十八万円相当にしかならない。しかも以前に注したように、この大分農場は亡き夫豊次郎と多佳子が結婚した大正六（一九一七）年にその結婚記念として開拓経営を始めた農場であって、豊次郎の青年時代からの夢を実現化したものでもあったから、多佳子にとっては亡き夫との思い出の地でもあったのである。「後記」からこの「九州路」の旅は昭和二二（一九四七）年であることが分かる。］

金沢へ

講演旅行に出られる西東三鬼、右城暮石氏に

蹤き、私も金沢の細見綾子さん、旧友松村泰

枝さんに逢ひたく旅に出る

冬の旅喫泉あふれゐるを飲む

［やぶちゃん注：この旅は年譜の昭和二五（一九五〇）年一月二十七日の条に『三鬼、暮石と同行にて奈良を発ち、金沢に沢木欣一、松村泰枝を訪ねる』とあるもの（最後の「雪の日の」の句の後に『（一九五〇、一）』のクレジットあり）。当時、多佳子五十一歳。

「西東三鬼」多佳子と三鬼とは昭和二一（一九四六）年に初めて出逢っている（リンク先は私の全句集。三鬼は多佳子より一つ年下）。「後記」には昭和二十四年とするが、多佳子の記憶違いであろう。

「右城暮石」（うしろ　ぼせき　明治三二（一八九九）年～平成八（一九九五）年）は高知生まれ。本名は斎（いつき）、俳号の暮石は出身地の小字の名。大正七（一九一八）年、大阪電燈に入社。大正九（一九二〇）年に大阪朝日新聞社の俳句大会で松瀬青々を知り、青々の主宰誌『倦鳥（けんちょう）』に入会、『風』『青垣』同人から『天狼』同人。昭和二八（一九五二）年『筐（かたみ）』を創刊、主宰（後に改題して『運河』）。昭和四六（一九七一）年に第五回蛇笏賞を受賞している（以上はウィキの「右城暮石」に拠る）。ネット上で管見して惹かれた句を示す（現代俳句協会の「現代俳句データベース」に拠ったが、恣意的に正字化した）。

一身に虻引受けて樹下の牛

冬濱に生死不明の電線垂る

裸に取り巻かれ溺死者運ばるる

昭和二十一年の年譜に三鬼・平畑静塔・多佳子らがこの秋に始めた『奈良俳句会』の参加メンバーの中に後の参加として暮石の名が初めて登場し、以下の年譜でも多佳子の没するまで親しくした俳人であることが分かる。多佳子とは同い年。

「細見綾子」（明治四〇（一九〇七）年～平成一〇（一九九七）年）は兵庫県市）生まれ。昭和四（一九二九）年に作句を始め、松瀬青々の俳誌『倦鳥』に入会、後、『風』創刊に同人として加わり、昭和二二（一九四七）年には同主宰の沢木欣一と結婚している。昭和五四（一九七九）年に句集「曼陀羅」で蛇笏賞を受賞している。ネット上で管見して惹かれた句を示す（活動期からやや考えたが恣意的に正字化した。引用元の現代俳句協会の「現

代俳句データベース」内のデータにずっと後の方でも正字を使った句があるからである)。

チューリップ喜びだけを持つてゐる

亡母戀ひし電柱に寄せよごれし雪

働きて歸る枯野の爪の艶

「松村泰枝」この叙述からは女流俳人と思われるが、不詳。

「喫泉」は「きつせん(きっせん)」で、水飲み場の立位で啜るタイプの水道栓を言うものと思われる。ずっと後の西東三鬼の句集「變身」の昭和二十九(一九五四)年に(リンク先は私のブログ版の三鬼句集の当該部)、

春の驛喫泉の穂のいとけなし

とある。]

雪マント被(かづ)けばすぐにうつむく姿勢

沢木欣一を訪ふ、細見綾子さん丹波にて逢

へず　一句

若さかくさず冬帽に雨の粒ふえてゆく

[やぶちゃん注:「沢木欣一」(大正八(一九一九)年~平成一三(二〇〇一)年)は俳人、東京藝術大学名誉教授。妻は細見綾子。富山県生まれ。東京帝国大学国文科卒業、加藤楸邨・中村草田男に師事、昭和二一(一九四六)年に俳誌『風』を創刊し、社会性俳句を主唱、昭和四一(一九六六)年、東京藝術大学教授。昭和六二(一九八七)年、俳人協会会長。平成八(一九九六)年、句集『白鳥』で蛇笏賞受賞。ネット上から句を引く。

上官を殴打する夢四月馬鹿

秋風をきくみほとけのくすりゆび

赤富士の胸乳ゆたかに麦の秋

当時、沢木は三十一歳。多佳子五十一歳。「若さかくさず」で自然ではある。]

まくなぎの位置さだまらず雪の上

[やぶちゃん注：「まくなぎ」目配せ。]

雪激し一つの地窪埋めむため

松村泰枝さんの許にて

梳（くしけづ）りゐて雪嶺の照る曇る

馴るゝまで雪夜の枕うちかへし

雪の昼ねむし神より魔に愛され

芳江ちやんすでに小学生、別れる朝バス迄送って呉れる

雪の日の登校クレヨン画大切に

（一九五〇、一）

鼓ケ浦

[やぶちゃん注：昭和二八（一九五三）年一月六日の条に現在の三重県鈴鹿市寺家町鼓ヶ浦に山口誓子宅を訪問するという記事がある。但し、本句集は昭和二十六年までなので、

前の句の順列からは昭和二十五年の一月以降、昭和二十六年中の訪問ということになる（年譜にはその訪問記載はない）。］

冬駅に名を筆とづゝ伊賀に読み

師の前にたかぶりゐるや冬の濤

ゆらゆらと月のぼるとき師と立てる

濤高き夜の練炭の七つの窓

うち伏して冬濤を聴く擁るゝ如

［やぶちゃん注：橋本多佳子の句に対し、しばしば、師誓子を詠むものにはあたかも恋人に接するような趣きがあるという評言を目にするが、確かにまさにこの五句など（この後の二句もすべて師を訪問した折りのものとは断言出来ないものの）、ブラインド・テイスティングしたなら、まず明らかにかなりどきっとする恋句連作にしか、まず見えぬ。］

冬鷗百姓たゝせたゝせ来る

寒月下海浪干潟あらはしつゝ

寧楽

［やぶちゃん注：「寧楽」は奈良の古表記。］

春日神社節分宵宮　二句

万燈のどの一燈より消えむとす

離るれば万燈の燈（ひ）となりにけり

野の鹿も修二会（しゅにゑ）の鐘の圏（わ）の中に

［やぶちゃん注：「修二会」国家安泰を祈る法会で、ここは東大寺のそれ。所謂、お水取りである。同寺の修二会の本行は現在は新暦三月一日から十四日までの二週間に亙って二月堂で行われる。］

修二会僧女人のわれの前通る

つまづきて修二会の闇を手につかむ

凍る火の嵒を割（さ）きて僧頒つ

春日野あたり

野火燃やす男は佳（よ）けどやすからず

がうがうと七星倒る野火の上

野火あとに水湧く火（ほ）中にても湧きし

唐招提寺

蛇いでゝすぐに女人に会ひにけり

蛇を見し眼もて彌勒を拝しけり

吾去ればみ仏の前蛇遊ぶ

唐招提寺道

ゆきすがる片戸の隙も麦の金

［やぶちゃん注：「ゆきすがる」道行くに便りとする（ところの農家のその）という謂いか。］

手に拾ひ金色はしる麦一と穂

東大寺　法華堂　月光菩薩

初蝶に合掌のみてほぐるゝばかり

［やぶちゃん注：この「ほぐるゝばかり」は作者の心がやわらぐの謂いとしかとれないが、そうすると如何にも飛躍に欠いた説明的なつまらない句となる。寧ろ、蝶がとまって羽を畳んでまた羽ばたくというさまを「ほぐるゝばかり」と表現したとすればこれは面白いが、そう解釈するには中七の「合掌のみて」の叙述に無理がある。］

興福寺

北庭に下りて得たりし蝸牛

仏母たりとも女人は悲し灌仏会

鹿

二月尽林中に鹿も吾も膝折り

野火跡を鹿群れ移る人の如

野火あとに雄鹿水飲む身をうつし

仔鹿駆くること嬉しくて母離る

万緑やおどろきやすき仔鹿ゐて

乳(ち)飲む仔鹿四肢張り尾上げ露まみれ

○

袋角(ふくろづの)指触れねども熱(あつ)きなり

［やぶちゃん注：「袋角」鹿の若角。鹿類の角は毎年抜け落ちるが、その、一般に夏に生え替わったばかりの皮を被って瘤のようになっているものをいう。当初、外側は毛の生えた皮膚に覆われていて、その内側に血管が通っていて栄養を補給し、その中心に骨質が形成

される。十分に伸長すると血液が止まり、外側の皮膚は死んで乾燥し見慣れた角になる。
夏の季語。]

袋角鬱々と枝（え）を岐ちをり

袋角神の憂鬱極りぬ

袋角見し瞳（め）濡れてゐたりけり

袋角森ゆきゆきて傷つきぬ

○

秋は

息あらき雄鹿が立つは切なけれ

背を地にすりて妻恋ふ鹿なりけり

雄鹿の前吾もあらあらしき息す

寝姿の夫（つま）恋ふ鹿か後肢抱き

女（め）の鹿は驚きやすし吾のみかは

にはたづみ鹿跳び遁げてまた雲充つ

○

一つづゝ落暉ふちどるみは冬鹿

雉

絵雛かけし壁をそのまゝくらがりに

恋猫のかへる野の星沼の星

よこざまに恋奪ひ尾の長き猫

百姓の不機嫌にして桃咲けり

桃畑恋過ぎし猫あまたゐて

花折つて少女椿より降りしばかり

［やぶちゃん注：これはもう、西東三鬼の昭和一一（一九三六）年の問題作、

白馬を少女瀆れて下りにけり

への多佳子の少し辛めの返歌である。］

啓蟄の土の汚れやすきを掃く

木瓜紅く田舎の午後のつゞくなる

伊地知清重態の報来る

嘆かじと土掘る蜂を見てゐたり

［やぶちゃん注：「伊地知清」不詳。］

雉啼くや堪へゐし涙奔りいで

雉啼くや胸ふかきより息一筋

蘇枋の紅

［やぶちゃん注：「蘇枋」は「すはう（すおう）」。植物体としては本来はマメ目マメ科ジャケツイバラ亜科ジャケツイバラ属スオウ *Caesalpinia sappa* を指す（この心材や莢からは赤色の染料ブラジリンが採取され、その色を蘇芳色と呼ぶ。ウィキの「スオウ」に拠る）が、この花は五月～六月頃に咲き、しかも赤くなく黄色い。「蘇枋」の如く「紅」色で、ここの冒頭にあるように桜咲く春に咲くにはジャケツイバラ亜科ハナズオウ *Cercis chinensis* である。こちらは早春に枝に花芽を多数つけ、三～四月頃に葉に先立って開花、その花は花柄がなく、枝から直接、花が咲く。花は基本的に紅色から赤紫色を呈し、長さ一センチメートルほどの蝶の形をしている。和名は「花蘇芳」で花弁の色がスオウで染めた色に似ているからである（ウィキの「ナナズオウ」に拠る）が、実はしばしば園芸家の間でも「ハナズオウ」は単に「スオウ」と呼ばれることがネットを調べると分かる。以下に出る標題句「蘇枋の紅（べに）昃（ひかげ）る齢（よはひ）同じうす」から見て、この「蘇枋」はスオウ *Caesalpinia sappa*

ではなく、後者のジャケツイバラ亜科ハナズオウ *Cercis chinensis* である。因みに「蘇芳の紅」色とはこの色である（リンク先は「Color-Sample.com」）。］

上京して

夜の雨万朶の花に滲み通る

足濡れてゐれば悲しき桜かな

過去は切れ切れ桜は房のまゝ落ちて

起りたる桜吹雪のとゞまらず

中村汀女さんに初めてお逢ひする

蘇枋の紅（べに）昃（よはひ）る齢 同じうす

［やぶちゃん注：後記］にはこの「蘇枋の紅」句群は昭和二四（一九四九）年と翌年の春の二度の上京の際の創作であるとするのであるが、年譜には昭和二十四年の上京記事はない。これは多佳子の記憶違いではなかろうか？　年譜から推定すると、昭和二三（一九四八）年四月の『上京、目白の国子』（次女。彼女の婚約者堀内三郎氏は昭和十九年学徒動員で出兵、終戦後の内地帰還の途次に遭難している。この前年の六月に国子は小布施大三郎氏と結婚している）『宅に滞在。東京の俳人たちと会う』とあるのがそれかと思われる。「昃る」は「ひかげる」と読み、恐らくは庭に咲くハナズオウ（前注参照）の紅い花の実景に互いの「ひかげるよはひ」とを掛けたものである。私は初読時、「蘇枋」色の紅（べに）で、黒味を帯びた赤い口紅の色を指し、汀女が「蘇枋の紅」を点（さ）していたものかと思ったりしたが、

それでは露骨に如何にも無礼な句となってしまうということに、無粋な男である私は愚かにもなかなか気づかなかったのであった。そもそもがこの前後の句群は花尽くしでもあり……いや、私はそういう迂闊な男だつたのです……。星野立子・橋本多佳子・三橋鷹女とともに「４Ｔ」と呼ばれた中村汀女は明治三三（一九〇〇）年生まれで、当時、四十八、多佳子より一つ若い。]

いたどりの一節（よ）の紅に旅曇る

いそがざるものありや牡丹に雨かゝる

木蓮の一枝を折りぬあつは散るとも

旅の手の夏みかんむきなほ汚る

春空に鞠とゞまるは落つるとき

[やぶちゃん注：多佳子の私の偏愛句である。]

咽喉疼（いた）き旅寢や燕吻づくる

讃りちがふ三色もてすみれ一輪なす

[やぶちゃん注：この句、私にはなかなか難しい。以下のように、まずは詠んだ。

春（プリマヴェーラ）の女神の花であるスミレ目スミレ科スミレ属 *Viola* のスミレ類は、「慈愛」のシンボルとしてのバラ及び「清純」のユリとともに「控えめさ」と「誠実」を象徴する聖母マリアの花ともされる。ここはそのキリスト教の聖母への「禱（いの）り」を指して

いると読めなくはないが、どうも「ちがふ」という語彙から考えると、文字通り、違う意味であろう。そこでビオラ・トリコロール、「三色すみれ」を調べる。スミレ属サンシキスミレ *Viola tricolor* はウィキに「サンシキスミレ」によれば（一部の記号を改変した）、『サンシキスミレ、又はサンショクスミレ（三色菫）は、一年生もしくは短命な多年生の野草。園芸種であるパンジーの原種の一つで、それゆえ数多くある英名の一つにワイルドパンジーの別名があり、その名で呼ばれることもある。園芸種が今日のように洗練され広く植栽される以前は、パンジーと云う語は当種を指した』とあり、『ヨーロッパに広く分布する。北米にも移入されて広まり、ジョニー・ジャンプ・アップ johnny jump up の名で親しまれているが、黄花を咲かせる近縁種もこの名で呼ばれることがある。日本には移入されておらず，野外逸出もしていないが、かつて園芸種のパンジーの和名にこの名が用いられたので，年配者はパンジーをこの名で呼ぶことがある。なお現在ではパンジーと本種は別種に扱われている』とあり、「人間との関係」の項に『数ある英名の一つである heartsease の名にちなみ、長らく失恋 heart break の特効薬であるといわれ続けた歴史を有する』と出る。「ease」は「楽」「気楽」「安心」「安楽」「悩みなき安楽なる生活」をいう。また「文学での扱い」の項には『園芸種のパンジーが市場に出回る以前、またの名をパンジーとされた本種は、しばしばその花言葉（フランス語のパンセ「pensee」：物思い）と関連付けられた』。ゆえにウィリアム・シェイクスピアのハムレットに登場するオフィーリアが口にする台詞「There's pansies, that's for thoughts」（これはパンジー、物思いの徴）のパンジーについて、シェイクスピアの念頭には園芸種ではなく本種があった。シェイクスピアは、戯曲夏の夜の夢の作中にて、さらに重要な役割をサンシキスミレに担わせている。妖精の王オベロンは、乙女らが「love-in-idleness」（徒なる恋）と『呼ぶ「西方に咲く小さな花」を手下の妖精パックに集めるために遣わす。「西の玉座に君臨する美しき処女（おそらくはエリザベス１世のこと）」を狙い、キューピッドの弓から放たれた矢はオベロンの計略によりそらされ「それまでは乳白色だったが、矢から受けた恋の傷で今では深紫に変わってしまった花」を持つ植物に落された。「帝権に魅入られし婦人」は、「恋を知らぬまま」、決して恋に陥ることのない運命を定められる一方で，「恋煩いの花」の絞り汁は、いまやオベロンの意図のまま

「眠りについた者のまぶたに塗られたら、目覚めて初めて見たそれが、男であれ女であれ、激しく溺愛する」媚薬と化す。この魔力を備えたオベロンとパックは、シェイクスピア劇にはつきものの派手さと滑稽さの演出を引き立たせ、劇中に登場する様々な人物の運命を動かす』とある。

さて、これらからこの句の難局である「𪜈りちがふ」という語を見つめなおしてみると――恋に纏わる秘かな「𪜈り」というものは、祈るその一個の女人（と私は採る）の心中にあっても、「ちがふ」、「たがふ」、本来ならば同時にあり得ない相反するような複雑に食い違った錯綜した「𪜈り」として「在る」、しかもそれが一個の女人の願いなのだ――と多佳子はいいたいのではあるまいか？　と感じさせるのであるが、如何？　大方の御批判を俟つものではある。」

花栗に寄りしばかりに香にまみる

［やぶちゃん注：多佳子のこの句より二年後の昭和二十七（一九五二）年の鈴木しづ子の句に、

わが十指花栗の香にまみれけり

がある（リンク先は私のブログでの選句）。そこでも注したが、栗の花の匂いには、男性の前立腺から分泌するスペルミン$C_{10}H_{26}N_4$というポリアミンが含まれている。栗の花はしばしば精液の匂いと同じだとされる。私に高校生の時、このことをちょっとはにかんだ笑顔で教えてくれたのは――理科の先生でも、ませた友人でも、なかった――私の母であった。］

敷かれたるハンカチ心素直に坐す

驟雨の中歩幅あはされゐたりけり

駿二、啓子代々木に新居構へる

夕焼に柵して住む煙突を出し

夫婦して耕土の色を変へてゆく

夜の皿よりとりし葡萄の房短か

［やぶちゃん注：昭和二五（一九五〇）年五月の年譜に『三女啓子が代々木に新築、上京、滞在』とある。多佳子五十一。］

石田波郷を東京郊外清瀬病院に見舞ふ。手術直後にてその瞳に会ひしのみ　一句

どこまでも風蝶一路会ひにゆく

［やぶちゃん注：この訪問の翌月（と思われる。前句注からの推定）、昭和二五（一九五〇）年六月に刊行された波郷の句集「惜命」は子規を先駆とする闘病俳句の最高傑作と位置付けられているとウィキの「石田波郷」にある。石田波郷は大正二（一九一三）年生まれで多佳子より十四も年下であった。彼は昭和一九（一九四四）年に左湿性胸膜炎を発症、永きに亙る闘病の末、昭和四四（一九六九）年に満五十六歳で肺結核のために亡くなった。但し、多佳子はそれに先立つ六年前の昭和三八（一九六三）年五月二十九日に肝臓癌・胆嚢癌及びその転移により、満六十四歳で既に亡くなっている。］

遠く鼓ヶ浦を想ふ　一句

雀の巣かの紅絲をまじへをらむ

［やぶちゃん注：「鼓ヶ浦」既注。現在の三重県鈴鹿市寺家町鼓ヶ浦には師山口誓子が住んでいた。本句集「紅絲」の標題句である。誓子は同句集序を、

「紅絲」は、多佳子俳句を貫く一筋の何かもの悲しいものである。

と擱筆している。本句、句集標題を引き出し得るような佳句とも思われぬ。思われぬがしかし、とんでもない問題作ではある。これを句集の標題句とするに躊躇しない確信犯としての多佳子、序のコーダをかくもぬけぬけと綴る確信犯としての誓子……この男の師と女弟子の相聞をスキャンダラスと言わずして何と言おう……それはそれでしかし、当時の二人それぞれが身に引き受けなくてはならなかった試練でもあったには違いあるまい……］

しやぼん玉窓なき廈（いへ）の壁のぼる

コンクリートに童子のしやぼん玉はずむ

旅の椅子仔雀はいま地（つち）にゐて

清、一周忌近し、面影を忍びて　三句

死が近し翼を以て蝶降り来（く）

太虚より蝶落ちにおつ身をもだえ

手にとりて死蝶は軽くなりにけり

［やぶちゃん注：先に出た不詳の「伊地知清」氏であろう。］

旅了らむ燈下に黒き金魚浮き

夜具の下畳つめたき四月尽

枕せば蚊ごゑ横引くひとの家

梅雨の藻

言葉のあと花椎の香の満ちてくる

花椎やもとより独りもの言わず

花椎の香に偽りを言はしめし

［やぶちゃん注：「花椎」シイブナ目ブナ科シイ属 *Castanopsis* の花は先に挙げた栗と同じく男性の前立腺から分泌するスペルミンを含む。］

ガラス戸より薄暮の蝶を出してやる

夜の雨より飛び入りし蛾の濡れもゐず

いとけなく植田となりてなびきをり

梅雨の藻よ恋しきものゝ如く寄る

厚板の帯の黴より過去けぶる

かぎりなく出てしやぼん玉落ちて来ず

母の手より穂絮の一つづゝとびゆく

［やぶちゃん注：「穂絮」は「ほわた」と読む。穂綿。綿の代用にしたチガヤ・アシなどの穂。母となった娘の誰かを詠じた現在詠とも読めないことはないが、私はこれは多佳子の回想吟ではないかと読む。多佳子の母は昭和一七（一九四二）年十一月七日に亡くなっている。］

海南風死に到るまで茶色の瞳（め）

［やぶちゃん注：本句は誰かの追悼吟か。識者の御教授を乞う。］

うとましき人離るればかげろへり

毛絲編む手の疾（はや）くして寄りがたき

白桃に入れし刃先の種を割る

あぢさゐが藍となりゆく夜來る如

花苑にて指の先より蝶たゝす

麦秋

蟇いでゝ女あるじに見(まみ)えけり

更衣水にうつりていそぎつゝ

ひと聴きて吾きかざりしほとゝぎす

病める掌にのせて藤房余りたり

更衣雀の羽音あざやかに

虻は弧を描きをり想ひ伸びざりき

罌粟ひらく髪の先まで寂しきとき

ほとゝぎす新しき息継ぎにけり

あぢさゐやきのふの手紙はや古ぶ

麦秋や乳児(ちご)に蟲まれし乳の創

麦刈が立ちて遠山恋ひにけり

雀斑(かすも)をとめ野の麦熟れは極まりし

［やぶちゃん注：「かすも」雀斑(そばかす)の古語で「滓面」「飼面」の字を宛てる。］

麦束をよべの処女(をとめ)のごとく抱く

菜殻火は妻寝し方(かた)ぞ沖の漁夫

青蛇の巻き解けてゆく尾の先まで

隠るゝ如茗荷の花を土に掘る

とゞまれば鋤牛の身の暮るゝなり

青梅の犇く記憶に夫(つま)立てり

吾よりも薄暮の蝶のためらはず

朝曇る地(つち)の起伏を蝶いそぐ

藤房の隙間だらけに入日時

藤房の堪ゆるかぎりの雨ふくむ

百合折らむにはあまりに夜の迫りをり

何うつさむとするや碧眼万緑に

黴の中一間青蚊帳ともりけり

濡れ髪を蚊帳くゞるとき低くする

杉田久女句集出版ときゝて嬉しさに堪へず

一句

松高き限りを凌霄咲きのぼる

［やぶちゃん注：「杉田久女句集」は昭和二七（一九五二）年十月二十日の刊行（角川書店）であるが、本句集「紅絲」はその前年の昭和二六（一九五一）年六月一日刊行（目黒書店）であるから、刊行の一年以上前に「杉田久女句集」の企画が多佳子の耳に正式に伝わる程度に本格始動していたことが分かる。因みに久女が句生前に句集を出せなかった元凶ともいうべき高浜虚子の序文は昭和二十六年六月十六日の、編者で久女の長女であられる石昌子さんの後書きである「母久女の思ひ出」は昭和二十六年九月二日のクレジットであることから考えると、六月十六日に書かれることになる「杉田久女句集」の序を、虚子が引き受けたという情報を多佳子が「紅絲」の刊行のかなり以前に、虚子か又はその周辺の人物から聴き知っていたことを意味しているのではあるまいか？　でなくてはこの句をこの「紅絲」に入集することは難しいからである。何よりこの句は句集「紅絲」の丁度、中央位置に配されてあるのである。これは私はもう少し考察する価値のある事実ではないかと考えている。

「凌霄」は「のうぜん」で、シソ目ノウゼンカズラ科タチノウゼン連ノウゼンカズラ *Campsis grandiflora*。参照したウィキの「ノウゼンカズラ」によれば、「凌霄花」のほか、「紫葳」とも書く。『夏から秋にかけ橙色あるいは赤色の大きな美しい花をつける、つる性の落葉樹。

気根を出して樹木や壁などの他物に付着してつるを延ばす。花冠は漏斗状。結実はまれである。中国原産で、平安時代に渡来したといわれる』『ノウゼンというのは凌霄の字音によるといわれる。古くはノウセウカズラと読まれ、これがなまってノウゼンカズラとなった。霄は「空」「雲」の意味があり、空に向かって高く咲く花の姿を表している。夏の暑い時期は花木が少なく、枝を延ばした樹木全体に、ハッとするような鮮やかな色の花を付け、日に日に咲き変るので、よく目立つ。花の形がラッパに似ていることから英語では』「Chinese trumpet vine」『「トランペット・フラワー」、「トランペット・ヴァイン」あるいは「トランペット・クリーパー」と呼ばれる』とある（「vine」と「creeper」は孰れも蔓（つる）・蔓性植物の意）。グーグル画像検索「ノウゼンカヅラ」はこちら。」因みに、これをブログに公開した二〇一四年六月二十八日、偶然にもこの直前に私がブログにアップした杉田久女の句には、まさに、

凌霄（のうぜん）花の朱に散り浮く草むらに

が入っていた。」

僧恋うて層の憎しや額の花

虫たち

こがね虫朝は殺さず嘆きけり

翡翠（かはせみ）飛ばねばものに執しをり

夫（つま）恋へば吾に死ねよと青葉木菟

くらがりに捨てし髪切虫が啼く

髪切虫押へ啼かしめ悲しくなる

うつむきてゐるは髪切虫と遊ぶ

わがそばに夜蟬を猫が啼かし啼かし

青みどろ蛇ゆきし跡さらになし

蟻地獄孤独地獄のつゞきけり

断崖へ来てひたのぼる螢火は

螢籠昏ければ揺り炎えたゝす

水鶏笛吹けばくひなの想ひ切

［やぶちゃん注：「水鶏笛」は「くひなぶえ（くいなぶえ）」と読み、クイナを誘い出す（食用で串焼きなどにした）ためにその鳴き声に似せて作った笛。伊賀市観光公式サイト「いがぶら」の「くひな笛」に画像がある。吹くのにはかなりコツがいるらしい。音源を探してみたが見つからなかった。これ、欲しい。］

おはぐろ蝶雨すぐ止んですぐ降つて

［やぶちゃん注：「おはぐろ蝶」チョウ目アゲハチョウ上科アゲハチョウ科アゲハチョウ亜

科アゲハチョウ族アゲハチョウ属クロアゲハ *Papilio protenor* 若しくはその近縁種を指すか。]

蟻走りとゞまり走り蟻に会ふ

隠るゝもの青蛇の尾のなほ余る

人来るひとり蜈蚣を押へゐれば

[やぶちゃん注：老婆心乍ら、「蜈蚣」は「むかで」と読む。]

さかしまにゐて蟷螂よこのまゝ暮るゝか

毛虫焼く盃が触るゝものを焼く

いなびかり毛ものゝ背に手触れゐて

愛されずして油虫ひかり翔つ

熱砂ばかりもし青蜥蜴失なはゞ

[やぶちゃん注：この句、妙に惹かれる。]

日盛りや脚老い立てる一羽鶴

篁に[illegible]ひ入りなほ迷ふ

甲虫しゆうしゆう啼くをもてあそぶ

［やぶちゃん注：非昆虫少年であった私はカブトムシが発情期に五月蠅いほど鳴くという事実を全く知らなかった。こちらの動画で本日只今、初めて聴いた。……情けなや……］

拾いたる空蟬指にすがりつく

炎天や雀降りくる貌昏く

けさよりいくたび秋蝶通る崖の傷

隠れ了ふせしと思ひゐるや瑠璃蜥蜴

［やぶちゃん注：「隠れ了ふせしと思ひゐるや」これは「かくれしまふ／せしとおもひゐるや」と私は読んだ。上五で――まんまと隠れてしまった――という蜥蜴の内心を代わって詠み、中七で作者の視点から――（そんな風に）隠れおおせたとでもあなたは思っているの？　すっかり私にはお見通しなのに――瑠璃蜥蜴さん――。大方の御批判を俟つ。なお、老婆心乍ら附言しておくと、「瑠璃蜥蜴」（「るりとかげ」と読もう）とはそういう和名の種がいるわけではない。有鱗目トカゲ亜目トカゲ下目トカゲ科トカゲ属ニホントカゲ *Plestiodon japonicas* の幼体及び成熟した♀の一部で幼体の色彩を残した個体を指す語である。ウィキの「ニホントカゲ」によれば、『幼体は体色が黒や暗褐色で5本の明色の縦縞が入る。尾は青い。オスの成体は褐色で、体側面に茶褐色の太い縦縞が入る。繁殖期のオスは側頭部から喉、腹部が赤みを帯びる。メスは幼体の色彩を残したまま成熟することが多い』とある。］

一夜経て朝蛾行方を失へり

秋の蝶沼の上にて逢ふものなし

いなづまの野より帰りし猫を抱く

蚕蛾生(あ)れて白妙いまだ雄に触れず

微動しつゝ二つの蚕蛾のまだ触れず

野分の家蝶ゐて薄暮過ぎにけり

蟇(ひき)をりて吾が溜息を聴かれたり

はたはた飛ぶ地を離るゝは愉しからむ

［やぶちゃん注：「はたはた」はバッタ。秋の季語である。直翅（バッタ）目雑弁（バッタ）亜目に属するバッタ上科 Acridoidea・ヒシバッタ上科 Tetrigoidea・ノミバッタ上科 Tridactyloidea のバッタ類の総称であるが、ここは有意に飛ぶ様からバッタ上科バッタ科ショウリョウバッタ亜科 Acridini 族ショウリョウバッタ属 *Acrida cinerea* やバッタ科トノサマバッタ *Locusta migratoria* また、バッタ亜目イナゴ科イナゴ亜科 Oxyinae・ツチイナゴ亜科 Cyrtacanthacridinae・フキバッタ亜科 Melanoplinae に属するイナゴ類をイメージした方がよいかとも思われる（本邦産のバッタ類は四十種を超える。但し、ウイキの「バッタ」によれば、バッタには『イナゴ（蝗）も含まれるが、地域などによってはバッタとイナゴを明確に区別する』とあるのでイナゴは除外しておいた方が無難かも知れない）。］

寒蟬の一つの聲す死なざりしか

ゆきあひて眼も合さずよ野分蝶

蟷螂のおのが枯色飛びて知る

暮れて鳴く百舌鳥よ汝は何告げたき

友蜂の歎きもなくて蜂は死す

洗髪同じ日向に蜂死して

冬日の蜂身を舐めあかず羽づくらふ

童女抄

乳母車夏の怒濤によこむきに

［やぶちゃん注：この句、発表当時から毀誉褒貶半ばする句である。童女虐待を匂わせるような背徳味に生理的嫌悪を示す男の大家――孫をあやす祖母の中に突き放すような一瞬の鋭利な女の視線を探す女性評者――孰れも私の本句の「写真」ではない。一読、なるほどこれはそれでも腑に落ちると思わせるのは、底本全集の年譜を担当している多佳子の弟子堀内薫氏の『俳句研究』（昭和三七（一九六二）年七月号・橋本多佳子追悼）に載る以下の評であろうか（北川光春氏のサイト「俳句の雑学小事典」のこちらの頁の『「乳母車夏の怒濤によこむきに」の句鑑賞』から孫引き）。

《引用開始》

これは単なる自然観照の句ではない。実は反対に強烈な我の句なのである。これは小田原にある御子さんの家で、家の前にすぐ海である。祖母として乳母車の内の愛する孫へ切なる思いをこめて詠っている。この孫はいくつになるも頭がしっかりと落ち着かないのである。祖母としてその孫の悲惨な運命を思い、自然のなすまま手の下しようのないことの悲しみが、是非なんとかしてほしいという祈願が鬱積し狂わんばかりに沸騰している。これは主観と客観とが融合して一体となり、強固な結晶体となっている。

《引用終了》

私はこの句、嫌いではない。否、寧ろ好きだ。私に言わせれば冒頭掲げた両評などは見当違いも甚だしいと言わざるを得ない。俳句は辛気臭い道徳の教材なんぞではないし、熟女の「女」への回帰なんぞというどろどろの情念をどこをどう剖検したら出てくるのか？

堀内氏の評は『強烈な我の句』『鬱積し狂わんばかりに沸騰』する詩想、『主観と客観とが融合して一体となり、強固な結晶体』となった句という評言の選び抜かれた語彙にはかなり共感を覚える。しかし、そこに具体的に示された内容は、作句状況の客観的事実を説明するには十分条件だが、それは作品として独立した句である一句に対峙して一読し、そこから受けるある強い感銘を裏打ちするに欠かせぬ必要条件では――ない。

この句の私の映像には乳母車の子の母はいない。というより、ここには祖母だかに比定する多佳子はいないし、多佳子のある具体的な欲求や願望を核とするような一人称視線でもないのだ。私は寧ろ、引用元の北川光春氏の『夏の繰り返す荒波の浜辺に横向きに置かれている乳母車』という『みごとなまでの客観的な事物の配置であり、映画の一シーンにありそうな場面』だという評言部分（但し、以降の『論乳母車のなかには幼い赤ちゃんがおり、当然それを見守る多佳子おばあちゃまがい』て、『さらにこの句からは、妙なリアリティーが感じられ、多佳子おばあちゃまの冷静なまでの眼差しが感じられる』という部分を除いて、である）にこそ強い共感を覚えるのである。

これはエイゼンシュタインの「戦艦ポチョムキン」のオデッサの階段のショックを微かに匂わせた、対立するモンタージュの純粋な美学的陶酔にこそ句の核心はあると読む。少なくとも多佳子の眼目はそこにあったと私は信じて疑わないのである。それは続く後の二

句を見れば明々白々であるとしか私には思われない。句から読み取ることは出来ない文芸外の具体的なプライベートな事実を文字解説されて貼り付けられて、これが句の言いたかったことで御座い、なんどとまことしやかに宣明された日には、これら三句からは最早、初読時の慄っとするほど素敵なあの痺れるような感動は、決して再び体験することが出来なくなってしまうと声を大にして言っておきたいのである。]

雲の峰たちてのぞける乳母車

夏氷童女の掌にてとけやまず

父逝きし洋子よ博よ

帰りゆく人のみ子等と蝸牛

[やぶちゃん注：「洋子」「博」多佳子の孫（長女敦子の？）と思われ、年譜上の記載からはある程度の推測は可能であるが、不詳としておく。]

後ろ髪涼しき子かな母へかへす

寝冷子の大きな瞳に見送られ

日焼童子洗ふやうらがへしうらがへし

啼きひゞく蟲を裸子（はだかご）より受けとる

裸子いかに抱かむ泣きわめくを

女童泣き男童抱く虹の下

唐招提寺

夏雲の立ちたつ伽藍童女のうた

童女のうた伽藍片陰しそめけり

日を射よと草矢もつ子をそゝのかす

［やぶちゃん注：「草矢」は薄（すすき）・茅（ちがや）・菅（すげ）などの葉の太い脈を矢柄としてその両脇を矢羽根形に裂き、葉を指に挟んで投げ矢のように飛ばす遊び。小愚氏のブログ「五七五　大河の一滴」の「草笛や昭和を向いて吹いてみる」に写真がある。……ああ、草矢を最後に飛ばしたのはいつだったか……］

日を射つて草矢つぎつぎ失へり

博と同じほどの男の子ひとり野に立てば

林檎齧る童子冬日を落しつゝ

日の翼冬蝶遊びほゝけたり

冬の蝶童女の顔をのぞきては

童女より冬蝶のぼるかゞやきて

鞦韆を漕ぎはげむ木々枯れつくし

童女の眉馥郁として雪を吊る

註。炭のかけらに糸を結びつけて雪を吊る遊び

［やぶちゃん注：この遊び、私は知らなかったが、サイト「札幌の自然資料」の「雪つり」に可愛らしい絵とともにその遊びが紹介されてある。］

つまづきし如く忘れし手毬歌

息かくる一と羽（は）一と羽と羽子蘇（い）きる

突き了へて羽子を天より掌に享くる

童女走り春星のみな走りゐる

麻疹（はしかご）子の並びて髪の長きが姉

草矢

農場にて

我等の結婚を記念して九州別府市外高城丘陵

を開墾して二十年、果樹漸く茂りし頃、夫の死にあひ女手に煩はしきこと多く漸次衰退に向ふとき戦争となり、終戦後農地改革の為めに全農場買上げの運命に会ふ。

東に別府湾燦き、西に鶴見、由布嶽など美しき山々重なり思出多き地なりし。

燦々とをとめ樹上に枇杷すゝる

枝にあるをとめの脚や枇杷をもぐ

枇杷を吸ふをとめまぶしき顔をする

牛飼のわが友五月来りけり

草矢射る山の子草矢射らすは音

虹新し田にてをとめの濡れとほる

八方へゆきたし青田の中に立つ

炎天に松の香はげし斧うつたび

炎天の梯子昏きにかつぎ入る

薔薇色の雲の峰より郵便夫

暑の中に吾をうつさず鏡立つ

祭太鼓うちてやめずもやまずあれ

踊りゆくどこまでも同じ輪の上を

一ところくらきをくゞる踊の輪

爪立てども切れたる虹のつながれず

祭笛

戦後はじめて京都祇園祭を観る

ゆくもまたかへるも祇園囃子の中

われもまたゆきてまぎれん祇園囃子の中

髪白く笛息ふかき祭(まつり)びと

鉾囃子(ほこばやし)高くくらきに笛吹く群れ

祭笛吹くとき男佳(よ)かりける

祭笛うしろ姿のひた吹ける

［やぶちゃん注：この句について、私の『鈴木しづ子　三十二歳　昭和２６（１９５１）年８月２４日附句稿６９句から３２句及び「樹海」昭和２６（１９５１）年１０月号発表句３句』の「遠花火音より早く失せにけり」注の鈴木しづ子の「祭笛」の句二句、

祭笛吹き了りなば情ささげむ

祭笛ふくとき若さ恥ぢにけり

についての私の解釈部分を是非お読み戴きたい。］

生き田堪へて身に沁むばかり藍浴衣

堪ゆることばかり朝顔日々に紺

泣きたけれど朝顔の紺破るべし

あさがほが紺折りたゝむひらく前

○

榎本冬一郎氏に誘はれて、その故郷紀州田辺に流燈を見る　三句

一束の地の迎火に照らさるゝ

流燈を灯して抱くかりそめに

近村の人々精霊に捧げし燈籠を集め波打際に
焚く、盆次々と幾ケ所にもあがり、夜更くる
まで続く

盆の中蓮燈籠の燃ゆるなり

［やぶちゃん注：「榎本冬一郎」（えのもとふゆいちろう　明治四〇（一九〇七）年～昭和五七（一九八二）年）和歌山県生。『馬酔木』（山口誓子選）に投句して誓子に師事、誓子の『馬酔木』離脱とともに「天狼」創刊に同人として参加、別に『群蜂（ぐんぽう）』を創刊、没年まで主宰した。作品を示す。

ぎらぎら青し泥より芦立つ血族婚

尾てい骨で坐る赤ん坊の星祭

メーデーの中やうしなふおのれの顔

根の国の祖（をや）への道のとりかぶと

凍蝶のいまわのきわの大伽藍

以上は引用句も含め、「俳句舎の俳人名鑑」の記載に拠った。］

連れ立ちて百姓低し天の川

七夕や同じ姿に農夫老い

潮汲のゆきて夏濤小さくなる

夏潮の二つの桶を肩にかけ

北を見る

いなびかり遅れて沼の光りけり

いなびかり北よりすれば北を見る

地(つち)の窪すぐにあふるゝいなびかり

わが行方いなづましては闢きけり

いなづまの触れざりしかば覚めまじを

双の掌をこぼれて了ふいなびかり

いなづまのあとにて衿をかきあはす

いなびかりひとの言葉の切れ切れて

いなづまの息つく間なし妬心もつ

燈の消えて野にあるごときいなびかり

月明

一燈なく唐招提寺月明に

野の猫が月の伽藍をぬけとほる

百姓や月の白壁惜しみなく

薬師寺

月天へ塔は裳階（もこし）をかさねゆく

月光に朱（あけ）うばはれず柱立つ

月光のいまも黒髪老いつゝあらむ

忌月

［やぶちゃん注：これは「九月」と三句目にあることから、亡き夫豊次郎（昭和一二（一九三七）年九月三十日逝去。享年五十歳）の忌月である。句の順列から考えると、この句は昭和二五（一九五〇）年の作と私は推定するが、とすれば十四回忌、節目となる十三回忌の翌年なればこそのある淋しさが「忌月」という標題に現われているように思われる。］

忌日眼に見ゆるちかさに青野分

忌日ある九月に入りぬ蝶燕

麻衾暁の手足を裏み余さず

［やぶちゃん注：「麻衾」は「あさぶすま」で麻布で作った粗末な夜具のこと。これは実際に粗末なのではなく（残暑も残るから薄いものではあったであろう）、多佳子の孤独感の表象である。］

くらがりに傷つき匂ふかりんの実

蟲叫や吾を睡らし吾を急き

日の中にゐて露冷えに迫らるゝ

曼珠沙華咲けば悲願の如く折る

曼珠沙華からむ蘂より指をぬく

昏くして雨ふりかゝる曼珠沙華

瀬を流るゝとき曼珠沙華のもつれとけず

［やぶちゃん注：参考までに。単子葉植物綱クサスギカズラ目ヒガンバナ科ヒガンバナ亜科ヒガンバナ連ヒガンバナ *Lycoris radiata*（別名の「マンジュシャゲ」又は「マンジュシャカ」はサンスクリット語「manjusaka」の音写。仏典に載る天界に咲ていて瑞兆を示すために天から降ってくる赤い花を指す。属名 *Lycoris* はギリシャ神話に登場する海のニンフ（ネレイス或いはネレイドと呼ばれる）の一人、金髪の「Lycorias」（リコリアス）に由来するものと思われる）。種小名 *radiata* は「放射状」の意である。ここまでは主にウィキの「ヒガンバナ」その他のネット情報に拠った）の花言葉は「情熱」「独立」「再会」「想うはあなた一人」「また会う日を楽しみに」……「悲しい思い出」……そして「あきらめ」である…

…]

唐招提寺金堂に首なき美しい仏像あり

仏足に一本の曼珠沙華を横たふ

[やぶちゃん注：「首なき美しい仏像」は「如来形立像（にょらいぎょうりゅうぞう）」と呼ばれるもの。頭部及び両手・両足首が破損している。実際には元の尊名も分からず、如来に同定する物証があるわけではないが、装飾品をつけていない点から如来と推定されてかく呼称されている。「唐招提寺のトルソー」という異称の方でよく知られる。木心乾漆で漆箔（うるしはく）、像高百五十四センチメートルでほぼ等身大の榧（かや）材製一木造。全体に均整がよくとれており、理想的肉体の表現という点では奈良様式であるが（唐招提寺公式サイトでは奈良時代八世紀とする）、衣文の表現法や大腿部の強調などは平安前期の特徴とされる。参照した『朝日新聞デジタル』「探訪　古き仏たち」の二〇一三年十二月二十一日附沖真治氏の記事によれば、『脚の長い、腰高のスマートな体形だが、大腿（だいたい）部は盛り上がって、がっしりしている。胴体部は、豊満な胸、衣を通して表される膨らんだ腹、引き締まった腰が抑揚に富む。衣のひだ（衣文（えもん））が整然とした波形の曲線を描く。翻波（ほんぱ）式衣文と呼ばれる様式で、腹部、そで、大腿部に浅く、鋭く、洗練された彫り口で刻まれ、リズム感をつくっている』とある。重要文化財。グーグル画像検索「如来形立像」も参照されたい（二〇一四年七月二十九日現在では最上部一列は一つを除いて当該仏像である）。]

秋燕となりて一日（いちにち）天にばかり

秋の蝶吾過ぐるとき翅ゆるめよ

霧中にみな隠れゆく燈（ひ）も隠る

いなづまに誘はれ飛びて蝶はづかし

頭(づ)あぐればかなしさ集ふ野分あと

白露やわが在りし椅子あたゝかに

荒百舌鳥や涙たまれば泣きにけり

百舌鳥の下みな雨ぬれし墓ばかり

墓と共に花野に隠れゐたかりし

傘いつも前風ふせぎ雨の百舌鳥

秋風や鶺鴒二つ飛びたる白

断崖や激しき百舌鳥に支へられ

叫びても翅濡る雨のの百舌鳥なれば

老いよとや赤き林檎を掌に享くる

露

鶏頭起きる野分の地より艶然と

伏目に読む睫毛幼し露育つ

露の中つむじ二つを子が戴く

人の背をふと恃みたる穂草の野

白露や鋼の如き香をもてり

露けき中竈火胸にもえつゞけ

虫鳴く中露置く中夫（つま）死なせし

［やぶちゃん注：既注乍ら、夫豊次郎の逝去は、本句集刊行（昭和二六（一九五一）年六月一日）の十四年前の昭和一二（一九三七）年九月三十日、享年五十であった。この句集刊行当時、多佳子五十二歳、夫の年を既に越えていた。］

露霜や死まで黒髪大切に

露万朶幼きピアノの音が飛ぶ飛ぶ

椎の実の見えざれど竿うてば落つ

淡路島

一夜の島月下の石蕗（つは）の花聚まる

海より雨激しくよせる石蕗の花

海彦の答へず霧笛かけめぐる

［やぶちゃん注：「海彦」単に海の比喩であるが、言わずもがな乍ら、淡路島は記紀の国産み神話に於いて伊弉諾尊（いさなきのみこと）と伊弉冉尊（いさなみのみこと）が最初に創造した島である。同じ記紀に載る山幸彦と海幸彦自体の伝承の内、彼らの誕生地や背景は現在の宮崎県の宮崎市を中心とした宮崎平野に集中しているが、これから派生した浦島太郎伝承は四国にあり、淡路島と海彦の取り合わせは必ずしも場違いではない。］

舟虫の背に負ふ瑠璃の砲塁亡し

［やぶちゃん注：甲殻綱等脚（ワラジムシ）目ワラジムシ亜目フナムシ科フナムシ *Ligia exotica* は一般には背中側の体色は鈍い光沢のある黒色であるが、淡黄色の斑（まだら）模様や褐色の広い縁取りがある個体もあり、成体の大型個体の中にはまさに多佳子のいうように「瑠璃」の虹色を帯びた個体もいる。「砲塁」跡が何処かは不明。太平洋戦争末期の本土防衛のために日本各地で海岸直近に砲塁は建てられたが、幕末のそれらも多くあり必ずしも直近のそれとも断定は出来ない（寧ろ、幕末期のそれの可能性の方が高いか。とすると福岡か）。ロケーションの分かる方は御教授下さると嬉しい。］

高まりつゝ野分濤来るはや砕けよ

野分濤群れ来る歓喜生き継ぐべき

秋蛾

沼の上に来て二星（ふたぼし）の逢ひにけり

七夕流す沼水流れざるものを

髪縋るぶんぶん二星逢にけり

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「縋る」は「すがる」と読み、「ぶんぶん」はカナブンブンのことで、狭義には鞘翅（コウチュウ）目多食（カブトムシ）亜目コガネムシ下目コガネムシ上科コガネムシ科ハナムグリ亜科カナブン族カナブン亜族カナブン *Rhomborrhina japonica*（緑色と銅色の個体がよく見られる）を指すが、一般人はコガネムシ科 Scarabaeidae 全般、特に金属光沢のあるものをひっくるめてこう呼ぶから（ここまではウィキの「カナブン」に拠る）、コガネムシ科スジコガネ亜科スジコガネ族スジコガネ亜族コガネムシ *Mimela splendens*（成虫の体色は時に赤紫の混ざった光沢の強い緑色・赤紫色・黒紫色のものもある。ここはウィキの「コガネムシ」に拠る）などのコガネムシ類全般としておくのが無難であろう。ここでは私としては強い金属光沢の緑色個体のそれを配した方が絵にはなる気がする。］

いそぐほど銀河の流れさからひて

秋風にあさがほひらく紺張りて

髪を梳きうつむくときのちゝろ虫

［やぶちゃん注：「ちゝろ虫」蟋蟀（こおろぎ）の古称。］

ぬれ髪にちゝろは何を告げゐるや

吾に近き波はいそげり秋の川

淳子、三野明彦と結婚

母と子の間(あひ)白露の幾千万

［やぶちゃん注：「淳子」は多佳子の長女。結婚は昭和二十五年六月で当時、淳子は満三十歳。］

秋風に箏をよこたふ戦経て

三日月に死の家ありて水を打つ

沼水に捨てし秋蛾のそれぞれ浮く

［やぶちゃん注：私はかつて「鈴木しづ子　三十二歳　昭和二十六（一九五一）年十一月二十九日附句稿百三句から二十一句」に採った以下の連句、

秋の蛾の人の如くに玻璃を打つ

どこからか昨夜の秋蛾のきたりけり

二夜來ていのちをはりし秋蛾かな

秋の蛾に玻璃は閉ぢられゐたるまま

に対して、次のように評した。

＊

「秋蛾」の連句はうまい、これは橋本多佳子の『紅絲』の中にある「秋蛾」という標題句群を意識しているのかも知れないが、多佳子の「秋蛾」が「沼水に捨てし秋蛾のそれぞれ浮く」というクールな突き離し一句にのみ現れるのに対して、ホラー映画のように霊的な秋蛾を四カットで撮りきったしづ子の手腕は尋常な技ではない――この蛾は蛇笏が芥川龍之介の魂を「秋の螢」になぞらえたように、しづ子の愛する死者たちの魂である――

＊

私はこの評を修正する意志は今も全く、ない。いや、それどころか、はっきり言おう、未発表に終わったこれらのしづ子の句の方が多佳子のそれよりも遙かに優れている、と――]

霧月夜美しくして一夜ぎり

穂草野に雀斑を濃く従へり

[やぶちゃん注：老婆心乍ら、「雀斑」は「そばかす」と読む。]

つくるよりはや愛憎や木の実独楽

ひと死して小説了る炉の胡桃

[やぶちゃん注：この折り、多佳子の読みし「ひと死して」「了る」「小説」、その題名、知りたや……]

握りもつ山栗ひとつ訣れ来し

山の子が独楽をつくるよ冬が来る

指に纏(ま)きいづれも黒き木葉髪

［やぶちゃん注：「木葉髪」冬の季語。十月の木の葉髪とも称する。陰暦十月初冬頃、木の葉の散る頃に髪の毛がよく抜けるのを、落ち葉に譬えていったもの。別に生理学的にはその時期に実際に抜け毛が多くなるわけではなく、老いと冬の侘しさと落葉の実景がをついそれを強く意識させることによるものと思われる。当時、多佳子五十一歳。］

此処去らじ木の実落ちてはころがる

［やぶちゃん注：多佳子には珍しい破調である。］

掌(て)の木の実ひとに孤独をのぞかるゝ

由布高原

一月六日関西旅行の横山白虹氏、自鳴鐘の岡部丘夫、中尾芦山氏に誘はれて久々にて九州へ旅する

河豚煮るゆげ誘はれて海渡りたる

昨日(きぞ)海に勁かりし星枯野に坐る

莨火にも由布の枯野の燃えやすき

野火立ちて由布野の小松つひに燃ゆ

野に寝れば髪枯草にまつはりぬ

狐の皮干されて枯るゝ野より悲し

［やぶちゃん注：年譜によれば昭和二六（一九五一）年一月六日の旅立ちであったが、有名な由布の野焼きは現在は二～三月に行われるし、以下（「岡部丘夫」の注）から五月にまで及ぶ非常に長い旅ででもあったものかとも考えたが、幾らなんでも五ヶ月の旅はおかしい。最後のクレジットは一月ではあり、野焼きを一月中に行う場所もある。

「横山白虹」（はっこう　明治二二（一八八九）年～昭和五八（一九八三）年）は医師で俳人。本名、健夫（たけお）。東京府生まれ。九州帝国大学医学部を卒業。俳句は中学時代からはじめ、大学で九大俳句会を設立、また吉岡禅寺洞の『天の川』に投句、昭和二（一九二七）年より『天の川』編集長となって新興俳句運動の推進に努めた。昭和九年、小倉市にて横山外科病院を開設、昭和十二年には『自鳴鐘（とけい）』を創刊して主宰、同誌は昭和十四年に戦時の用紙統制令によって休刊したが戦後の昭和二三（一九四八）年には『自鳴鐘（じめいしょう）』として復刊した。昭和二七（一九五二）年、山口誓子の『天狼』同人、一九七三年、現代俳句協会会長に就任、他にも小倉市議会議長、九州市文化連盟会長などの要職を歴任し、多彩な交流があった。句集に「海堡」「空港」「旅程」など。『天の川』の同朋であり、彼の患者でもあった俳人芝不器男が夭折した折には遺句集を編んでいる（以上はウィキの「横山白虹」に拠るが、「芝不器男」のリンクは私の電子化句集）。句を掲げておく。

たそがれの街に拾ひし蝶の翅

原子炉が軛となりし青岬

原爆の地に直立のアマリリス

「自鳴鐘の岡部丘夫」号は麦山子。詳細不詳であるが、個人ブログ「かわうそ亭」の「苺どろぼう、夏蜜柑どろぼう」という記事に、西東三鬼が昭和三四（一九五九）年五月号『天狼』に書いた「どろぼう」という随筆に書いた、非常に面白いエピソードが載るが、そこに名が出る。三鬼とは横山白虹と岡部麦山子の二人に招かれて、博多で催された『天狼』三周年記念博多大会に出席したが（年譜で確認した）、その後、慰労会と称して山口県川棚温泉で彼らから歓待を受けた。その『宴もたけなわ、話は麦山子のえんどう豆どろぼう、鶏どろぼうの武勇伝になって一同、げらげら笑い転げているうちに、麦山子が緊急動議を出した。きみらに少し真の反俗精神を教えてやらにゃならん、この近くの禅寺に手頃な夏蜜柑があった。あれをこれから採集に出かけよう』ということになったという（以下は「どろぼう」からの引用段落冒頭に一字下げを施した）。

《引用開始》

先ずその時のいでたちは、男はゆかたの尻つぱしより、頬かむり。女（すなわち橋本さん）は、手拭で伊達な吹き流し。まんまと寺苑に忍び入り、ましらのごとく木に登る。手あたり次第に捻り取るは、夜目にも黄金の夏蜜柑。垣の外ではをんな賊、ドンゴロス袋に詰め込んで、ソレ引揚げろと親分の下知を合図に逃げ出した。甚だ薄気味悪かった。

その翌朝、麦さん平然として、昨夜の夏蜜柑をお住持に土産に持つてゆくという。これにはびつくりしたが、実は戦時中、麦さんはその寺に疎開していて、坊さんとは親交がある由。それを伏せての昨夜のいたづらであつた。

《引用終了》

「ドンゴロス袋」は麻袋のこと。ウィキの「麻袋」によれば粗い綿布（デニム）を指す英語の「dungaree」（ダンガリー）からの転訛とされる。……この話を読んで、多佳子が彼だけ本名を呼び捨てにしている（好意的に考えるなら、単に「両氏」とするところを落しただけとも言えるが）意味が分かった気がした。

「中尾芦山」不詳。]

折尾へ

赭崖の氷雨の八幡市すぐ暮るゝ

凍る嶺（ね）の一つ嶺火噴きはゞからず

（一九五一・一）

［やぶちゃん注：「折尾」北九州市八幡西区の地名。句会か講演での訪問か。
「赭崖」読み不詳。「あかがけ」と訓じているようには思う。
「嶺火」不詳。地図上、折尾からでは噴煙の見える火山はないように思われるが。
これが句集「紅絲」の掉尾で、最後の国文学者神田秀夫の歴史的仮名遣で書かれた『「紅絲」跋』が載るが、神田氏の著作権は存続しているので省略する。］

後記

「紅絲」は俳誌「天狼」創刊の昭和二十三年一月に始り、約三年間の作品を収めました。

思へば「天狼」の創刊は私にいろいろの幸福をもたらしました。山口誓子先生の主宰される「天狼」に参加する非常な喜びと緊張、得難い諸先輩同人に親しく触れることが出来たのは何としても「紅絲」の世界に大きな力を与へられたと思ひます。尚この他にも常に鞭うつて下さる幾多の友を持つ喜びを「紅絲」を編み乍らつくづく感じました。

この「紅絲」の三年間は私にとつて実に多難な年でしたが、ことに二人の娘の夫に逝かれたことが一番私を悲しませ弱らせました。幸ひその悲しみの穴も日々に埋められてゆきます。「紅絲」の次の世界は明るい平淡なものが待つてゐるやうに思はれます。一応今日までの作品を纏め新しい出発を期したいと思ひます。

尚「紅絲」は年代に分けず一つの題名のもとに一群の作品を集めてみました。旅の作品

にも年月を記しませんでしたが、「冬の旅」の中の「九州路」は昭和二十二年、「金沢」は同二十四年、「蘇枋の紅」は同二十四年と五年の春上京しての作品で、「由布高原」は今年一月久々に九州へ旅をして作りました。

「紅絲」に対し山口誓子先生の序文、神田秀夫氏の跋文を戴きました。いづれも身に余る御厚情、謹んで御礼申上げる次第でございます。

「紅練」は初め秋元不死男氏の御すゝめにより編む機を与へられ、この度目黒書店の木村徳三氏、石川桂郎氏の御配慮により漸く出版のはこびとなりまかした。厚く御礼申上げます。

昭和二十六年三月

奈良菅原の里にて

橋本多佳子

［やぶちゃん注：本文中の句作年代については幾つかの疑問がある（特に「金沢」と「蘇枋の紅」。「金沢」はそもそも「金沢へ」の誤りである）。それぞれの注でそれを示しておいた。］

句集「海彦」

［やぶちゃん注：昭和三二（一九五七）年二月二十五日角川書店刊。昭和二六（一九五一）年から同三十一年（多佳子五十二歳〜五十七歳）までの作品四百九十六句を収録する。序文は山口誓子。誓子の序文は著作権存続中のため、省略する。因みに、気がつけば、この発行日は私が生まれて十日後の日附であった。］

夏

青蘆原

博多天狼大会の為め自鳴鐘に招かれて、西東三鬼氏と西下す。恰もどんたく祭に当る

歎きゐて虹濃き刻（とき）を逸したり

旅の歩みどんたくしやぎりに替へる

［やぶちゃん注：昭和二六（一九五一）年五月、博多で催された『天狼』三周年記念博多大会に出席した際の句。前句集「紅絲」の末尾の句群もその折りのもので、句集としての連関性を高める。年譜には日付がないが、この前書の博多どんたくの祭日であったという

記載によって、少なくともこの句以下の三句は五月四日或いは五日の景であることが分かる。「自鳴鐘」は「じめいしょう」と読み、横山白虹主宰の俳誌。詳しくは先の句集「紅絲」の「由布高原」の私の注を参照されたい。

「しやぎり」「しゃぎり」は、本来は歌舞伎の下座音楽の一つで、一幕が終わるごとに太鼓・大太鼓・能管で奏する（最終幕には奏さない）、ものを指すが、そこで使われる当たり鉦、所謂、摺り鉦の意から、さらにそれを用いることが多い各種の祭りの囃子（祭の中で町中を練り歩く行列や山車など）の行列に奏する囃子をも言うようになった。調べて見ると博多どんたくではそうした行列の中の囃子方の集団を「しゃぎり隊」と呼んでいるようである（他の資料では「余興隊」「通りもん」などともある）。また、ウィキの「博多どんたく」によれば、古来の博多どんたくの核心は実はまさにこの囃子にあるとあり、『博多どんたくの起源であり中核といえる選択無形民俗文化財の博多松囃子は、福神流、恵比須流、大黒流、稚児東流、稚児西流が「博多松ばやし振興会」を組織し、それぞれの当番をつとめる』とある。因みに「どんたく」は日本語ではない。ウィキの「どんたく」によれば、『どんたくとはオランダ語で日曜日を意味する zondag の訛りである。ぞんたくとも。zon は太陽、dag は日を意味し』、『英語の sunday 同様、ラテン語名のひとつ dies solis の直訳である。現代オランダ標準語での発音は［zɔndɑx］でゾンダッハに近い』。『オランダ語由来の外来語は多くが江戸時代に使われ出しているがこの語は比較的新しく、明治初期に使われ出した。まだ曜日自体が普及していなかったせいか、日曜日から転じて休日を意味するようにもなった』とあり、また、博多どんたくについては、『起源は平安時代末にまで遡ると言われ』、『名称は明治時代に松囃子が禁止されて』（理由はウィキの「博多どんたく」によれば「金銭を浪費し、かつ文明開化にそぐわない」というものであった）、後の明治一二（一八七九）年頃に『再開されたときに付けられたと言われる』とある。］

どんたくの仮面はづせし人の老い

［やぶちゃん注：「仮面」ウィキの「博多どんたく」の「どんたく関連用語」に「肩裏（す

らせ)」という項があり、これは行列の中の多様な衣装演出の一つで、『羽織を裏返して着ることであり、粋な着こなしとしてどんたくで目にする。これにかるさん袴を合わせ、背に「預かり笹」を挿し、頭には頭巾あるいは博多にわかのにわか面を付けるのがポピュラーな出で立ち』とある。「かるさん袴」とは中世末に来日したポルトガル人が穿いていたものに似せて筒を太く、裾口を狭くした袴のこと。江戸時代の武士の旅装や大工などの仕事着として用いられた。「預かり笹」福岡商店街のブログ「あちこち聞きある記」の『「博多どんたく」”通りもん広場”で待っとーよ！（上川端商店街）』に（現在、当該記事は消失している模様）、画像入りで、『この笹は「預かり」と言われ、長さ 1 メートルほどの笹枝に、赤で大きく『のし』と書いた半紙や紙風船、にわか面などを結んだもの。祝いに来て頂いた気持ちを預かるという意味です』。『昔はまんじゅう何個、酒一合、などと書いて自分の店のハンコを押し、自慢の芸をして帰るときに渡した、とあります。貰った人は指定のまんじゅう屋などへ行って現物と代えてもらったそうです』。『訪れてもらったご好意を確かに「お預かりした証拠の文書」というのが、その名の由来でしょう』と解説がある。博多商人の心意気の現われである、ともある。「博多にわかのにわか面」「博多にわか」は博多地方で行われる即興の寸劇を伴う話芸で（詳細は「郷土芸能　博多にわか　入門」の「博多にわかとは」を参照）、「にわか面」とはそこで用いられる顔の上半分に装着する半面（はんめん）のことを指す。同じく「郷土芸能　博多にわか　入門」の「にわかの面」をご覧あれ。ああ、あれ！　と合点され、同時にこの多佳子の句の意も俄然明瞭となるであろう。」

どんたく囃子玄海に燈を探せどなし

杉田久女に、菱採ると遠賀の娘子裳（すそひ）濡ずも、の句あり、久女を想ひつゝ遠賀川を渡る　二句

咳しつゝ遠賀（おが）の蘆原旅ゆけり

青蘆原をんなの一生透きとほる

［やぶちゃん注：本「青蘆原」句群の標題句二句。これもやはり昭和二六（一九五一）年五月に博多で催された『天狼』三周年記念博多大会に出席した折り、遠賀川まで足を延ばした際の詠。特に二句目は嘗ての師久女を追懐して余りある。いや、寧ろ、そこに老いを迎えた（当時多佳子五十二）自身の影をもダブらせているように思われる。

前書の久女の句は、昭和七（一九三二）年秋の句で、久女没（昭和二一（一九四六）年一月二十一日。満五十五歳）後、六年後に日の目を見た昭和二七（一九五二）年十月刊「杉田久女句集」では、まず「水郷遠賀　十一句」の二句目に「菱刈ると遠賀の乙女ら裳を濡すも」と載り、すぐ後に、「水郷遠賀　三句」の二句目にこの句形で出る。以下に後者を引用する。

水郷遠賀　三句

菱實る遠賀の水路は縦横に

菱採ると遠賀の娘子裳濡づも

菱摘むとかゞめば沼は沸く匂ひ

「遠賀川」（現在、「おんががわ」と読んでおり、ここでもそれに倣って前書のそれは「をんががは」と読んでおく）は福岡県南東部にある現在の嘉麻市（旧嘉穂郡嘉穂町）の馬見山に源を発し、筑豊地方の平野部を流れて響灘（玄界灘）へと注ぐ川で、久女は好んでこの下流域（水巻町から河口近くの芦屋町辺り）を吟行した。富士見書房平成一五（二〇〇三）年刊の坂本宮尾氏の「杉田久女」によれば、この芦屋は『九州のいわば海の玄関で、京都と大宰府を結ぶ官道の重要な地点で』、『京都から来た役人たちは』、ここ旧地名で「塢舸の

水門（みなと）」（これが「岡賀」「遠賀」と表記が変化して濁音化撥音化して「遠賀」となったとある）『から九州に上陸し、逆に京都へ帰る役人はここから船に乗った』とあり、「万葉集」にも（巻七の一二三一番歌）、

天霧（あまき）らひ日方（ひかた）吹くらし水茎（みづくき）の岡の水門（みなと）に波立ちわたる

と詠まれている。「水茎の」は「岡」の枕詞。

――空一面に曇って、東の方から風が吹いているようだ……岡の湊に波が一面に立ち渡っているよ――

の意。

坂本氏は杉田久女の本句について、

《引用開始》

「濡づ」とは水につかる、濡れるの意。「裳（も）を濡（ひ）づも」あるいは「裳の裾ぬれに」は万葉時代に用いられた女性の官能的な美を詠う慣用表現である。久女はこの句を何度も推敲して「乙女は」「乙女ら」「娘子」の三種類の表現を試みている。「乙女は」の助詞「は」は説明的だ。「乙女ら」よりも「娘子」のほうが字面がいい。そのため久女は最終的に娘子を採用したのであろう。久女は「娘子」に「いらつこ」とルビをふっているが、辞書には「いらつこ」とは若い男のこと、若い女は「いらつめ」とある。そうなるとこの読みには無理がありそうだ。

《引用終了》

とある。

私は、菱を採る際に詠われ労働歌は、実は広くアジアに於ける歌垣（ラブ・ソング）であったのだと思う。日本初公開のベトナム映画「無人の野」（一九八〇年）の冒頭の、美しいそのベトナム語の歌声（男性から女性へ）を私は忘れることが出来ない（確証はないが、あれは菱採りであったように思う）。菱採りという設定自体が既にしてロマンスなのだと私は信じて疑わぬのである。

何より、私は菱が大好きなのである。一年草の水草で池沼に生える双子葉植物綱フトモモ目ヒシ科ヒシ *Trapa japonica* の実は澱粉が凡そ五十二%含まれており、茹でたり蒸したり

して食すると栗のような味がする（以上はウィキの「ヒシ」に拠る）。私は私の年代では珍しいヒシに親しんだ経験のある人間である。鹿児島出身の母の実家は大隅半島中央の岩川というところにあったが、小学校二年生の時に初めて訪ねた折り、近くの山陰の池に平舟を浮かべて、鮮やかな緑色のヒシの実をいっぱい採って、茹でて食べた思い出がある。それから三十年の後、妻や友人とタイに旅行し、スコータイの王朝遺跡を訪れた際、路辺で婦人が黒焼きにしたヒシの実を小さな竹籠に入れて売っていた。それは棘が左右水平方向にほぼ完全に開いたもので実の湾曲が殆んどない如何にも美しいのフォルムであった（グーグル画像検索「ヒシの実」はこちら）。まだ二十歳の美しいガイドのチップチャン（タイ語で「蝶」の意）に「これは日本語ではヒシと言います」と教えると、「ヒシ」という名をノートに記し、何を思ったものか、そのヒシの実一籠を自分のお金で買い求め、私にプレゼントしてくれた。それからまた三十年近くが経つ。そろそろヒシに出逢えそうな予感がする。……]

水底の明るさ目高みごもれり

吾に気づきてより翡翠の気鋒損じ

草深く落つ螢火の重さもて

滝道や小幅の水がいそぎゆく

螢火が過ぐとき掌中の螢もゆ

葭雀松をつかみて啼きつゞくる

[やぶちゃん注：「葭雀」は「よしすずめ」と読む。スズメ目スズメ亜目スズメ小目ウグイ

ス上科ヨシキリ科 Acrocephalidae に属するヨシキリの仲間の総別称。夏の季語。mizθra 氏の「よしきりのさえずり（2）」で鳴き声と映像が視聴出来る。]

髪乾かず遠くに蛇の衣懸る

[やぶちゃん注：多佳子には珍しいかなりはっきりとした鬼趣句である。「衣」は「え」で、蛇の抜け殻であろう。やや作為的確信犯だが嫌いじゃないね。]

日盛りの墓かげ濃しや吾を容れ

草静か刃をすゝめゐる草刈女（め）

人への愛憎午前の蟲午後の蟲

時計直り来たれり家を露とりまく

（二十六年）

片蔭

松蟬の中に帰り来（く）こゝよしと

[やぶちゃん注：「松蟬」半翅（カメムシ）目頸吻亜目セミ型下目セミ上科セミ科セミ亜科ホソヒグラシ族ハルゼミ *Terpnosia vacua* の別名。ヒグラシを小さく、黒くしたような外見で翅は透明だが、体はほぼ全身が黒色か黒褐色をしている。参照したウィキの「ハルゼミ」によれば、『ある程度の規模があるマツ林に生息するが、マツ林の外に出ることは少なく、生息域は局所的である』とあり、『日本では、セミの多くは夏に成虫が現れるが、ハルゼミ

は和名の』四月末から六月にかけて発生する（そこから季語としては晩春から初夏に相当する）。『オスの鳴き声は他のセミに比べるとゆっくりしている。人によって表現は異なり「ジーッ・ジーッ…」「ゲーキョ・ゲーキョ…」「ムゼー・ムゼー…」などと聞きなされる。鳴き声はわりと大きいが生息地に入らないと聞くことができない。黒い小型のセミで高木の梢に多いため、発見も難しい』とある（parariira18 氏の「ハルゼミの声」をリンクさせておく）。］

青蜥蜴吾ゆかねば墓乾きをらむ

帯ゆるく片蔭をゆくもの同士

［やぶちゃん注：「片蔭」は午後の日差しが建物や塀などに影をつくることをいう。大正以降によく使われるようになった晩夏の季語。］

洗ひ浴衣ひとりの膝を折りまげて

髪につく蟻緑蔭も憩はれず

青蚊帳の粗（あら）さつめたさ我家なる

真夜起きゐし吾を油虫が愕く

青蟷螂燈に来て隙間だらけの身

倒るるも傾くも向日葵ばかりの群

一粒を食べて欠きたる葡萄の房

額(がく)碧し聞きたる道をすぐ忘れ

近くに住みながら右城暮石さんにいつも会へず

七月の螢ひと訪ふまたこの季(とき)

［やぶちゃん注：「右城暮石」（うしろぼせき　明治三二（一八九九）年～平成七（一九九五）年）は俳人。高知県長岡郡本山町字古田小字暮石の生まれ（俳号は出身地の小字の名）で本名は斎(いつき)。大正七（一九一八）年大阪電燈に入社、二年後の大正九年に大阪朝日新聞社俳句大会で松瀬青々を知り、青々の主宰誌『倦鳥(けんちょう)』に入会、昭和二一（一九四六）年に『風』『青垣』同人となり、後に『天狼』同人となった。多佳子の本句創作と同時期（本句群末尾クレジット参照）の昭和二七（一九五二）年『筐(かたみ)』を創刊、昭和三十一年にそれを『運河』と改名して主宰した。昭和四六（一九七一）年に第五回蛇笏賞受賞。新興俳句の一翼をになった俳人として知られるが、晩年は天狼調の温厚な作風となった（以上はウィキの「右城暮石」に拠った）。句を引いておく。

冬浜に生死不明の電線垂る　　暮石

裸に取り巻かれ溺死者運ばるる　暮石

散歩圏伸ばして河鹿鳴くところ　暮石］

巣があれば素直に蜂を通はせる

仔鹿追ひきていつか野の湿地ふむ

踊りゆく踊りの指の指す方(かた)へ

［やぶちゃん注：多佳子はこの昭和二七（一九五二）年の四月（満五十三歳）には、心臓に変調をきたし、平畑静塔に往診して貰った結果、心臓ノイローゼ（心臓神経症）と診断されている。］

老いまでの日の

上京して

衣更前もうしろも風に満ち

衣更老いまでの日の永きかな

駅燈に照らされて巣の燕寝し

武蔵野の三谷昭氏新居を訪ひて

旅のひざ仔猫三つの重さぬくさ

［やぶちゃん注：「三谷昭」（明治四四（一九一一）年～昭和五三（一九七八）年）は俳人。素人社や実業之日本社などで編集者を勤める傍ら、『走馬灯』『京大俳句』などに加わり、昭和一五（一九四〇）年の京大俳句事件で検挙された。戦後は『天狼』『面』同人。現代俳句協会初代会長。多佳子より十二歳年下である（講談社「日本人名大辞典」に拠った）。句を掲げる。

ある街の木瓜の肉色頭を去らず

わが一生女はいつも野火に似て
暗がりに檸檬泛かぶは死後の景]

単衣着て足に夕日のさしゐたり

蓮散華美しきものまた壊る

飛燕の下母牛に乳溜まりつゝ

嫗の身風に単衣のふくらみがち

[やぶちゃん注：順列と季語から見て、昭和二八（一九五三）年の夏の句。当時、多佳子五十四。]

夏書（げがき）の筆

[やぶちゃん注：「夏書」とは本来は夏安居（げあんご）（インドの僧伽に於いて雨季の間は行脚托鉢を休んで専ら阿蘭若（あらんにゃ）〔寺院の意〕の内に籠って座禅修学することを言った。本邦では雨季の有無に拘わらず行われ、多くは四月十五日から七月十五日までの九十日を当てる。これを「一夏九旬」と称して各教団や大寺院では種々の安居行事がある。安居の開始は結夏（けつげ）といい、終了は解夏（げげ）というが、解夏の日は多くの供養が行われて僧侶は満腹するまで食べることが出来る。夏安居は「雨安居（うあんご）」若しくはただ「安居」ともいう。ここは平凡社「世界大百科事典」の記載をもとにした）の期間中に経文を書写すること、また、その書写した経文をいう語。第三句から実際の経文の書写を多佳子がしていた事実があるのであろうが、それ以上にそらくは以下の句作をその書写に擬えたものでもあったのであろう。]

炎天や笑ひしこゑのすぐになし

踊り唄終りを始めにくりかへし

夏書の筆措けば乾きて背くなり

ひしひしと声なき青田行手に満ち

舷燈の一穂（すゐ）に火蛾海渡る

万緑や石橋に馬乗り鎮むる

誓子先生と名張の藤堂氏を訪ふ　三句

トンネルに眼つむる伊賀は万緑にて

明けて覚めをりひとの家の蚊帳に透き

螢火の一翔つよく月よぎる

［やぶちゃん注：年譜の昭和二八（一九五三）年六月の条に『名張へ螢狩に行く。女性らのほかに、誓子、静塔、薫参加、藤野弥生居に一泊』とある。「薫」は堀内薫、藤野弥生は俳人（詳細不詳。しかし「藤堂氏」というのと「藤野」の齟齬が気に掛かる）。「一翔」は「ひととび」と訓じているか。］

吉野青し

急流を泳ぎ切り若き全身見す

青き吉野泳ぐ百姓淵に透き

尻あげて泳ぎ吉野の川に育つ

吉野青し泳ぐとぬぎし草刈女

泉の底明し顔浸(つ)け眼ひらけば

待つ長し電線つかみ仔燕等

（二十八年）

［やぶちゃん注：「吉野」は奈良の吉野。「吉野の川」は奈良県から和歌山県へと流れて紀伊水道に注ぐ紀の川。河川法上の名称は「紀の川」で、国土地理院二万五千／一地形図では「紀ノ川」、奈良県内では奈良県南部の地名「吉野」に因んで「吉野川」と呼ばれるが、河川名を案内する標識などには水系名である「紀ノ川」が併記されてある（以上はウィキの「紀の川」に拠る）。底本年譜の昭和二八（一九五三）年の条に、『七月三十日、吉野へ吟行、静塔、多佳子、清子』（津田）、『美代子、薫』（堀内）『参加。多佳子は吉野川の青淵』（和歌山県新宮市から奈良県吉野郡十津川村に跨る峡谷瀞八丁(どろはっちょう)か？　十津川村観光協会公式サイト内の「瀞峡」を参照）『をのぞき込んだり、大岩に腰かけて句作にふける。雷雨の中、静塔は濡れて着く。下市』（しもいち：奈良県吉野郡下市町大字下市）『の「吉野山水」』（奈良県吉野郡十津川村平谷にある離れ一軒宿。現在は「小料理宿　山水」と称する。十津川温泉の源泉地下湯温泉にあり、本年で創業三十五年の和風旅館。公式サイトはこちら）『にて夜、土地の俳人等を交えて句会。夜中、泥棒入り大騒ぎ。翌三十一日、未明に起き、

鮎釣を觀。午前中句会。作品「吉野青し」。』とある。]

青あらし

苦楽園誓子居に於て天狼同人会　一句

老い髪の仲間隅まで青あらし

斑猫が紅青をもて惑はせり

[やぶちゃん注：「斑猫」は鞘翅（コウチュウ）目オサムシ亜目オサムシ上科ハンミョウ科ナミハンミョウ *Cicindela japonica*、所謂、ミチオシエである。人が近づくと一、二メートル程飛んで直ぐ着地するという行動を繰り返し、その過程で度々、後ろを振り返るような動作をする本種の習性をうまく詠み込んでいる。なお、「斑猫」全般については、私の「耳嚢　巻之五　毒蝶の事」の注で詳細を述べておいた。是非、参照されたい。]

馴れざる水に金魚の尾鰭ひらく

[やぶちゃん注：この句、中七と下五のブレイクが私は好きだ。]

踊り唄遠しそこよりあゆみ来て

百足虫の頭（づ）くだきし鋏まだ手にす

[やぶちゃん注：多佳子の名句と私は信じて疑わぬ句である。美しい多佳子ならではの映像のマジックだ。多分、これを演じられる――拮抗出来る――のは他には私の偏愛するジ

ヤンヌ・モローぐらいしかいない。]

淡路島

七曜同人朝倉十艸氏宅に滞在

みどりの島へ舷梯懸るわたりけり

[やぶちゃん注：「七曜」は昭和二五（一九五〇）年一月に『天狼』系の俳誌として多佳子が主宰していた（多佳子没年の昭和三八（一九六二）年に堀内薫が継承）。「朝倉十艸」不詳。]

あぢさゐのくれなゐ潮路来りけり

地にのこる鮮血蠮（えひ）を競りしあと

月光来る靴がばがばと搾乳夫

月光（て）る桶びしびし奔る牛乳享け

月光濃き搾乳の桶股ばさみ

天女丸

思ひ切り西日の舵輪まきかへす

［やぶちゃん注：「天女丸」摂陽商船株式会社が大正一五（一九二六）年に大阪と淡路島の洲本間に運行を開始した急行線で就航したディーゼル・エンジン搭載の新造船天女丸四百九十五トン。個人サイト「～ぶらり散歩～淡路島　歴史の小径」のこちらの記載によれば、運行当時は大阪―洲本間を二時間三十分で運行、『その姿と快速ぶりが人気をよんだ。さらに、昭和５年にはディーゼルの此花丸』『による兵庫洲本急行便を加え、天女丸とともに春から初秋の淡路島観光を盛り上げた』とある。リンク先には優雅な船体の写真もある。］

長崎行

［やぶちゃん注：年譜によれば、以下の「阿蘇」までは確実に昭和二九（一九五四）年五月の九州旅行の際の句群である。六日に津田清子と同伴で旅立ち（伊丹から板付まで航空機を利用した。冒頭異例の九句にも及ぶそれらから見ると、もしかすると多佳子はこの時初めて航空機に乗ったものかも知れない）、長崎に三泊の後、『十数年ぶりに阿蘇山に登』った。その後、『横山白虹らと共に、久女終焉の地、筑紫観音寺にある九大分院、筑紫保養院に行き、久女を弔』ったとある。］

夏雲航（ゆ）く地上のことを語りつゞけ

巣燕を見しこと遠し天翔（あま）けつゝ

灼くる翼その上に重き無限の碧

［やぶちゃん注：「上」は「へ」、「碧」は「へき」と読んでいるか。私は少なくともそう読みたくなる。］

夏の雲天航く玻璃に露凝らす

夏の雲翼とゞまるゆるされず

夏天航く四ツ葉プロペラ健かなり

灼くる翼ゆれつゝ平らたもちつゝ

双翼が地上の梅雨の暗さに入る

天降りて青野に車輪ぐゝと触る

横山白虹氏と共に久女終焉の地を弔ふ、筑紫観音寺保養院にて

青櫨が蔽ひ久女の窓昏む

［やぶちゃん注：「青櫨」は「あをはぜ」でムクロジ目ウルシ科ウルシ属ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* の新緑。］

鑰（かぎ）はづし入る万緑の一つの扉（と）

万緑やわが額（ぬか）にある鉄格子

［やぶちゃん注：「筑紫観音寺保養院」は現在の、福岡県太宰府市五条にある福岡県立精神医療センター太宰府病院の前身である。単科精神科病院福岡県立筑紫保養院の開院は昭和六（一九三一）年十一月二十五日で、当初は百床であった（同病院公式サイトの「院長挨

拶」に拠る)。

久女はここで八年前の昭和二一（一九四六）年一月二十一日、極寒の中、腎臓病悪化――精神科医でもある俳人平畑静塔は当時の極度に悪い食糧事情での栄養失調或いは餓死と推察している（坂本宮尾「杉田久女」一九八頁より孫引き）――のため、肉親に看取られることなく（敗戦直後の劣悪な交通事情に拠る）亡くなっている。満五十五歳と八ヶ月余りであった。

多佳子は後の「自句自解」（『俳句』昭和三三（一九五八）年一月発行）で、この句に自注し、以下のように述べている（底本全集第二巻を底本とした)。

＊

万緑やわが額にある鉄格子　（海彦）

昭和二十九年筑紫保養院の作。

杉田久女の終焉の地を弔ふことは長年の念願でしたが、なかなかその機に恵まれず、絶えず心にかかつてをりました。偶々「自鳴鐘」の好意によつて、それを実現することが出来ました。医学博士である横山自虹氏が同行されましたので、つぶさにその当時の模様を院長から伺へました。

久女終焉の部屋は、櫨の青菜が暗いほど茂り、十字に嵌る鉄格子は、私の額に影を刻みつけました。

久女に手ほどきを受けた弟子の一人として、いまなほ至らないわが身を、この時ほどつよく悔まれたことはなく、厳しい生涯を送つた久女の終焉の部屋のたたずまひは、私の生きる限り灼きついて離れないことでせう。

夕暮、保養院の門を出ると、菜殻火が炎々と燃えてゐました。白虹氏に聴くと、久女の入院は昭和二十年の秋で、翌年の一月に逝つたのですから、久女はこの菜殻火を見てゐないのです。夕日の中に燃えてゐた菜殻火の炎の美事さ恐ろしさは、到底忘れることが出来ません。

＊

この感懐はこれらの句に孕む非常に深い多佳子の思いを知らせているところの、厳粛な

一文であると私は思っている。」

保養院を出づれば菜殻火盛んなり

一切忘却眼前に菜殻火燃ゆ

［やぶちゃん注：如何にも意味深長な句である。自句自解ではこれは多佳子の心境というよりは、久女の意識に共時化した意識（菜殻火の燃えたつ如き久女の情念が憑依したと言ってもよい）に基づく感懐のように読める。孰れにせよ、この時確かな先師と再実感した久女に対する、恩讐の彼方の思い、であることは間違いない――間違いないが、しかし、私はここに、今一つ――多佳子が、久女没後のおぞましき「久女伝説」の形成に確信犯で自ら組したこと（と私は思っている）を――「一切忘却」しようとしている、と意地悪くも読みたくなるのである。多佳子以上に久女を愛している私はどうしてもこのことを言わずにはおれないのである――］

菜殻火の燃ゆる見て立つ久女いたむ

菜殻火の火蛾をいたみ久女いたむ

つぎつぎに菜殻火燃ゆる久女のため

菜殻火や入日の中に盃もゆ

久女の終焉をみとりし末継はつみ女

万緑下浄き歯並を見せて閉づ

［やぶちゃん注：「末継はつみ女」明らかに久女門下の女流俳人と思われるが、不詳。敢えて言うと、「女流俳句を味讀す」（昭和七（一九三二）年三月発行『花衣』創刊号）に、

さげ髪して床にあり風邪の妻　　波津女

とある人物、また同『花衣』二号（昭和七年四月発行）に、

うたゝねやさめて疊む花衣　　波留女

とある人物がそれらしくは見える。是非とも識者の御教授を乞うものである。］

長崎崇福寺三句

仏花としてアマリヽスの花八方向く

僧苑や咲く罌粟散る罌粟罌粟に充ち

河間氏累代の墓あり

一族の墓乾く泉遠く遠く

［やぶちゃん注：「崇福寺」は「そうふくじ」と読む。ウィキの「崇福寺」によれば、『長崎県長崎市にある黄檗宗の寺院。大雄宝殿と第一峰門は国宝建築である。興福寺・福済寺とともに「長崎三福寺」に数えられ』、寛永六（一六二九）年に『長崎で貿易を行っていた福建省出身の華僑の人々が、福州から超然を招聘して創建。中国様式の寺院としては日本

最古のものである。福建省の出身者が門信徒に多いため福州寺や支那寺』と称せられたとある（但し、最後の部分には要出典要請が掛けられてある）。

「河間氏」は中国から渡来して帰化した唐通事河間氏（本姓は兪（ゆ）で「河間」は本邦での居住地名由来とされる）のことと思われる。

因みに、芥川龍之介がこの寺で詠んだと推定される句がある。

再び長崎に遊ぶ

唐寺（からでら）の玉巻芭蕉肥りけり

旧岩波版全集では、この句の注記として大正十三（一九二四）年九月刊の『百艸』に所収する「長崎日録」の大正十一（一九二二）年五月二十一日の条参照とある。以下に引用する。

五月二十一日

古袷の尻破れたれば、やむを得ずセルの着物をつくる。再び唐寺に詣る。

唐寺の玉巻芭蕉肥りけり

唐寺は唐四箇寺とも呼ばれ、中国様式建築の顕著な崇福寺・興福寺・福済寺・聖福寺の四寺があるが、これはその中で最も古いとされるこの崇福寺と私はみる。」

甃坂にすくむ頭（づ）勝ちの捨仔猫

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「甃坂」は「いしざか」。本句群は「長崎行」である。］

龍舌蘭どこにでも腰おろして旅

活水女学校

万緑や霧笛どの窓からも入る

［やぶちゃん注：「活水女学校」は現在の長崎県長崎市宝栄町にある私立女子中高一貫校である活水（かっすい）中学校・高等学校のこと。明治二二（一八七九）年にアメリカ人宣教師エリザベス・ラッセルによって創立された女学校を前身とする。参照したウィキの「活水中学校・高等学校」によれば、明治一四（一八八一）年八月に「ヨハネによる福音書」第四章十四節『わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る』に因んで（引用部分は同校公式サイト「学校案内」から引用した）、校名が「活水女学校」（旧学制下）と定められ、その後の昭和一九（一九四四）年に女学校高等女学部が「活水高等女学校」に改組された。新学制となってからは昭和二二（一九四七）年に活水中学校が、翌年に活水高等学校が発足しており、この「活水女学校」という呼称は旧称に基づく通称である。その歴史については統轄する活水学院公式サイト内の「活水学院１３０周年が教えるもの」が詳しい。］

大浦天主堂裏に泊りて

鎧戸（よろひど）ひらく青きあぢさゐ青き枇杷

暁の弥撒へ

アマリヽス跣足の童女のはだしの音

糊かたき弥撒のベールに農の日焼

西日の玻璃神父に赤光孤児に紫光

汗の雀斑（かすも）少年聖歌隊解かれ

すでに日焼少年聖歌隊匂へり

日焼子の涎が念珠（ねんじゅ）の一つ一つに

たゞ黒き十字架朝焼雀らよ

浦上天主堂

原爆の跡に仮御堂建つのみ

同じ黒髪梅雨じめる神父と子等

梅雨の床子等へ聖書を口うつしに

石塊として梅雨ぬるる天使と獣

梅雨の廃檀石塊の黙天使の黙

梅雨に広肩（ひろかた）石のヨハネの顔欠けて

［やぶちゃん注：多佳子の浦上天主堂来訪は昭和二九（一九五四）年五月である。底本年譜によれば、『浦上天主堂は被爆の跡に仮堂を建て、孤児たちを収容。孤児たちは神父より

聖書を習っている』とある。以下、浦上天主堂公式サイト内の「原爆被災」から引用する。昭和二〇（一九四五）年八月九日午前十一時二分、浦上の松山町上空五百メートルで炸裂した原子爆弾は浦上を焼土と化した。『この日、浦上天主堂では毎年のならわしによって、大祝日の前には地区ごとに日をきめて告解の秘跡が行われていた。聖母被昇天の大祝日の準備の告解のために主任司祭西田三郎師は聖堂に入ろうとし、助任司祭玉屋房吉師は告解場に入っておられた』。『この日は数十人の信者が天主堂内にいたと思われる。そして爆風で天主堂は倒壊し』、二人の神父も『信者たちも即死した。倒壊した天主堂には火がつき炎上した』。『長崎への原爆投下により、爆心地から至近距離に在った浦上天主堂はほぼ原形を留めぬまでに破壊』した（同サイト内「浦上天主堂の被爆後の写真」及び「原爆資料室」）。『一部側壁を残すのみで全壊で』、『正面上部の右塔は真下に落下して破壊し、左塔は天主堂左下の川の中にほとんど壊れず落下している』。『正面入口のアーチ部分は亀裂甚だしく、間もなく引き倒』され、『その他の各側壁も亀裂甚だしく、正面右側入口部分を残して全部引き倒』された。『残った石像の内、天使像』十七体と『聖マリア、聖ヨハネの石像は、再建整備された現在の天主堂正面に装着されて』いる。それが鼻部分が欠けた多佳子の詠んだ聖ヨハネ像である。私が撮った写真があるはずだが、直ぐに出ない。うさ氏のブログ「たるるの部屋」に掲げられた写真をリンクしておく。]

阿蘇

長崎の帰途登る、十数年振りなり

寄りゆけば寄り来（く）夏野の牛と吾

牛達の夜床（よどこ）野の草まだ短かく

肉桂（につけい）の香がする夏野の仔牛ねむし

［やぶちゃん注：「肉桂」クスノキ目クスノキ科ニッケイ属ニッケイ *Cinnamomum sieboldii*。シナモン *Cinnamomum zeylanicum* と同属。］

放馬と寝たし夏野はるかに発破音

［やぶちゃん注：「放馬」は「はうば（ほうば）」と音読みしているらしい。］

噴く火見えず青き低山牛遊びて

砂千里をゆく

熔岩（らば）を積む道標熔岩の野の夕焼（ゆやけ）

ひとり遅れつゝ

熔岩に汗しおのれの歩みあゆみつゞる

夕焼くる嶺が聚（あつま）る火の山へ

夕焼（ゆやけ）鴉熔岩野の寂に降りられず

［やぶちゃん注：多佳子は夫豊次郎を亡くした翌昭和一三（一九三八）年八月に三女啓子と四女美代子を連れて阿蘇・雲仙・長崎を旅行しているので、十六年振りの阿蘇であった。］

母燕

母燕細し炎天へ翔けいづるとき

汗の荷を胸に背に分け歩き出す

柘榴の粒幾百食はゞ寂しさ消ゆ

手をおけば胸あたゝかし露微塵

をどりの衆眉目(まゆめ)わかたず影揃ふ

男をんな夜の砂擦つてをどりの足

夜の崖に水打つ胸をぬらす如

麻衾暁(あけ)ごうごうの雨被る

［やぶちゃん注：五月上旬であるが本句群の中の祭は不詳。識者の御教授を乞う。］

老いも緑

老いも緑(みどり)袋のものを出して喰べ

道よぎる蜥蜴や和するに難き行

毛虫焼く盛このとき孤独でなし

考ふる瞼の裡(うち)も緑さし

赤毛大瞳(おほめ)誰に似しかもよ麦負ふ子

麦刈の薬罐が日のぬくさまでさめ

麦を負ふ母金色の夕の餓ゑ

鵜川

岐阜「流域」の人々と

鵜の餓ゑどき西日徹(とほ)して荒鵜籠

家に西日鵜匠もろとも田楽刺(でんがくざし)

鵜川暮れず何に生(あ)れつぐ白水泡(しろみなわ)

老い鵜「彦丸」内輪歩きに暮れざる川

篝火に眼窪頬窪鵜の匠(たくみ)

のどふくらむ鵜にて引かるる縄つよし

（二十九年）

［やぶちゃん注：私は「縄」という漢字だけは許せない。この「縄」では直ぐに解けてぼろぼろになる。旧字とした。］

疲れ甘ゆ鵜の鳥鵜じまひはかどらず

かをかをと疲れ鵜鵜綱（うづな）ひきずつて

べたべたと簑おとろへ鵜のつかれ

つかれ鵜のこゑごゑ鵜匠きゝわけて

鵜じまひや鵜匠折れ身に鵜を抱きて

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三〇（一九五五）年七月の条に、『岐阜の松井利彦の招きで、長良川の鵜飼を見る』とある。「流域」は岐阜の流域俳句会の俳誌で編集発行人（昭和三十三年版を確認）は松井利彦名義である。翌三十一年の七月にも彼に招かれて誓子と同地を再訪、鵜飼を楽しんでいるが（後掲）、その年譜記載には『岐阜「流域」主宰、松井利彦』とある。

本句群、全十一句の内、冒頭連続四句と一句挟んで再び二句連続する計六句にも及ぶ異様な上五字余り、五句もの句にルビを配し、二句連続でオノマトペイアの使用、老いた鵜の名「彦丸」という固有名詞を鉤括弧で挿入するなど、明らかに非常な特異点を呈する句群である。当時多佳子満五十六歳。］

発掘

人声よりきちきち勁し宮址掘る

［やぶちゃん注：「宮址」は以下も概ね「ぐうし」と音読みしている模様。］

炎天の礎石に老眼鏡（らうがん）発掘者

風化刻々宮址の溝にぎす鳴きて

野の鶉灼くる宮址の赤土（はに）に来ず

宮址発掘す傍観の日傘の影

埴輪出土炎天に歓喜のこゑ短く

埴輪出づ舐むるばかりに土愛（かな）し

宮址の寂[illegible]押へし指を[illegible]む

［やぶちゃん注：「寂」は「じやく（じゃく）」であろう。「[illegible]」は「ばつた（バッタ）」。］

昏れて秋風宮址の窪より起る

［やぶちゃん注：この句は「くれてあき　かぜ／みやあとの　くぼよりおこる」と読むか。識者の御教授を乞う。］

北の蒼

郭公や明さとなるか北の蒼

［やぶちゃん注：「明さ」は「あかるさ」ではとてもであるが、「あかさ」では意味が取れない。「あけさ」で明け方の謂いか。お手上げ。識者の御教授を仰ぎたい。］

遁走によき距離蛇も吾も遁ぐ

［やぶちゃん注：この句は腑に落ちる。悪くない句である。］

炎天の鵜や遠かける羽づかひ

［やぶちゃん注：これも面白い。モンタージュが面白い。］

いたどりの酸さを渋さを弟（おと）に教せ

［やぶちゃん注：「酸さ」は「すさ」であろう。「教せ」は「をせ」か。しかし文法的に「教（を）す」という語は古語になく、無理がある。しかし、「けうせ（きょうせ）」では意味もおかしいし、韻律も頗る悪い。何となく川柳なら「教（を）せ」はありそうだが。意味は分かるがこれも何だかしっくりと腑に落ちない。お手上げである。とんでもない読み違いを私はしているのか？　識者の御教授を仰ぎたい。］

炎天下鉦が冴え音のチンドン屋

［やぶちゃん注：これもモンタージュとＳＥが効を奏した佳句と思う。］

わが夜床火虫に新参の青蛾加ふ

［やぶちゃん注：「新参」は「あらて」か。そうでも読まないと韻律が如何にも悪いのだが。鬼趣があって好きではあるが読み方が今一つ不審。

何か、この句群、孰れも用字も修辞も奇異で、路上パフォーマンスを眺めるようで、面白く感じながらも、今までの多佳子の句に感じない非常な戸惑いを覚える。全体に識者の眼から鱗の御見解を乞いたいというのが正直なところ。］

赤目溪

木菟明眸をりをり月に瞼伏せ

月光を羽毛にふくめ木菟ねむし

月の嶺音なき滝を天垂らし

長路来て泉さそへば足浸ける

泉に足行く手の長路頭に白らけ

泉に入れ胸腹熱き碧蜥蜴

手をついて深淵の静滝わすれ

朴落葉ひき入れつよき底流れ

月の瀬々また滝なして溪展(ひら)く

［やぶちゃん注：「赤目溪」三重県名張市赤目町を流れる滝川の溪谷にある一連の滝を持った赤目四十八滝溪谷のこと。参照したウィキの「赤目四十八滝」によれば、古えより『山岳信仰の聖地であり、地元には「滝参り」という呼び方が今も残』り、『奈良時代には修験道の開祖である役行者（役小角）の修行場ともなった』。『地名「赤目」の由来は、役行者が修行中に赤い目の牛』『に乗った不動明王に出会ったとの言い伝えにあるとされる。また、役行者および修験道と関連するが、忍者の修行場であったとも伝えられている』。『滝のある溪谷はおよそ』四キロメートルに『わたって続き、峠を挟んで香落溪（こおちだに）へとつながっている。 溪谷は四季折々に楽しめるハイキングコースとなっており、紅葉の名所としても知られていて、秋には関西・中京方面などから多くの観光客で賑わいを見せる』。『溪谷とその周辺地域は野生動物と植生の宝庫である。特に溪谷は』『オサンショウウオの棲息地として知られ』る。赤目四十八滝の内でも比較的大きな五つの滝を赤目五瀑（不動滝・千手滝・布曳(ぬのびき)滝・荷担(にない)滝・琵琶滝）と称する、とある。年譜の昭和三〇（一九五五）年の条に、『八月二十九日、俳句が出来ないので、津田清子に案内され、赤目の滝に吟行。滝本屋に一泊。宿の窓にみみずくが止る。幼鳥のときに拾われ、飼われて育ち、成鳥となり山に還されたもの。しかし、腹が空くと、餌をもらいに滝本屋にもどってくる』とある。滝本屋は赤目町赤目四十八滝に現存。公式サイトはこちら。］

青馬追

巣が近くをりをり硯舐めに蜂

青馬追こゑとならざる切々(せつせつ)青

［やぶちゃん注：「青馬追」直翅（バッタ）目キリギリス亜目キリギリス科ウマオイ属ハヤシノウマオイ *Hexacentrus japonicus* 又はハタケノウマオイ *Hexacentrus unicolor* 。「日本鳴く虫保存会」のこちらのページの音源がその違いを良く認識出来る。この聴き比べでは、多佳子の聴いたのは「こゑとならざる」「切々」からハタケノウマオイか。］

白露や目覚めてブンと虻がくる

いなづまをふみふむ帰路の折曲る

燈が消えて暁（あけ）の蛾行方失へり

（三十年）

秋

青野分

没せむとしては顔あぐ青野分

いなづまの薔薇色徹（とほ）る雲の峰

寒蟬啼くひとつびとつが語尾を曳き

師の前に野分來し髪そのまゝなる

刈田にて白鷺あらそふ姿と影

（二十六年）

［やぶちゃん注：この五句、何かキャメラ・ワークにヌーヴェル・ヴァーグの先駆のようなものを感ずる。］

菊作者（きくつくり）

黄菊白菊菊作者いま白に触れ

黄菊にむかふ一切の彩（いろ）しりぞけ

紅玉の霧の日つる祖母の唄

燈に山蛾寄せゐる電柱帰り着きぬ

瀬をくゞりふたゝび曼珠沙華が浮く

［やぶちゃん注：この辺り、確信犯の韻律のずらしが顕著である。］

忌日に　二句

吾なしに夫（つま）ゐる曼珠沙華を流す

毛糸編むや夫のこゑ幼かしり子のこゑ

［やぶちゃん注：昭和二十七（一九五二）年夫豊次郎の祥月命日九月三十日の吟であろう。豊次郎は昭和十二年逝去であるから十六回忌に当たる。豊次郎は享年五十で当時の多佳子

は満三十七であったが、この年多佳子は既に満で五十三となっていた。一句目は墓前での感懐であろうか。]

猛かりし鵙よ隻翼拡げて見る

鱗雲ことごとく紅どこから暮る

櫨採唄(はぜとりうた)なぜ櫨採りの子となりしと

[やぶちゃん注:「櫨」ムクロジ目ウルシ科ウルシ属ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* 。木蠟(もくろう)を製するための果実採取をしている情景を詠んだものか。木蠟とはこのハゼノキの果実を蒸して圧搾し、そこから採取される高融点の脂肪質で、和蝋燭・坐薬や軟膏の基剤・ポマード・石鹸・クレヨンなどの原料として利用される。参照したウィキの「ハゼノキ」によれば、『日本では、江戸時代に西日本の諸藩で木蝋をとる目的で盛んに栽培された。また、江戸時代中期以前は時としてアク抜き後焼いて食すほかすりつぶしてこね、ハゼ餅（東北地方のゆべしに近いものと考えられる）として加工されるなど、飢救作物としての利用もあった。現在も、食品の表面に光沢をつけるために利用される例がある』とある。また、ウィキの「木蝋」には、『生蝋（きろう）とも呼ばれ、ウルシ科のハゼノキ（櫨）やウルシの果実を蒸してから、果肉や種子に含まれる融点の高い脂肪を圧搾するなどして抽出した広義の蝋。化学的には狭義の蝋であるワックスエステルではなく、中性脂肪（パルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸）を主成分とする』。『搾ってからそのまま冷却して固めたものを「生蝋」（きろう）と呼び、さらに蝋燭の仕上げ用などにはこれを天日にさらすなどして漂白したものを用いる。かつては蝋燭だけでなく、びんつけ、艶（つや）出し剤、膏薬などの医薬品や化粧品の原料として幅広く使われていた。このため商品作物として明治時代まで西日本各地で盛んに栽培されていた』。『長崎県では島原藩が藩財政の向上と藩内の経済振興のため、特産物として栽培奨励をしたので、島原半島で盛んにハゼノキの栽培

と木蝋製造が行われた。特に昭和になってから選抜された品種、「昭和福櫨」は、果肉に含まれる蝋の含有量が多く、島原半島内で広く栽培された。木蝋製造は島原市の本多木蝋工業所が伝統的な玉絞りによる製造を続け、伝統を守っている』とあり、また、『愛媛県では南予一体、例えば内子（内子町）や川之石（八幡浜市、旧・西宇和郡保内町）は、ハゼノキの栽培が盛んであった。中でも内子は、木蝋の生産が盛んで、江戸時代、大洲藩６万石の経済を支えた柱の一つであった。明治期には一時、海外にも盛んに輸出された』とあり、本句、特に詠唱地が記されていないが、これらの名産地の孰れかであったかとも思われる。」

噴井の水遁げをり葡萄作りの留守

乳足り子を地におき葡萄採りいそぐ

葡萄畑男が走り日に斑ゆれ

葡萄樹下処女身に充つ酸さ甘さ

葡萄の房切るたび鋏の鉄にほふ

鶏頭もゆ疲れしときを伏し隠れ

穴まどゐ身の紅鱗をなげきけり

［やぶちゃん注：「穴まどゐ」「穴惑い」でるから本来は「穴まどひ」が正しい。秋彼岸を過ぎても冬眠のための穴に籠らずにいる蛇のこと。鱗が赤い色を帯びるとなると、有鱗目ヘビ亜目ユウダ科ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus* 若しくはヘビ亜目クサリヘビ科マムシ亜科マムシ属ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* が想起される。孰れも毒蛇であるが、多佳子の

アブナい句としてはマムシとしたい私と、実際の紅い鱗というイメージでは実体験上、ヤマカガシの紅い帯が好きな私の双方がいる。因みに、私は大の蛇好きである。」

霧に鳩

「青燕」の人々に招かれて戦後初めて信州へ

旅立つ。津田清子さん同伴

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和二七（一九五二）年の条に、『十月二日の夜行で、清子同伴、信州長野市の「七曜」支部発表式に、戦後初めて信州へ旅立つ。三日長野着。その午後木口奈良堂の案内で林檎園を見に行く清子を詠って』として後掲される「林檎の樹のぼりやすくて処女のぼる」が掲げられてある（「木口奈良堂」という人物は同支部の俳人と思われるが不詳。因みに清子は当時三十二歳である）。続けて、『六日、北軽井沢から鬼押出しに吟行。一冊の句帳を満たす』とある。

「青燕」は小諸の青燕俳句会の俳誌であるが、恐らくこの『「七曜」支部』とあるのと同一組織であろうと思われる。

「七曜」は昭和二五（一九五〇）年一月より多佳子が本格的に主宰した俳誌（創刊は昭和二十三年一月一日で多佳子の名で冬一郎指導と年譜にある）。

因みに、この昭和二十七年の年譜末尾には、『この年より、青森の寺山修司、京武久美ら「七曜集」へ投句。修司より依頼され、その俳誌の誌名「牧羊神」を揮毫』とある。』京武久美（きょうぶひさよし）（昭和一一（一九三六）年〜）は青森県生。青森市立野脇中学校二年の折りに同級の寺山修司と友人となり、県立青森高等学校時代には文芸部でともに活動、俳句・短歌に熱中した。高校一年の時、京武の俳句が地方新聞の俳壇に掲載されたことへの競争意識が寺山の句作の原点となったという。昭和二九（一九五四）年の第一回全国高校生俳句コンクールで一位（二位は寺山）を獲得、若者のための全国的俳誌『牧羊神』を寺山とともに始めた

ことで知られている。後、金子兜太の『海程』で活躍、二〇〇九年に初めて処女句集「二月四日」を発表している（以上はウィキの「京武久美」に拠った）。寺山と多佳子が師弟関係にあることは必ずしもよく知られているとは思われないので、ここに記しおくこととする。

なお、プライベートでは、この昭和二十七年の四月に多佳子は心臓の変調を訴え、心臓ノイローゼの診断を下されている（同年譜より）。]

汽車を乗り継ぐ月光の地に降りて

霧に鳩歩む信濃の着きしなり

霧寒きとき信濃川わたりゐたり

畑の樹（き）林檎幾百顆にて曇る

林檎にかけし梯子が空へぬける

林檎の樹のぼりやすくて処女のぼる

青胡桃ひろへり墓地の土つきしを

秋野の汽笛波立つ千曲渡り来て

「孀恋」の字（あざ）に住み秋草のみじかさ

[やぶちゃん注：底本では「字」は「宇」である。「宇」には辺土や野原の意はあるから敢

えて特異なルビ俳句とも採れぬことはないが、「あざ」とは決して読めない。私は敢然、誤植と断じて訂した。大方の御批判を俟つ。]

夕焼熔岩（らば）何処にてをとめのこゑ消ゆる

秋風や地底よりなる熔岩の隙

こほろぎやもとより深き熔岩の隙

こほろぎが生きをるこゑをよびかはす

胸先にくろき富士立つ秋の暮

天暮るる綿虫か地に着くまでに

（二十七年）

[やぶちゃん注：「綿虫」雪虫。以下、ウィキの「雪虫」を参照・引用して述べる。カメムシ目ヨコバイ亜目アブラムシ上科 Aphidoidea に属するアブラムシのうちで、白腺物質を分泌する腺が存在するものの通称。体全体が綿で包まれたようになる。「雪虫」という呼び方は主に北国での呼称で、他に「綿虫」「オオワタ」「シーラッコ」「シロコババ」「オナツコジョロ」「オユキコジョロ」「ユキンコ」「しろばんば」といった俗称を持つ。体長は五ミリメートル前後。『具体的な種としては、トドノネオオワタムシやリンゴワタムシなどが代表的な存在である』。『アブラムシは普通、羽のない姿で単為生殖によって多数が集まったコロニーを作る。しかし、秋になって越冬する前などに羽を持つ成虫が生まれ、交尾をして越冬の為の卵を産む。この時の羽を持つ成虫が、蝋物質を身にまとって飛ぶ姿が雪を思わせるのである。アブラムシの飛ぶ力は弱く、風になびいて流れるので、なおさらに雪を思

わせる』。『北海道では初雪の降る少し前に出現したりする（と感じられることが多い）ことから、冬の訪れを告げる風物詩ともなっている』。『雄には口が無く、寿命は一週間ほど。雌も卵を産むと死んでしまう。熱に弱く、人間の体温でも弱る』。最後に『俳句ではセッケイカワゲラのことを指し春の季語となっている』とある。セッケイカワゲラは積翅目クロカワゲラ科セッケイカワゲラ属セッケイカワゲラ *Eocapnia nivalis* のこおであるが、時期的にも表現からも多佳子の詠んだものは前者「しろばんば」の方であることは言うまでもない。]

誓子先生、大和郡山に柳沢保承氏を訪ねらる。

御案内しての帰途

椎どんぐり海龍王寺ぬけとほる

（二十九年）

[やぶちゃん注：底本年譜にはそれらしい記載は見当たらない。「柳沢保承」というのは、名前からして、畿内の雄藩として知られた旧大和郡山藩の藩主であった柳澤家の第八代当主と思われる。柳沢保承（明治二一（一八八九）年～昭和三五（一九六〇）年）は郡山藩最後の第六代藩主柳澤保申の子として生まれた。父死亡当時は幼少であったため、新潟県黒川の柳澤支藩の保恵が家を継ぎ、昭和一一（一九三六）年の保恵死後、柳澤家の家督を継いだ。伯爵・貴族院議員で昭和二二（一九四七）年に公選により初代郡山町長に就任、同二十四年に退職、その間、教育制度変更による新制中学校・新制高等学校の改編に努力した（以上はこちらの記載を参照した）。彼と誓子との関係については不詳。識者の御教授を乞うものである。]

焼津漁港

秋刀魚競(せ)る渦に女声の切れつぱし

秋刀魚競場旅の肩身の吹きさらし

秋刀魚市場風蝶の羽のむだづかひ

秋刀魚競る忘れホースの水走り

鮪またぎ老いのがにまた競りおとす

鮪競る興奮ををもて老いのたゝら

故国野分大漁旗のひらきつぱなし

野分濤(か)かれる中の遠洋漁船

野分浪さなくとも旅衣しめりやすし

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三〇（一九五五）年の条に、『秋、焼津に行き、「七曜」の武政洋人、田中白夜らの案内で競りを見る』とある。私としては、まだ新しい記憶である、前年三月一日にビキニ環礁の水爆実験に巻き込まれて被爆、三月十四日、ここ焼津港に帰港した第五福龍丸のイメージを含ませた句の一つもないことを少し残念に思うのである。］

南河内

おのが蜜柑山にて長脛(ながすね)行く自在

蜜柑の枝折りひゞかせるおのが山

大足に傾斜踏まえて蜜柑取る

立木(たちき)より立ちてむさぼる蜜柑の肉

長脛をがくがく蜜柑負ひ下(くだ)る

蜜柑担く重さに押され山下る

蜜柑負ふ背が眼の高さわが前に

樹齢五十蜜柑千顆を黄に照らし

蜜柑照る丘葛城の眠りを前

（三十年）

冬

雪乾く

縄とびをするところだけ雪乾く

［やぶちゃん注：私は「縄」という漢字だけは許せない。この「縄」では直ぐに解けてぼ

ろぼろになる。旧字とした。」

日照るとき霜の善意のかゞやけり

大きな冬がジヤケツ毛ばだつ童女の前

（二十六年）

枯山中

笹枯るる明さ山中猫さまよひ

冬夜の霧馴れし道ゆく馴れし水音

冬日の髪茶色母われが伝へし

冬の石乗れば動きぬ乗りて遊ぶ

めざむよりおのが白息纏ひつゝ

対丈（つゐたけ）の着馴れし冬着に手足出し

［やぶちゃん注：「対丈」長着や長襦袢・男物などの仕立てで、身丈と同じ寸法に仕立てた丈。身の丈と同じに布を裁って仕立てた着物。対丈の着物は「お端折（はしょ）り」（着物を着た際に帯の下に出て折り返してある部分のことを指し、通常はこれによって着物の長さを調節する。一般にその長さは指の長さ程度が程よいとされる。江戸後期には女性の着物は対丈でお端折りがなかったが、次第に丈が長くなり、屋内では裾を引き、外出するときに腰でた

くし上げて短くして着用していた。明治中頃になると、屋内でもお端折りをして着るようになったが、男性の着物はお端折りをしないのが普通で、腰の部分で余分な長さを内側に縫い込む「内揚げ（うちあ）」（着物の内側で帯の下になる位置に予め施しておく縫い込み。これを設けておくと裾が擦り切れた時などにも裾を切っても本来の身丈を確保出来、また仕立て直しの際に丈の調節が可能という融通性が出る。）が施される。裾が汚れたりすり切れたりした場合は、洗い張りの後、裾を切ってここを用いて仕立て直す。）を作らないで着付け、これを「対丈（ついたけ）で着る」と称する。お端折りがない分、上半身の微調節が利かず、着づらいと感ずる人もいるが、逆に襟元の固定が簡単なために着崩れがなくすっきりと着られるともいう。但し、腰紐を結ぶ位置や後ろ裾が下がらないようにするなどの工夫が必要（以上は「きもの用語大全」を参照した）。]

はしばしより凍て髪を解きほぐしゆく

四方枯野たるを燈ともして忘る

天の青さ広さ凍蝶おのれ忘れ

月明し凍蝶翅を立て直す

厚き氷の下にて泥の尾鰭もつ

心臓に突然変調を覚ゆ　五句

絶対安静雪片の軽々しさ

絶対安静降りくる雪に息あはず

生(いく)るはよし静かなる雪いそぐ雪

枕上み枯れし崖立つ枯れはてし

雪まぶしひとと記憶のかさならず

［やぶちゃん注：既に注したが、年譜によれば、この昭和二七（一九五二）年（満五十三歳）の四月に多佳子は心臓の変調を訴え、俳友で医師の平畑静塔に来診を乞い、心臓ノイローゼの診断を下されている。『心臓発作の起こった当日は、ＮＨＫの「番茶クラブ」』（当時のＮＨＫテレビの第二放送でこの年から開始された番組で、火曜日の二十時三十分から二十一時の間に放映されていた座談会形式の番組）『開催の日で、多佳子は毎回出席を楽しみにしていただけ落胆する。メンバーは、上司海雲（東大寺）』（第二百六世東大寺別当）、『須田剋太』（洋画家）、『竹中郁、入江泰吉、川村与志栄』（染物家か？　京都市日向市公式サイト内の「寄贈美術品の紹介」の「渡邊武コレクション」の中に、同姓同名の方の「つなぎ椿文手拭」なるものを見出せる）『等の大阪周辺の有名文化人』であったとある。］

暮れてゆくひとつの独楽を打ちにうつ

きしきしと帯を纏(ま)きをり枯るる中

かじかむや頭(づ)の血脈(けちみやく)の音とくとく

オリオンの盾新しき年に入る

撃ちもたらす鴛鴦(おし)どこよりか泥こぼす

鼓ケ浦誓子居に「俳句」座談会ありて三鬼・
静塔氏らと集る　一句

踵深き静塔のあと千鳥の跡

［やぶちゃん注：「鼓ヶ浦」既注。現在の三重県鈴鹿市寺家町鼓ヶ浦。］

雪嶺が遠き雪嶺よびつゞけ

鴨隠るときあり波に抗はず

炉火いつも

霜柱顔ふるるまで見て佳しや

田に燈なし冬のオリオン待ちてゆく

炉火いつも燃えをり疲れゐるときも

みつみつと雪積る音わが傘に

十指の癖一と冬過ぎし手袋ぬぐ

牧夫

（二十七年）

――福山牧場にて

群羊帰る寒き大地を蔽ひかくし

冬野かへる群羊に牧夫ぬきん出て

群羊に押され背見せて寒き牧夫

冬草喰ひ緬羊姙りにも従順

［やぶちゃん注：「緬羊」「めんやう（めんよう）」で家畜の羊（ウシ目ウシ亜目ウシ科ヤギ亜科ヒツジ属ヒツジ *Ovis aries*）のこと。特に毛用に改良された品種群を指す。「姙り」は「みごもり」と読む。］

寒き落暉群（むれ）を離るる緬羊なく

ポケットに「新潮」寒き緬羊追ひ

寒き緬羊耳たぶのみ血色して

［やぶちゃん注：「福山牧場」広島県福山市にある牧場と思われるが、ネット検索で固有名ではヒットしない。底本年譜の昭和二八（一九五三）年の十月の項に、『福山市の「七曜」支部発表会に出席』とある。この折りであろう。］

霜月夜

使ひ子走る昃ればすぐ風花して

風邪の眼に解きたる帯がわだかまる

除夜浴身しやぼんの泡を流しやまず

ひざ前（さき）に炉火立つ一切暮るる中

霜月夜細く細くせし戸の隙間

ルオー展

寒き肉体道化師は大き掌（て）平たき足

寒き道化瞼伏せればキリストめき

いま降りし寒き螺旋階の裏が見え

春日おん祭後宴の能　二句

月下に舞ふ照りてくもりて姥面（うばおもて）

月に立つ桜間龍馬すでに素（す）おもて

［やぶちゃん注：「春日おん祭後宴の能」春日大社の春日若宮おん祭の最後を飾る、十二月十八日の午後に演じられる後宴能（ごえんのの）。「桜間龍馬」（さくらまたつま　大正五（一九一六）年

（平成三（一九九一）年）」は金春流シテ方の能楽師。本名、桜間金太郎。当時、三十七歳。多佳子は当時、五十四。」

山路暮るる子が失ひし独楽ころがり

（二十八年）

凍湖

諏訪湖の凍るを見に再びの来信を約せし伊東槇雄氏僅か十数日のちがひにて急逝さる。訪ひて霊前に額づく

漁夫の櫂わが眼の寒湖かきたつる

［やぶちゃん注：「伊東槇雄」年譜の昭和二九（一九五四）年の条に、『一月十一日、諏訪の凍湖を見に信州に行き、伊東総子方に泊る。諏訪湖の凍るのを見に、再び来信を約束した伊東槇雄は、僅か十数日のちがいで既に急逝。多佳子は深く霊前に額ずく』とある。多佳子はこの前年の三月にも諏訪を独り旅で訪れており、その際にもこの伊藤総子の家に泊っている（後掲）。年譜は伊東総子を名を最初に掲げているので、彼女が多佳子の俳句仲間であったか？　この夫と思しい人物については不詳。同姓同名で「朝日新聞」のこちらの記事に載る、戦前戦中に製糸会社経営で京城（現在のソウル）で成功し、財を成した（但し、敗戦で総てを失って帰国とある）朝鮮古陶磁の収集家とある人物と同一人物か？］

まどゐの燈ときに賭しや湖（うみ）凍つるか

凍潮青し指に纏（ま）きもつ木の葉髪

沖の鴨群それへいそげる鴨の翅

赤彦の氷魚（ひを）かも真鯉生きて凍て

［やぶちゃん注：島木赤彦（明治九（一八七六）年～大正一五（一九二六）年）の第三歌集は「氷魚」であるが、短歌嫌いの私には表題作を知らない。識者の御教授を乞うものである。］

月一輪凍湖一輪光りあふ

［やぶちゃん注：年譜により、この一句は間違いなく昭和二九（一九五四）年一月十三日の夜の景であることが分かる。この日、初めて（多佳子滞在中かこの年初めてかは厳密には分からないが、後者であろう）諏訪湖が凍っている。］

八ツ嶽山麓夜久野に「寒天」造りを見る。雪野日に眩し

雪原の昼月（ひるづき）乾し寒天軽き

［やぶちゃん注：「夜久野」年譜によれば一月十二日の嘱目吟であるであるが、年譜にも『八ヶ岳の夜久野』とあるのだが、この「夜久野」という地名は私は知らない。ネットにも何故かかからない。識者の御教授を乞うものである。］

寒天煮るとろとろ細火鼠の眼

家鼠を見て野鼠が走るや雪明り

子を呼ぶや寒天の反射雪の反射

雪の上餌あるや雀胸ふくらみ

白き山白き野寒天造りの子

諏訪地酒「舞姫」いま寒醸りにいそがし

雪の酒庫男の手力扉(と)を開くる

[やぶちゃん注：年譜に、一月『十三日、降る雪の中、諏訪地酒の「舞姫」の寒造りを見て、新酒の香に酔う。その夜、初めて待望の諏訪湖凍る』とある。「舞姫酒造」公式サイトはこちら。]

酒湧くこゑ槽に梯子をかけ覗く

糀室(むろ)出し髪すぐに雪がつく

松本に那須風雪居を訪ふ

赤子泣き覚めぬひとの家雪明し

[やぶちゃん注：「那須風雪」不詳。年譜に一月『十四日、雪やむ。塩尻峠をバスで越えて、松本に行く。十五日、那須風雪居に泊る』とある。俳友であろう。]

穂高白し修理の小城被履して

寒念仏追ひくる如く遁げゆく如く

穂高の熊飼れて

熊が口ひらく旅の手に何もなき

小諸へ

［やぶちゃん注：年譜に、一月『十八日、長野市の木口奈良堂宅に着く。長元峰の鷹の巣を見に行く。二泊し、二十日、上田市で「青燕」の人たちと会う。二十一日、朝、小諸の小林朴壬居に着く。雪の懐古園を歩く。夕方、出張中の堀内薫、僕壬居に着く。胴まわり一尺に近い寒鯉の甘煮を食べ、多佳子はこんな脂っこいのが好きだと喜ぶ』とある（因みに私は「長元峰」という山を知らない。もしや、これはハヤブサ目ハヤブサ科ハヤブサ属チョウゲンボウ（長元坊）*Falco tinnunculus* の巣のことではあるまいか？）。］

雪原に踏切ありて踏み越ゆる

落葉松（からまつ）を仰げば粉雪かぎりなし

雪原や千曲が背波尖らして

雪原のわれ等や鷹の眼下にて

火の山へつゞく雪野に足埋め立つ

雪野のかぎり行きたし呼びかへされずに

土間は佳(よ)し凍雪道の長かりしよ

天然水採取場吟行

氷上を犬駆ける採氷夫が飼へり

［やぶちゃん注：年譜に、一月『二十二日、軽井沢の天然氷採取所に吟行。夕方東京着』とある。軽井沢の渡辺商会か（長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢旧軽井沢）。菊水酒造公式サイトのこちらの記事がよい。軽井沢ならではの歴史を持っていることがよく分かる。現在、首都圏近縁では日光三軒（吉新氷室・松月氷室・三ツ星氷室）、秩父一軒（阿左美冷蔵）とこの軽井の渡辺商会の五業者のみが天然氷の生産販売を行っていると minifreaker さんのこちらの記事にある。］

採氷夫焚火に立ちて雫する

なほ信州にあり、上田にて

遠灯つく千曲の枯れを見て立てば

藁塚も屋根も伊吹の側に雪

枯崖

師誓子及び三鬼・暮石両氏に訪はれて会はず

一句

留守を来てわが枯崖を如何に見し

［やぶちゃん注：「枯崖」「かれがけ」と読むか。冬枯れした崖の謂いで、聴き馴れぬ語ながらしっくりとはくる。ネット検索では、

一茎の鶏頭枯崖しりぞけつ　　野澤節子

枯崖の下あるときは愛し合ひ　吉田三枝子

の用例を見出せる。］

飛火野荘（志賀直哉旧居）天狼同人会

直哉きゝし冬夜の筧この高さに

［やぶちゃん注：「飛火野荘」旧志賀直哉邸。奈良市高畑町にあり、この前年の昭和二八（一九五三）年より厚生省厚生年金宿泊所「飛火野荘」として使用されていた（昭和五三（一九七八）年まで）。現在は奈良文化女子短期大学セミナーハウス内「旧志賀直哉邸」として復元されている（学校法人奈良学園公式サイト内の「志賀直哉旧居」に詳しい）。］

寒き壁と遊ぶボールをうち反し

相うつは凍（い）つるや解くるや氷と波

綿虫飛ぶ天光の寵暮るるとも

風邪の髪解けざるところ解かず巻く

風邪の身に漢薬麝香しみにけり

黄八丈の冷たさおのがからだ冷ゆ

風花や葱が主（おも）な荷主婦かへる

（二十九年）

東大寺三月堂

同じ寒さ乞食の身より銭鳴り落つ

仏寒しわめける天邪鬼に寄る

天邪鬼木枯しゆうしゆう突く音（ね）立て

凍てゆくなべ壊れやまざる吉祥天女

虎落笛書祥天女離れざる

［やぶちゃん注：「虎落笛」老婆心乍ら、「もがりぶえ」と読む。冬の激しい風が竹垣や柵などに吹きつけて発する笛のような音。］

狐

狐飼はれてたゞに餌を欲る愛しさは

地を掘り掘る狐隠せしもの失ひ

狐舎を守る髪に狐臭が浸みとほり

われに向く狐が細し入日光

狐臭燦狐にはまる鉄格子

［やぶちゃん注：特異な表現句である。「こしう／さん／／きつねにはまる／／てつがうし」（こしゅう／さん／／きつねにはまる／／てつごうし）と読むか。「燦」は通常は視覚上の鮮やかに輝くさまをいうが、それをむっとする獣の臭いに響かせるのは面白い。個人的に欲を言うと「狐臭燦狐に嵌（はま）る鉄格子」とガッしと固めて見たい気はする。］

詩をしるす鉛筆狐きゝもらさず

唐招提寺

白羽子に息かけ童女斜視（すがめ）になる

独楽舐るいま地に鞭うちゐしを

独楽舐る鉄輪（かなわ）の匂ひわれも知る

溝乾く伽藍凩絶間あり

寒夜

――春日神社節分

何あるといふや万燈（まんとう）のつゞきをり

行く方の未知万燈の火が混みあふ

万燈の一つが消えて闇あそぶ

万燈の万のまたゝき五十路（いそぢ）よき

［やぶちゃん注：この時（昭和三〇（一九五五）年か）、多佳子五十六。］

恍惚と万燈照りあひ瞬きあひ

一燈に執し万燈の万忘る

呼ばれしにあらず万燈の火のまどはし

万燈の闇にぬめぬめけものの膚

稔、渡米

冬芒幡（はた）なす加勢子を発たす

［やぶちゃん注：「稔」この昭和三〇（一九五五）年の六月に三女美代子さんが柴山稔と結婚して奈良あやめ池の家に同居したとあるが、年譜にはそこに渡米の記事はない。］

叔母渋谷多美子八十二の高齢にて逝く

遺身の香女帯の長さ冬日に巻く

［やぶちゃん注：「いしんのか／めおびのながさ／ふゆびにまく」と読むか。］

室戸崎

大病後初めて旅に出らるる誓子先生に従ひて

冬の巌この身を寄せしあともなし

巌の黙石蕗の一花を欠きて去る

［やぶちゃん注：「いわのもく／つはのいつくわを／かきてさる」（いわのもくつわのいっかをかきてさる」と読むか。この辺りより、多佳子の句には漢語の熟語（音読み）が有意に増えるように私は感ずる。］

断崖の穂絮きらきら宙にあり

［やぶちゃん注：「穂絮」「ほわた」（チガヤやアシなどの穂の綿毛）と訓じていよう。］

椿咲く冬や耳朶透く嫗の血

枕かへし冬藩の音ひきよせる

冬濤の壁にぶつかる陸（くが）の涯

遍路の歩岬（さき）の長路をたぐりよせ

崎に立ちおのれはためき冬遍路

崎に立つ遍路や何の海彦待つ

遍路歩むきぞの長路をけふに継ぎ

［やぶちゃん注：「きぞ」老婆心乍ら、昨・昨夜と書き、万葉以来の昨日・昨夜の意の古語。］

遍路笠裏（うら）に冬日の砂の照り

遍路笠かぶりし目路にまた風花

［やぶちゃん注：「目路」は「めぢ（めじ）」で目で見通した範囲・視界の意。］

冬の泉冥し遍路の身をさかしま

遍路笠かぶれば冬涛ばかり充つ

女遍路や日没る方位をいぶかしみ

［やぶちゃん注：「没る」は「いる」と訓じていよう。］

女遍路や背負へるものに身をひかれ

孤りは常会へば二人の遍路にて

眼前に浮く鴨旅に何責むや

龍舌蘭遍路の影の折れ折れる

（三十年）

［やぶちゃん注：昭和三十年の年譜に、『十二月、ＮＨＫの有本氏に招かれ、室戸岬の旅へ誓子と行く。健康を回復した誓子にとっての初めての旅。多佳子が誓子に教えを受けはじめてから三十年にもなるが、お伴して旅に出かけるのは初めてであると、しみじみ述懐』とある。］

奈良古梅園工房

［やぶちゃん注：奈良市椿井町にある創業以来四百有余年という奈良墨の老舗。個人ブログ「旅の記憶―travelogue―」のこちらの記事がよい。昭和三一（一九五六）年一月の年譜に、『誓子と奈良古梅園の工房に吟行』とある。］

寒墨踏む蹠(あうらあしゆび)足趾ねんごろなる

すでに汚る墨工が眼に触れしのみに

墨工のわが眼触れざる側(がは)も汚れ

かじかめるまゝ蝮指墨を練る

［やぶちゃん注：「蝮指」「まむしゆび」と読み、先端の関節だけが蛇のマムシが鎌首を擡(もた)げたようにくっきりと曲がるようになっている指をいう。］

雪の暮墨工の眼に墨むらさき

煤膚(すゝはだ)に隠れ墨工何思ふや

煤膚の墨工佳(よ)しや妻ありて

寒雀と墨工眼澄む夕餓ゑどき

墨工房せましわが香を畏れはじむ

墨工の黙つひに佳(よ)し工房去る

木枯に墨工房を狭く仕切る

倉造りの一房に数百のかはらけの油火を並べ、

油煙を採る

油煙部屋四方(よも)を壁天窓あるのみ

北風(きた)より入り百の油火(あぶらび)おどろかす

散華

近江八幡に泊り、暁の四時雪中に舟を出し鴨を待つ

猟銃音殺生界に雪ふれり

［やぶちゃん注：昭和三十一年の年譜に、『二月十九日、猟好きの尼崎の医師の案内で、近江八幡に鴨打ちに行く。清子同伴。自家用車に猟人の運転手、猟銃二挺。その夜は猟師宿（長命寺）に泊り、翌朝四時、雪しまく中、魚舟の中にコンロを持ち込み、筵を被って雪を避けつつ猟場へ』行ったとある。この「長命寺」とは滋賀県近江八幡市長命寺町の地名を指すのであろう（同所にある天台宗の長命寺では無論、あるまい）。］

雪はらはず鴨殺生(せつしやう)の傍観者

鴨撃つと鴨待つ比良の飛雪圏

［やぶちゃん注：「比良」近江八幡から見て琵琶湖の対岸（西岸）に連なる比良山地。古くから近江八景の一つ「比良の暮雪」で知られる景勝地である。］

猟夫(さつを)立つすでに殺生界の舟

雪中や絶対にして猟夫の意志

眼ばたきて堪ふ猟犬の身の殺気

猟人の毛帽雪つきやすしあはれ

鴨撃たる吾が生身灼き奔りしもの

鷺撃たる羽毛の散華遅れ降る

［やぶちゃん注：私の好きな鮮烈な映像句。］

鷺撃たれし雪天の虚のすぐ埋まり

猟夫の咳殺生界に日ざしたり

春

落椿

落椿一つの墓を潜しつゞく

身の入れ処(ど)なし紅梅の枝尖る

（三十一年）

美代子に

鳥の巣拾ひ幸福載せし如く持つ

雪解川濁る勢(きほ)ひを合しけり

足袋白く霞の中をなほいでず

漸くに雛を飾る世となれば

雛を出す枯山つゞく枯山中

男女(をめ)の雛枯山の日は永きかな

照り反す光の中に雛ほころび

ひしめきゆく風の中にて蝶ひかる

蝶蜂いでて身辺ひかり夥(おほ)し

蕊高く紅梅の花ひとつひらく

さからへる手に春水のひゞきくる

（二十六年）

阿修羅の掌

唐招提寺

伽藍の屋根大日(だいにち)わたる恋雀

恋雀頭(づ)に円光をひとつづつ

簷色雀簷を泰(やす)しと巣藁垂れ

［やぶちゃん注：本句、読み方が分からない。初五の「簷」は索引から「のき」と読んでいる。「簷色雀」で「のきすずめ」と読んでいるのか？　しかし「色雀」という語は見馴れぬ。識者の御教授を乞う。］

興福寺

蝶が来る阿修羅(あしゅら)合掌の他(ほか)の掌(て)に

近き春山もひとたび陰りし山にして

石山に石截り春の日を一輪

秋元松代さんを訪づねて

日が射して梅雨蝶翅をおもひ出す

［やぶちゃん注：「秋元松代」俳人秋元不死男の妹で後に劇作家となる秋元松代（明治四四（一九一一）年～平成一三（二〇〇一）年）か。神奈川県生まれで、戦後、三好十郎に師事し、ラジオ・ドラマなどを執筆、後の昭和三九（一九六四）年に「常陸坊海尊」で田村俊子賞を受賞している。］

あぢさゐに真向きてひとに応へをり

（二十七年）

信濃三月

句が作れず、春雪深き長野に一人旅立つ

雪原に没る三日月を木星追ひ

［やぶちゃん注：昭和二八（一九五三）年の年譜に、『三月、句作れず、春雪の深い信州へ一人で行く。長野市の木口奈良堂居に滞在。積雪五尺余の内山紙漉場等へ吟行。湯田中へ泊る。連日雪崩つづく。小諸の小林朴壬居に泊る。バスにて雪崩の中仙道、和田峠を諏訪に行き、諏訪湖畔の伊東総子居に着く』とある。］

三日月を駆りて疾（はや）しや橇の馬

どこも雪解稚子より赤き毯ころがり

長野市木口奈良堂氏の許に滞在

階下に手斧（てうな）の音雪どんどん解くる

内山紙漉場へ行く、なほ積雪五尺余り

紙漉女（め）と語る水音絶間なし

日当ればすぐに嬉しき紙漉女

雪嶺が雪嶺を負ひ紙漉き老ゆ

深雪の下くゞり来し水漉場に入る

雪原の太陽乙女灼きに灼く

枯れ立つは胡桃雪嶺いくつも暮る

［やぶちゃん注：「内山紙」奥信濃の長野県下高井郡木島平村内山で寛文元（一六六一）年に始めたとされる手漉き和紙。詳細は内山紙協同組合公式サイトを参照されたい。］

湯田中に泊る、雪崩つゞく　三句

一夜の床敷きくるる乙女雪崩音

旅の髪よりつめたきピンをいくつもぬく

子守唄そこに狐がうづくまり

雪野暮れすぐ木星より光来る

一族の墓雪嶺(せつれい)根より真白

雪に一歩一歩何の荷ぞ子の負ふは

電線や雪野はるばる来て吾を過ぐ

うつむくときおのが息の香雪野にて

切れ切れの雪野の虹をつぎあはす

一粒の星もこぼさず雪の原

信濃雪解(ゆきげ)口をそゝぎて天美し

小諸小林朴壬氏を訪ふ　二句

鱗甘(うま)し雪解千曲の荒鯉なり

母のどこか歯みてどれも雪焼け子

赤き雪下駄見てそのをとめを見上げる

雪解の中仙道、和田峠をバスにて諏訪へ下る

千木(ちぎ)の屋根重しや雪消(け)ざる家

［やぶちゃん注：「和田峠」長野県長和町と下諏訪町の間にある。最大標高一五三一メートル。参照したウィキの「和田峠」によれば、まさに多佳子が越したこの昭和二八（一九五三）年に、和田峠を含む前後の区間が国道一四二号に指定されている。『和田峠トンネルは戦前戦後を通じ、坑口のコンクリート覆いを延伸するなどの対策で積雪等への対処が図られてきたが、幅員は』現在も自動車一台分強の狭いままで、『信号機を設置して交互通行するようにされている』。後の昭和五三（一九七八）年、『低い標高の新和田トンネルで貫通する新和田トンネル有料道路が』『開通したことで、旧道は幹線道路としての役割を終えた。旧道の国道指定は解除されていないものの、現在の幹線自動車交通の大半は新トンネル経由の新道で賄われている』。『また、尾根道のビーナスライン（旧霧ヶ峰有料道路）が旧中山道と交わるかたちで通っており、旧道のトンネルの長和側出口付近で接続されている（ビーナスラインが有料だった頃は料金所が設置されていた）。この連絡もあって、旧道は観光道路としての性格が強くなっている』とある。

「千木(ちぎ)」は現行では神社の大棟の両端に載せたX字状の飾り材で堅魚木(かつおぎ)（神社本殿の棟上に棟と直角に太い丸太上の飾り材を並べたもの）とともに神社建築のシンボルであるが、古くは上流階級の屋敷の棟にも設けられ、私も山家の旧家にこれを見たことがあるから、ここも神社と限定する必要はなかろう。］

山バスも春水も疾(はや)し平地恋ひ

雪解の泉飲まむとすれば天うつる

和田峠茶屋にて暮れる

ランプの焔(ほ)ぺロリとゆがむまた雪崩れる

雪崩音暮るれば明きランプの辺（へ）

諏訪湖畔の伊東純子さんの家に着く

吾待たで諏訪の大湖凍解（いてと）けたり

寝ね足りぬ紅梅は蕊朝日に向け

雪解鳩よろこぶこゑを胸ごもらせ

卒業歌弾くこの家（や）のをとめまだ吾見ず

信濃いま蘇枋紅梅氷解（ひ）くる湖（うみ）

［やぶちゃん注：「蘇枋」は「すはう（すおう）」。ジャケツイバラ亜科ハナズオウ *Cercis chinensis*。同定の根拠を含め、既注。］

諏訪のうなぎ氷解けて揺られ吾食（た）うぶ

生いつまで

桜大枝刃もので載りしすがしさ

春嵐鳩飛ぶ翅を張りづめに

四方の扉(と)を閉(さ)して静かに春の塔

生(せい)いつまで桜をもつて日を裏(つ)む

手がとゞくかなしさ桜折りとりぬ

（二十八年）

［やぶちゃん注：当時、多佳子、五十四歳。］

鶯

春の暮白き障子を光とし

流水と関る藤が色に出て

［やぶちゃん注：「関る」は「あづかる（あずかる）」と訓じていよう。］

子がつくりし干潟砂城(すなじろ)潮満ち来(く)

卒業近しバスケツトボールはづむを聞み

切株ばかり鶯のこだまを待つ

蝶食ひし山蟻を許すか殺すか

枯崖に雨鶯の鳴きしあと

加太浦に誓子先生、静塔氏と遊ぶ　三句

ばらばらに漕いで若布（め）刈の舟散らず

［やぶちゃん注：「加太浦」は「かだうら」で和歌山県和歌山市加太と思われるが、昭和二九（一九五四）年の年譜の年初の辺りには、この旅の記載はない。「若布」二字で「め」と読ませている。］

海人の掌窪（てくぼ）棘だつ雲丹の珠が載り

子が駆け入る家春潮が裏に透く

たんぽゝの金環いま幸福載せ

（二十九年）

和具大島

津田清子さんと同行志摩へ二日の旅をして

潮潜るまで海女（あま）身の濡れいとふ

［やぶちゃん注：年譜に昭和三〇（一九五五）年春、清子同伴で志摩へ二日間の旅を楽しんだとある。「和具大島」の「和具」は三重県志摩市志摩町和具（わぐ）。前島（さきしま）半島の中心的な集落で、同県鳥羽市の伊勢湾口にある菅島（すがしま）や的矢湾の北の岬の相差（おうさつ）と並んで海女の多い地域として知られる。その「大島」は北海上の熊野灘上にある無人島。志摩町布施田（和具の西

側で接する）の広の浜の沖合二・五キロメートルにある二十平方メートルの小島である。和具の八雲神社が所有する私有地で三重県指定天然記念物の「和具大島暖地性砂防植物群落」（昭和一一（一九三六）年指定）があり、ハマユウの花が咲く（北東約五百メートルの本土寄りに和具小島があって、大島と同じくハマユウが群生する）。大島・小島は浅瀬と岩礁に取り囲まれており、付近はイセエビを始め、アジやサバなどが獲れる漁師や海女の好漁場で、「和具の金蔵」とも呼ばれる（以上はウィキの「志摩町和具」に拠った）。]

海女舟に在り泳げざる身をまかせ

鎌遁れし若布が海女の身にからむ

あはび採（と）る底の海女にはいたはりなし

海女潜り雲丹を捧げ来若布（め）を抱き来

[やぶちゃん注：「若布」二字で「め」と読ませている。]

南風（まぜ）吹けば海壊れると海女歎く

[やぶちゃん注：「南風」二字で「まぜ」と読んでいる。海上を南方から強く吹いて渡ってくる南風は「みなみかぜ」「なんぷう」以外に、漁師や船乗りらが「みなみ」「はえ」「まぜ」「まじ」「ぱいかじ」などと呼称し、これを天候が激変する予兆として強く警戒する。]

産みし乳産まざる乳海女かげろふ

海女あがり来るかげろふがとびつけり

かげろふを海女の太脚ふみしづめ

平砂に胸乳海女の濡身伏せ

春の日がじりじり鹹(から)き身が乾く

（三十年）

青葉木菟

青葉木菟記憶の先の先鮮か

［やぶちゃん注：「青葉木菟」は「あをばづく（あおばずく）」と読み、フクロウ目フクロウ科アオバズク *Ninox scutulata* のこと。ウィキの「アオバズク」によれば、全長二七～三〇・五センチメートル、翼開張六六～七〇・五センチメートル。『頭部から背面は黒褐色の羽毛で覆われる。下面の羽毛は白く、褐色の縦縞が入る。顔を縁取るような羽毛（顔盤）は不明瞭』。『虹彩は黄色。嘴の色彩は黒い。後肢の色彩は黄色』で、『オスはメスに比べて相対的に翼長が長く、腹面の縦縞が太くなる傾向がある』。『鳴き声は基本的に「ホッ、ホッ」と二回ずつで規則正しく分かりやすい』。『群れは形成せず単独もしくはペアで生活する。夜行性で、昼間は樹上で休む』。『食性は動物食で、昆虫類、両生類、爬虫類、小型の鳥類、小型哺乳類などを食べる』。『樹洞（時には庭石の間や巣箱）に巣を作り』、一回に二～五個の卵を産む。『抱卵はメスのみが行い、オスは見張りをしたりメスに獲物を運んだりする。抱卵期間は』約二十五日、巣立ちまでの日数は約二十八日で、『雛は巣立ち後、徐々に営巣木から周辺の林へ移動する』。『大木の樹洞に巣を作るため社寺林に飛来したり、昆虫類を食べるため夜間に街灯に飛来することもあり、日本では最も人間にとって身近なフクロウ』であるとある（グーグル画像検索「*Ninox scutulata*」）。昼間の動画（1945tulip 氏）

と鳴き声（gaskg9 氏）をリンクしておく。この「青葉木菟は」、前に注したが、年譜の昭和三〇（一九五五）年の八月の条に、『二十九日、俳句が出来ないので、津田清子に案内され、赤目の滝』（既注）『に吟行。滝本屋に一泊。宿の窓にみみずくが止る。幼鳥のときに拾われ、飼われて育ち、成鳥となり山に還されたもの。しかし、腹が空くと、餌をもらいに滝本屋にもどってくる』（「滝本屋」も同リンク先に既注）とある「みみずく」であろう。］

草炎や一歯（し）を欠きし口閉づる

春の𠮷こゑ鮮（あらた）しくしては継ぎ

石光寺にて

牡丹百花衰ふる刻（とき）どつと来る

［やぶちゃん注：「石光寺」は「せつこうじ（せっこうじ）」と読む。奈良県葛城市染野にある浄土宗の寺。参照したウィキの「石光寺」によれば、『山号は慈雲山。本尊は阿弥陀如来。出土遺物等から飛鳥時代後期（白鳳期）の創建とみられる古寺で、中将姫伝説ゆかりの寺院である。境内には中将姫が蓮糸曼荼羅を織成する際に蓮糸を染めたという井戸「染めの井」と、糸を干したという「糸掛桜」があり、「染寺」と通称されている。観光的にはボタンの寺として知られ、境内にはボタン、シャクヤク、アジサイ、サクラ、サルスベリなどが植えられている』。まさしく『牡丹・寒牡丹・芍薬と中将姫伝説で有名な奈良のお寺』と名打っている公式サイトはこちら。］

春の日の木樵また新しき株

手繰る藤素直に寄り来藤ちぎる

鶯の必死の誘ひ夕溪に

地上に母立つぴしぴしと椿折る

西の日に紅顕(た)ち来るや貴妃桜

［やぶちゃん注：「貴妃桜」楊貴妃桜。サトザクラ（グーグル画像検索「サトザクラ」）の一品種で、花は大きく、淡紅色の八重咲き。グーグル画像検索「楊貴妃桜」。

因みに、杉田久女は句にはこの貴妃桜を詠んだ連作がある。以下に示す。

掃きよせてある花屑も貴妃櫻

風に落つ楊貴妃櫻房のまゝ

花房の吹かれまろべる露臺かな

むれ落ちて楊貴妃櫻房のまゝ

むれ落ちて楊貴妃櫻尚あせず

きざはしを降りる沓なし貴妃櫻

……さても……誰が……美しくも哀しい楊貴妃だったのであろう……］

淡路門崎(とざき)

渦潮見る断崖上のわが背丈よ

波あげて鵜岩の孤独わだなかに

渦潮に対ふこの大き寂しさに

燈台守よたぎつ渦潮汝（な）とへだつ

渦潮の圏にて鵜岩鵜を翔（た）たす

渦潮見ていのち継がむと吾立てり

渦潮見て荒き心を隠さざる

生き身疲る渦潮のはやく衰へよ

渦潮去る香を奪はれし髪そゝけ

渦潮のおとろへざるに断崖去る

南風（はえ）の迫門渦潮の刻解かれ

［やぶちゃん注：「淡路門崎」本州側の最先端鳴門岬のある現在の兵庫県南あわじ市阿那賀（あなが）の門崎。これは昭和二九（一九五四）年七月の年譜に載る、『淡路洲本の朝倉十艸に招かれ、誓子と同行、渦潮を見る』とある折りの吟である。「南風（はえ）」と辛うじて夏の季語を出だす。

則ち、これらの句は基本、無季である点でも特異であることに気づかれたい。かなり意味深長な強烈な句群――と私は見る。……いや、多くは語るまい。なお、老婆心乍ら、「迫門」は「せと」で瀬戸と同義。」

伊予行

春夜解纜しづかに陸を退(しりぞ)けて

［やぶちゃん注：初五は「しゅんやかいらん」（春の夜に艫綱(ともづな)を解いて出船すること）と読んでいよう。すると自動的に「陸」は詰屈に「くが」と私は読みたくなる。標題が「伊予行」で、後の句に「八幡浜」が出るから、これは愛媛県西端にある佐田岬半島の付け根に位置する八幡浜への船旅の始まりであることが分かる（但し、出港地がどこかは定かでない。広島か。ただ夜の出帆というのが気になる）。年譜の昭和三一（一九五六年の条に、『四月、八幡浜の「七曜」支部発表会に出席』というのがそれであろう。」

春夜解纜それ以後潮のたぎちづめ

春夜解纜陸の燈ひとつだに蹤き来ず

［やぶちゃん注：「蹤き」は「つき」と読む。」

幾転舵春潮の舳(へ)に行方あり

春夜どの岬ぞ吾を呼ぶ燈台は

また転舵春夜の寄港短くして

海風に尾羽根（をは）を全開恋雀

［やぶちゃん注：「尾羽根」三字で「をは」とルビを振る。］

八幡浜郊外に緬羊を飼ふ百姓家多く

毛を刈る間羊に言葉かけとほす

かなしき声羊腹毛刈られをり

羊毛刈る膝下に荒きけものの息

羊毛刈る人とけものの夕日影

毛刈り了ふ赤膚羊がかたまり啼き

羊啼く毛を刈る鋏またあやまち

（三十一年）

［やぶちゃん注：底本では最後に本句集「海彦」の『（昭和三十二年二月二十五日発行角川書店刊）』という書誌データが載る。］

後記

「海彦」は「紅絲」に次ぐ第四句集である。昭和二十六年春から、三十一年春まで約五年間の作を収めた。

私の俳句は「紅絲」の延長であるが、旅に出る機会に恵まれ、健康のゆるす限り旅に出て旅の句を多く作つた。身体の弱い私は病気の隙をねらつてはそれを敢てしたやうである。しかし私には特に旅の句を作らうと云ふ意識はなく、その日その時にぶつかつた素材を通し、おのれの心に触れたものに徹して詠むだけであるが、旅に出れば心に触れる新しい事物に接することが多く楽しかつた。今後も折さへあれば旅に出たいと思ふ。

句集「海彦」の名は昨年の暮、山口誓子先生にお伴して行つた土佐の旅の句から選んだ。誓子先生から序文を頂いた。はからずもその旅中の私の姿が書かれてあり、有難いことと思ふ。

私の俳句は、「紅絲」の、内へ向けた歎きを経て次第に外へ向ひはじめたやうであるが、老婆を詠んでも、童女を詠んでも私は自分との生（せい）のつながりに於て見ずにはゐられない。さういふ年齢に達したのであらう。そこから私の句の新しいいとぐちが引き出されるやうに思はれる。

「海彦」の出版に当つて角川源義氏、志摩芳次郎氏に御配慮に預かつた。厚く御礼申上げる次第である。

昭和三十一年九月

奈良にて

橋本多佳子

［やぶちゃん注：多くは語るまい――と言ったが、私は、渦潮の一群の特異点の句群と、この「後記」と、そして山口誓子の序文の三種を並べた時、そこにある謎めいた暗号の解読のヒントが見え隠れするように思われた、誓子の著作権が存続するためにその序文を示せないのが実に歯痒い。是非、お読みあれかし。――］

橋本多佳子句集「命終」

［やぶちゃん注：昭和四〇（一九六五）年三月二十九日角川書店刊。「命終」は「みやうじゆう（みょうじゅう）」と読む（本句集第十三句目「この雪嶺わが命終に顕ちて来よ」の私の注を参照されたい）。第五句集にして遺句集。橋本多佳子はこの二年前の昭和三八（一九六三）年五月二十九日、肝臓癌と胆嚢癌及び周囲淋巴腺部への転移により午前零時五十一分に死去している。昭和三一（一九五六）年五月から同三十八年三月（多佳子五十七歳～六十四歳）までの作品七百四十一句を収録する。序文と題字は山口誓子、あとがきは橋本美代子。誓子・美代子の序文は著作権存続中のため、省略する。］

昭和三十一年

信濃の旅

八ケ嶽高原

花しどみ老いしにあらず曇るなり

［やぶちゃん注：「花しどみ」バラ目バラ科サクラ亜科リンゴ連ボケ属 *Chaenomeles* ボケ

Chaenomeles speciosa の近縁種で本邦固有種であるクサボケ（草木瓜）*Chaenomeles japonica* 。ボケは中国原産で観賞用に栽培されており自生はないのに対し、クサボケは本邦の本州関東地方以西・四国・九州に自生する。樹高は五十センチメートルほどで、『実や枝も小振り。本州や四国の日当たりの良い斜面などに分布。シドミ、ジナシとも呼ばれる。花は朱赤色だが、白い花のものを白花草ボケと呼ぶ場合もある。果実はボケやカリン同様に良い香りを放ち、果実酒の材料として人気がある。減少傾向にある』とウィキの「ボケ」にあり、この場合、特に多佳子が「花」を冠しているところをみると、この白い花の『白花草ボケ』なのかも知れないとも思ったが、とすれば二句後の「草木瓜は紅きがゆゑに狐寄らず」を差別化せずに出すことは考え難い。やはりこれも紅い花であろうと思われる。因みにグーグル画像検索「*Chaenomeles japonica*」の中に桃色のものや白化したものが少し見られる（但し、これが *Chaenomeles japonica* 白色花タイプである保証はない。必ず当該頁を開いて確認されたい。例えば、最初にピンク色で出るものは、そのページに「*Chaenomeles japonica* Madame Butterfly 」とキャプションする。］

入りゆくや落葉松（からまつ）未知の青籠めて

草木瓜は紅きがゆゑに狐寄らず

旅ゆく肩落葉松の風草の風

背を凭せて風がひびける芽落葉松

五月白き八ケ嶽（やつ）聳つを日常にて

天界に雪渓として尾をわかつ

双眼鏡天上界に白嶺混み

双眼鏡いつぱいの白嶽にて遠し

伊藤淳子さん

欲れば手に五月の雪嶺母の傍（そば）

［やぶちゃん注：「伊藤淳子」不詳。しかしこれ、「伊藤」は「伊東」の誤りで、前出の諏訪の伊東総子の娘か孫ではなかろうか？　そう私が思う理由は、後の「この雪嶺わが命終に顕ちて来よ」の私の注を参照されたい。］

孤（ひと）つ身のいよよ孤つに白穂高

五月白嶺恋ひ近づけば嶺も寄る

この雪嶺わが命終に顕ちて来よ

［やぶちゃん注：「命終」は「みやうじゆう（みょうじゅう）」と読む。底本年譜の昭和三一（一九五六）年五月の条に、『二十日、長野県「七曜」俳句大会に誓子と出席』し、その『大会の帰途、伊東総子の案内で、誓子と八ヶ岳に遊ぶ』とある（下線やぶちゃん）。年譜にも、**多佳子の死後の遺句集「命終」の書名の由来となるとする本句**が引かれており、そこにははっきりと**「みやうじゆう」のルビが振られている**からである。さらに『句帳に、「五月雪嶺に涙する」と前書がある』と記す。「顕ちて」は「たちて」と読む（これも同年譜にルビがある）。目前にかつて見たものの記憶が鮮やかに蘇る（他にも、季節の気配などがたち現われる或いはそうした雰囲気が濃厚に漂ってくるといった意味も持つ。いずれにせよ、

一種の歌語で日常的な語彙とは言い難い）謂いである。]

八ヶ嶽聳てり斑雪(はだれちかはだ)近膚吾に見せ

[やぶちゃん注：「斑雪(はだれ)」は「はだら雪」とも称し、「はだれ野」などとも詠まれる。俳句では点々と残っている斑(まだら)をなす雪として詠まれることが多く、ここも次の「近膚」（斑らに残る雪の間から顔を出した地面がくっきりと見える擬人的表現であろう）から推してそれである。但し、「はだら」にはこれ以外にも、日陰に残る雪で斑(まだら)になっている景や、はらはらと虚空や地に斑(まだら)を成しながら降る薄雪の謂いにも用いる、万葉以来の古語である。]

みづから霧湧き阿彌陀嶺天(あま)がくる

[やぶちゃん注：「阿彌陀嶺」「あみだがたけ」と訓じていよう。八ヶ岳の南方、赤岳の約一キロメートル西に位置する。標高二八〇五メートル。八ヶ岳では赤岳・横岳に次いで三番目に高い。私は山岳部の生徒を連れて三度登ったが、西側からの通常ルートの登頂途中では、実はまさに、この霧があった方が登りやすいことを申し添えておく。ルートの最上部近く（梯子のある辺り）は北側にかなり切り立った断崖があって、これがピーカンだとかなり恐怖感を感じる。これは当時の部長でさえ共感してくれたことである。……ああ、懐かしいなぁ。……]

そのいのち短しとせず高野の虹

[やぶちゃん注：以下、私はこの「高野」を「たかの」と訓じたい。言わずもがなであるが、固有名詞ではなく、高原の謂いである。]

轍曲る五月高野の木の根つこ

天ちかき高野の轍黍芽立つ

雪嶺と童女五月高野のかがやけり

白穂高待ちし茜を見せざりき

眼を凝らす宙のつめたさ昼半月

［やぶちゃん注：個人的に好きな句である。］

五月の凍み童女髪の根の密に

［やぶちゃん注：これも個人的に好きな句である。］

母の鵙翔ちて地上の巣を知らるな

行々子高野いづこか葭ありて

紅鱗かさねて何の玉芽なる

眼おとせば大地に髪切り虫の斑

花しどみ倚れば花より花こぼれ

［やぶちゃん注：「花しどみ」花櫨子。バラ目バラ科サクラ亜科リンゴ連ボケ属クサボケ（草

木瓜）*Chaenomeles japonica*）のことと思われる。実や枝もボケ *Chaenomeles speciosa* よりも小振りで、地梨（じなし）とも呼ばれる。花は朱赤色だが、白いものもある。果実はボケやカリン同様に良い香りを放ち、果実酒の材料として人気があるが、実自体ははなはだ酸っぱく食用には適さない。語源を検索すると、この実を食べるとはなはだすっぱいことに由ると書いてあるのであるから、これは「しど実」なのであろうが、しかしいくら調べても「しど」には酸っぱいという意味はない。識者の御教授を乞うものである。因みに、ボケの属名 *Chaenomeles* は、ギリシア語「chino」（開ける）と「melon」（リンゴ）の合成語で、「裂けたリンゴ」の意。熟すとリンゴやナシに似た実が裂けることに由来する。秋の季語。]

尖石遺趾

残雪光岩石斧を研ぎたりき

[やぶちゃん注：長野県茅野市豊平南大塩の、八ヶ岳西側山麓地帯の大扇状地上にある標高一〇五〇から一〇七〇メートルの東西に広がる長い台地上にある縄文中期の集落遺跡尖石（とがりいし）・与助尾根（よすけおね）遺跡。ここの南側に位置する尖石遺跡は戦前から発掘されてきた縄文時代を代表する遺跡の一つとして知られている。現在は同遺跡と浅い沢を隔てた北側台地上にある与助尾根遺跡と一括して扱われる。「尖石」の名称は遺跡の南側にあった三角錐状の巨石の通称に由来する（ウィキの「尖石・与助尾根遺跡」に拠る）。]

赤土（はに）籠めの埴輪おもへばしどみ朱に

花しどみ火を獲し民の代の炉焦げ

八つ嶽に雪牡丹に雨のふりそそぐ

[やぶちゃん注：「雪牡丹」とは季節的にも花菖蒲の改良品種の一種のそれではあるまいか？　児玉洋子氏の「ハーブと花の畑から」のこちらのページの最後の肥後系「雪牡丹」を参照されたい。]

五月高原よれば焚火の岔がわかれ

[やぶちゃん注：「ごぐわつ／かうげん／／よれば／たきびの／／ほが／わかれ」（ごがつ／こうげん／／よれば／たきびの／／ほが／わかれ」と読みたい。]

信濃落合

雪解犀川千曲（さいかはちくま）の静にたぎち入る

[やぶちゃん注：「信濃落合」長野駅の東南五・二キロメートルの千曲川に犀川が合流する地点に架けられた落合橋附近の嘱目吟。底本年譜に昭和三一（一九五六）年五月の条に、『二十日、長野県「七曜」俳句大会に誓子と出席。開会までの数時間、長野市の山崎矢寸居に案内され、落合橋の、犀川（男流）と千曲川（女流）の合流地点に行く。犀川の渦巻く雪解け水が、静かな千曲川に流れ入っている』とある。「男流」「女流」は「おながれ」「めながれ」と読むか？　こういう呼称は初めて聴いた。ネット上でも検索にかからない。識者の御教授を乞うものである。因みに、『山崎矢寸居』とあるが、これは小諸の青燕俳句会刊に「山崎矢寸尾句集」があるから、俳人山崎矢寸尾の誤植かと思われる。因みに、ここを頂点として西に延びる三角状の平坦地こそが、かの武田信玄と上杉政虎（謙信）が激しく激突した、川中島の戦いの舞台であった。

「たぎち」「浪（たぎ）つ」「激（たぎ）つ」などと漢字表記する。万葉以来の古語で（上代は「たきつ」とも）、水が激しく湧き流れる、湧き上がる、逆巻くの意。後に転じて、心が激しく動く、揺

さぶられるの意ともなった。多佳子は後者の意味も含ませていると私は読む。この十一句の連作はそう読んでこそ、深い味わいがあるのである。しかもそれはこの当時、多佳子の心臓発作が続いていたであろう（同年年譜の最後には、『十一月、心臓発作つづく』とある）なんどということとは、無論、違った意味で、である。」

よろこびに合へり雪解の犀千曲

雪解犀川砂洲を見せては瀬を頒つ

こゑ出さばたちまち寂し雪解砂洲

假橋にて雪解水嵩に直（じ）かに触れ

［やぶちゃん注：「假橋」（「假」は底本の用字である）以下の句群の句柄からは間違いなく落合橋としか思われないのであるが、Zenmai 氏のサイト「信濃路の風・信濃路の橋」の信濃路の橋のデータを見る限りでは、当時、落合橋は仮橋ではない。しかし、他の橋のデータを見ても昭和三一（一九五六）年当時に仮橋であったものも見出せない。識者の御教授を乞うものである。］

假橋にて雪解犀川鳴りとほす

ひざついて雪解千曲をひきよせる

雪解落合ふ嬉々たり波鬱たる波

犀・千曲雪解を合はす底ひまで

［やぶちゃん注：「底ひ」古語。現代仮名遣「そこい」。「涯底」などとも書く。物事の至り極まるところ。果て。極み。「退き方（そへ）」（遠く離れた場所・最果て）や「退く方（そへ）」と同語源かとされる。］

眼の前の雪解の千曲かちわたらず

雪代の光れば天に日ありけり

［やぶちゃん注：「雪代」「ゆきしろ」で、雪解け水。ゆきしろみず。「代」は「形代」などと同じく、代わりとなる代用の「代」で、雪の溶けて変じたものの謂いであろう。春の季語。］

木曽溪

紫雲英打つ木曽の青天細き下

［やぶちゃん注：「木曽溪」は一般的な呼称ではない。木曽川上流の流域を意味する木曽谷のことかと思われる。ウィキの「木曽谷」によれば概ね、『長野県木曽郡の全域（上松町、木曽町、南木曽町、王滝村、大桑村、木祖村）、岐阜県中津川市の一部（神坂、馬籠、山口地区）に該当』し、『木曽川の浸食により形成されたV字谷状地形が』延長約六十キロメートルに亙って続き、その主線は概ね『北北東から南南西の方角に沿う。東南方面には木曽山脈（中央アルプス）が、西北方面には御嶽山系がある。現在の長野県南西部が主な地域である。地形的には鳥居峠以南の木曽川上流の流域をさすが、歴史的には木曽路をさすことがある』とある。以下、中仙道（中央本線或いは国道十九号）を名古屋に下った際の嘱目吟である。

「紫雲英打つ」「れんげうつ」或いは「げんげうつ」（多佳子がどっちで読んだかは確証がない）。これはマメ目マメ科マメ亜科ゲンゲ *Astragalus sinicus* を緑肥（りょくひ）（「草肥（くさごえ）」とも言う）とする作業を指す。昔は、八～九月頃、稲刈り前の水田の水を抜いてレンゲの種を蒔いておき、翌年の田植えの前にこのレンゲ畑を耕して、レンゲをそのまま鋤き込んで田の肥料とした。」

青木曽川堰きて一つ気にまた放つ

五月空真白くのぞき木曽の駒嶽（こま）

［やぶちゃん注：「木曽の駒嶽」木曽駒ヶ岳。長野県上松町・木曽町・宮田村の境界に聳える木曽山脈（中央アルプス）の最高峰で、標高二千九百五十六メートル。しばしば木曽駒（きそこま）と略称もされる。］

雪嶺の赤恵那として夕日中

［やぶちゃん注：「赤恵那」「あかゑな」。「恵那」は恵那山（えなさん）。長野県阿智村と岐阜県中津川市に跨る、木曽山脈最南端の山。標高二千百九十一メートル。「赤富士」同様に夕陽に照らされたその美観を実際に「赤恵那」と呼称する。］

笠置

くつわ虫激ち一夜に一生（よ）懸け

［やぶちゃん注：「一夜」は「ひとよ」で、「一生」も「ひとよ」。総表題の「笠置」は京都府南部の相楽郡笠置町にある笠置山と思われるが、年譜上の昭和三一（一九五六）年秋の

データからは来訪は窺えない。後に出る「吊り橋」は笠置橋か。現在は違うが、当時は全長百三十メートルの鉄筋の吊橋であった（ウィキの「笠置橋（木曽川）」その他のデータに拠る）。」

くつわ虫歴（くき）とわが影燈を負ひて

ひとに会ふひとは知らずに虹を負ひ

露の吊橋「一橋一車」ならば許す

すぐゆくべく揚羽蜜吸ふ翅せはし

法師蟬友蟬ゐねばこゑとぎれ

＊

眼を病む

夕顔の匂ふ眼つむれば即ち盲ひ

右眼病めば左眼に青き野分充つ

奥吉野

土砂降りより入る目口に楮の湯気

［やぶちゃん注：「楮」老婆心乍ら、「かうぞ（こうぞ）」と読む。和紙の原材料とするイラクサ目クワ科コウゾ属コウゾ *Broussonetia kazinoki* × *Broussonetia papyrifera* 。］

楮煮るゆげ土砂降りの家出でず

土砂降りの紙漉場より水流れ

古きままの紙漉に老女ゐて簀の子の上に坐して漉く。

老いの顎うなづきうなづき紙を漉く

紙漉のぬれ胸乳張る刻が来て

ぬれ紙に重ねる漉紙滴るを

漉きかさねし濡紙百枚まだはがさず

むんむんと子の香を率ゐ霧の教師

鮎下り尽きし瀬の夜を鳴り徹す

鉄棒にさかしまたぎつ青吉野

吉野山青山檜山修羅場を袈裟懸けに

わが立てる岩より秋水また下る

＊

夫の忌日に

木犀や記憶を死まで追ひつめる

［やぶちゃん注：多佳子絶唱の一つと思う。この昭和三一（一九五六）年九月三十日の祥月命日の句であろう。夫豊次郎の死（昭和一二（一九三七）年。享年五十、当時多佳子三十八）であるからこの年は二十回忌に当たった。多佳子五十七。］

奥美濃

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三一（一九五六）年の十月の条に、奥美濃の上牧（かみまき）の紙漉きを見るとある。現在の美濃市乙狩（おとがり）。］

子の母がここにも胸濡れ紙を漉く

紙砧をりをり石の音発す

［やぶちゃん注：「紙砧」「かみきぬた／かみぎぬた」。紙を作るために原料の楮の皮を台に載せて木づちで敲くこと、また、その台のことをいう。画像を検索してみると、この台は木製の他に石製もあることが分かった。］

顎に力をとめ紙漉く脚張つて

働く血透きて紙漉くをとめの指

漉紙に漉紙かさぬ畏るる指

紙しぼる赤手(あかて)の上を水流れ

紙しぼる流れの端に鍋釜浸け

隆き胸一日圧(お)して紙しぼる

水照りて干紙に白顕(た)ち来る

干紙の反射に遊ぶ茶目黒目

紙を干す老いの眼搏つて鵙去れり

若き日の如くまぶっしき紙干場

死なざりし蜂干紙にいつ死ぬる

峡より峡に嫁ぎて同じ紙を漉く

遠燈点くはつとして紙漉場点く

紙漉女「黄蜀葵糊(ぬべし)」ぬめぬめ凍てざるもの

［やぶちゃん注：「黄蜀葵糊（ぬべし）」の「黄蜀葵」はアオイ目アオイ科トロロアオイ *Abelmoschus manihot* のことを指す。ウィキの「トロロアオイ」に、『オクラに似た花を咲かせることから花オクラとも呼ばれる。原産地は中国。この植物から採取される粘液はネリと呼ばれ、和紙作りのほか、蒲鉾や蕎麦のつなぎ、漢方薬の成形などに利用される』とあり、『主に根部から抽出される粘液を「ネリ（糊）」と呼び、紙漉きの際にコウゾ、ミツマタなどの植物の繊維を均一に分散させるための添加剤として利用される。日本ではガンピ（雁皮）という植物を和紙の材料として煮溶かすと粘性が出て、均質ないい紙ができたといわれ、それがネリの発想の元となったという説がある』。『根を十分に洗い、打解し、水に一昼夜漬けておくと粘性分である多糖類が出てくるので、濾して塵などを除去して使用する。抽出したネリは保存がきかず、腐りやすいため冬の気温が低い時期に紙漉きが行われる。紙漉き場などに行くとクレゾール臭がしていることがあるが、これはトロロアオイを防腐処理のためクレゾールなどに漬けているからである。トロロアオイを乾燥させて保存しておく事も可能だが、粘性が落ちると感じる人もいるようである』。『現在、機械抄き和紙はもちろん、手すき和紙の中でも古来の方法でネリを使用しているところは少なく、ポリアクリルアミドなどの化学薬品を合成ネリとして使用しているところが増えている』とある。こちらの「和紙製造の特徴」という頁（引用らしい）に、江戸時代のこの「ネリ」の方言として、「ネベシ」（美濃）・「ノリ」（土佐）・「タモ」（駿河）・「オウスケ」（九州）とし、『ほかに、ニレ、ニベ、ヌベシ』とある。］

＊

石よりも地よりも生ける蝸牛冷ゆ

冬立ちて十日猫背の鵙雀

暗黒に水らぎらして廃れ簗

絶対安静見えざる虹をたしかに懸け

絶対安静 眦(まなじり) に鵙の天

［やぶちゃん注：この昭和三一（一九五六）年の十一月の条には『心臓発作続く』とあるから、これはこの年のそれ以前の作と考えておく。次に十月に行った鵜飼の句群が載る関係上の推測であるが、必ずしも時系列で並べられていると考える必要も勿論、ない。］

友鵜舟

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三一（一九五六）年の七月の条に、『岐阜「流域」主宰、松井利彦に招かれ、誓子と鵜飼を見る。鵜匠頭(のかみ)の山下幹司の鵜舟に乗り、川下りすることを懇願。古来、女性が鵜舟に乗ることは堅く禁じられていたので困惑。一晩思案の後、黒装束（男装）をつける条件で許さる。上流の津保川より長良川を二里半下る』とある。「友鵜舟」は格別の計らいによる鵜舟への同乗から「鵜」を「友」としつつも、その実、誓子を「友」（伴）とする意を含めていよう。となお、別詠の二句を挟んだ末尾の「上の鵜飼」四句は、情景からも恐らく同年の十月の奥美濃での小瀬の鵜飼を見た際の別吟と思われる（後注も参照）。］

鵜舟に同乗、津保川より長良川を下る。

高鳴つて鵜の瀬暮るるに遅れたり

腋も黒し鵜飼の装に吾を裹(つつ)む

腕長(うでなが)の鵜飼の装に身を緊(し)むる

狩の刻(とき)荒鵜手縄(たなは)をみな結はれ

［やぶちゃん注：私は底本の「縄」の新字体が嫌いなので、敢えて「縄」とした。以下、同じ。］

手縄結はるる不安馴れし鵜とても見す

鵜の篝夜の殺生の明々と

鵜篝の火花やすでに樟さし出

友鵜舟岌危し瀬に乗りて

狩場にて鵜の修羅篝したたりづめ

男壮(をさかり)りの鵜の匠にて火の粉の中

鵜舟に在りわが身の火の粉うちはらひ

［やぶちゃん注：この句、個人的に意味深長なる句として好む。］

かうかうと身しばる叱咤鵜の匠

瀬落すや手縄曳かれて鵜が転び

早瀬ゆく鵜綱のもつれもつるるまま

中乗や男（を）の腰緊り鵜舟漕ぐ

［やぶちゃん注：「中乗」「ちゆうのり」と読んでいよう。これは謡曲のリズムの型の一つで、二音節に一拍を当てるもの。切れのよい躍動的な効果を持ち、修羅物・鬼畜物などで戦闘や苦患（くげん）のさまを表わす場面などに用いる、修羅乗りとも呼ばれるもので、この句は、謡曲の鬼物の一つである「鵜飼」（禁漁の罪を犯したために殺された鵜飼いの悲劇とその業の美事さを表現しつつ、法華経による救済を描く）をインスパイアしたものであろう。］

牽かるるもまた安からむ手縄の鵜

鵜匠の眼火の粉になやむ吾を見る

［やぶちゃん注：この句も同様に何か惹かれる。次の句も同じい。］

鵜舟に在る女面を篝襲ひづめ

彼方にて㐂はげしき友鵜舟

こゑとどかぬ速さの火焔友鵜舟

友鵜舟離るればまた孤つ火よ

一炎やおのが狩場に鵜を照らし

鵜の篝倚せゐて崖の胸焦がす

鵜舟にあり一切事闇に距て

［やぶちゃん注：破調が却って作者の秘めた情念をよく伝えるように思われる。］

＊

寝髪にほふ鵜篝の火をくぐり来て

鵜篝の火の臭（かざ）の髪解き放つ

［やぶちゃん注：「友鵜舟」事後の詠であるが、その妖しい情趣の余韻が何とも言えず、よい。］

上の鵜飼

［やぶちゃん注：これは岐阜県関市小瀬の長良川で毎年五月十一日から十月十五日まで行われる小瀬鵜飼（おぜうかい）を指しているものと思われる。ウィキの「小瀬鵜飼」によれば、『中秋の名月と増水時を除く毎夜行われる。中秋の名月に行われないのは、満月の月明かりにより篝火に鮎が集まりにくいためである。関市の鮎ノ瀬橋上流付近で行なわれる』とあって、知られる長良川鵜飼（前句群）よりも「上」流で行われることから「上の鵜飼」と題したものか？　『同じ長良川で行なわれる長良川鵜飼と比べて小規模であることは否めないが、観光化が著しい長良川鵜飼と比べて昔からの漁法としての鵜飼いが色濃く残って』いる、

とある。前の「友鵜舟」句群との絶妙にして妖しい連関が心地よい。]

わがゆく道くらし鵜舟いま過ぎゆく

鵜舟過ぎしあとに夜振の小妖精

念々に紅焔靡く二夕鵜舟

二羽のゐて鵜の嘴(くち)あはす嘴甘きか

[やぶちゃん注：下の「嘴」は私は「はし」と読み分けたい気がする。]

昭和三十二年

薪能

火と風と暮れを誘ふ薪能

風早(かぜはや)の暮雲薪能けぶる

指さえざえ笛の高音の色かへて

伏眼の下笛一文字に冴え高音

舞ひ冴ゆや面(めん)の下より男(を)ごゑ発し

春颯面(はやてめん)にて堪へてシテ立ち身

［やぶちゃん注：「颯」疾風。早手。「て」は「風」の意。急に激しく吹き起こって短時間でしまう風。］

春颯長絹透けるシテ立ちて

またたかぬ舞の面上風花うつ

笛冴ゆる老いの重眉いよよ重(おも)

薪能鴉の翼日を退け

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三二（一九五七）年五月十一日の条に、『奈良興福寺の南大門址の芝生で、能の四座演ずる薪能を観る』とある。］

＊

生きてまた絮あたたかき冬芒

［やぶちゃん注：「絮」「わた」と訓じていよう。］

木枯の絶間薪割る音起る

ひとたび来し翡翠(かはせみ)ゆゑに待ちつづく

吸入器噴く何も彼も遠きかな

胡桃割る音団欒のおしだまり

足摺岬

枯れ崖(きりぎし)長し行途につきしばかり

また同じ枯れ切通しこの道ゆく

紅実垂る大樹長途も半ば過ぐ

［やぶちゃん注：「紅実」「くみ」と訓じているか。］

郵便脚夫に鴉は故旧枯山中

［やぶちゃん注：「郵便脚夫」「ゆうびんきやくふ（ゆうびんきゃくふ）」は郵便集配人の旧称。「故旧」は昔馴染み・旧知の意。］

りんりんと海坂張つて春の岬

［やぶちゃん注：「海坂」「うなさか」と訓じていよう。］

断崖にすがるよしなし海苔採舟

海の鴉椿林の内部知る

椿林天透きてそこ風疾し

一人の遍路容れて遍路の群増えず

冬の旅日当ればそこに立ちどまる

新居浜

かりかりと春の塩田塩凝らす

一丈のかげろふ塩田に働きて

黒々とかげろふ塩田万一里

出来塩の熱きを老の掌（て）より賜（た）ぶ

［やぶちゃん注：これらは年譜の昭和三二（一九五七）年二月の条に、『ＮＨＫ放送のため、誓子と新居浜、足摺岬へ旅行。遍路に会う』とある折りの吟詠であろう。ＮＨＫ放送は以前より多佳子の出演していたラジオ番組「番茶クラブ」か。「新居浜」は「にいはま」と読み、愛媛県東予地方に位置する市。多佳子が訪れたのは多喜浜塩田（たきはまえんでん）であろう。正徳六・享保元（一七一六）年に開田され、享保年間に備後国から招かれた塩業家天野喜四郎によって幾度もの拡張工事がなされて総面積二百三十八ヘクタールに及ぶ日本有数の大塩田に発展、代々天野喜四郎の子孫によって受け継がれ、長年に亙ってこの地方の重要な産業基盤

となったが、この多佳子来訪の僅か二年後の昭和三四（一九五九）年、国策によって廃田となった（現在は埋め立てられて新居浜市を代表する工業団地となっている。以上はウィキの「多喜浜塩田」に拠った）。この四句、結果して、まさにこの塩田の落日を描いていて、いや万感胸に迫る思いがするではないか。」

奈良

沼みどり瞳しぼつて恋の猫

暮れ際に茜さしたり藤の房

藤昏るる刻の浪費をし尽して

切れ切れに雨降る藤の低きより

藤の房寄りあひ雨のだだ漏れに

やはらかき藤房の尖額（さき）に来る

仔鹿の脚雨の水輪に急（せ）かれをり

梢まで藤房重し一樹立つ

破損仏緑光堂の隙割つて

ものをいふ老顔の口緑さす

孫崎

渦の迫門翅あれば鴉の翔けつづけ

［やぶちゃん注：「孫崎」は徳島県鳴門市鳴門町土佐泊浦（とさどまりうら）にある最北端の岬。東方に鳴門海峡を望む（山湯（さんゆ）っくんの個人サイト「四国のええとこ教えてあげ隊」の「孫崎灯台」が位置や景観を知るに最適である）。老婆心乍ら、「迫門」は「せと」と読む。］

渦潮に乗りゆく何の躊躇もなし

渦潮を乗り切るときに後退して

躊躇許さずはや舶を貴むる渦の潮

渦潮を脱せし船体白波敷き

荒鎌の刈り若布（め）を逸す疾潮に

［やぶちゃん注：「若布」の二字に「め」のルビが振られている。次の句も同じと読む。］

疾潮に逸せし刈り若布惜しと立つ

渦潮と落ちゆく舵輪いつぱいに

泉

薔薇崩る切るに躊躇の長かりき

一切の混沌青嵐矢つぎばや

蜘蛛の囲の蝶がもがくに蝶が寄る

泉湧きあふる歓喜は静かならず

泰山木ひらき即ち古びに入る

深草にこゑ張りつめてぎすの昼

［やぶちゃん注：「ぎす」句柄の全体の印象から見てこれは間違いなく、直翅（バッタ）目キリギリス亜目（剣弁亜目キリギリス下目キリギリス上科キリギリス科キリギリス亜科 *Gampsocleidini* 族キリギリス属 *Gampsocleis* の真正キリギリス類であろう。ニシキリギリス *Gampsocleis buergeri* かヒガシキリギリス *Gampsocleis Mikado* かは、多佳子の居住地から（奈良市あやめ池町）からは見て微妙。］

露の空白鷺ちらと傍（わき）見して

高野行

［やぶちゃん注：年譜によれば、昭和三二（一九五七）年八月に津田清子同伴で高野山行き、十五日、三星山彦（当時、高野山在住であったと思われる『ホトトギス』の同人）の案内で一般人は入れない修行僧の寺円通寺に参ったとある。］

白炎と見しは太白(たいはく)露の塔

［やぶちゃん注：「太白」は明けの明星、金星の瞬きをかく詠んだものか。］

露晒し日晒しの石桔梗咲く

閼伽水のながれの尖が吾にくる

墓花の夏花の紅縁者来て

切子燈籠

［やぶちゃん注：この高野行の年譜記載は先に続けて、『また、多佳子は、普賢院の切子燈籠（盂蘭盆に寺院の入口に吊る）の下に跼みこみ、句作に専念』とある。「跼みこみ」は「かがみこみ」と訓じているようである。「跼」は古くは「せくぐまる」で、体を前へ屈めて背を丸くすることで、かがむ・かがまる・こごむ・くぐまるなどと訓ずる。グーグル画像検索「高野山 切子燈籠」をリンクさせておく。但し、生憎、灯の点った夜の画像は見当たらないようだ。］

切子(きりこ)点く寂光濾せる紙の質

真の闇切子が山蛾欲りつ獲つ

火蛾生死(しやうじ)切子内界さしのぞく

切子火蛾よぶ殺生戒の身におもしろ

火蛾よべる切子より吾貪欲に

山蛾食ひ切子ふたたび明（めい）もどす

切子貪欲一山（いっざん）蛾族翔け参じ

切子長尾ただにしつまり燈が暗し

切子燈籠うしろが明しまわりて見る

火蛾捨身潰れ潰れて大切子

［やぶちゃん注：私の多佳子の句中、最も偏愛する一句。「潰れ」は私はずっと「よごれ」と訓じてきた。］

真別処

旅人はものなめげなり沙羅落花

沙羅双樹ぬかづくにあらず花拾ふ

夏行秘苑泉のこゑに許されて

沙羅落花傷を無視してその白視（み）る

沙羅双樹茂蔭(しげかげ)肩身容れるほど

夏行秘苑僧の生身(いきみ)のねむたげに

「脚下照顧」かなぶんぶんが裏がへり

一燭の饒舌夏行の僧の眼に

夏行秘苑指しびる清水魚生きて

[やぶちゃん注：「真別処」「しんべつしょ（しんべっしょ）」と読む。円通律寺のこと。高野山金剛峯寺奥の院一の橋手前の高野山蓮花谷の南六百メートルの山中にある真言宗の僧侶を目指す者の修行寺院で、現在も厳格な規律を守って原則、女人禁制、一般人は通常は立入禁止である。この寺院は弘法大師の甥で天台宗の智証大師が修行した跡とされ、東大寺再建で有名な俊乗坊重源上人が荒廃したこの地に専修往生院を建立したが、後に再び荒廃を極め、江戸幕府第二代将軍徳川秀忠の側近山口修理亮重政が登山して出家し、智証・重源の旧跡を慕って堂を再興、密教と律宗の兼学道場となった。現在は高野山真言宗の修行寺院であるが、律宗を兼学した当時の名残りとして寺号に「律」の字がそのまま残っている。山門の前は現在、薄暗い杉林になっているが、重源が活躍した時代は一帯に念仏聖が無数の庵を構えていたと伝えられる（以上は和歌山県観光連盟公式サイト内の「観音巡礼の面影を遺す石畳道」に拠った）。女人禁制と書いたが、尼僧が受戒を受ける際と、旧暦四月八日の釈迦の誕生を祝う花祭りの際には一般公開されて女性も立ち入ることが出来、この時は先に注した通り、多佳子は、この昭和三二（一九五七）年八月十五日に三星山彦（当時、高野山在住であったと思われる『ホトトギス』の同人）の案内で、特別に円通寺を参観出来たのであった。

「ものなめげなり」「なめげなり」は「無礼気なり」などと書く形動動詞。「無礼だ」「失礼だ」「不作法だ」の意の形容詞「なめし」の語幹に、如何にもそのような感じに見えるの意を添える接尾語「げ」のついたもの。無礼なさま、無作法に見えるさまをいう。

「沙羅双樹」「沙羅」は「さら」若しくは「しやら（しゃら）」と読み、ツバキ目ツバキ科ナツツバキ *Stewartia pseudocamelli* の別名である。本邦には自生しない仏教の聖樹フタバガキ科の娑羅樹（さらのき　アオイ目フタバガキ科 *Shorea* 属サラソウジュ *Shorea robusta* ）に擬せられた命名といわれ、実際に各地の寺院にこのナツツバキが「沙羅双樹」と称して植えられていることが多い。花期は六月～七月初旬で、花の大きさは直径五センチメートル程度で五弁で白く、雄しべの花糸が黄色い。朝に開花し、夕方には落花する一日花である（ここは主にウィキの「ナツツバキ」及び「サラソウジュ」に拠った）。

「夏行」「げぎやう（げぎょう）」と読む。狭義には夏安居（げあんご）のことを言う。元来はインドの僧伽に於いて雨季の間は行脚托鉢を休んで専ら阿蘭若（あらんにゃ）（寺院の意）の内に籠って座禅修学することを言った。本邦では雨季の有無に拘わらず行われ、多くは四月十五日から七月十五日までの九十日を当てる。これを「一夏九旬」と称して各教団や大寺院では種々の安居行事がある。安居の開始は結夏（けつげ）といい、終了は解夏（げげ）というが、解夏の日は多くの供養が行われて僧侶は満腹するまで食べることが出来る。雨安居（うあんご）ともいう（平凡社「世界大百科事典」の記載をもとにした）。多佳子の参拝は八月十五日であるから、この「夏行」とは狭義の夏安居の時期ではなく、夏安居に相当する暑い夏の静寂に満ちた真別処円通律寺のそれを詠じたもの。

「秘苑」女人禁制の円通律寺の幽邃な庭園をかく言ったものであろう。

「脚下照顧」「きやくかせうこ（きゃっかしょうこ）」と読む禅語。「脚下」は足元の意から転じて本来の自分・自分自身の意、「照顧」は反省してよくよく考える、また、よくよく見るの意。「己れ自身をよくよく見つめよ」という意で、他に向かって悟りを追い求めることなく、まずは自信の本性をよくよく見定めよ、という戒めの語である。転じて、他に向かって理屈を言う前に、まず自分の足元を見て自分のことをよくよく反省せよ、足元に気をつけよという一般の故事成句となったが、ここは無論、原義である。「照顧脚下」とも言う。

個人的には、

夏行秘苑僧の生身のねむたげに

「脚下照顧」かなぶんぶんが裏がへり

一燭の饒舌夏行の僧の眼に

の三句が映像的にすこぶる素晴らしい。]

大阪伝法川

施餓鬼舟黒煙を吐く船に曳かれ

施餓鬼の波芥引寄せ引放つ

海までの穢川よ施餓鬼のもの青赤

卒塔婆流す穢川の舟に偕(とも)に乗り

[やぶちゃん注：「偕(とも)に」「伴(とも)に。一緒に。]

施餓鬼舟より享けよと紅き毬流す

施餓鬼卒塔婆流す入日の波寄り来る

裏返り穢川に施餓鬼卒塔婆の白

施餓鬼幡鉄打つ音にうなだれづめ

落日に群衆が透く川施餓鬼

施餓鬼僧蝙蝠（こうもり）の両（ふた）つ袖ひろげ

［やぶちゃん注：「伝法川」ウィキの「伝法川」によれば、『かつて大阪府大阪市此花区』（このはなく）『に存在した河川で』、現在はそう呼称する川筋は存在しない模様である（事実、地図や検索に実在する「伝法川」としては見出せない）。『旧淀川の分流である正蓮寺川から分かれ、大阪湾に注いでいた。沿岸は大坂の町へ出入りする水運の拠点となり栄えていた』が明治四三（一九一〇）年に『新淀川が開削されたときに下流部の土地が利用されたために新淀川に流入する形にな』り、その後、高潮対策のために昭和二六（一九五一）年から埋め立てが始められ、『現在は新淀川に注ぐ部分のみが漁港として残されている』に過ぎないとある。地図上で見ると、新淀川の河口の新伝法大橋から六百メートル強下った右岸（伝法五丁目と西島二丁目の境に陥入する港湾があり、大阪市漁協もあるから、ここが旧伝法川河口と考えられる（後掲する正蓮寺は湾奥から東南へ二百メートル強の位置にある）。底本年譜の昭和三二（一九五七）年八月の条に、『大阪伝法川で、施餓鬼舟に乗り、施餓鬼を見る』とあるから、この昭和三十二年の段階では、辛うじて伝法川の川の流れが残っていたものか。

「施餓鬼舟」大阪市公式サイト内の「正蓮寺の川施餓鬼」に、『施餓鬼（せがき）とは、餓鬼道（がきどう）にあって飢えと渇きに苦しむ餓鬼に飲食を施し、仏に供養することによって餓鬼を救済し、自身も長寿することを願う仏事をいい、特に川辺で死者の霊を弔う施餓鬼を川施餓鬼という。川辺や船を用いて行われ、施餓鬼法要の後に、水死者の法名を記した経木（きょうぎ）や供物（くもつ）などを川に流す。本来は時期を限ったものではな

かったが、盆行事と結び付き精霊（しょうりょう）送りや納涼の要素が大きくなっていった』と概説した後、かつてこの伝法川で川施餓鬼を行っていたのは正蓮寺で、同寺は寛永二（一六二五）年に開創された日蓮宗の寺院で、『寺伝では川施餓鬼は第七世寂行院日解上人（じゃっこういんにっかいしょうにん）が』享保六（一七二一）年に始めたと伝えるとり、安政年間（一八五四年～一八六〇年）に成立した「摂津名所図会大成」には、『例年七月廿六には、当地正蓮寺といふ日蓮宗の寺院に施餓鬼の法会ありて、浪花中より宗門の男女、船にて群集して、いたって賑わし。是を伝法の施餓鬼とて、天神祭に彷彿たる舟行の大紋日也』とあって、『天神祭とならぶ夏の大きな祭となっていたことが分かる』と記す。現行の同施餓鬼舟の行事は八月二十六日の午前十時から新盆会特別法要から始まり、『続いて唱題（しょうだい）行進が行われ、塔婆（とうば）・経木供養、法話・説教、稚児大法要・焼香、練供養（ねりくよう）、船渡御（ふなとぎょ）、経木流しの順に行事が進行』、午後三時頃から、『練供養をして乗船場（新淀川閘門繋船場（こうもんけいせんじょう））へ向かう。行列は先見（せんけん）、金棒（かなぼう）、旗幡（はた）、纏（まとい）、稚児、御輿（みこし）、大太鼓、僧侶、団扇太鼓（うちわたいこ）、檀信徒の順である。日蓮聖人（にちれんしょうにん）立像を納めた御輿には多数の経木も納められる。行列が乗船すると、玄題旗（げんだいき）と吹き流しを立てた船団は新淀川の中央まで進み、先頭の船の舳先（へさき）で導師が読経をしながら経木を流し、それに合わせて参列者が御題目を唱えながら経木を流す』とあるから、これらの句柄の作品内時間も。夕刻少し前ということになろうか。また、『正蓮寺川で行われていた川施餓鬼では、川の中に五色の幣（へい）を付けた笹、塔婆を立てた棚が数多く設けられた。笹と精霊棚（しょうりょうだな）の前を船渡御の船列が進むというもので、多くの見物の船が出て大いに賑わった』が、精霊棚の設置は昭和一八（一九四三）年以降は行われておらず（従ってこのロケーションにもない）、『さらに、地盤沈下によって橋の下を船が運航できなくなったので』、昭和四二（一九六七）年からは『新淀川に移動して行事を行っている』。『日蓮聖人が萬霊供養のため、川まで出向く行事の形式をとり、諸霊を送り出す経木流しが組み合わされた盆行事であり、かつてはいくつかの寺院で行われていた、水都大阪らしい行事の遺風を今日に伝えている』とある

（下線やぶちゃん）。］

賀名生村

蒟蒻掘る泥の臭（か）たてて女夫（めをと）仲

蒟蒻掘妻（め）と吉野山常（とも）に偕

蒟蒻掘顔をあげるを鴉まつ

蒟蒻掘る尻がのぞきて吉野谷

天が下土と同色蒟蒻掘

蒟蒻掘る顔を妻があげ山鳩翔つ

蒟蒻掘る穴に吐き捨つ夫（を）の言葉

蒟蒻掘る夫婦に吉野山幾重

蒟蒻負ひ馴れしこの道この傾斜

蒟蒻負ふ泥の重さも背に加へ

＊

柿盗りの蹠（あうら）に老の樹のよき瘤

柿盗りを全樹の柿がうちかこみ

柘榴の裂けすでに継げざるまで深く

茸山に入る身を細め身を屈し

これが茸山うつうつ暗く冷やかに

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三二（一九五七）年に、『晩秋、柿取りを見たく、柿の産地の賀名生（あのう）村に、清子と行く。時季遅れで柿無く、蒟蒻（こんにゃく）掘りを見る。僻地で、バスは日に二三回しか無く、ヒッチハイク式に、多佳子は手を上げて、「森本組」と書いた、土建業者の車に乗せてもらって帰る』とある。ウィキの「賀名生」によると、賀名生は和歌山線五条駅の南南東六・七キロメートルの『奈良県五條市（旧吉野郡西吉野村）にある丹生川の下流沿いの谷である。南北朝時代（吉野朝時代）、南朝（吉野朝廷）の首都（ただし行宮であるため正式な首都ではない）となった地域の一つ』。『もと「穴生」（あなふ）と書いたが、後村上天皇が皇居を吉野（吉野山）からこの地に移した際に、南朝による統一を願って叶名生（かなう）と改め、さらに』正平六／観応二（一三五一）年、一旦、『統一が叶うと（正平一統）「賀名生」に改めたという。明治になって、読みを「かなう」から原音に近い「あのう」に戻した。後村上天皇の遷幸より前の』延元元／建武三（一三三六）年十二月二十一日に後醍醐天皇は京都の花山院から逃れ出て、同月二十三日には『穴生に至ったが、皇居とすべきところがなかったのと高野山衆徒の動向を警戒してここに留まるのを断念』、同月二十八日に『吉野山に至った』が、正平二／貞和三（一三四七）年に『正月に楠木正行が四条畷で戦死したのち、南朝では北朝方（室町幕府、足利軍）の来襲を防ぎ得ないのを知り、吉野を引き払い穴生に移った（皇居は総福寺であろうという）』（中略。リンク先に

はこの間の詳細な歴史的経緯と南朝方の移動が記されてある)。『のち長慶天皇を経て後亀山天皇が践祚するに及び』、文中二／応安六（一三七三）年八月より、住吉から『また賀名生を皇居とし以後』元中九／明徳三（一三九二）年に『京都に帰って神器を後小松天皇に伝えるまで』の二十年の間、『賀名生は南朝の皇居の所在地であった』とある。『明治以降は吉野郡賀名生村が存在したが』、多佳子が訪れた二年後の昭和三十四（一九五九）年、『合併し西吉野村となった。日本国有鉄道五新線が通る予定で、途中の阪本まで建設が進められていたが中止され、用地の一部はバス専用道路に転用された』。その後、西吉野村は二〇〇五年の市町村合併で五條市の一部になって、一九五九年以降は『「賀名生」という地名は通称としてのみ使われていたが』、二〇一一年に『西吉野町和田地区の一部が西吉野町賀名生と変更され、住所表記として賀名生が復活し』ている。『賀名生の皇居は、従者の住まいだった一部が現存する』。『南北朝時代から賀名生梅林が有名であり、明治以降は実を収穫するための植林もされた。さらに』、大正一二（一九二三）年に当時の『東宮（後の昭和天皇）成婚を記念して』五千本の『梅が植林された。現在は柿の生産も盛んである』とあり、交通の項には『奈良交通バス五條西吉野線（五新線用地）賀名生バス停下車、または八木新宮線賀名生和田北口バス停下車』とある。それぞれのバス停の時刻表を見ると、後者は一日三便しかないが、前者は五本運行している。

「蒟蒻」単子葉植物綱オモダカ目サトイモ科コンニャク属コンニャク *Amorphophallus konjac* 及びその球茎。」

昭和三十三年

梅溪

梅溪に赤土露出せる一断崖

ひきよせてはつしと放つ梅青枝

吾等去つて木魂しつまる梅の溪

鶯や火を欲りて立つ崖の枯れ

鶯や山拓く火に昂りて

毛糸編む老の刻々打ち込みて

［やぶちゃん注：「梅溪」は奈良盆地と伊賀盆地の境に広がる大和高原の北側、京都・三重・奈良府県境付近にある月ヶ瀬梅林のことであろう。鎌倉中期に当地にある真福寺境内に梅が植えられたのが始まりとされる古くから知られた梅林で、参照したウィキの「月ヶ瀬梅林」によれば、奈良県奈良市月ヶ瀬尾山とその周辺に位置する梅林で、名張川（五月川）の渓谷沿いに梅の木が広がることから月ヶ瀬梅渓とも呼ばれる。二〇〇七年現在で約一万三千本の白梅・紅梅が栽わる。奈良市中心部からは東に約三十キロメートル、三重県伊賀市中心部からは南西に約十二キロメートルの距離にある。『大和高原北側の府県境付近は木津川水系名張川の渓谷が続いており、特に月ヶ瀬梅林のある名張川下流域は五月川と呼ばれ、深いV字谷を形成して』おり、『月ヶ瀬梅林はこのV字谷の斜面に広がる梅林である。「月ヶ瀬梅渓」と呼ばれる所以となった雄大な渓流は高山ダムの完成』（昭和四四（一九六九）年）『によりダム湖の底に沈んだが、近年はその月ヶ瀬湖の湖水と梅林が調和し、新たな景観を形成している』。『明治時代に入る頃まで月ヶ瀬は烏梅（若い梅の実の燻製。紅花染めに必要な材料。）の一大生産地であり、月ヶ瀬梅林は烏梅の原料となる梅の実を収穫する用途で規模を拡大し』、最盛期の江戸時代には約十万本の烏梅の木が成育していたとされる。しかし二十世紀になって『合成染料の発達により、烏梅はほとんど生産されなくなっ

たため、月ヶ瀬梅林は観光資源として利用や食用の青梅の栽培に軸足を移した』とある。
多佳子の詠じた景色はダムに沈む以前の景観であることに注意されたい。」

白鳥行

汽罐車のよこがほ寒暮裏日本

雪の駅ピアノ木箱を地膚の上

野の雪雲集(よ)りて仕へて白大山(はくたいせん)

駅炉の煖盗む白鳥行に暮れ

白鳥を恋へる眼に鳶鷗翔つ

風颯々白鳥の鋭目(とめ)切れ長に

尻重き翔ちざまの鴨白鳥湖

白鳥渡来日本の白嶽滝せ

雪嶽越ゆ白鳥の白勝ちて

日の寵は白鳥にのみ鴨翔ける

漁る白鳥主婦は下身に雪の泥

「レダ」の白鳥出雲白鳥像かさね

低雲の一日駅夫と白鳥と

月ある闇白鳥光は寄りあひて

楫（かぢ）の音夜目の白鳥追はれゐる

一夜吾に近寝（ちかね）の白鳥ゐてこるゑす

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三三（一九五八）年の条に、『一月ごろ宍道湖の白鳥を見に、清子同伴で松江に行く。松江の岩田屋旅館に泊まる。しかし』白鳥（年譜には『白馬』とあるが、まさに「烏焉馬（うえんうま）」の誤りであろう）『は松江にはいず、松江の近くの入り江秋鹿（あしか）で十数羽を見る。夜も見たく、夜の鳴き声も聞きたく、湖岸にある秋鹿荘という公務員の寮に行くが、公務員で無いので断られる。どうしても一泊したく、公務員で俳人の西村青渦（裁判官）に気がつき、電話連絡、その尽力により許可される。ここでは湖際に親しく白鳥を見ることが出来た』とある。］

万燈籠

万燈の低きに混めりわが来し方

歩み高まり万燈の高まりゆく

万燈の夜を遠吠えの小稲妻

万燈の明り流水石底見せ

万燈籠地に焚ける火焔裂き

万燈籠とぎれてそこは溪の暗

万燈の廻廊のその赤光寂び

万燈やおのれ徹して一流水

裾の寒さよ万燈下の暗さよ

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三三（一九五八）年二月の条に、『三日、誓子と、奈良春日神社の万燈籠を見る』とある。春日大社では二月の節分と八月の中元の夜に全ての燈籠に火が灯され、それを万燈籠と呼ぶ。最後の句は多佳子にしては珍しい、かなり思い切った破調である。］

蝶の翅

蝶の翅ひたひた粗朶の永乾き

桃桜野良ごゑ出せば胴ひびき

負ひ帰る海髪（うご）の滴り濡れついで

［やぶちゃん注：「海髪」紅色植物門紅藻綱オゴノリ目オゴノリ科オゴノリ *Gracilaria vermiculophylla* 。当初、実際の海女の髪を言っていると面白いとちらと思ったが、それでは季語が隠れるし、負って帰るのはやはり、絡みついた海髪（おごのり）であろう。］

四方風樹仔雀を地に置放し

風騒ぐ緑蔭の幹背を凭せ

潮出づる海女がぴつたり肉つつみ

御木本養殖真珠工場

うつうつと母貝の醜（しこ）蓋核入れ後

［やぶちゃん注：下五は音数律なら「かくいれご」だろうが、私はどうも「かくいれ／のち」と読みたい気がする。］

岩山

岩山を蝶越ゆ吾も幸福追ふ

薄明界味は眼よりも翅信じ

草あらし香を奪はれて百合おとろふ

濃夕焼泥田をいでず泥夫婦

囲の蝶のもがきに蜘妹のともゆれる

蚋入りしわが涙眼のたしかに醜

菖蒲園かがむうしろも花暮れて

万緑の中層々と贋アカシア

梅雨泥の靴裏汝(なれ)の寝つづかしめ

西日の仮睡汝の荷汝をかばひ

森いでて女(め)たる隠さず新毛鹿(あらけじか)

穂草八方いづこかに仔鹿が隠れ

袋角脈々と血の管通ふ

農婦帰る青田をいでて青田中

祇園祭

白炎天鉾の切尖深く許し

太鼓の音とびだす祇園囃子より

鉾の稚児袖あげ舞ひて衣裳勝ち

炎天の眼に漲りて鉾の紅

眼前の鉾の絢爛過ぎゆくもの

鉾の後姿コブラン皇妃灼け放題

地車止り祇園囃子のとどこほる

鉾曲る前輪ぎぎと挺子を噛み

鉾過ぎし炎天架線工夫吊り

帰り山車（やま）走せて徒足（かちあし）脛揃ひ

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三三（一九五八）年七月の条に、『十三日、京都祇園の八坂神社の祭礼である祇園会に行き、宵山を見る。翌十七日に山鉾の巡行を見る』とある。私は祇園祭を見たことがないが、とあるテレビ番組で如何にも古いゴブラン織りのタペストリーが山鉾の装飾にあるのを見たことがあった。今回、調べて見ると、く〜にゃん氏のブログ「く〜にゃん雑記帳」の「〈祇園祭㊤〉豪華な懸装品　４００年前のベルギー製タペストリーも！」の記事によって、ベルギーのフランドル地方で凡そ四百年も前に製作されたものらしいことが分かった。しかもそれは伊達政宗が派遣した慶長遣欧使節団の支倉常長が、一六一五（慶長二〇）年一月に謁見したローマ教皇パウロ五世から下賜された五枚の内の三枚が裁断されて使用されているのではないかといわれているとあった。リンク先

では写真も見られる。]

乗鞍嶽行

砂利採りが砂利にまぎれて木曽青し

鮎の底流木曽となる荒性見せ

[やぶちゃん注：この句、詠の対象は分かる気がするものの、どう切ってよいのか、私にはよく分からぬ。]

昼寝部落よ屋根にみな石重く

杏子熟れ落つ飛驛つ子の重瞼（おもまぶた）

青田豊年定紋頑（がん）と飛鞳の倉

山のバス駿雨に合歓の紅の惨

緑山中下りがあつて車輪疾し

真つ昼の照燈霧の盲目バス

一燭のわが寝（い）に霧の窓をおき

いなびかり雪渓二重ガラスの外

靴に踏み固しもろしこれが雪渓

一瞬の日にも柔らぎ雪渓照る

雪渓に手袋ぬぎて何を得し

大雪渓太陽恋ひの顔あぐる

雪渓にひろふ昆虫の片翅を

蝶蜂の如雪渓に死なばと思ふ

残りて汚れて雪渓日曝し霧曝し

摂理の罅走る雪渓滅びのとき

霧の嶽上わが背に鳴るはわが翼

身伏せれば地ややぬくし霧押しくる

霧去つて魔王嶽南雪渓垂り

［やぶちゃん注：「魔王嶽」は乗鞍二十三峰の一つ魔王岳。標高二千七百六十メートル。］

死を遁れミルクは甘し炉はぬくし

炉にかはき額にかたまる霧の髪

颱風に襲はれ山小屋に數日寵る。

青林檎の青さ孤絶の山小屋に

豪雨中雪渓真白(しんぱく)以て怺ふ

［やぶちゃん注：「怺ふ」は「こらふ」と読み、「堪(こら)ふ」に同じい。］

雪渓がごつそり溢せて豪雨晴れ

登山荘煙吐き吐く我らこもり

一行中七〇歳の老婆あり。

避難下山負はれて老いの顔高く

いまは花野決壊の傷天に懸け

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三三（一九五八）年七月の条に（十八日以降）、『「流域」の松山利彦に誘われて乗鞍嶽に登る。誓子、利彦ら同行。高山で一泊し、翌朝三千米級の乗鞍三兆近くまで到着。借用の登山服、登山靴で、生まれて初めて雪渓を踏み感激する。乗鞍での二日目に台風に遭う。道路決壊し、下山路は途絶。下山不能。山上の山小屋で缶づめとなる。心臓発作おこる。新聞に「病人一人出る。」と出たが、多佳子のことであった。

三日後、平湯山嶽部員やリーダーの松井利彦の力により、ザイルを伝い、六里』（凡そ二十四キロメートル弱）『の道を歩いて平湯に下りる。美濃白鳥、郡上八幡を経て岐阜に出』た、とある。当時、多佳子五十九歳。かなりハードな経験である。」

比叡山

わが比叡比良と嶺わかつ秋の空

はるかに光る秋の川来るか行くか

根本中堂

不断燈鬱々夏を遣り過す

北谷に立てば北空法師蟬

仏燈や火蛾の翅粉をただよはす

＊

山清水汚せしことのすぐに澄む

鞦韆の男女夜の谷にひらく

老いて醜き白川女（め）頭に秋草

［やぶちゃん注：「白川女」は老婆心乍ら、「しらかはめ（しらかわめ）」で、京で花などを頭に乗せて売り歩く女性。嘗て京の白川地方（京都市左京区を流れる比叡山に源を発し、祇園付近で鴨川に合流する白川の流域一帯の地名。古くは鴨川以東、東山との間の地区を指した）の女性が、特有の装束をして市中を売り歩いたことに由来する。］

春日奥山

白露行身袖ひつかく有刺線

石窟仏蜂の出入に有刺線

秋晴より蜂がかへり来石窟仏

石窟仏秋蚊に女血（をんな）たつぷり

なきがらの蜂に黄の縞黒の縞

秋晴に仏の石窟口ひらく

［やぶちゃん注：「春日奥山」「石窟仏」春日山石窟仏（かすがやませっくつぶつ）。私は全く知らないので、ウィキの「春日山石窟仏」から引用する（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更した）。『奈良県奈良市の春日山山中石切峠近くにある磨崖仏。国の史跡に指定されている。通称・穴仏』。『柳生街道石切峠に近い南面傾斜地に露出する凝灰岩の岩壁を龕状に掘り、その壁面に仏像を刻んで彩色したもので相接する東西の二窟から構成される。西窟には久寿二年（一一五五年）および保元二年（一一五七年）の造立銘が刻まれていることから、平安時

代末期（十二世紀中期）の作品とみられている。久寿二年の銘は現状では年号の部分が欠損しているが、近世末期の記録により、久寿二年と確認されている』。『東窟は間口約五メートル、奥行約二・四メートル、高さ二・四メートルで中央柱四面に顕教系の如来坐像四体、東壁に菩薩形立像三体、西壁に地蔵菩薩立像四体を表し、東西両壁に天部立像各一体（二天像）を表している』。『西窟は間口約三・六メートル、奥行約二メートル、高さ二・四メートルで経年・風化による損傷は大きいものの、如来坐像三体および多聞天立像一体が現存する。如来坐像は金剛界五仏を表したものと推定されるが、五体のうち二体は滅失している』とある。個人ブログ「ポジティブオーラ」の「春日奥山石窟佛から地獄谷石窟佛」が説明板の写真があり、分かりが良い。グーグル画像検索「春日山石窟仏」もリンクしておく。]

昭和三十四年

紀南

岬に土ありて藷づる引けば藷

[やぶちゃん注：老婆心乍ら、「藷」は「いも」、甘藷。サツマイモ。和歌山県東牟婁郡串本町の潮岬（しおのみさき）での藷掘りでの吟。本州最南端の串本町では温暖な気候を利用して古くから地元だけで消費されていた果肉が鮮やかな黄色でしっとりとした食感の非常に甘い薩摩芋が栽培されている（参照した後に示す和歌山県公式サイトの記載によれば、串本町には慶長二〇・元和元（一六一五）年に既に栽培していた記録があると記す。但し、ウィキの「サツマイモ」によれば、サツマイモがフィリピンから中国を経て宮古島に伝来したのが一六一〇年代初頭、その後沖縄本島（琉球王国）を経て本土の薩摩国種子島に伝わったのは元

禄一一（一六九八）年三月、薩摩藩で「カライモ」と称して本格的に栽培されるようになったのは一七〇〇年代初頭とあるから、この古記録が正しいとすると、驚くべきことに、遙かその凡そ百年以前に恐らくは黒潮を伝って独自にサツマイモがこの地に齎されていたということになる)。「和歌山県」公式サイト内の「東牟婁地方の食材コレクション」によれば、近年、「なんたん蜜姫」(商標登録出願中)というブランド名で売り出されているとある。]

礁の道女藷担(か)く肩かへては

子の干柿口より享けて口濡れる

廃馬ならず花野に手綱ひきずつて

一摑み落葉を置けば水急ぐ

みな聳ちて冬山那智に聚まれる

冬山中いま暮る滝に会ひ得たり

滝凍てしめず落下すなほ落下す

全山の寒暮滝壺よりひろごる

冬の旅滝山に入り滝尊む

滝を神としとどろくものとし禰宜かがむ

冬滝の天ぽつかりと青を見す

滝山を出づる沖には冬白浪

太地（たいぢ）

鯨割く血潮三和土に流れ難く

鯨の血蟹の行動さまたげず

冬潮にしづみて散らず鯨の血

鯨の血流れて海に入り沈む

海に生きし大鰭離す鯨より

閉ぢし眼の一文字雨の古鵙よ

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三三（一九五八）年十二月の条に、『新宮公民館俳句大会のため、紀南の旅に出かける。潮岬での藷掘り、那智の滝、太地では鯨を割くのを見る』とある。］

蘆刈

触らねば蘆火おとろふ刈蘆原

蘆刈がもの喰へば鋭刃やすらへり

妻遠し蘆原広し蘆刈男

高々と塔組む刈蘆に過ぎず

蘆刈の姥の重腰(おもごし)鎌させば

枯蘆中すでに枯蘆退路断つ

この風にこの枯蘆に火をかけなば

何得んと吾立つ恋得んと鹿駆く

廃戒壇あれば高まり野の穂絮

泥擾乱泥鰌いつぴき身を隠し

［やぶちゃん注：「穂絮」老婆心乍ら、「ほわた」と読む。穂綿。チガヤ・アシなどの穂のことで、かつては綿の代用とした。

どうもロケーションが判然としないので感情移入が私にはし難い句群である。「高々と塔」が「組」まれていて、「鹿」と「廃戒壇」とくれば、これは奈良のように見えるが、奈良に冥い私にはそれ以上（というかそれが正しいかも含めて）は感じが湧いて来ない。標題に「蘆刈」と持ってくれば、まずは能の「蘆刈」を読者はイメージするであろうが、それを思わせるのはせいぜい三句目の「妻遠し」ぐらいなもので、寧ろその他の句は実際のアシ・

ヨシ刈りの景物を嘱目している感を私は受ける。また能のハッピー・エンドの「蘆刈」の雰囲気は全体からは全く伝わって来ず、孤立と哀愁を全体のコンセプトしているように見える点では、「大和物語」に見るような悲劇的な男女の別離を配した蘆刈伝承や、夢幻能をインスパイアした谷崎潤一郎「蘆刈」（これは粘着質で嫌いな谷崎の作品の中でも例外的に私の好きな作品である）を匂わせているものか？　但し、それらのロケーションは難波津であり、水無瀬の宮跡の山崎であって、このロケーションとは違うような感じがする（といっても私は難波津も水無瀬離宮跡も訪れたことはない）。しかし全体、殊更にわざとらしく、それでいてどこか説明的（接続助詞「ば」の頻出が蚊柱のように忌まわしく五月蠅い）で如何にもな安っぽいクロース・アップ（C―UP）の多様が鼻につく。例えば、

「触らねば〈だから〉」（C―UP）→「蘆火」が「おとろふ」（C―UP）

「もの喰へば〈だから〉」（C―UP）→「鋭刃」が「やすら」ふ（C―UP）

「妻遠し」／「葦原広し」（パースをつける）→「蘆刈男」（C―UP）

「姥」で「鎌させば〈だから〉」（バスト・ショット）→「腰」が「重い」（C―UP）

「この風に」→「この枯蘆に」→「火をかけなば〈たとしたらどう？〉」

「恋得んと鹿駆く」→ならば〈だとしたら？〉「何得んと吾立つ」か

「廃戒壇あれば〈だから〉」→「野の穂絮」が「高ま」る（C―UP）

「泥鰌いつぴき」が「身を隠し」〈だから〉→「泥擾乱」（C―UP）

これは恐らく多佳子の実験であって確信犯なのであろうが、しかしどうもこの句群、好きになれぬ。こう評しながら、以前はいいと感じた「この風にこの枯蘆に火をかけなば」のジャンヌ・モローの「マドモアゼル」風（トニー・リチャードソン監督一九六六年フランス＋イギリス合作。因みに本句は昭和三四（一九五九）年の作）の一句も、今は全くいいと感じなくなっている自分を見出している。却って禅語染みたような印象の「枯蘆中すでに枯蘆退路断つ」の方が、断然、いい。――蘆原を分け入って分け入って分け入って――そうして――振り返ると――蘆が音もなく――閉じているのである――これもまた、私が老いたからに他あるまい。」

長浜

夕冴ゆる雪嶺ちりめん織られゆく

灰削げば真紅な炭火ちりめん織る

冬日移るちりめん白地一寸織られ

機絲の凍て柔指にほぐれ出す汐

ちりめん織る冬の一日の時間の量

寒き光織子の盆の総生毛

絲の継傷ちりめんの白地冴え

織子寒し千の縦絲一本切れ

凍て機の縦絲を歯(み)き鳴らして検る

雪嶺下藍つぼ紅つぼ深し深し

湖北尾上

沈み友禅寒水の流れゆるみ

鴫群の鴨翔つ従ひしは数羽

雪明りこゑももらさず餌場の鴨

鴨毟る雪降らざれば止まぬなり

鴨浮寝はぐれし一羽降り来たり

はぐれ鴨加はりすぐに夜の鴨

春雷のあとの奈落に寝がへりす

［やぶちゃん注：底本年譜昭和三四（一九五九）年一月の条に、『琵琶湖の長浜で、ちりめん工場を見学する、清子同伴』とある。ここ滋賀県長浜市を中心に製される縮緬は「浜ちりめん」と称し、高級絹織物の総称で滋賀県の地場産業である。「丹後ちりめん」とともに古えよりの縮緬の二大産地の一つである。ウィキの「浜ちりめん」によれば（アラビア数字を漢数字に代えた）、『古文書（『古事記』及び『風土記』）によれば、古く元明天皇の和銅五年（七一二年）に『近江国他に令を始めて綾絹を織らしむ』。光孝天皇の仁和三年（八八七年）には『近江等の国より絹を貢す』と記されている。又、平安時代の記録では蚕糸生産において上糸生産の筆頭の国とあり、近江では太古より絹織物が織られ、上質の糸を生産していたことがわかる』。近世の天正年間（一五七三年～一五九一年）には『大明国の職工が泉州堺に渡来し、日本に伝えられたとされる。豊臣秀吉による天下統一後『ちりめん』生産の中心は堺から京（西陣）に移り』、享保年間（一七一六年～一七三五年）になると、縮緬技術は丹後の加悦谷や峰山にも伝えられたという。『『浜ちりめん』の始まりは江戸時代中期に、近江浅井郡大郷村（現滋賀県長浜市）の中村林助と乾庄九郎により丹後より技術がもたらされ、大郷村の南浜、中浜、八木浜で手工業として織られていた『ちりめ

ん』が長浜に集荷され、京・大阪方面で販売されたものとされる。長浜の『ちりめん』であることから浜ちりめん（長浜ちりめん）と呼ばれた』。名織師であった『中村林助と乾庄九郎が生まれた大郷村難波は、度々起こる姉川と高時川の氾濫による水害によって年貢米も納めかねるほど疲弊していた。水害に強い桑を植え養蚕に力を入れていたが、江戸時代中期には生糸の値段が下がり、大郷周辺の村々は困窮の極みに達していた。林助と庄九郎はこの状態を何とかしたいと考えていたところ、近隣の上八木村に蚕紙を買いに来た丹後宮津の商人庄右衛門から、「丹後では『ちりめん』織りを始めてから農民にも余裕ができるようになった」との話を聞き、早速『ちりめん』織りの技術を学びに丹後に行き、又、丹後から庄右衛門に来てもらい、村の人達に技術を伝えた。林助と庄九郎は宝暦二年十二月（一七五三年一月）領主である彦根藩に届を出した上で、農閑期に『ちりめん』を織りそして販売することを始めた。これが『浜ちりめん』の最初と伝えられ、中村林助と乾庄九郎の二人は『浜ちりめん』の創始者と言われ』ているという。その後、縮緬織の『生産はすぐに大郷村周辺から長浜全域へと広がり、琵琶湖を通って京でも販売されるようになった。これに対して京の業者達が「自分たちの営業を妨げるもの」として京都町奉行に訴えでたことから、林助と庄九郎は「（浜ちりめんを京で売ったのは）私利ではなく、村の困苦を救うため」と弁解したが、許されずに京での販売を禁じられた上、捕縛・入獄させられてしまった。村人の嘆願や領主である彦根藩からの働きもあり、漸く四年後解き放たれると共に、『浜ちりめん』の京での販売も認められることになった。この時、林助と庄九郎は大変喜び、西陣に勝ったことから、自分たちのちりめんを『西勝ちりめん』と呼んだ。彦根藩は林助と庄九郎の功績を称え、二人を『浜ちりめん』の織元に任じ、製品の検査を行わせ検印料徴収の特権を与えた。これにより、織元の検印を得られない粗悪品は販売できないことから、製品への信用力を得ることができ、彦根藩は『浜ちりめん』を年貢の対象とし、藩が保護した結果重要な特産品として発展』。浜縮緬は近江商人特に湖東地区の商人によって全国的に売られるようになった。しかし、『明治時代に入り、彦根藩による保護、統制が無くなると粗製乱造されたため、一時全国において信用を大いに失った』。しかし、明治十九年（一八八六年）三月の農商務省令によって『近江縮緬絹縮業組合が創設され、

同組合による統制と県の支援による指導研究と機械化推進により、現在まで重要な地場産業の一つとして発展した。滋賀県は大正四年（一九一五年）サンフランシスコで開かれた万国博覧会に『浜ちりめん』を出展し輸出を志向したが、輸出が盛んになることはなかった』。浜縮緬の特徴は、『強撚糸を用いシボ（さざ波のような生地上の皺）の高い重目の無地織物を主体とする。『丹後ちりめん』は平織地に文様を織り出した綸子などの紋織物を主体と』し、『種類としては、シボの高い最高級の『一越ちりめん』、『古代ちりめん』、縦糸横糸を撚糸の工程で変化させた『変わり織ちりめん』、絹の紡織糸を使って織った『浜つむぎ』がある』とある。

「湖北尾上」現在の滋賀県長浜市湖北町尾上地区。ＪＲ北陸本線の長浜駅から西北へ凡そ十キロメートルの位置にある琵琶湖畔にある温泉街、琵琶湖漁業の古くからの漁港でもある。嘗ては縮緬工場も多くあったという。」

薪能

薪能枝を入日に枯桜

春夕べ舞の女面の狭き視野

咽喉笛を女面の下に薪能

薪能執しあひつつ二夕火窓

薪能雑色のみに火の熱気

薪能火窓熱しと眼に観じ

薪能悔過の女面を火の粉責め

［やぶちゃん注：何処の薪能か不詳。識者の御教授を乞う（年譜に記載なし）。最後の句の「悔過」は「けか」と読み、仏教用語で罪や過失を懺悔すること、或いは儀式の上で仏菩薩等の前で自らが犯した身体的行動上の罪悪・言動上の罪悪・心理的精神的罪悪意識を懺悔することを指す。］

壬生大念仏

「壬生念仏」は黙劇で、鉦・太鼓・笛につれて口中念仏を唱へつつ、狂言が演ぜられる。中でも「抱烙割」が代表的。

目つむれば鉦と鼓（こ）のみや壬生念仏

壬生念仏とても女（め）なればみめよき面（めん）

壬生念仏身振りの手足語りづめ

壬生念仏「喰はれ子」鬼に抱へられ

炮烙割れし微塵の微塵壬生念仏

春の日を壬生念仏が牽きとどむ

天に蝶壬生念仏の褪せ衣

［やぶちゃん注：「壬生大念仏」壬生狂言（みぶきょうげん）のこと。元来は大念仏狂言（だいねんぶつきょうげん）の一種で、濫觴は融通念仏（大念仏）の中興者円覚上人による念仏の教えを無言劇化したものとされる。融通念仏は、摂津国の大念仏寺（大阪市平野区）を根本道場として良忍（聖応大師）によって始められたもので、これはその方便してその教化のために創作された念仏狂言という。後に京の清涼寺や壬生寺などでこれを発展させた融通念仏が盛んになり、壬生寺・清涼寺・千本閻魔堂・神泉苑には円覚上人による原初に近い大念仏狂言が伝えられているという（ここはウィキの「大念仏狂言」に拠る）。ウィキの「壬生狂言」によれば（アラビア数字を漢数字に代えた）、これは毎年節分と四月及び十月に京都市中京区の壬生寺（みぶでら）で演じられる無言劇である（現在は重要無形民俗文化財指定）。約七百年の歴史を持ち、演目は現存三十曲に及ぶ。『仮面をつけた演者が、鉦・太鼓・笛の囃子に合わせ、無言で演じる。演目は全部で三十ある。演目には、勧善懲悪などの教訓を伝える話や、平家物語・御伽草子などに取材した話がある。煎餅を観客席に投げる（愛宕詣り）、紙でできた糸を観客席に投げる（土蜘蛛）、綱渡りをする（鵺）（蟹殿）、素焼きの皿（焙烙）を割る（炮烙割り）といった派手な見せ場を持つ演目もある。鉦と太鼓の音から「壬生寺のカンデンデン」の愛称で親しまれている』。『壬生狂言を伝承し演じるのは、壬生大念仏講中の人々である。地元の小学生から長老まで約四十人が壬生大念仏講中を構成し、学校通い、会社勤め、商いなどの本職のかたわらに練習をし、公演をして』おり、現在の公演は年三回で、二月の節分前日と当日の二日間の節分会、四月二十九日から五月五日までの七日間の大念仏会、十月の「体育の日」までの三日間の秋の特別公開に限られている。多佳子はわざわざ「壬生大念仏」という標題を掲げているから、この四月二十九日から五月五日までの七日間の大念仏会での嘱目吟と思われるが、年譜には記載がない。既に述べているが、鎌倉末期の正安二（一三〇〇）年、『融通念仏宗の円覚上人によって創始されたと伝えられている融通念仏の狂言』で、『拡声器のない時代に、仏教を群衆にわかりやすく説くために、大げさな身ぶり手ぶりで表現する無言劇の形態が採用されたという。念仏狂言が無言劇化した理由については、本来、大衆が念仏をする前で行なわれたものであったために、台詞を発しても念仏の声にか

き消されて伝わらないので無言になったとする説もある。なお、同じ念仏狂言でも、千本閻魔堂のものは、台詞入りで行なわれている』とあり、『江戸時代になると、布教活動としての色彩が薄れ、大衆娯楽として発展した。能や狂言、物語に取材し、新しい演目が考案された』とも記す。以上の引用や多佳子が特に挙げる演目「炮烙割（ほうらくわり）」は特に『四月の大念仏会の公演では、必ず毎日の最初に催される演目であり、二月の節分会の際に奉納された』多量の炮烙が』、この演目の最後に派手に割られることで知られる（私は同寺へ行ったこともなく、未見）。『炮烙が割れると願い事が成就するとされている』と解説にある。当該壬生狂言演舞を SankeiNews 氏のアップした「炮烙割」の動画で見られる。かなり豪快に割られるのが判る。必見。

『壬生念仏「喰はれ子」鬼に抱へられ』という句は何の演目を言っているのかよく分からない。鬼子母神を考えたが、演目一覧から見るとそれらしいのは「安達が原」ぐらいか？識者の御教授を乞う。]

桜狩

つづみうつ肉手丁々都踊

修学旅行緘黙紅き都踊

桜狩葬煙をいぶかりもせず

＊

花桐や城址虚しき高さ保（も）つ

城址の記憶落窪と金鳳華

密集の金魚に選別手網(たも)入れる

幣ひらひら夜も水口(みなぐち)の神います

まくらせる北の空にてほととぎす

暁の雨蛙また枕ひびく

ひた翔くるこゑほととぎす鳴いて過ぐ

仰臥する胸ほととぎす縦横に

噴き出づる汗もて汗の身を潔め

麦の秋無縁の基に名をとどめ

十薬の匂ひにおのれひき据ゑる

［やぶちゃん注：底本年譜に、この昭和三十四年の『初夏、「七曜」吟行句会で、大和郡山市の郡山城址、金魚養池等を吟行』と記す。私は行ったこともなく、興味もないのでこれ以上の注は附さない。正直、晩年の多佳子の句柄には全体に彼女らしいキレがなくなってしまっている。目の止まる句も頗る少ない。セレブ女流俳人の好き勝手我儘放題なアバンチュール嘱目吟にはどうも親近感が湧かぬというのが本音である。悪しからず。］

由布

ＮＨＫ・二六会の仲間とこがね丸にて別府・由布原へ旅立つ。

炎天に冥きこるごる蜂巣箱

翅のうなりが蜂の存在青裾野

近づき過ぎバスに由布岳青胴のみ

青双丘乳房と名づけ開拓民

志高湖

湖底に合す鶴見青裾由布青裾

昼浴衣地獄げむりを身に纏きて

過去見るかに老婆泉を長眺め

蜜まづき花のかぼちやに遠来し蜂

［やぶちゃん注：底本年譜に『七月、ＮＨＫ二六会員と、こがね丸にて、別府、由布原へ旅行。由布高原をドライブ、志高湖へ』とある。「ＮＨＫ二六会員」不詳。興味なし。「こがね丸」不詳。同前、興味なし。「由布原」由布高原の旧地域名と思われるが不詳。同前、興味なし。「志高湖」「しだかこ」と読む。現在の大分県別府市内の鶴見岳南東側山腹にあ

る湖。現在は「阿蘇くじゅう国立公園」に含まれ、戦前は「別府三勝」の内の一つとして有名であった別府を代表する観光地の一つ。海抜約六百メートルの高原にあり、周囲約二キロメートル・湖面積約九万平方メートル・水深約二〜五メートル。貯水量約二百五十キロトン。『キャンプ場、管理釣り場、貸しボート等の施設が整備されており、湖には白鳥が遊び、鯉が放流されている。また、南東側に位置しハナショウブの名所として名高い神楽女湖とは、遊歩道で結ばれている』。『この湖には流入する川がないため、ポンプで汲み上げた地下水を給水している。しかし、アオコの発生により水質が悪化することがあるため、湖水の浄化のために琵琶湖固有種のイケチョウガイの試験的な導入が進められている』ものの、グーグル画像検索「志高湖」を見ると景観としては実に美しいが、現況の観光事業開発としては誘致その他に大失敗した部類に入る状況下にあることが参照したウィキの「志高湖」から判る。]

*

踏みゆるめばすぐに低音稲扱機

豊年や走れば負ひ子四肢をどる

三つ星がオリオン緊める新ラ刈田

乳母車坂下りきつて秋天下

噴水を白らめ川霧とどこほる

昭和三十五年

薬師寺

強白(こはじろ)の息ぬくぬくと吉祥(きちじやう)讃

人香に仏香勝てり吉祥(きちじやうゑ)会

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三五（一九六〇）年に、『三月、東大寺二月堂の修二会（お水取）を拝する。二月堂の内陣の裏にある局(うぼね)から、桟窓(さま)格子を隔てて見る、東大寺独特の古格のあるいおおらかな声明』（しょうみょう）『を聞き、「走りの行法」や「ダッタンの行法」を見る』とある。後にも出る「桟窓格子」はよく分からない（興味なく、特に調べたくもない）。興味もないのでグーグル画像検索「桟窓格子」をリンクしておく。「走りの行法」は三月五日からの三日間及び三月十二日からの三日間、後夜の悔過作法の前に行われ、本尊十一面観音の十一の面の内の頂上仏面を「南無頂上」「南無最上」などと呼称して礼拝、須弥壇の周りを回りながら一人ずつ礼堂に出て五体投地する。だんだんと歩調が早くなり、はじめは木の沓(さしかけ)を履いているが、やがてそれを脱いで最後に裸足で走るようになる、とウイキの「修二会」にはある。「ダッタンの行法」同前のウイキの「咒師作法(しゅしさほう)と達陀(だったん)の行法」（ルビは私が振った）の中に、『咒師作法は咒師が須弥壇の周りを回りながら、清めの水（洒水）を撒き、印を結んで呪文を唱えるなど、密教的な儀式である。鈴を鳴らして四方に向かって四天王を勧請するのもその一環で』、三月十二日以降の三日間は、後夜の咒師作法の間に達陀の行法が行われるとし、達陀(だったん)の行法は、堂司以下八人の『練行衆が兜のような「達陀帽」をかぶり異様な風体で道場を清めた後、燃えさかる大きな松明を持った「火天」が、洒水器を持った「水天」とともに須弥壇の周りを回り、跳ねながら松明を何度も礼堂に突き出す所作をする。咒師が「ハッタ」と声をかけると、松明は床にたたきつけられ火の粉が飛び散る。修二会の中でもっとも勇壮でまた謎に満ちた行事である』とある。国家鎮護

をのみ主体として衆生を救わない東大寺祭祀儀式には私は全く興味がない。ご自分でお調べ戴きたい。なお、『その日の全ての行法を終えて参籠宿所に戻るときには「ちょうず、ちょうず」と声を掛け合いながら石段を駆け下りる。「ちょうず」とは手洗い、トイレのことである。ある時、行法を終えて帰ると、烏天狗たちがやってきて行法のまねをしていたことがわかったので、ちょっと手洗いにゆくのだと思わせるためにこういうのだそうである』と付記されてあることは引いておこう。「強白」不詳。興味なし。なお、東大寺法華堂には重要文化財塑造の吉祥天立像がある破損は激しいが、日本最古級の吉祥天像として貴重とされる。「吉祥讃」吉祥天を祀る呪言と思われるが不詳。興味なし。前注参照。「吉祥会」修二会でも特に前記の吉祥天を祀る祭儀と思われるが不詳。興味なし。]

*

炉より立ちひとりの刻をさつと捨つ

炉框の方形の方待ち時間

熾る炉火その上言葉ゆききする

ただ寒き壁大仏の背面は

冬晴の影ふかぶかと伽藍の溝

森をゆく頭上に遠き秋の晴れ

湖北に寝てなほ北空の鴨のこゑ

右傾直せば左傾不機嫌耕耘機

心底より深杢ゆるす冬泉

うつむくは堪へる姿ぞ髪洗ふ

前燈に枯野枯道行方知らぬ

線虫載せおのが手相をおのが見る

蜂もがく生きるためにか死ぬためにか

溺るゝとも蜂一匹の死に過ぎず

霞む山引つかへさざる鴉の翼（はね）

山火の夜光りもせずに溝流れ

紅と方向楷示器吹雪の中の意志

雪とけて凍る靴底一直路

暗くふかく家裡見えて雪深道

お水取

火がついて修二会(しゅにえ)松明(たいまつ)たちまち惨

火の修二会闇に女人を結界して

修二会の闇われ方尺の女座を得て

桟(さま)窓格子透きてへだてて修二会女座

火を滴々修二会松明炎えほろぶ

走りの行法

刻みじかし走りて駆けて修二会僧

修二会走る走る女人をおきざりに

飴ふくむつばとくとくと修二会の闇

一睡さめ身が覚めきつて修二会女座

ダツタンの行法

水散華火散華修二会僧たのしや

西天に赫きオリオン修二会後夜

＊

椿華鬘（けまん）重し花蕊をつらぬきて

［やぶちゃん注：「華鬘（けまん）」は通常、仏前を荘厳（しょうごん）するために仏殿の内陣や欄間などに掛ける仏具で、金銅・牛革製の円形又は楕円形のものに唐草や蓮華を透かし彫りにして下縁に総状の金物や鈴を垂らしたものを言うが、ここは椿の花全体のそれを華鬘に譬えたもの。］

落椿くもる地上の今日の紅

二夕雲雀鳴きあふ低き天もたのし

唐招提寺

散りづめの桜盲眼もつて生く

嘴（はし）こぼる雀の愛語伽藍消え

［やぶちゃん注：「愛語」は「あいご」で、仏語。優しい、相手の気に入る、相手の心に訴える、暖かい心の籠った言葉をかけることを指す。仏教を実践する人が人々を惹きつけるために具えているという四種の美点たる「四摂事法（ししょうじぼう）」（他に分かち合う「布施」・相手のために相手を利する「利行（りぎょう）」・平等に接する「同事」）の一つで、「愛語摂（あいごしょう）」とも言う。ここはそれを多佳子は雀の囀りに聴いたのである。］

＊

こゑ断つて虻が牡丹にもぐり入る

牡丹畑はげしき雨に雨衣頭巾

生きてゆく時の切れ目よ藤垂りて

青嵐ガラス戸ひらき何招ず

青嵐危ふきときは身を屈し

静臥の上巣藁一本づつ加はる

静臥の上巣つくり雀しやべりづめ

蟻殺し殺し身力を信じくる

青嵐静臥の椅子に身を縛し

おとろへて生(せい)あざやかや桜八重

病蝶を一蝶の翅うちうちて

蝶蜂の薊静臥の主花として

眼つむれば泉の誘ひひたすらなる

静臥飽く流泉のこゑ蜂のこゑ

ほととぎす叫びをおのが在処(ありど)とす

K病院

走馬燈昼のからくり風にまはる

天神祭

病院の壁に囚はれ祭囃子

鉄格子天神祭押しよせる

＊

九月来箸をつかんでまた生きる

九月の地蹠ぴったり生きて立つ

朝より暑汝も飢ゑ顔煤雀

虫のこゑベツド鉄脚つつぱつて

ちちろ虫寝よ寝よとこゑ切らず

深青の天のクレパスうろこ雲

人恋へり鱗つばらにうろこ雲

起きて見る木床秋日が煮つまつて

軽々と抱きて移さる秋日和

紅き実がぎつしり柘榴どこ割つても

深裂けの柘榴一粒だにこぼれず

雀・仔猫病院やつと露乾く

点滴注射遠く遠くに木の実落つ

露ベツド人の言葉を瞼で享け

しやぼん玉吹いてみづからふりかぶる

雁のこゑわが六尺のベツド過ぐ

［やぶちゃん注：「六尺」一・八メートル。］

病み勝つて日々木の葉髪木の葉髪

忘れゐし花よ其白き枇杷五瓣

柿・栗吾にもたらし食べよ食べよ

秋の蝶病院のどの屋根越え来し

綿虫の浮游病院の屋根越せず

病室に柿色かたまる柿もらひ

蝙蝠がゆきて病院燈がともる

晴れて到る人の訃シベリヤ高気圧

霧の太陽すずめの中の病院鳩

病院の六十年史子連れの油虫

十二月十日退院す

退院車入りてまぎれて師走街

藁塚が群れて迎ふる退院車

臥して見る冬燈のひくさこゝは我家

［やぶちゃん注：多佳子はこの昭和三五（一九六〇）年七月に胆嚢を病み、大阪中之島の大阪回生病院に入院しているから、「K病院」とはそこを指す。句中に出る「柘榴」は見舞った俳人大喜多冬浪の持参したもの。句にあるように、年譜によれば多佳子はベット上でシャボン玉を吹いて遊んだりした（実にお目出度い入院生活である）。この入院期の句群を年譜記者堀内薫は、『多佳子俳句の真声、新境地の句』で実に『自由な表現の写生句』とし、『誓子の内部構造俳句を必死に勉強した』結果、この期に及んでそれが遂に『多佳子の血肉と化し、多佳子の気息を通して、新らしく生まれ出た表現の句である』と手放しで絶賛している（言っておくが、私は全くそう感じない）。因みに、実際の退院は、前書より五日後の十二月十五日で入院は実に六ヶ月に及んだ。］

昭和三十六年

崖

臥す顔にちかぢか崖の霜の牙

今日も臥す立ちはだかりて枯れし崖

綿虫の綿の芯まで日が熱し

［やぶちゃん注：「綿虫」既注。］

冬日浴足の爪先より焼きて

髪洗ひ生き得たる身がしづくする

臥す平らつづき寒肥の穴ぽつかり

霜を踏み試歩の鼻緒をくひこます

枕辺に揚げざる凧と突かざる羽子

われとあり天を知らざるわが凧よ

凧・独楽・羽子寄りあふわれと遊ばずば

独楽とあそぶ壁に大きな影おいて

厚氷金魚をとぢて生かしめて

もがり笛枕くぐりて遁げ去りぬ

［やぶちゃん注：「もがり笛」既注。］

垂直に崖下る猫恋果し

［やぶちゃん注：晩年の多佳子の句の内でも特に私の偏愛する一句。］

崖下に臥て急雪にめをつぶる

養身や目鼻にからむ飯(めし)のゆげ

枯田圃日風雨風吹きまくり

回想

話しゆく体温の息万燈会

万燈の誘ひ佳き道岐れをり

鬼の闇一文字深く溝の黒

［やぶちゃん注：「万燈会」「万燈」万灯会（「まんどうゑ（まんどうえ）」と正確には濁るのが正しいようである）は東大寺・薬師寺・高野山のそれが有名であるが、これは単なる思い付き乍ら、この三年前の昭和三三（一九五八）年二月三日に誓子と一緒に奈良春日神社の万燈籠を見た際の「回想」ではあるまいか？　但し、春日神社のそれは通常は「万燈籠」と呼ぶ。］

＊

我ら来て人気(ひとけ)枯山三時頃

降る雨が浸まず流れて二月の地

風花の大勢小勢待つ時間

昆虫の肢節焼野の灰ぼこり

土に憩ひ眼にひろがれる野焼黒

恋負け猫ずつぷり濡れて吾に帰る

山中に恋猫のわが猫のこゑ

土筆の頭遠くに人も円光負ふ

［やぶちゃん注：パースの効いた夢幻的な佳句である。］

近くして静かな修羅場昼山火

北天の春星の粗に北斗の鉾

［やぶちゃん注：個人サイト「宇宙（太陽系・スタートレック）」の「春の星座」を参照されたい。冒頭で『春の星は、全体的に明るい星が少ないのが特徴ですが、そのためかえって大きな星座が目につきます。まず北の方角を見ると、ひしゃく型に並んだおおくま座、北極星をもつこぐま座があります』とあり、「粗」（「まばら」と訓じているものと思う）の意味が判る。］

桜吹雪ござ一枚の上に踊る

疲れ知らぬ韓鼓どどどど桜の山

［やぶちゃん注：「韓鼓」「どどどど」というオノマトペイアからは「チョアゴ（座鼓）」「ヨンゴ（龍鼓）」「プク」等の和太鼓に似た形状のものが想起されるが、不詳。識者の御教授を乞う。］

青き踏む試歩よ大きく輪を描いて

いくらでもあるよひとりのわらび採り

風吹いて帰路の白道わらび採り

誕生仏立つ一本の黒き杭

［やぶちゃん注：寺院に於いて通常、四月八日に行なう釈迦の誕生を祝う仏生会（ぶっしょうえ）＝灌仏会（かんぶつえ）の甘茶をそそぐ誕生仏の像が年を経て「黒き杭」の如く見える景か。］

熱灰の焼野日輪直射して

とび出せし犬麦畑の滝地帯

崖山吹倉暗黒の覗き窓

［やぶちゃん注：「倉」とは崖にある穴、時代的に見て防空壕の跡か。私（昭和三二（一九五七）年生）の経験上、しばしば防空壕跡は当時、民家や農家の貯蔵庫や倉庫に転用されていた。］

罪障のごとしその根の落椿

［やぶちゃん注：やや難解に見えるが、映像的に私の偏愛する一句である。］

奈良飛火野

藤の森日曜画家に妻のこゑ

わが頭上無視して藤の房盗む

藤盗む樹上少女の細脛よ

女を飾る木よりぬすみし藤をもて

藤盗み足をぬらして森を出る

いなびかり髪膚をもつて堪へてをり

臆病なとかげが走り瑠璃走る

［やぶちゃん注：「飛火野」「とぶひの」と読む。狭義には奈良の春日山の麓の春日野の一部であるが、広義には春日野の別名でもある。地名は元明天皇の頃、ここに烽火台（のろし）が置かれたことに由来するという。］

山城棚倉

土中より筍老いたる夫婦の財

筍の穴が地軸の暗を見す

筍と老婆その影むらさきに

凭りて刻長し藤咲く野の一樹

［やぶちゃん注：「山城棚倉」京都府木津川市山城町のＪＲ棚倉駅付近か。地名そのものは万葉以来の歌枕である。底本年譜の昭和三六（一九六一）年の項に、『初夏、山城の棚倉から筍を売りに来るお婆さんと親しくなり、美代子同伴、筍掘りを見せてもらう』とある。私などは筍掘りは初春のイメージであるが、夏の季語で、実際、三月下旬から五月下旬が筍狩りの季節だそうである。］

＊

奈良白毫寺村

田を植ゑてあがるや泳ぎ着きし如

妻の紅眼にする田植づかれのとき

［やぶちゃん注：「白毫寺村」「びやくがうじむら（びゃくごうじむら）」と読む。は奈良市街地の東南部の、現在の奈良県奈良市白毫寺町。名は域内にある真言律宗高円山白毫寺に由来する。］

＊

男女入れ依然暗黒木下闇

仔の鹿と出会がしらのともはにかみ

梅壺の底の暗さよ祖母・母・われ

一粒一粒漬梅かさね壺口まで

漬梅を封ぜし壺を撫でいとしむ

漬梅と女の言葉壺に封ず

金銀を封ぜし如き梅壺よ

梅干を封ぜし壺のなぜ肩よ

透ける簾に草炎の崖へだつ

稔、庭にＤＤＴを撒く。

こがね虫千殺したり瑠璃の千

七月の光が重し蝶の翅

十代の手足熱砂に身を埋め

海昃りはつと影消す砂日傘

けふの果紅の峰雲海に立つ

乳母車帰る峰雲ばら色に

華麗なるたいくつ時間ばらの園

爛熟のばら園時間滞る

らん熟のばら園天へ蠅脱す

長良川

山下鵜匠邸庭にわが句碑立つ、誓子先生の句碑とともに。東京より三人の娘、三野明彦・武彦来。美代子・稔、奈良より加はる。

姉妹同じ声音蟬鳴く中に会ひ

［やぶちゃん注：前書の「美代子・稔、奈良より加はる」の中間の読点は恣意的に挿入した。「[illegible]」は底本の用字。以下同じ。底本年譜の昭和三六（一九六一）年の七月の条に、『岐阜長良川河畔の鵜匠山下幹司邸の前庭に、誓子との師弟句碑立つ。両句共に、三十一年七月、鵜舟に乗った時の句』とある。以下の二句である。

鵜篝の早瀬を過ぐる大炎上　　誓子

早瀬過ぐ鵜飼のもつれもつれるまま　多佳子

『除幕式に、誓子、波津子、多佳子、かけい、双々子、薫ら出席。また、東京より三人の娘と三野明彦、武彦。奈良より美代子、稔』とある。誓子満五十九、多佳子満六十二であった。」

籐椅子が四つ四人姉妹会ふ

[illegible]声に高音加はる死は遠し

＊

女やすむとき干梅の香が通る

紅き梅コロナの炎ゆる直下に干す

甲虫飛んで弱尻見せにけり

西日浄土干梅に塩結晶す

＊

をどり太鼓すりばち沼に打ちこんで

をどり衆地上をよしと足擦つて

をどりの輪つよし男ゐて女ゐて

かの老婆まためぐりくるをどりくる

夜の土に腰唄はずにをどらずに

尽きぬをどりおきて帰るや来た道を

をどり太鼓びんびん沼がはね反す

子が持つて赤蠟赤光地蔵盆

わが燭の遅れ加はる地蔵盆

＊

曼陀羅の虫の音崖の下に寝て

［やぶちゃん注：「曼陀羅」の用字はママ。］

甲虫紅き縫絲がんじがらめ

郭公に刻をゆづるよ暁ひぐらし

吾去れば夏草の領白毫寺

試歩を寄す秋天ふかき水たまり

翅立てて蝶秋風をやり過す

蜂さされ子に稲を刈る母の濃つば

プールサイドの椅子身をぬらさざる孤り

月遅し木星が出て海照らす

流れ急どかっと曼珠沙華捨つる

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三六（一九六一）年には先の七月の条に続いて、ただ一行、『九月、身体の調子悪くなる』とあって、この年の叙述そこで終っている。］

昭和三十七年

障子貼る

障子貼るひとり刃のあるものつかひ

障子貼る刃ものぬれ紙よく切れて

昼臥しに風さらさらと新障子

愛しさや恋負け猫が食欲(ほ)れり

奴凧夜覚の顔のわが近くに

独楽あそび手窪のごとき地を愛し

鳥渡る群ばらばらに且つ散らず

綿虫とぶものに触れなばすぐ壊えん

頭も見せず蒲団を被れば一切消ゆ

＊

薬師寺

花会式造花にいのちありて褪せ

＊

折ればわがもの冬ばらと園を出る

脚抱きて死にきれぬ蜂掃き出せり

あやめ池動物園

一冬の玩具熊に木の切れつ端

冬兎身の大(だい)の穴いくつも掘り

独楽

元旦、丘本風彦氏来訪。独楽を習ふ。

頭をふつておのれ止らぬ勢ひ独楽

何の躊躇独楽に紐まき投げんとして

掌にまはる独楽の喜悦が身に伝ふ

掌に立ちて独楽の鉄芯吾(あ)をくすぐる

寝正月夢湧きつげば誰より贅(ぜい)

寝正月鶲を欲れば鶲来る

［やぶちゃん注：「鶲」は「ひたき」。スズメ目スズメ亜目スズメ小目ヒタキ上科ヒタキ科 Muscicapidae に属するヒタキ類を広く指すが、正月の嘱目吟からは同ヒタキ科（ツグミ科 Turdidae ともする）ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus* ではなかろうか。］

わが起居に眼をみはるもの奴凧

りんりんたる白羽破魔矢に鏃なし

白破魔矢武に苦しみし神達よ

羽のみだれ正(ただ)す破魔矢に息かけて

わが寝屋の闇の一角白破魔矢

養身のほとりにつよく破魔矢おく

［やぶちゃん注：以上の破魔矢句は個人的に好きな多佳子晩年の句群である。］

籾殻の深きところでりんご触れ

［やぶちゃん注：私の偏愛する句である。］

寒肥の大地雪片ふりやまず

手をつけば土筆ぞくぞく大地面

野に遊ぶ土管胎内くぐりして

泉の底天より早く星を得て

はるかなる雪嶺のその創まで知る

もがり笛厚扉厚壁くぐり来る

亡き夫顕(た)つごと焚火あたたかし

金魚池水輪もたてず雪ふりて

［やぶちゃん注：「丘本風彦」一時期、『天狼』の編集人であった人物であるくらいしか分からない。］

大石忌

祇園一力にて

燦と燭良雄忌はまた主税忌よ

大石悼む低き鴨居のその低きも

大石忌仮恋とても恋佳きぞ

大石の死の刻春日この位置に

［やぶちゃん注：「大石忌」赤穂浪士四十七士の大石良雄（万治二（一六五九）年～元禄一六（一七〇三）年）とその嫡男良金(よしかね)（元禄元（一六八八）年～元禄十六年：通称、主税(ちから)）の忌日は旧暦二月四日（新暦一七〇三年三月二十日相当）である。主税は享年十六歳、無

論、浪士中、最年少であった。底本年譜の昭和三七（一九六二）年の条に、『三月二十日、大石忌に誓子と京都「一力」に赴く』とある。「祇園一力」大石内蔵助が幕府や吉良を欺くために豪遊したとされる花見小路の角にある茶屋。現存する。個人サイト「中之島のＢＯＷ」内の「祇園一力亭」をご覧あれ。私は生涯、行くこともありますまい。」

花子さん

老の妓の笛座ゆづらず大石忌

［やぶちゃん注：「花子」不詳乍ら、祇園の老妓の名と思しい。］

＊

投げ独楽の遠くにまはる吾と遊び

親よりも頭勝ちむつくり巣立鳥

泉の円一方切つて流れ出す

鈍男野焼きしことに勇みをり

［やぶちゃん注：「鈍男」は「にぶをとこ」と読むか？　差別的な意識が働いている句の如く読めて、私は不快である。］

＊

紅椿直哉が捨てし涸れ筧

［やぶちゃん注：「直哉」は志賀直哉か？　孰れにせよ、意味不詳。識者の御教授を乞うものである。］

三鬼氏を悼む

桜の下喪の髪にビンいくつも插し

花万朶しづもるや喪の重き如

桜寒む生死の境くつきりと

桜見てひとり酌む酒手向け酒

げんげ畑そこにも三鬼呼べば来る

花万朶皮膚のごとくに喪服着て

［やぶちゃん注：この句、私は強く惹かれる。］

眼にあまる万朶の桜生き残る

喪服着て花の間いそぐ生き残り

桜寒む熱き白湯飲み生一途

日をつつむ西方桜死は遠し

［やぶちゃん注：「三鬼」多佳子が終生兄事し続けた西東三鬼（彼女より一つ年下）は昭和三七（一九六二）年四月一日、胃癌のため満六十二で永眠した。この追悼句群はその死への苛立つような同調性の「黒」と、それに応ずる眼前の桜花の生々しい「生」の色彩が恐ろしいまでにエッジを鋭くしており、映像化してみたい欲求に駆られる優れた句ばかりである。私の偏愛する西東三鬼の私のオリジナル句集はこちらにある。未見の方は、是非、どうぞ。］

＊

踏み込んで大地が固しげんげ畑

げんげ畑坐ればげんげ密ならず

蝶翅をつかへり風の群れ来るに

東大寺戒壇院

寒き戒壇人が恋しくなりて降る

鵜飼

山下幹司氏を訪ふ。

鵜飼見る盲ひ鵜匠と務並べ

鵜舟より火花とびくる盲鵜匠

かなしき距て鵜篝と盲鵜匠

盲鵜匠疲れ鵜羽うつ翼風

［やぶちゃん注：「山下幹司」（明治二七（一八九四）年～昭和四〇（一九六五）年）大正から昭和の鵜匠。注では名は既出であるが、データを示す。岐阜県出身で岐阜中学卒。大正五（一九一六）年に宮内省式部職鵜匠に任じられた。昭和一四（一九三九）年にサンフランシスコ万国博覧会で長良川鵜飼を世界に紹介し、岐阜市の観光の目玉に育てた（講談社「日本人名大辞典」に拠った）。］

＊

出陣の稚き眉目の武者人形

牡丹畑日熱りのいま入り難し

みごもりて盗みて食ひて猫走る

捨猫の寄りかたまるを日がぬくめ

捨猫によびかけられて見送らる

わが寝屋に出でし百足虫は必殺す

百足虫殺さむとすわれの力頼み

雨風に巣藁のなびき法華尼寺

［やぶちゃん注：「巣藁」歳時記に「巣藁雀（すわらすずめ）」がある。雀の巣と一応採っておくが、私は雀ではないと個人的には思う。「法華尼寺」不詳。固有名詞ではなく、どこかの日蓮宗の尼寺かと思われる。識者の御教授を乞う。］

くろがねの甲虫死して掌に軽し

悲しき夏百日のはじめの日

わが髪にぶんぶんもつれ啼きわめく

蜥蜴食ひ猫ねんごろに身を舐める

［やぶちゃん注：選ぶ語とその音律のエッジが如何にも多佳子らしいが、往年の切れがないのは少し淋しい。］

猫走る白斑野分の暮れんとして

野分の燈鳴かぬちちろがうつむきて

炎天下夫婦遍路の白二点

［やぶちゃん注：これは多佳子と亡き夫豊次郎の幻像である。と同時に――私と「誰か」でもある――］

うろこ雲声出すことを禁じられ

いのち守る秋の簾を地上まで

月祀る起きて坐りて月に照り

蜻蛉の翅枯葉のごとく指ばさむ

指の間に枯葉の音す蜻蛉の翅

蜂の巣をもやす殺生亦たのし

蜂巣もゆる紅き舌のふつと見え

もえ難き蜂巣仔蜂の生詰る

炎えてゐる巣よりこぼれて蜂白子

入日に蜂とべり焼きたる巣の蜂か

［やぶちゃん注：若い頃は、「蜻蛉の翅」以降の七句に私はぞくぞくした――しかし今――不思議に響いて――こない――］

角伐り

角伐り場土壇場へ鹿追込めり

角伐り場血ぬれて土が傷つけり

角重し生きし鹿より伐りとつて

鋸の歯に鹿角(しかづの)最後まで硬し

走り去る男鹿(を)男の角失ひて

斎かれて鹿の伐り角枝交す

［やぶちゃん注：「斎かれて」は「いつかれて」で、ここでは鹿が角伐りをして貰い、神に仕える如く、人間から大事に世話をされて、の謂いであるが、そこには神鹿として心身の汚れを去って神の御使たるものとして仕えられてのニュアンスを言わずもがなに含む。］

角伐り場解きたるあとは野の平ら

角伐り場虹がかかりて凄惨に

犠牲の鹿投げ縄からみなほ駆ける

［やぶちゃん注：私は「縄」の字が生理的に嫌いである。敢えてここのみ「縄」とさせて

戴いた。底本年譜の昭和三七（一九六二）年十月の条に、『十五日、奈良公園の「鹿苑」にて、角伐りを薫と見る。病後初めての吟行で、「寒い」と言い、しばらく見て去る』とある。」

昭和三十八年

大和美し

大和美（うるは）しみぞれ耕馬を眼にせずば

日向にゐて影がまつくら手毯つく

竹馬を御す手胸辺にやすみなし

羽子つよくほじきし音よ薄羽子板

勝ち勝ちて天に残りし孤つ凧

＊

神楽ひよつとこ神楽おかめの惚れ手振り

神楽の世をんなおかめの妬（や）き手振り

泣きじやくる神楽おかめの笑ひ面

年迎ふ櫛の歯ふかく髪硫きて

除夜の鐘打ちつぎ百を越えんとす

除夜の鐘大切なこの歳を病み

火を恋ふは岔恋ふなり落葉焚き

熟柿つつく鴉が腐肉つつくかに

書を曝す中に紅惨戦絵図

＊

猟銃音わが山何を失ひし

銃音圏逃げる真の生きる翼

雉子置きしところにその香とどこほる

雉予科るつめたき水に刃をぬらし

つよき香の雉子食ふいのち延ばすとて

雉子食ふや外の暗黒締切つて

暮れ土に雉子の羽毛の一羽分

天と遊ぶわが凧の絲のばしきつて

湯気ガラス外（と）より見られず外を見ざる

湯気ガラス夜は樺色の燈を芯に

新薬師寺

またたくは燃え尽きる燭凍神将

少年の冒険獲もの一氷片

氷塊の深部の傷が日を反す

［やぶちゃん注：以上の二句は――今の私が――多佳子の晩年句群で認めるところの偏愛句である。］

寒燈を当つ神将の咽喉ぼとけ

［やぶちゃん注：底本年譜の昭和三八（一九六三）年の一月の条に、『十三日、奈良の薬師寺にて「七曜」初句会に出席、句帳に「参会者四十余名。なごやかなり。楽し。」と。これが多佳子最後の吟行となる』とある。］

＊

低き凧おもしろたえず風ぐるひ

天知らぬ凧を揚げむと野に抱き来

雪降る中髪洗ひたる顔あげる

オリオンが方形結ぶ野火余燼

山焼きし余塩もなしや天狼下

荒ラ凧の絲がわが手に刃なす

万燈籠

なんといふ暗さ万燈顧る

万燈道けものの匂ひかたまり過ぐ

木下利玄に歌あり。

万燈会廻套利玄とすれちがふ

［やぶちゃん注：「廻套」は恐らく「まはし（まわし）」と訓じてよう。「二重廻し」が元の謂いで、紳士向けの和装用コート、「トンビ」とも言った。

和歌嫌いの私は、珍しく何故だか分からぬが、若い頃から木下利玄（明治一九（一八八六）年〜大正一四（一九二五）年）の短歌に惹かれてきた。この多佳子の言う「木下利玄に歌あり」というと、幾つかの歌が浮かびはする。しかし、それはもしかするととんでもない誤りであるかもしれない（それらは実はことごとく彼女の好きな実際の春日大社の中元万燈籠とは実は無縁なものである）。だから私は多佳子が言う「歌」は何かは指し示し得ない。しかしこの一首は――いい。多佳子は確かに――すれ違ったのだ――振り返ったら――その「廻套」の後ろ姿は――人ごみへ――万燈の彼方へ――消えて行ったのである……」

K病院再び

入院車ゆきて深々雪轍

病院のガラス春雲後続なし

春の河夜半に大阪ネオン消す

雪はげし化粧はむとする真顔して

雪映えの髪梳くいのちいのりつつ

ガラス透く春月創が痛み出す

暁春やベッドの谷に附添婦

一羽鳩春日を二羽となり帰る

風に乗る揚羽の蝶の静止して

［やぶちゃん注：「K病院」多佳子は昭和三八（一九六三）年二月、大阪回生病院に入院（年譜には『再入院』とある）した。底本年譜には『開腹の結果、肝臓癌及び胆嚢癌』で、既に周囲のリンパ腺に転移しており、『右半身の麻痺障害増加』が見られ、『手遅れなので、切除せずに閉じ』た。事実は知らされず（叙述からの推定）、『多佳子は手術により悪い物が除去されたと喜ぶ』とある。］

＊

雪の日の浴身一指一趾愛し

［やぶちゃん注：――その最期の最後まで多佳子は――慄っとするほど――確かに――美しい――］

雪はげし書き遺すこと何ぞ多き

［やぶちゃん注：橋本多佳子は昭和三八（一九六三）年五月二十九日午前零時五十一分に逝去した。満六十四歳であった。

なお、底本ではこの後に『昭和四十年三月』のクレジットで、『橋本多佳子』という署名を最後に記す「あとがき」があるが、その内容は全文が明らかに四女で俳人の橋本美代子の筆になるものであるので、電子化しない。

彼女の最後の句集「命終」の本文はこの句で終わっている。「雪はげし」――それは――俳人多佳子の熱情の――オリジナルな「絶対」の語であった――］

既刊四句集及び遺稿句集「命終」未収録作品

［やぶちゃん注：以下、生前の句集及び遺稿句集「命終」に採られなかった未収録作品を底本である「橋本多佳子全集　第一巻」（一九八九年立風書房刊）の「補遺（句集未収録作品）」（『自・大正十五年』『至・昭和三十八年』というクレジットが附されてある）から電子化するが、私のポリシーに従い、昭和二〇（一九二五）年までの句は総て恣意的に正字化した。底本では出典元が句群の最初にゴシックで下方に示されてあるが、このデータは私の注の形で後ろに回した。］

大正十五（一九二六）年

櫨紅葉芋洗ふ手に流れ寄り

［やぶちゃん注：俳誌『天の川』掲載分。「櫨紅葉」は「はぜもみぢ（はぜもみじ）」と読む。秋に美しく紅葉するハムクロジ目ウルシ科ウルシ属ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* の紅葉を指す、確信犯的季語を目指して造られたと思しい季語である。多佳子満二十七。句作開始から四年目の一句である。］

昭和二（一九二七）年

たんぽぽの花大いさよ蝦夷の夏

樺太旅行

大干潟打よす昆布そのまゝに

うとみ見る我丈ほどの女郎花

［やぶちゃん注：「樺太旅行」とあるが、多佳子が夫豊次郎と鉄道省主催の二週間の「樺太・北海道旅行」に身重で旅立ったのは大正一四（一九二五）年の七月末であるから（当時多佳子二十六歳）、この二句は旧吟の推敲形か回想吟である。］

幌内川

夏川や板ごと流るゝ大朽木

［やぶちゃん注：「幌内川」は「ほろないがは（ほろないがわ）」と読み、アイヌ語の「ポロ・ナイ」（「大きい」或いは「親の」・「川」）に由来するため、実は樺太・北海道及び東北地方に多くある川の名である。ここでは彼らの旅行が「樺太・北海道旅行」であったことから特定は出来ないが、直感的にはダイナミックに樺太の北から南へと流れる幌内川かと私は思った。この川は長さ約三百二十キロメートルで、樺太日本統治時代当時の日本にあっては利根川に匹敵する長さを誇っており、当時のソヴィエト領であった北樺太を水源とすることから日本唯一の国際河川としても知られていた（以上はウィキの「幌内川」と「幌内川（樺太）」を参考にした）。］

麻雀をしまひし卓や冬牡丹

金屏につぼみまろさよ雛の桃

朝霧や帆あげしまゝの止り舟

灯をめぐる大蛾のかげや蚊帳くらき

［やぶちゃん注：以上、俳誌『ホトトギス』掲載分。最後の句の「灯」はママとした。実はこの年の一月号の『ホトトギス』雑詠欄で、多佳子は最初の句「たんぽぽの花大いさよ蝦夷の夏」（署名は「多加子」）で初入選している（底本年譜に拠る）。］

胸高にささげし膳や雛の前

振返へる人美しや雛の市

蜆舟いつか去りたる窓の景

笠深の笑顔幼なし蜆賣

カーテンに月の若葉のゆるゝ影

若き騎手若葉くぐりて現はれぬ

濃むらさきもぐ手そむかや茄子のつゆ

茄子もぐや草履にふみし草の丈

夏の夜や驟雨くるらし樹々の風

化粧ひしも我眉けはし夏の宵

露草や郵便まてる門の坂

夏寒しくれてつきたる山の驛

山裾や萩の見え來し海の色

ふみ入りし小笹深さよ女郎花

夏座敷客間へくゞる簾のかず

［やぶちゃん注：俳誌『天の川』掲載分。多佳子、二十八歳。］

昭和三（一九二八）年

萩の風葉うらかへして渡りけり

裏門の石段しづむ秋の潮

裏門を入り來し海女の祭髪

柴漬の舟あらはれぬ窓の景

窓の海今日も荒れゐる煖爐かな

裏門や潮ひくあとの花芥

箒目のまだ濡れやらず黄楊の雨

春蟬や窓の松風つよからず

花葛のひきおろされてあらけなや

濃き淡き霧の流れや日のあたり

乗捨てし駕まだ見ゆれ霧の中

［やぶちゃん注：「乗捨てし駕」時代詠？　或いは後の方に出る普賢岳登山用の駕籠か？　以上、『ホトトギス』掲載分。総てではないが、主なロケーションは明らかに海浜の櫓山荘と見てよい。底本年譜によって、「裏門の石段しづむ秋の潮」が同誌の三月刊号に、「窓の海今日も荒れゐる煖爐かな」が六月刊号に載ることが判った。］

新涼の沼にうつりて流れ雲

山霧の下りて色濃き野菊かな

よみがへる野菊の色よ片手桶

谷橋に湯けむりのぼる野菊かな

深々と磐石しつむや革もみじ

月光にこぎ入る舟の影ありぬ

野菊折るや地獄温泉けむりながれくる

［やぶちゃん注：かなり思い切った破調である。「地獄温泉」現在の熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陽（旧長陽村）にある温泉か。］

初雪や椋鳥あそぶ廣芝生

慈善鍋みかんの皮のふかれゆく

蓬萊丸にて

早靷の風おさまりし暖爐かな

［やぶちゃん注：「蓬莱丸」大阪商船所属九千百九十二トンで、台湾航路（神戸―基隆（キールン）線）として大正一三（一九二四）年六月より就航した貨客船に「蓬莱丸」（漢字が違うのに注意）があるが、それか？　ほかにも同名の舟はあるが貨物船であったりする。識者の御教授を

乞う。]

木彫雛灯ゆるゝ御衣のひだ深き

[やぶちゃん注：「灯」はそのままとした。]

裏門や夕潮よする落椿

咲きみちし寂しさありぬ寒牡丹

春めける雨垂をきく火桶かな

おほわだへ日向うつりぬ冬の山

春寒や砂にくひゐる櫻貝

まゆ玉の散るをくべたる暖爐かな

春寒や砂をかみたる櫻貝

春寒の雨となりたる暖爐かな

春寒の葉もれ日ありぬ藪椿

松内の俥ゆききや雪の町

春月や今宵の客に暖爐たく

こゝかしこ散りつぐ花の小龍卷

夜振火の松間がくれにあらはれぬ

［やぶちゃん注：「夜振火」「よぶりび」とは一般には川漁の一種である（但し、河口付近や岩礁性海岸域などでも行う）。単に「夜振」とも呼ぶ。主に夏場に於いて（必ずしも夏に限る訳ではない）闇夜に松明などの明りを灯してそれを大きく振ってその火影を目指して寄ってくる正の走光性を持つ川魚や甲殻類及び沿岸性海棲生物を、網で掬い獲ったり、ヤスで突いたりして捕える古くからある漁法である。わざわざかく妙な補足（一般には「夜振」漁は夏の川漁とされる）を注に施したのは、これは並びから見ても春の句であり、しかも海浜の櫓山荘からの嘱目であるとあると私は考えたからである。但し、「夜振火」は厳然とした夏の季語ではある。ただ、以下の句柄を見ても、季節は実は順列になっていないようである。］

夜振火の礁かげにもゐたりけり

谷藤の昏さにありぬ蝌蚪の水

八重櫻土に崩れて大いなる

春めきし雨音をきく火桶かな

藤椅子や窓の芒の暮れやらず

夜振火のむきをかへたる火くづかな

瑠璃壺にうつり鳴き出しきりぎりす

［やぶちゃん注：「きりぎりす」の「ぎり」は底本では踊り字「〻」。］

門川やあけぼのすでに鯊つる子

駕の戸や霧晴れそめし普賢嶽

［やぶちゃん注：「駕の戸」この駕籠は次の句を見ても、実際に当時、山で営業していた登山用の実際の駕籠掻きの、戸が附いた駕籠としか思われない。］

霧雨や下り路速き山の駕

瑠璃草の岩根ぞ暗き霧しぐれ

［やぶちゃん注：「瑠璃草」キク亜綱シソ目ムラサキ科ルリソウ属 *Omphalodes* で本邦に分布するのは日本固有種四種である。前の句と「岩根」の語彙からみて普賢岳登山で嘱目したものと考えるなら、これはその中のルリソウ属ヤマルリソウ *Omphalodes japonica* と同定してよいであろう。ロゼット状になる根出葉が大きく、多数つく。茎は多数あり、茎の基部は倒れて上部が斜上し、花序は分枝しない。分果は縁が滑らか。本種は本州の福島県以南、四国・九州に分布し、他の三種は九州には分布しないと思われる（ウィキの「ルリソウ」を参照されたい）からである。ウィキの「ヤマルリソウ」によれば（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した）、『和名は山に生育し瑠璃色の花をつけることに由来し、別名が「ヤガラ」、「ヤマウグイス（山鶯）」。属名の *Omphalodes* は、中央が凹

となる分果であることに由来し、「へその形をした」という意味』であるとあり、『日本の固有種で、福島県以西の本州、四国、九州に分布する』。『湿り気のある山地や道端、半日陰となる木陰に生育する』。『根生葉は倒披針形（長さ七～二十センチメートル、幅二～五センチメートル）でロゼット状に広がる。茎葉は根生葉よりも小さく、基部が茎を抱き、上部のものほど小さく、まばらに互生する。茎の高さは七～二〇センチメートルで数本が斜めに立ち枝分かれせず、開出した白い毛が多く、先端に直径一～一・五センチメートルの淡青紫色の総状花序をつける。花期は四～五月で、五枚ある花弁の色が薄桃色から薄青色へと変化する。花序は分岐せず、八～十七ミリメートルの小花柄があり、花が終わると下に垂れる。萼は長さ五～八ミリメートルに大きく伸びる』とある。また、この花はシソ目ムラサキ科ワスレナグサ属 *Myosotis* に似ているとあり、実際に画像を見ると確かに似ている。グーグル画像検索「*Omphalodes japonica*」と「*Myosotis*」を見比べて見られよ。

以上、俳誌『天の川』掲載分。多佳子、二十九歳。]

昭和四（一九二九）年

露けさや伏してひらかぬねむの事

實葛はむ瑠璃の小鳥の名を知らず

[やぶちゃん注：「實葛」マメ目マメ科マメ亜科インゲンマメ連ダイズ亜連クズ *Pueraria lobata* は秋の開花後、剛毛に被われた枝豆に似た扁平な実を結ぶ。

「瑠璃の小鳥」seni_seviyorum 氏の「【野鳥】日本の野山にいる青い鳥写真集」の中にいるか？]

落椿そびら合せに二つかな

赤間宮平家の夢

額づけばまた水無月の落葉かな

［やぶちゃん注：「赤間宮」山口県下関市阿弥陀寺町にある安徳天皇を祀る赤間神宮であろう。］

手花火の子等に浦波よするなり

裏門や舟蟲這ひてとざされず

［やぶちゃん注：以上、『ホトトギス』掲載分。］

百合見えて肩をかはしぬ山の駕

庭下駄のこだまのありぬ夕紅葉

庭下駄の鼻緒かたさよ石蕗の花

返り咲くたんぽゝの畦あるやなし

この里の手毬のうたもうろおぼえ

うぐひすや藪のひまなる海の色

落椿まわりとまりし藁の堰

囀や一羽おりたる芝生かな

囀や嶋山かけて虹の景

山荘や春の暖爐を焚きしまゝ

みどり藻の磯のうす雪とけやらず

やどかりのよろばひいでぬ若布籠

落椿この一波にさらはれん

磯の香や椿の籔をぬけしより

門川や落つる椿も籬ぞひ

馬醉木川はぐれし鹿をうつしたる

馬醉木野や鹿よぶ聲のうしろより

［やぶちゃん注：「馬醉木川」も「馬醉木野」も固有名詞としては存在しないと思う。奈良公園辺りを漠然と私的に幻想化したものか？］

白木蓮散りし光りをまのあたり

久保邸にて

こぼれ生ふ罌粟そのまゝに苑の徑

［やぶちゃん注：「久保」不詳。可能性としては、俳人で歌人でもあった久保より江（明治一七（一八八四）年～昭和一六（一九四一）年）か？　郷里の愛媛県松山で夏目漱石・正岡子規に接して句作を始め、上京後、府立第三高女を卒業、久保猪之吉と結婚、福岡に住み、高浜虚子に俳句を、服部躬治（もとはる）に和歌を学び、柳原白蓮らとも交友があった。著作に「嫁ぬすみ」「より江句文集」など（講談社「日本人名大辞典」に拠る）。彼女とは同じ福岡に住んでいたこと（但し、この昭和四（一九二九）年十一月に大阪帝塚山へ転居している）、同じく同時期に虚子の傘下にあったこと、また、後の昭和七（一九三二）年に、多佳子も寄稿している旧師（多佳子は彼女を「師」と呼ぶことを嫌うであろうが）杉田久女の俳誌『花衣』には彼女の寄稿もある点で接点は大いにあるが、誤っているとまずいので識者の御教授を乞う。］

しみいづる草の清水や春龍胆

草むらに囮の鳥の高音かな

落椿よりつ離れつ波のまゝ

再びの提灯おそふ花吹雪

［やぶちゃん注：「灯」はそのままとした。］

日向青島

春光や蒲葵（びろう）樹林の御幸道

［やぶちゃん注：「蒲葵（びろう）」単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科ビロウ *Livistona chinensis*。別名の「ホキ」はこの「蒲葵」の音読み。蒲宮崎市日南海岸青島はこのビロウで覆われている。］

ばりばりと蒲葵落葉をふみ出る

塵籠の塵おほかたは落椿

旅衣螢の欄にかけられし

機織女梧桐の風をほしいまゝ

青簾漁火見えそめてまかれけり

下ノ關安德陵にて

此の陵や春も早く暮れぬべし

［やぶちゃん注：「安德陵」山口県下関市阿弥陀寺町にある阿彌陀寺陵に治定されている安徳天皇陵。ここにはかつて安徳天皇の怨霊を鎮めるために源頼朝の命により建てられた阿彌陀寺があったが、明治のおぞましき廃仏毀釈により廃され、先に出た安徳天皇を祀る赤間神宮となった。参照したウィキの「安徳天皇」によれば、現代になって『新たな社殿造

営のため、御影堂解体が行われた際に、本殿床下に五輪塔の存在が確認されたことにより、数十箇所の陵墓の伝承地の中から、阿弥陀寺に隣接するものが陵墓とされ阿弥陀寺陵（あみだじのみささぎ）とされた』『赤間神宮は安徳天皇や二位尼が竜宮城にいたという建礼門院の見た夢（『平家物語』「六道之沙汰」）にちなみ、竜宮城を再現した竜宮造りとなっている』とある。」

日向鵜戸神社にて

山藤や此處より沓を許されず

［やぶちゃん注：「鵜戸神社」宮崎県日南市大字宮浦の日向灘に面した断崖の中腹、東西三十八メートル／南北二十九メートル／高さ八・五メートルの自然の海食洞内に本殿を鎮座させてあり、参拝するには崖を石段で降りる神社としては珍しい「下り宮」である。参照したウィキの「鵜戸神宮」によれば、『「ウド」は、空（うつ）、洞（うろ）に通じる呼称で、内部が空洞になった場所を意味し、祭神名の「鸕鷀（う）」が鵜を意味するのに因んで、「鵜戸」の字を充てている。古くは「鵜戸権現」とも称された』とあり、『創祀の年代は不詳であるが、古代以来の海洋信仰の聖地で、社伝によれば、本殿の鎮座する岩窟は豊玉姫が主祭神を産むための産屋を建てた場所で、その縁により崇神天皇の御代に』『「六所権現」と称して創祀され、推古天皇の御代に岩窟内に社殿を創建して鵜戸神社と称したと伝える』。また、延暦元年（七八二年）には『光喜坊快久という天台僧が桓武天皇の勅命を蒙って別当となり、神殿を再建するとともに、別当寺院を建立し、天皇より「鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺（うどさんだいごんげんあびらさんにんのうごこくじ）」の勅号を賜わったとも伝える』。『平安時代以来、海中に聳える奇岩怪礁とも相俟って、修験道の一大道場として「西の高野」とも呼ばれる両部神道の霊地として栄えた。中世以後、伊東氏や島津氏などの在地領主の崇敬を受け』たとある。ここで多佳子が詠んでいるのは、境内にある玉橋のことである。同ウィキに（アラビア数字を漢数字に代えた）『「神橋」とも呼ばれ、釘を一

切用いない橋板三十六枚からなる反橋で、金剛界三十七尊を現す（三十六枚の橋板が三十六尊を、橋を渡る本人が一尊を現す）と伝える。宝暦十年（一七六〇年）に別当隆岳が撰述した『鵜戸玄深記』に、往古よりこの橋を境に不浄の履き物を禁じているとの記述があり、ここから先は裸足で参詣する習いであったが、戦後にその風習は廃止された』とある。そうだろうと思った。ここは珍しく私も十九の時に行ったことがあるが、靴を脱いだ記憶がないからである。]

すゐすゐと小魚のかげや冷し瓜

日向景清陵人麿塚にて

手折り持つ薊そのまゝ手向花

[やぶちゃん注：「日向景清陵人麿塚」これは宮崎市下北方町にある平家の猛将悪七兵衛景清を祀る景清廟と同所に並ぶ景清の娘人丸（ひとまる）の塚（墓）の誤りであろう。私の訳注附電子テキスト「耳嚢　巻之四　景清塚の事」を参照されたい。]

抱へ行く藤の花房うちかふり

あぢさゐのまだ珠ちさき薄曇かな

誘蛾灯ともす童に從ひぬ

[やぶちゃん注：「灯」はそのままとした。]

ぬぎすてし衣にとび來し青蛾かな

［やぶちゃん注：俳誌『天の川』掲載分。多佳子、三十歳。］

昭和五（一九三〇）年

櫓山を去る

かたむきし夕顔垣もそのまゝに

［やぶちゃん注：前年の十一月の夫豊次郎父橋本料左衛門の死去により大阪帝塚山（てづかやま）に移転した際の句であろう。但し、櫓山荘はそのまま豊次郎の持ち分としてあって、別荘としてその後も豊次郎・多佳子一家はたびたび用いている。後の昭和一四（一九三九）年に橋本家の所有を離れた。］

夕されば春の炬燵によりにけり

石蹴のをとめもすなるふところ手

あしべ踊り

軒々の紙の櫻に春の雨

［やぶちゃん注：「あしべ踊り」蘆辺踊り。昔の大阪の花街踊りで、大阪市南地五花街の芸妓が総出で難波新地の演舞場で演じた舞踊。明治二一（一八八八）年に始まり、現在は四

月一日から十日間、道頓堀中座で行われる「大阪踊り」がその後身である。明治二十一年はじまる。毎年四月、大阪市演じられる。最初、「浪花風流蘆辺踊」として上演されたのでこの名がある。春（三春）の季語でもある。」

顔見せや京に降りれば京ことば

鶯や駕に先きだつ大原女

水草の花のあけくれ渡し守

道の邊の小さき祠も藤を垂れ

［やぶちゃん注：以上、『ホトトギス』掲載分。］

秋の灯やピアノの上の人形達

［やぶちゃん注：「灯」はそのままとした。］

烏瓜吹きあらはれてま青なる

住吉の宮の映りて蓮枯るゝ

［やぶちゃん注：「住吉の宮」現在の大阪市住吉区住吉にある住吉大社であろう。多佳子が移った帝塚山は大阪市阿倍野区南西部から同市住吉区北西部にかけての広域名称でもあって住吉神社は直近。参照したウィキの「帝塚山」によれば、『大正時代までは住吉郡（のち

東成郡）住吉村に属していた。かつて一帯は原野だったが、明治時代に開発され大正時代初頭から住吉第一耕地整理組合等による耕地の区画整理が行われ、そこが住宅地として次々転用されていった』経緯があるから、次句の如く、彼女の住まう場所を「住吉の里」と表現しても何ら不自然でない。なお、同ウィキは前の引用に続けて、『ただ、帝塚山は住宅街となったものの、近隣に適当な教育施設がなく、新規居住者の子女が教育を受けられない状況にあった。そこで、地元の教育関係者や開発業者、地主らが資金を捻出して、東京の学習院をモデルに』大正六（一九一七）年に帝塚山学院小学部を開校したとあるが、底本年譜のこの前年、昭和四（一九二九）年の十一月の条によれば（というより、この年は十一月の条しかない）、豊次郎多佳子の長女淳子（当時、私立明治専門学校（明専／現在の国立九州工業大学の前身）附属小学校三年）と次女国子（同二年）は、この帝塚山学院小学部に転校している。］

住吉の里の時雨に移り來し

かゞまれば草にかくれぬ秋の海

秋雨や潮にさびたる門の鍵

［やぶちゃん注：少なくとも以上の二句は櫓山荘哀別の嘱目吟であろう。］

大籠に落葉もて來て焚きそへぬ

焚かれある落葉に遠く掃きゐたり

病人のあつかひうけて日南ぼこ

葛城の今日はかすみて日南ぼこ

［やぶちゃん注：「葛城」奈良県御所市と大阪府南河内郡千早赤阪村との境にある大和（やまと）葛城山（かつらぎさん）であろう。帝塚山の二十四、五キロメートル南東に位置する。］

土筆摘土師の里輪はとのぐもり

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「つくしつみ／はじのさとわは／とのぐもり」と読む。「土師の里」は現在の大阪府藤井寺市道明寺附近の古い呼称で、古墳時代の豪族土師氏にその名の由来を持つものの、ウィキの同市道明寺一丁目にある近畿日本鉄道（近鉄）南大阪線「土師ノ里駅」（「はじのさとえき」と読む）によれば、『土師ノ里という名は駅と交差点のみ（交差点名は土師の里）で、地名は存在しない』とある。「里輪」とは「里回」「里廻」「里曲」とも書き、「その里の辺り」の謂い。上代語では「さとみ」とも読む。］

當麻寺

夕櫻當麻の塔は暮れてあり

春晝を灯れる御厨子拜みけり

［やぶちゃん注：「灯」はそのままとした。次句も同じ。］

當麻曼荼羅

春灯や佛の國をまのあたり

[やぶちゃん注：「當麻曼荼羅」「たいままんだら」と読む。奈良県葛城市当麻にある二上山当麻寺の現在の信仰の主体となっている本堂の西方極楽浄土の様子を表わした当麻曼荼羅（創建時の本尊は金堂の弥勒菩薩）で長谷観音のお告げによりこれを織って誠実に祈念し、目出度く西方浄土に向ったとされる中将姫（法名は法如）伝説でも知られる。国宝指定の名称は「綴織（つづれおり）当麻曼荼羅図」。原本（「根本曼荼羅」と呼称する）は損傷度が深刻なほどひどく、現在は通常では非公開である（但し、多佳子が見たものが原本であったか、その後に複製された転写本の一つであったかは不明）。なお、原本は二度の調査の結果、本邦で織られたものではなく、中国（大陸）製と推定されている（概ね、ウィキの「當麻寺」の記載に拠った）。]

人々の聲かへし來ぬ谷櫻

涅槃像柱まはりてまみえけり

[やぶちゃん注：「涅槃像」何処の涅槃像かは不詳。当麻寺には涅槃像はないように思われる。識者の御教授を乞う。]

夫婦して遊べるごとく種蒔ける

文樂座樂屋にて

魂ぬけの人形達や春灯

[やぶちゃん注：「春灯」は「はるともし」と訓じておく。大坂松島新地の「文楽座」はこの前年の昭和四（一九二六）年の火災によって消失（この時、名品の頭（かしら）の多くが失われてしまった）、翌昭和五（一九二七）年一月に経営権者である松竹が四ツ橋近辺の佐野屋橋南

詰にあった旧近松座を買収、その跡地に近代的な洋風建築の四ツ橋文楽座を再建したから、この「文樂座」は新装後のそれである（この劇場も昭和二〇（一九四五）年三月の戦災で焼失した。現在の大阪日本橋の国立文楽劇場の開場はずっと後の昭和五九（一九八四）年三月のことである。以上は概ねウィキの「文楽座」に拠ったが、私は文楽のフリークである）。］

春の燈のとゞかぬ人形ありにけり

ゆく春の夜の人形をとひにけり

比叡山根本中堂

晝の虫消えずの燈のほとりより

［やぶちゃん注：迷ったが、「虫」はそのままとした。］

晝寢する客や主や草の庵

あぢさゐに霧の流れのひまありぬ

長門峽より萩町へ舟行一句

壺坂の爪先きあがり這おしへ

［やぶちゃん注：「長門峽」は「ちやうもんきやう（ちょうもんきょう）」と読む。私は行ったことがないので、ウィキの「長門峽」より引く。阿武川上流の山口県山口市阿東及び

萩市川上に位置する峡谷である。全長十二キロメートル。『奇岩や滝、深淵など変化を織りなす奇勝として知られ、国の名勝や長門峡県立自然公園にも指定されている』。『中生代白亜紀の流紋岩質凝灰岩やデイサイト溶岩から形成されており、断崖を形成する』。『命名者は郷土の画家、高島北海であり、また詩人中原中也もこの地を絶賛した。景勝地は個性的な名前で、洗心橋や龍宮淵、獺淵、暗がり淵などの名所がある。洗心橋には中原中也の詩碑が立つ。この洗心橋から龍宮淵まで』五・五キロメートルの『観光遊歩道が設置されており、ハイキングやトレッキングのメッカとなっている』。『長門峡は、春は桜、夏は避暑地、秋は紅葉と四季を通じて楽しむことができ』、年間六十万人以上の『観光客が訪れる観光スポットでもある』。『山口市側の入り口はＪＲ山口線長門峡駅の前にある道の駅長門峡、萩市側の入り口は阿武川ダム上流の竜宮淵であり、双方とも駐車場が完備してあるが、国道』九号線に『面している山口市側の方が年間を通じての来客が多い』とあるから、多佳子はそこから入って萩へ川下りしたものらしい。]

粟筵塔をめぐりて干されけり

[やぶちゃん注：老婆心乍ら、「粟筵」は「あはむしろ（あわむしろ）」でアワを干してある莚（むしろ）のことである。「塔」不詳。ロケーションのお分かりになる方は、御教授を乞う。]

まのあたりころがり鳴れる鳴子かな

[やぶちゃん注：俳誌『天の川』掲載分。多佳子、三十一歳。]

昭和六（一九三一）年

かさねたる袂の上の散紅葉

住吉や鰊料理の麻のれん

［やぶちゃん注：特定の料理屋を指していると思われるが、不詳。］

法隆寺村佐伯家

籾干して天平よりの舊家かな

［やぶちゃん注：「法隆寺村佐伯家」法隆寺村（現斑鳩町）出身の佐伯姓となると、法隆寺管主で法相宗及び聖徳宗（開祖）の僧佐伯定胤（さえきじょういん　慶応三（一八六七）年～昭和二七（一九五二）年）が知られる。ウィキの「佐伯定胤」によれば、彼は明治三六（一九〇三）年に三十七歳で法隆寺管主に就任、大正一〇（一九二一）年の聖徳太子没後千三百年を記念して聖徳太子奉賛会を組織、後の昭和九（一九三四）年からは法隆寺の「昭和の大修理」を開始（五十年に亙る大事業の始め）たが、昭和二四（一九四九）年の一月二十六日に金堂から出火して壁画が消失して翌昭和二十五年にはその責任を取って管主を辞任、長老となったが、同年、法相宗を離脱、法隆寺を本山にして新たに聖徳宗を開いた。『明治時代の廃仏毀釈で衰えていた唯識・法相の教えを再興した学僧』で、『法隆寺勧学院で開かれた唯識の講義には宗派を超えて多くの僧侶が聴講しに来た。また、東京大学でも講義している。専門の僧侶向けの講義は難解さを極めたが、宗派を超えて聴聞する者が多かった。一般信徒向けの夏百日の講義は非常に噛み砕いた平易な語り口であったという』。『戒律を保ち、肉食をとらず、生涯独身を貫いた』とある。］

かへりみて淀のかゞやく枯野かな

住吉の松の中なる花の茶屋

業平忌あふちの花はいまだしや

［やぶちゃん注：「業平忌」在原業平（ありわらのなりひら）（天長二（八二五）年～元慶四年五月二十八日（ユリウス暦八八〇年七月九日）の忌日。旧暦五月二十八日を忌日とするが、晩年は現在の京都市西京区大原野小塩町（おしおちょう）（に現存する天台宗小塩山十輪寺（おしおさんじゅうりんじ）に住まったことから、現行では新暦の同日に同寺伝統の三弦で「業平忌」として法要が営まれている。そこでの吟か？

「あふち」楝（おうち）はムクロジ目センダン科センダン *Melia azedarach* の別名。］

俎板にながるゝ水や茄で蕨

［やぶちゃん注：「茄で蕨」老婆心乍ら、「ゆでわらび」と訓ずる。］

奈良春日神社蹴鞠奉納祭

蹴鞠の藤にかくるゝこともあり

［やぶちゃん注：「奈良春日神社蹴鞠奉納祭」既注の通り、不詳。調べた限りでは春日大社に現在、蹴鞠祭と称する祭はない。識者の御教授を乞う。］

室生寺二句

石楠木に干草よせてありしかな

［やぶちゃん注：「石楠木」「しゃくなぎ」或いは「しゃくなげ」と読んでいるか。ビワモ

ドキ亜綱ツツジ目ツツジ科ツツジ属シャクナゲ亜属 *Hymenanthes* 無鱗片シャクナゲ節に属する石楠花（しゃくなげ）類を指すものと思う。]

干草をかへせばありし花あざみ

夕顔に障子をしめてありしかな

腰かけしひざのあたりに垂るゝ萩

大いなる手をひらいては種をまく

生涯を人形つかふて近松忌

[やぶちゃん注：近松門左衛門（承応二（一六五三）年～享保九年十一月二十二日（グレゴリオ暦一七二五年一月六日）の忌日は陰暦十一月二十二日。別号から巣林子忌（そうりんしき）、巣林忌とも呼ぶ。この多佳子の視線の先にいる文楽の人形師が誰か、知りたい。

以上、『ホトトギス』掲載分。]

雨もりのして座をかへぬ紅葉茶屋

すくはれて紅葉まみれの生洲鯉

[やぶちゃん注：「生洲鯉」「いけすごひ（いけすごい）」と読む。生簀（いけす）で飼うている鯉。因みに、多佳子は鯉料理が好きであった。]

岩あひに鯉の生洲や散紅葉

柄をたてゝ雨傘につく散り紅葉

稲架の上に橋のみゆるや滝田川

［やぶちゃん注：「稲架」は「はさ」或いは「はざ」と読む。「挟む」の意で、竹や木を組んで作った刈った稲を掛けて乾かす稲掛けのこと。

「滝田川」「たつたがは（たつたがわ）」。前後の句から見てもこれは奈良の竜田川のことである。竜田川の流れる生駒郡斑鳩町の現行の行政地名は「生駒郡斑鳩町瀧田（たつた）」である。］

子規の碑をうつす人あり柿の茶屋

［やぶちゃん注：「柿の茶屋」子規の知られた「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」は「法隆寺の茶店に憩ひて」という前書を持つが、その茶店が聖霊院前の鏡池の側にあったもので、子規の句に因んで「柿茶屋」と呼称された。但し、この茶屋は大正三（一九一四）年秋に取り壊されている（青龍氏のブログ「大和＆伊勢志摩散歩」の「法隆寺　子規の句碑（1）」に拠る）。子規の句碑もその同じ跡位置にある。］

籾むしろ築地へかけて干されけり

麥踏みにあひたるのみの飛鳥京

［やぶちゃん注：全くの個人的に趣味から「踏」の字はそのままとした。実は「蹈」という正字は私が好きになれないことと、戦前でも「踏」と表記する作家が多かったことに拠る。］

畦ゆけば遲き梅あり飛鳥京

春水にそうてはなれて岡寺へ

［やぶちゃん注：「岡寺」「おかでら」は奈良県高市（たかいち）郡明日香村にある真言宗豊山派の寺院。東光山真珠院龍蓋寺（りゅうがいじ）という、もう一つの寺号を持つ。本尊、如意輪観音。参照したウィキの「岡寺」によれば、天武天皇の皇子で二十七歳で『早世した草壁皇子の住んだ岡宮の跡に義淵僧正が創建したとされる。史料上の初見は』、天平一二（七四〇）年の正倉院文書で、『現在の寺域は明日香村の東にある岡山の中腹に位置するが、寺の西に隣接する治田神社（はるたじんじゃ）境内からは奈良時代前期にさかのぼる古瓦が発掘されており、創建当時の岡寺は現在の治田神社の位置にあったものと推定されている』。『現在では真言宗豊山派の寺院だが、義淵僧正は日本の法相宗の祖であり、その門下には東大寺創建に関わった良弁や行基などがいた。義淵僧正が法相宗の祖とされていたため、江戸時代までは興福寺の末寺であった。江戸時代以降は長谷寺の末寺となった』。前述の如く、本寺は「岡寺」「龍蓋寺」の二つの寺号があるが、『「岡寺」は地名に由来する寺号、「龍蓋寺」は法号である。仁王門前の石柱には「西国七番霊場　岡寺」とあり、通常はもっぱら「岡寺」の呼称が用いられている。宗教法人としての登録名も「岡寺」である』。『「龍蓋寺」の法号は』義淵僧正の伝説のある境内の『龍蓋池に封じた竜の説話に由来する』とある。］

鹿のゐる暖簾のうちの蕨餅

日あたりて來れは柳の芽ぐみをり

庭下駄の紅葉はらひて出されけり

谷ふかく木の實拾ひの手をつなぐ

［やぶちゃん注：俳誌『天の川』掲載分。多佳子、三十二歳。］

昭和七（一九三二）年

よく見れば蝗干したる筵なり

青廉くらきをこのみ住ひけり

霜柱ゆるぎそめたるけはひなり

鹿うらゝぬかせんべいもたべあきし

風邪の夫こどものごときことをいふ

永き日の機（はた）に生（あ）れたる花鳥かな

ねころべる衞士にちろちろ燒くる芝

［やぶちゃん注：「衞士」は「ゑじ」。若草山の山焼きの嘱目吟か？　とすれば、この「衞士」は春日大社から出向いた古式の風俗を成した山焼きの護衛の者か？　しかし呑気に寝転んでいる、そこの近くでちろちろと火が燃えているのも気づかずにという景か？　トンデモ誤読かも知れぬ。］

たよたよとして遊び女の青きふむ

遊び女の帯の細しも青き踏む

茨籬遊び女と吾とへだてけり

［やぶちゃん注：「難波病院」不詳。年譜に同年の項なく、状況も不詳。三句目の「茨籬」及び前二句の「青き」「帯」を「踏む」「遊び女（め）」というところからは、隣りの病室の庭に出た遊女然としたの派手な女の入院患者（？）を私はイメージするが、とんだ誤読か？］

母の手をとればつめたし花篝

［やぶちゃん注：「花篝」「はなかがり」と読み、夜桜を観賞するために焚く篝り火を指す。京都祇園のものが有名であるが、これをそれと断定は出来ない。］

晝寢する夫によしなし舟遊び

遊船のみよし細さよ葦の中

秋篠やこゝは遲れて麥の秋

［やぶちゃん注：「秋篠」現在の奈良市の秋篠町・秋篠新町及び秋篠早月町一・二丁目と秋篠三和町一帯を指す地名で、平城京の北西端にあった西大寺の北側に広がる地域を広く総称する古称。歌枕。］

子等が手に端午のよもぎなへてあり

櫓山にかへりて二句

かの男ぼうふら抱いてたづね來し

隣なる舊家は絶えぬ葛の花

［やぶちゃん注：「櫓山」福岡に別荘として残していた櫓山荘。「ぼうふら」はネットで調べたところでは、博多弁で南瓜（かぼちゃ）のことをかく言うようである（「博多弁ちょい上級編」参照）。］

無月の灯みさゝぎ守はをられけり

［やぶちゃん注：「みさゝぎ」どこの御陵かは不詳。夜間の衛士（えじ）がいるというのは明治天皇を祀る伏見桃山陵か？］

あらあらと熊手をもるゝ萩の塵

花ぬなはひとつらなりにひかれける

［やぶちゃん注：「花ぬなは」万葉時代からの古語である「花沼繩」（はなぬなは（なはぬなわ））は多年生の水生植物で食用に供するスイレン目ハゴロモモ科ジュンサイ（蓴菜）*Brasenia schreberi* の開花した状態のものを指す。ウィキの「ジュンサイ」によれば、花期は六月から八月で『花は茎から水面に伸びた柄の先につき』、直径一～一・六センチメートル、花弁・萼片（がくへん）は三枚ずつで、『スイレンの花を細くしたような姿だが、花弁は紫褐色であ

まり目立たない』とある。]

草の穂のつんつんとして刈籠に

[やぶちゃん注：以上、『ホトトギス』掲載分。]

踏み入りし竹柏の林も花曇

[やぶちゃん注：「竹柏」これで「なぎ」と訓じていよう。裸子植物門マツ綱マツ目マキ科ナギ（梛）*Nageia nagi* のこと（ナギ属とぜずにマキ属 *Podocarpus* に含める説もある）。ウイキの「ナギ」によれば、雌雄異株で『比較的温暖な場所に自生』し、高さは二十メートル程の巨木に達する。『葉の形は楕円状披針形で、針葉樹であるが広葉樹のような葉型である。若枝は緑色で葉を十字対生につけ、それがやや歪んで』二列に『並んだようになる。五月頃開花して十月頃になると、『丸く青白色の実が熟す。多くの場合、根に根粒を形成する』。『海南島や台湾、日本の本州南岸、四国九州、南西諸島などの温暖地方に分布する。しかし、紀伊半島や伊豆半島に生育する個体は古い時代に持ち込まれたものが逸出したものが起源と考えられる（史前帰化植物）。少なくとも春日大社のものは』千年以上前に『植栽されたとされている。生育は関東南部が北限といわれる。ただし、化石が関西近辺でも出土する』。『熊野神社及び熊野三山系の神社では神木とされ、一般的には雄雌一対が参道に植えられている。また、その名が凪に通じるとして特に船乗りに信仰されて葉を災難よけにお守り袋や鏡の裏などに入れる俗習がある。神社の中には代用木としてモチノキが植えている場合もある』。『造園木のほか、材を家具器具材や、床柱などとしても利用する』とある。私は北条政子が頼朝と逢瀬を重ねたと伝えられる伊豆権現、現在の静岡県熱海市伊豆山にある伊豆山神社で初めて知った。源頼朝と北条政子がその葉を変わらぬ愛の証に持ったとされるいわくつきの梛である。なお、ここで「林」と詠んでいることから、私は

高い確率で奈良春日大社の境内の景ではないかと考えている（非常に珍しくも有意な林相を成していることから大正一二（一九二三）年に国天然記念物に指定されている）。］

春光や手にまろまろと竹柏の珠

［やぶちゃん注：「竹柏の珠」梛の実のことと思われる。秋に結果するが、翌年の夏頃まで成った状態で大きくなるので、春でも何ら、おかしくない。］

花あしびみどりの壺のふくらみ來

［やぶちゃん注：「花あしび」ツツジ目ツツジ科スノキ亜科ネジキ連アセビ属 *Pieris* subg. *Pieris* 亜属アセビ *Pieris japonica* 亜種アセビ *Pieris japonica* subsp. *japonica* の花。早春に枝先に複総状の花序を垂らして多くの白く壺状の花を咲かせるが、結花の直前直後のものは薄い緑色を呈している。］

春の海熔岩の流れの來て沈む

［やぶちゃん注：ロケーション不詳。

以上、俳誌『天の川』掲載分。多佳子、三十三歳。］

昭和八（一九三三）年

春日御祭三句

春日野の大杉立てりくらべ馬

騎手現れぬ紅葉の枝を襟にさし

朱の紐にくくりし袖やくらべ馬

［やぶちゃん注：「春日御祭」奈良市の春日大社の摂社若宮神社の奈良公園周辺で毎年十二月十七日を中心に数日に渡って行われる祭礼「春日若宮おん祭」の内、十二月十七日の正午より始まる「お渡り式」の第七番の「競馬」、第八番の「流鏑馬」、第九番の「将馬」辺りの嘱目吟か。］

來るといふ使の來たり春の雨

藤の下車舍は片廂

大阪に更衣して母の旅

えびの子と藻の花とありざるの中

［やぶちゃん注：「藻の花」湖沼や小川などに生えるさまざまな藻類や水草（顕花植物類）の花を指し、夏の季語であるが、これ単独でロケーションも分からぬので、同定は不能。］

すいすいと子えびのおよぐざるの中

厨たのし掘り來し只の潮ふける

暖房や南のくにのくだものを

冷凍會社を見る

雪かぶる赤き燈つけり冷藏庫

篝火や鵜匠の烏帽子とがりたる

洗ひたる我黑髪のへりにけり

［やぶちゃん注：以上、『ホトトギス』掲載分。多佳子、三十四歳。］

昭和九（一九三四）年

暖房や我が船募笛吹きつゞく

暖房や汽罐のひゞきすこしあり

傳書鳩雌はおくれつゝ秋の湖を

吾子いねしよりひたさびし煖爐もゆ

夜をかさね留守もる妻の繪雙六

暖房や花粉まみれとなりし百合

春日御祭后宴の能

ひとゝきの風おそひたる薪能

［やぶちゃん注：「后宴の能」は「ごえんののう」と読む。前に示した春日大社の摂社若宮神社「春日若宮おん祭」の内、十二月十八日の午後二時よりお旅所の芝舞台にて行われる後宴（ごえんのの）能。能が二番、狂言が一番行われる。］

冬茨病める遊女は破璃のうち

ひねもすの藪鶯や産籠り

繪屏風にかこまれゐるや産籠り

サドル島沖にて霧のため停船

海燕まつはり飛べり霧鐘うつ

［やぶちゃん注：「サドル島」「海燕」の「昭和十一年　霧の停船」に既注であるが再掲すると、戦前の中国に於いて欧米列強が幅を利かせていた頃に付けられた島名と思われ、英文サイト「American Merchant Marine at War」（戦争中の米国商戦の資料サイト）のこちらのページに載る上海の地図（右手）で（当該ページは教え子が「saddle island shanghai」の検索で発見して呉れた）、上海の中心から西南西へ凡そ百キロメートル、長江河口左岸南東尖端の巨大な砂嘴の先から七十キロメートルほどの位置に、東シナ海に浮ぶ「Saddle Island」

を認めることが出来る。海上の島の形が馬の鞍に似てでもいたのであろう。ここは現在の地図で確認すると彩旗島という島に相当する。ただ、問題なのは何故、この句が昭和九（一九三四）年の句であるのかが分からぬ。どう見ても、「海燕」の句と同時制の句としか読めないからである。底本年譜にはこの年に上海に多佳子が向かったという記載はなく、夫豊次郎と上海・杭州方面へ旅行するのは昭和十年の五月のことで、「海燕」の句はその体験に基づいたものを翌昭和十一年の句として掲げたとすれば問題はない。しかしもし、昭和九年の『ホトトギス』にこれらが句が載っているとするなら、昭和九年以前に多佳子が霧のサドル島の近くを同じように船で通ったことがあるということになる。どうも分からない。]

甲板や燕も我も霧に濡れ

霧げむり警鐘うてる人を消す

北四川路戰趾二句

夏草や廢墟の階は殘れども

燕や廢墟の柱空へ立つ

[やぶちゃん注：「北四川路戰趾」これは第一次上海事変（昭和七（一九三二）年一月から三月に中華民国の上海共同租界周辺で起きた日華両軍の衝突事件）の上海租界の戦跡地である。当時の上海市の北四川路及び虹江周辺には凡そ二万七千の在留邦人が住んでいた。年譜には記載がないものの、やはり多佳子はこの事変後の昭和七年から九年孰れかの夏に上海周辺を訪問していると考えないとおかしいのである。]

櫓山にて

馬刀賣りの彼の婆來たり馬刀買はな

［やぶちゃん注：「馬刀」は「まて」で、斧足綱異歯亜綱マテガイ上科マテガイ科マテガイ属 *Solen* の仲間と考えられる。美味い。］

劉氏別業

燕とぶ留守の閨房並ぶなり

［やぶちゃん注：「劉氏別業」不詳。］

角伐りや紅葉かざせし人もゐき

角伐りや老の髪透く立烏帽子

［やぶちゃん注：以上、『ホトトギス』掲載分。多佳子、三十五歳。］

昭和十（一九三五）年

暖房や地圖に航路の針すゝめ

暖房やふさふさゆるゝ花芭蕉

稲刈るや邪宗門徒の名を負ひつ

［やぶちゃん注：「清溪村」「切支丹遺蹟」の「溪」及び「蹟」は底本の用字である。「清溪村」旧大阪府三島郡清溪（きよたに）村。現在の茨木市の北西端で佐保川の上流域及び豊能郡豊能町大字高山に相当する、この豊能町東地区南東部の高山地域は「隠れキリシタンの里」としても有名で、地区名から想像がつくと思うが、かのキリシタン大名高山右近の生誕地である。］

日曜（ドミニカ）の祈りはすみぬ稲刈りに

［やぶちゃん注：「日曜（ドミニカ）」ユダヤ教の安息日やキリスト教の「神の日」を表わすラテン語「dies dominica」。］

苦行縄かけあり年木割つて居り

［やぶちゃん注：「苦行縄」主にカトリック教会で用いられた「苦行の鞭」、ディシプリン（discipline）のことであろう。「年木」は「としぎ」で「歳木」とも書き、新年の燃料として暮れの内に用意した薪のこと。「新年」の季語であるが、「割つて居」るのだから、嘱目は年の内である。］

樺太旅行

［やぶちゃん注：これは十年前の大正一四（一九二五）年の七月末より八月にかけて約二週間、鉄道省主催の「樺太・北海道旅行」に身重の身で夫とともに参加、客船高麗丸で安

別・敷香・海豹島等に旅した折り（旅当時の多佳子は二十六歳であった）を、追懐した回想吟である。「海燕」の「國境安別」を参照。]

國境や馬鈴薯の花咲ける町

樺の家われを迎ふる夏爐あり

[やぶちゃん注：「海燕」の「國境安別」に、

樺を焚きわれ等迎ふる夏爐かな

がある。]

ねころべば樺太車前草やはらかし

[やぶちゃん注：「車前草」音数律からここは「しやぜんさう（しゃぜんそう）」ではなく、「おほばこ（おおばこ）」と当て読みしているものと思われる。シソ目オオバコ科オオバコ *Plantago asiatica* のことである。和名は「大葉子」とも書き、葉が広く大きいことに因み、この「車前草」という漢名は牛車・馬車が通る道の端に多く生えることに由来する。小さな頃よくこれで相撲をしたものだった……]

波すゞし港といへど蕗茂り

フレツプにツンドラ地帯今こそ夏

[やぶちゃん注：「フレツプ」双子葉植物綱ビワモドキ亜綱ツツジ目ツツジ科スノキ属コケ

モモ *Vaccinium vitis-idaea*。フレップとは英語ではなく（コケモモ類の英名は「cowberry」或いは「lingonberry」）、アイヌ語で「赤いもの」を意味する本邦北海道以北でのコケモモの呼称である。ウィキの「コケモモ」によれば『果実は非常に酸味が強いため、通常は砂糖などで甘みを加えて調理し、ジャムやコンポート（砂糖煮）、ジュース、シロップなどとして食用にする。コケモモのコンポートは肉料理の添え物とすることがある』とある。麝香鹿（じゃこしか）爺さんのブログ「昭和ひとケタ樺太生まれ」の「フレップ（コケモモ）の実」に『樺太の代名詞にも使われるほど樺太には沢山自生し秋の野は赤く染まった』、『実は甘酸っぱく、お土産品としてフレップワイン・ジャム・ソーダ・羊羹などがあった』とあり（アイヌ語源記載もこちらを参照した）、また、「私の花物語のページ」の第二回の三士とみ子さんの「フレップ（こけもも）」の頁に、かつてのサハリン（樺太）での追懐とともに印象的にフレップのことが語られてある。]

オソチョン族住あり

こもらへる異人種の香ぞ夏爐もゆ

[やぶちゃん注：「オソチョン族」オロッコ族のこと。樺太（中部以北）のアルタイ諸語のツングース系民族で、現在はウィルタ（UILTA, Orok）と呼ぶ。この「オソチョン」というのは、推測であるがアイヌは彼らのことを古くからオロッコ（Orokko）と呼んでいたこと、同じツングース系の言葉を話すツングース系民族の知られた呼称であるオロチョン族（Orochon／Oroqin：主に北東アジアの興安嶺山脈周辺で中国領内の内モンゴル自治区及びその近隣のロシア領内に居住する民俗）と混同したものかと思われる。少なくともネットでは「オソチョン族」と一致する記載はない。

「住」「すまひ」と訓じておく。]

フレップにやがて滅びん民族遊ぶ

水草に白樺ひくき門もてり

野茨にわかれし馬車が笛ふけり

［やぶちゃん注：「西湖新々旅舎」湖湖畔を望む現在の「杭州新新飯店」（HANGZHOU THE NEW HOTEL）。洋風建築のホテルで蒋介石・宋美齢・魯迅・芥川龍之介といった著名人ゆかりのホテルで、孤雲草舎（一九一三年に建てられた西楼）・新新旅館（一九二二年に建てられた中楼。現在、省級文物保護建築群に指定されている）・秋水山荘（一九三二年に建てられた東楼）から成る、と中国旅行会社サイトなどにある。私の芥川龍之介「江南游記」の「三　杭州の一夜（上）」の本文及び私の注（写真有り）も是非、参照されたい。多佳子はこの年の五月に豊次郎と上海・杭州の旅に出ている。

以上、『ホトトギス』掲載分。］

しぐれ雲片照りつゝも野にひくゝ

赤金（しやく）に光（て）りつ花野が日をしづむ

曼珠沙華みとりの妻に詩（うた）はなき

［やぶちゃん注：「みとりの妻」不詳乍ら、これは夫を亡くした多佳子の友人である。「海燕」の「葬」も参照のこと。］

曼殊沙華衰へしかば鞭うたれず

夜となれば龍舌蘭も露ををくか

大旱の星雲けぶり渦巻けり

この國の夏天の銀河濃ゆかつし

［やぶちゃん注：「濃ゆかつし」読み（音数律からは「こゆ」であろうが）も意味も不詳。ネットで検索すると他の俳人の句に使用例が見られるが私には意味不明である。識者の御教授を乞う。【二〇一五年十月二十二日追記】かく書いてブログで公開したところ、翌日、未知の女性「名も無きしづ」様よりメールを頂戴した。そこには、これは謡曲などにしばしば現われる「かりし」の音便形である「かつし」なのではないか、という御指摘を頂いた。そこで謡曲集をひっくり返して見たところ、「無間の底に堕罪すべかつしを」（「鵜飼」）、「左右なう渡すべきやうも無かつし處に」（「頼政」）、「夫れ賢かつし時代を尋ぬるに」（志賀）、「めでたかつし世繼ぎを詠み納めし詠歌なればととて」（「関寺小町」）といった、「かりし」の促音便化した「かつし」が多用されていることが分かった。「かつし」は通常の古語辞典にも小学館の「日本国語大辞典」にも見出しとして出ないのであるが、これならば、私のような国語学嫌いの素人目でも形容詞「濃ゆし」のカリ活用の連用形に、過去回想の助動詞「き」の連体形がついた「かりし」が「かつし（かっし）」と促音便化したものと判断出来る。因みに、多佳子のこの「し」は――**今更ながらにして銀河の流れの濃い、密なるに気がついたこと！**――という連体中止法による詠嘆感慨の用法を含ませてあるように感じられる。意味からもこれに間違いないと思われる。大方の御批判を俟つものではある。

以上、『馬酔木』掲載分。多佳子、三十六歳。］

昭和十一（一九三六）年

赤間の陵

繪巻に見しこれの干珠（かんじゅ）島を秋潮に

秋潮に滿珠（まんじゅ）島は蒼き珠なせり

秋の潮哀しき御幸ありしところ

秋潮の底ひの官にゆきし帝（みかど）

みゆきましゝこの秋潮にみさゝぎを

秋潮の瀬の鳴るかたにみさゝぎを

早鞆を落つる秋潮音しづめよ

日のひかり秋の渦潮射て深く

［やぶちゃん注：「赤間の陵」山口県下関市阿弥陀寺町にある阿彌陀寺陵に治定されている安徳天皇陵。ここにはかつて安徳天皇の怨霊を鎮めるために源頼朝の命により建てられた阿彌陀寺があったが、明治のおぞましき廃仏毀釈により廃され、先に出た安徳天皇を祀る、現在の「赤間神宮」となった（ウィキの「赤間神宮」によれば、廃仏毀釈後は「天皇社」と改称、『歴代天皇陵の治定の終了後、安徳天皇陵は多くの伝承地の中からこの安徳天皇社の境内が』明治二二（一八八九）年七月に安徳天皇の「擬陵」として公式に治定されたと

ある。「天皇社」は明治八（一八七五）年十月に「赤間宮」に改称、昭和一五（一九四〇）年八月に官幣大社に昇格するとともに「赤間神宮」と改称されたとあるから、多佳子が訪れた折りは「赤間宮」であったことが判る）。参照したウィキの「安徳天皇」によれば、現代になって『新たな社殿造営のため、御影堂解体が行われた際に、本殿床下に五輪塔の存在が確認されたことにより、数十箇所の陵墓の伝承地の中から、阿弥陀寺に隣接するものが陵墓とされ阿弥陀寺陵（あみだじのみささぎ）とされた』『赤間神宮は安徳天皇や二位尼が竜宮城にいたという建礼門院の見た夢（『平家物語』「六道之沙汰」）にちなみ、竜宮城を再現した竜宮造りとなっている』とある。またここは平家一門をも祀り、かの小泉八雲の「耳なし芳一」の舞台でもある。

一句目の「繪巻」は「平家物語絵巻」か。私は親しく見たことがない。

二句目三句目に出る「干珠島」「滿珠島」は先の赤間神宮からは壇ノ浦を経て、東北へ七～八キロメートル隔った関門海峡の瀬戸内海側の入口附近にあり、句順から見て、この二島を見た後に赤間宮を訪れたと考えられる。ウィキの「満珠島・干珠島」によれば、『山口県下関市長府沖、瀬戸内海（周防灘）中の』二つの『無人島であり、原生林が満珠樹林・干珠樹林として国指定の天然記念物となっている』。忌宮（いみのみや）神社（山口県下関市にあり、仲哀天皇が熊襲平定の際に滞在した行宮である豊浦宮の跡とされる）の『飛び地境内であり、祭神の神功皇后が住吉大神の化身である龍神から授けられた二つの玉、潮干珠（しおひるたま）・潮満珠（しおみつるたま）から生まれたという伝説がある島。また、彦火火出見尊が海神より授かった潮満瓊（しおみつたま）と潮涸瓊（しおひのたま）を両島に納めたという伝説もある』。『二島は至近距離にあり、伝説ではどちらが満珠島か干珠島かはっきりしていないが、忌宮神社では沖の大きい方を満珠島、岸に近い小さい方を干珠島と呼んでいる。土地台帳と天然記念物指定文書では沖側の島が干珠、国土地理院の地図や海図、国立公園指定では岸に近い側の島が干珠となっており、公式にも定かではない』。『源平合戦最後の決戦である壇ノ浦の戦いで、源義経率いる源氏軍が拠点とした』とある。多佳子の歴史詠嘆は上代に遡り、そこから源平へと連絡させるものと思われ、この八句はそうした連関性から非常に上手く作られた連作として読める。

七句目の「早鞆」は「はやとも」と読み、関門海峡の大瀬戸の中で幅が狭い壇ノ浦と和布刈（めかり）（福岡県北九州市門司区。関門橋の九州側。御崎突端に旧暦元旦未明に三人の神職らが松明・手桶・鎌を持って社前の関門海峡の海岸に入って若布を刈り獲り、神前に供える「和布刈神事」で知られる和布刈神社があるが（私は中学一年の時に松本清張の「時間の習俗」でこの魅力的な神事を知った）、ここは壇ノ浦の戦いの前夜に平家一門が酒宴を開いた場所と伝えられている）の間の「早鞆の瀬戸」のこと。]

或る事件八句

つめたき手宣誓書けり墨うすく

冬の日は遠く判事の冊をまぢか

わが證言正しかれども心ひゆる

わが手足冷ゆるに心昂りぬ

書記あはれ凍てたる墨に筆つぎぬ

冷ゆる壁時計正しく時をきざむ

わが生くはこれなる穢土か床（ゆか）冷ゆる

わが歩み正しく階にさむき光（かげ）

[やぶちゃん注：「或る事件」不詳。明らかに多佳子自身が参考人の一人として聴取を受け

ているが、年譜には一切載らない。識者の御教授を乞うものである。]

ひかりつゝ雲去り空が碧く凍てぬ

暖爐もえ風荒れの海夜も荒るゝ

犬とゐてけものゝ香あり煖爐もゆ

うばたまの霧金色にともるは檣

[やぶちゃん注：破調になるが私は「檣」を「ほばしら」と訓じたい。]

地下涼し青き車體が扉あけてゐる

涼しき走輪闇ゆき地下の驛となる

霧にこもりロウンヂの爐によむひとり

[やぶちゃん注：「ロウンヂ」ラウンジ（Lounge）。ここは居宅の客間であろう。櫓山荘か。]

霧ごもり電話神戸をよんでゐる

[やぶちゃん注：以上、『馬醉木』掲載分。多佳子、三十七歳。]

昭和十二（一九三七）年

枯るる園學べる少女破璃に見ゆ

［やぶちゃん注：『ホトトギス』掲載句。］

暖房の燈を並め北風に航つゞく

［やぶちゃん注：「並め」は古語の自動詞マ行四段活用の「並（な）む」で、並ぶ・連なるの意。］

湯槽（ゆ）にひたり北風の甲板の眞下なる

［やぶちゃん注：「湯槽」の二字で「ゆ」とルビを振る。］

北風に覺め夜半の船室のあつすぎる

黄砂の日

黄砂航く貨物船側に朱を見たる

渡渫船黄砂暮るゝと音を斷ちし

［やぶちゃん注：「渡渫船」不詳。底本か初出の『馬醉木』のそれかは不詳乍ら、浚渫船の「浚」の誤字か誤植ではなかろうか？］

熔鑛爐黄砂の夜天ちかづけず

砕砂の夜鑛滓は地に火と炎ゆる

［やぶちゃん注：「鑛滓」「こうし」と読む（誤読の慣用読みでは「こうさい」）。金属を精錬する際に溶けた鉱石の上層に浮かぶ非金属性の滓（かす）。金糞（カナクソ）とも呼ぶ。所謂、スラグ（slag）のことである。］

玄海の砕砂の眞夜を月いづる

初瀬

牡丹先に日輪瞑き天にある

［やぶちゃん注：「初瀬」奈良県桜井市を流れる初瀬川北岸の地名。現行では「はせ」と読まれるようである。大和と伊勢を結ぶ初瀬街道を見下ろす初瀬山の中腹に建つ長谷寺の門前町で、上代に泊瀬（はつせ）朝倉宮・泊瀬列城宮（はつせのなみきのみや）が置かれた。ここはどうしても古名の「はつせ」で読みたい。初瀬山は昔から牡丹の名所として知られ、長谷寺には現在、百五十種類以上七千株と言われる牡丹が植えられており（ウィキの「長谷寺」のデータ）、古くから別名で「花の御寺（みてら）」と称される。］

牡丹あふり黒南風地より吹きたてり

［やぶちゃん注：「黒南風」は「くろばえ」と読む。梅雨の初めに吹く南風のこと。］

牡丹荒れ黒南風雲を走らしむ

黑南風に向ひ廻廊の階を降る

［やぶちゃん注：「階」は「きさ」と読みたい。］

南風集

停船旗南風の港がしろくある

南風吹けり巨船停らんとしつゝ來る

停船する船と歩めり南風を負ひ

舷梯を下り來ぬ南風にカラア碧く

南風の波搏てり騎馬いま遠く驅る

南風くろし走輪光りひかり驅る

南風くろし工事の鐵鎖街に鳴り

［やぶちゃん注：ここまでは印象からすると、前年の上海・杭州旅行の回想吟のように私には感じられる。］

水上署のボート祭の波を荒らす

祭舟篝の炎の中にゐる

まつり更け新聞トラック街驅くる

［やぶちゃん注：「海燕」の同年パートの、

天神祭

渡御まちぬ夕の赤光河にながれ

渡御の舟みあかしくらくすぎませる

の二句から見て、この三句は大阪天満宮の天神祭の嘱目吟であろう。同宵宮は七月二十四日、本宮は七月二十五日であるが、船渡御（ふなとぎょ）の景であるからこれらの句は昭和一二（一九三七）年七月二十五日に特定出来る。］

山のホテル

額の瑠璃山の秋草と苑に咲く

露あをしホテルの厨房苑に匂ふ

［やぶちゃん注：「海燕」の前年のパートに、

六甲ホテル

霧あをし紫陽花霧に花をこぞり

霧ごもり額（がく）の濃瑠璃が部屋に咲く

爐火すゞし山のホテルは梁をあらは

霧にほひホテル夕餐燈（ひ）がぬくき

が載り、句柄から見て、ここも同ホテルと見てよい（しかも額絵を詠んでいるから、これらもこの時の吟詠か回想吟の可能性が強い）この「六甲ホテル」は兵庫県神戸市灘区六甲山町南六甲一〇三四番地、六甲山山上に現在も営業する阪急阪神第一ホテルグループの「六甲山ホテル」のことであろう。昭和四（一九二九）年に宝塚ホテル分館として開業した（後に独立）。古塚正治設計による開業当時の建物は現存しており、二〇〇七年に国の近代化産業遺産に登録されている（以上はウィキの「六甲山ホテル」に拠る）。]

わがちかく銀河は澄みてけぶらへる

滿天の星澄み銀河苑にながれ

[やぶちゃん注：以上、『馬醉木』掲載分。夏の吟で終わっており、旧作の別詠や回想吟と思われるものが多いのは、この年に夫豊次郎が発病（病名不詳）し、同年九月三十日に享年五十歳で逝去したからである。底本の堀内薫氏の年譜によれば、『療養していた数か月間、多佳子は、病弱の夫に付ききり、妻、秘書、看護婦、母と、虚弱な一身に数役を背負うて大任を果す。豊次郎は生前に墓を作り、自分と多佳子との戒名を刻み、年月日を入れればよいようにしておいた。葬後、ノイローゼによる心臓発作つづく』とある。夫逝去時、多佳子は三十八歳、四人の娘（長女淳子も未だ満十七）の母であった。]

昭和十三（一九三八）年

露のあさ斷たれし髪は肩蔽はず

荒るゝ關門　四句

雪荒れて舷梯の階あるのみなり

雪昏らく落潮舷をとよもせり

船名もなく海峽の雪に爛る

吹雪去り峽港青き潮ながれ

泊つる燈に雨降り枇杷の花香り

［やぶちゃん注：「燈」は底本のママ。］

霜ひかり斑の牛を地にをける

雷火去り火口斷層面匂へり

灼くる斷層垂直に匍ひのぼれり

火口壁地層を厚く灼け曝らす

潮灼けて歩廊連絡船を置く

夏潮に古き巨船が煤をふらす

［やぶちゃん注：以上、『馬酔木』掲載分。多佳子、三十九歳。］

昭和十四（一九三九）年

汽車うづみ地上赤燈雪に刳られ

［やぶちゃん注：「燈」の用字はママ。以下、この注は略す。］

煖房車寝室の帷の裡曉くる

［やぶちゃん注：「帷」は「ゐ」（無論、寝台車の遮蔽用カーテン）、「裡」は「うち」、「曉くる」は「あくる」と読んでおく。］

赤倉観光ホテル三句

星くらき雪に地階の燈がのこる

階の窓雪の深きを見て降りる

雪深くいでゆの階をなほ降りる

［やぶちゃん注：同年年譜に、『一月七日、淳子、美代子を連れて、雪上車で赤倉観光ホテルに着き滞在』とある。前の二句も恐らくその向かう途中の連作中の句と考えられる。「赤倉観光ホテル」は創業が昭和一二（一九三七）年であるから、当時は開業後二年目。帝国ホテルを創業した大倉財閥が上高地帝国・川奈に次いで建てた高原リゾート・ホテルの草分け的存在。公式サイトはこちら。］

北風あをき灘へ舳は峡をいづ

由布高原

牧晴れて由布の霧氷を近く見る

緬羊舍ひとゐる部屋を煖くせり

富士にて　二句

夏爐焚きましろき鷄（かけ）を空に飼ふ

［やぶちゃん注：「鷄（かけ）」はニワトリの古称。鳴き声に由来するとされる。］

雲がゐる石楠花しろく秋たてり

［やぶちゃん注：以上、『馬酔木』掲載分。多佳子、四十歳。］

昭和十五（一九四〇）年

冬木の青吾等の塋城標めて立つ

［やぶちゃん注：「塋城」は「えいじやう（えいじょう）」で、奥津城・墓地のこと。先に引用したが、底本の堀内薫氏の年譜に、この三年前の昭和十二年九月三十日に亡くなった夫『豊次郎は生前に墓を作り、自分と多佳子との戒名を刻み、年月日を入れればよいようにしておいた』とある。まさに正しく「吾等」なのである。］

熱き雲面驅け り過ぎ臺風來

［やぶちゃん注：以上、『馬酔木』掲載分。多佳子、四十一歳。］

昭和十六（一九四一）年

鯖雲舷梯のぼるときわする

鯖雲峽の一船として爆る

［やぶちゃん注：「峽」は「かひ（かい）」、「爆る」は「かかる」と訓じておく。］

鰯雲峡港にごる日を一輪

雲疾くとぶ秋蝶を遅らしめ

靴の音わが家にとまらず塞柝も過ぐ

［やぶちゃん注：「塞柝」は不詳。これ、底本か初出誌のそれかは不詳乍ら、「寒柝」の誤字か誤植ではあるまいか？　「寒柝（かんたく）」なら、冬の夜に打ち鳴らす夜回りの拍子木の音で意味も腑に落ちるのである。］

月光に鐵路といはず地に滿つ霜

ひとの面に萬燈くらくくらくとぎれず

落穂蕊なまなまと指よごす

燈を負ひし兒沈丁の香とわすれず

［やぶちゃん注：「沈丁」「ぢんちやう（じんちょう）」で沈丁花（じんちょうげ）の略。フトモモ目ジンチョウゲ科ジンチョウゲ *Daphne odora* 。］

吾子遠き信濃の櫻咲き撓む

［やぶちゃん注：「信濃」年譜にこの年の五月の条に、別荘を『探しに、多佳子と国子』（次女）『は信州野尻湖へ行』き、翌六月からは『一家にて、野尻湖畔の』「神山山荘八十七番」で『十月まで滞在』している。］

霧の中ひぐらし啼くを曉とする

玫瑰に信濃はひるも霧が零る

［やぶちゃん注：「玫瑰」は「はまなし」又は「はまなす」と読む。バラ目バラ科バラ属ハマナス *Rosa rugosa*。和名は「ハマナス」であるが、元来は「はまなし」が正しい。果実がナシに似た形をしていることが和名由来で、それが「はまなす」と訛ったものであるからである。ハマナスは一般に砂地の海浜に植生するが、内陸でも普通に育ち、花を咲かせる。「零る」は「こぼる」で零れるの意。］

ゆけどゆけど夜の乾草ひろかりき

甥

征でたたす子ろと一夜の蚊帳つらむ

［やぶちゃん注：「子ろ」「ころ」で女性や子供を親しんで呼ぶ上代語である。］

雁わたる吾子鉛筆の音を斷たず

［やぶちゃん注：以上、『馬酔木』掲載分。多佳子、四十二歳。］

昭和十七（一九四二）年

寢がへりし足のつめたさ五位が啼く

［やぶちゃん注：「五位」五位鷺。コウノトリ目サギ科サギ亜科ゴイサギ *Nycticorax nycticorax*。］

笹鳴やひと去りし爐にわれもどる

信濃二句

湖みればしなのの櫻散るなりけり

旅の家にかたくりの花昏れんとする

木曽

おだまきや子を負ふ子等と吾遊ぶ

［やぶちゃん注：「おだまき」苧環。これは実際の山野草のモクレン亜綱キンポウゲ目キンポウゲ科オダマキ属 *Aquilegia* のヤマオダマキ（山苧環）*Aquilegia buergeriana* 或いはミヤマオダマキ（深山苧環）*Aquilegia flabellata* var. *pumila* であろう。苧環とは本来は機織りの際に苧（からむし）（イラクサ目イラクサ科カラムシ属ナンバンカラムシ変種カラムシ *Boehmeria nivea* var. *nipononivea*）や麻（あさ）（バラ目アサ科アサ属アサ（大麻）*Cannabis sativa*）の糸をまいた紡錘形のものを指し、それが本種の可愛いらしい花の形に似ていることに由来する。

以上、『馬酔木』掲載分。多佳子、四十三歳。］

昭和十八（一九四三）年

雁（母病篤くいそぎ上京）三句

夕焼くる運河ひとゆきひといそぎ

夜々の雁ふるさとに病む母に侍す

母とゐて母は雁がねはやわかず

［やぶちゃん注：これは前年の詠吟。昭和十七年十一月七日、多佳子の母津留は多佳子の看病と看取りを受け、東京にて享年八十二で亡くなった。］

笹子　二句

笹鳴の羽の幼なき雪をはね

［やぶちゃん注：「笹子」は「ささこ」と読み、鶯の笹鳴きのこと。鶯が冬になって餌を求めるため、山を下りて人里で暮らし始めると、草藪の中でチャッチャッという地鳴きをすることを言う語で、「笹子鳴き」などとも称して晩冬の季語であるが、こう鳴くのは幼鳥に限らず、鶯の冬の鳴き方である。］

時雨更く市電わが乗る間をとまり

紅梅にわれは征く靴ふきそろへ

寒夜の燈ひとつに母と子とふたり

青簾くらき起居のさわやかに

わくら葉の降るに急なり吾子を戀ふ

［やぶちゃん注：以上、『馬酔木』掲載分。多佳子、四十四歳。］

昭和十九（一九四四）年

柿すすり山家の秋のきはまりぬ

濤の音障子にふるるばかりなり

霜明くる瓦斯の瓮のはげしくて

［やぶちゃん注：「瓮」は底本の用字。］

寒梅や軍服の香ぞ吾子の香

祖母の雛戰嚴しき夜を在す

［やぶちゃん注：「在す」は「おはす（おわす）」と読みたい。］

寒梅の花鮮らしや旅衣

經文の行間正し牡丹雪

鶯や居間の囲囲もたゝまれぬ

わが住みて野邊の末黑に籬いまだ

［やぶちゃん注：「末黑」は「すぐろ」で、春の野焼きなどの後、草木が黑く焦げていること。また、その草木を指す。この年の五月、多佳子は大阪帝塚山から奈良市あやめ池南四丁目に疎開している。この「わが住みて」と詠み出したそれは、新しき住まいへの挨拶句とも読める。五月で「末黑」の春とやや季が気になるかも知れぬが、「末黑」は野焼きの跡、「後」であり、何より「信濃」の「住吉帝塚山より奈良西大寺の邊り菅原へ引移る　裏の松山へ登れば藥師寺の塔も見ゆ」という前書を持つ「菅原抄」に（当該部で既注であるが、多佳子の疎開先であった現在の「あやめ池南四丁目」は旧「菅原町」の一部が含まれており、「あやめ池町」全体が古くは「菅原」という名称で呼ばれていたと推定される）、

わが住みて野邊の末黑を簷のもと

の句を選んでいることからも間違いない。］

わが庭や末黑の雨のしぶきうつ

［やぶちゃん注：以上、『馬酔木』掲載分。この年の冬、次女国子の婚約者の堀内三郎が三

重県の鈴鹿航空隊に入隊している（三郎は終戦後の内地帰還の途次に遭難してしまう）。多佳子、四十五歳。］

昭和二十（一九四五）年

燈籠の尾のもとひとりい寝さめて

［やぶちゃん注：以上、『馬酔木』掲載の一句。多佳子、四十六歳。本句までを恣意的な正字表記とし、以降は底本の表記通りとする。］

昭和二十一（一九四六）年

大根ぬく南に雲多き日に

波の音芦火は消えてもすぐもゆる

寒牡丹寺苑野川を流れしめ

［やぶちゃん注：恐らくロケーションは長谷寺であろう。］

木枯や鳥屋に卵のあたゝかく

炭ひきて心しづかになりゆくを

鶯や沼辺は雨のしげりきなり

衣ほどく鋏小さゝよ野分中

［やぶちゃん注：以上、『馬酔木』掲載分。］

佐保山陵

松蟬や妃の陵をうちかさね

［やぶちゃん注：「佐保山陵」奈良市法蓮町にある聖武天皇のそれと治定されている佐保山南陵（さほやまのみなみのみささぎ）。その皇后、藤原不比等の娘安宿媛（あすかべのひめ）、光明皇后「妃の陵」は、その佐保山の参道を挟んだ東のピーク（ツイン・ピークスのピーク間は百メートル強）である東陵に治定されている（なお、陵墓には「仁正（にんしょう）皇太后」と記され、地図上でも「仁正皇太后陵」とある。夫豊次郎を亡くして九年目の夏、前掲の昭和十五（一九四〇）年の一句、

冬木の青吾等の塋城標めて立つ

が、そして次女国子の婚約者堀内三郎の内地帰還の途次の遭難の悲哀をも、実はこの句にはオーバー・ラップするように、私には思われてならないのである。

「松蟬」はカメムシ(半翅)目頸吻亜目セミ型下目セミ上科セミ科セミ亜科ホソヒグラシ族ハルゼミ属ハルゼミ *Terpnosia vacua* の異名。晩秋から初夏の季語である。

以上、『現代俳句』掲載分。多佳子、四十七歳。この年、一月二十一日に旧師杉田久女が亡くなっている。十月に戦後初めて伊勢の山口誓子を訪い、また西東三鬼・平畑静塔・秋

元不二男らと相知るのもこの年であった。秋以降、こうした仲間と『天狼』創刊への機運が高まった。また参照した年譜の最後には、懐かしい、亡き夫の希望や思い出の詰まったかの大分の十万坪の農場が坪八十銭で農地買上となった、とある。」

昭和二十二（一九四七）年

木の実独楽大小ありてまはり澄む

冬の虹立つ方へ子は田を走る

釘の頭を子が地に打つ冬の暮

炭を出す手燭のそこに山の闇

虹たちて刈田の畦のあきらかに

田に立ちて紅を残せる冬の虹

清水公俊氏逝去後は

この寺に知る僧なしや良弁忌

［やぶちゃん注：「清水公俊」大僧正で東大寺官長。既に昭和二〇（一九四五）年に亡くなっている。「良弁忌」「らうべんき（ろうべんき）」と読む。本来は陰暦十一月十六日で奈良

時代の学僧で東大寺開山の良弁（持統天皇三（六八九）年～宝亀四年閏十一月二十四日（ユリウス暦七七四年一月十日））の忌日で冬の季語。現行では一二月十六日に東大寺で行われているようである。以上の生没年はウィキの「良弁」によるものであるが、実際の没日と忌日が一致していない。理由は不明である。識者の御教授を乞う。]

空にゐて揚羽の蝶のゆるやかに

降る雪に男洋傘さしいづる

年木割山の月夜の濃かりけり

年木割るひびきの暮れてゐたりけり

年木樵るひびき雪降る山をいづ

年木樵るわが低山に雪ふれり

夜の雪い寝むとひとり手を洗う

喪の日日やなほ如月の山の崖

紅梅や一途に霰ふりてやむ

訪ね来し男の外套雛の宿

雛の宿雪降る崖を照らしけり

蛇叱る堂守甃の床を踏み

［やぶちゃん注：「甃」は通常は「いしだたみ」とか「しきがはら（しきがわら）」と読み、石畳のように土間や地面などに敷き並べた平たい瓦或いはそうした床（ゆか）を指す。ここは音数律から私は「いし」と訓じているように思う。］

蛇生れて常浄光土雨荒るる

［やぶちゃん注：「常浄光土」聴いたことがない文字列ではあるが、意味は「四土（しど）」の一つである「常寂光土（じょうじゃっこうど）」と同じではないかと思われる。常寂光土は仏教に於ける全宇宙の究極真理としての仏陀が常住する浄土とされるもので、永遠であり、煩悩も存在せず、絶対の智慧の光に満ちているとする。因みに仏教の「四土」には二種あり、主に天台宗で四種の仏土を指し、「凡聖同居土（ぼんしょうどうごど）」・「方便有余土（ほうべんうよど）」・「実報無障礙土（じつぼうむしょうげど）」・「常寂光土」をまず普通は謂い、更に教学上の唯識（ゆいしき）の四種の仏土として「法性土（ほっしょう）」・「自受用土」・「他受用土」・「変化土（へんげ）」があるが、多佳子の使う「常浄光土」というのはどこにもなく、「常」を造語的な接頭語と見ても、「浄光」は仏典や寺名に普通に見られるが、「浄土」や「寂光土」はお馴染みであっても「浄光土」というのさえも私には未見の熟語である。字の相違から誤字や誤植とも思われず、不審である。一応、多佳子の嘱目印象による造語と採ってはおく。］

仏達春昼立たし吾歩む

くちなはの追はるるときを青びかる

春の土碧びかる釘あまた落ち

初蝶や一途に吾に来るごとし

花群にちかづき木瓜の花を見る

むらさきの色藤にしてほるかなり

雨の藤昏れまぎれつゝ昏れてゆく

地に憩ふ枇杷盛る籠の間にして

門司

枇杷買ふや霧笛が髪を打つて過ぐ

夜光虫掬ひたる掌にとどまらぬ

流燈のはかなき土を灯しけり

[やぶちゃん注：「土」は「つち」と訓じていようが、意味合いとしては儚きこの世、穢土（えど）と私は読む。]

流燈を流すはかなきことを見る

又一歩ちかより立つや土用濤

揚羽蝶砂丘を越えて又逢へり

送らるる吾が遅れて片かげり

［やぶちゃん注：「片かげり」は「片蔭り」で「日陰（ひかげ）」のこと。歳時記などを見ると、大正以降によく使われるようになった晩夏の季語とする。

以上、『馬酔木』掲載分。］

修二会

天狼のいでて修二会の星揃ふ

［やぶちゃん注：「修二会」「しゆにゑ（しゅにえ）」と読む。既出既注であるが、再掲しておくと、法式としてのそれは国家安泰を祈ることを目的とした法会で、ここは東大寺のそれ、所謂、「お水取り」である。同寺の修二会の本行は、現在は新暦三月一日から十四日までの二週間に亙って二月堂で行われる。］

雪の上修二会の僧の沓一歩

修二会堂女人端ぢかくして寵る

修二会の火双眸にもやす女かな

ねむたさの女伏したる修二会かな

雪を来し女人修二会の扉をよごす

雪霏々と行法の火のもゆるなり

修二会僧行法の火にうちむかふ

雪の堂修二会の扉ひとつ開き

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。］

冬旅の一歩や鼻緒かたくして

肩かけや解纜の汽笛ふりかぶる

［やぶちゃん注：「解纜」は「かいらん」と読み、纜（ともづな）を解く意で、船が航海に出ること。船出。出帆。］

寒き門司舷はしづかに離れゐる

肩かけや白波かぎりなき只中

稲妻のしきりや言葉しづかにて

夕焼けて立つや喪服の手も足も

吾亦紅老いゆく日々を紅ふかむ

［やぶちゃん注：「吾亦紅」バラ目バラ科バラ亜科ワレモコウ *Sanguisorba officinalis*。既注。］

以上、『現代俳句』掲載分。」

昭和二十三（一九四八）年

蟻地獄かなしき刻の過ぎてゆく

今日生きてむさぼりゐるや蟻地獄

夕焼や葬列なればとどまらず

いなづまが樹々に入らんと犇けり

人の死の如く蟷螂膝を折る

熱のあと鶏頭がたつ悲しけれ

汽罐車が熱き湯もらす雪の上

猫が来て氷を舐りはじめたり

燈を消せば地虫の闇と一色に

砂丘ゆく蝶に光がぎつしりと

罌粟畑嬰粟の散ることはじまれり

月に向ひ水を走りて道下る

いちほやく桜紅葉を沼うつす

炎天に老婆ものいふか口うごく

［やぶちゃん注：面白いし、一種、鬼趣の佳句ではあるが、明らかに先行する盟友西東三鬼の名吟、

緑蔭に三人の老婆わらへりき

と、

廣島や卵食ふ時口ひらく

のハイブリッドなインスパイアである。］

幸福な日には忘れて蟻地獄

断崖を攀ぢ蟷螂は死に逢へり

蟷螂の骸をけば水流れ去る

冬空のけぶり一筋消すよしなし

月が照る雪を真近に熱の夜

凩やをんな近づき来て若し

月光へくらがりの雪ふみていづ

雪の日の厨を汚す犬叱る

墓地いでて冬の町ゆく歩みなる

月入りしあとの海にて河豚の宿

船がゐて雪岳よごすとめどなき

瓦斯槽（ガスタンク）雪ふる町に入りてゆく

駅の燈に入るや雪来し歩みもて

寒の星落ちて情死をいそぎけり

寒卵一つ得しのみ寒つゞく

流水に遅れて落花いそぎけり

情死の上寒の日輪のぼりたり

足袋はかず一日を過す蝸牛

ほとゝぎす夏も咳して臥しゐたり

喪の顔を向けゐる卯の花腐しかな

夕焼に羽蟻飛翔すついにひとり

［やぶちゃん注：「ついに」はママ。］

秋螢ゆく茫々と沼の上

野分の戸汽笛がうつてすぐ消えし

鳰波より先きに暮れゆける

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「鳰」は「かいつぶり」と詠んでいる。無論、鳥綱カイツブリ目カイツブリ科カイツブリ *Tachybaptus ruficollis*、古名「鳰（にお）」のことである。］

けふ張りし障子に山の闇ふるゝ

鵙叫び立つや雨傘墓にふれ

秋の蝶とまれば何に眼をうつす

栗一つ訣れしあとも握りもつ

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。この年の一月一日に同誌は創刊された（師山口誓子主宰）。］

泥の手を垂らして立つや虹の前

うらむけてトロッコ月に車輪四つ

雨の中砧の音が夜へつづく

うしろより砧追ひ来る夜の坂

砧はたとやみたる方へ心ゆく

ものの影露の夜にして濃かりけり

十三夜約せしことも病みて過ぐ

熊ン蜂怒りぶつかる樹々冷か

鶏頭やひと通るとき獣めき

洗髪いなづまきては遊びけり

句を作り夜のいなづまと遊びけり

曼珠沙華炎ゆるときゝ消ゆるときゝ

百舌声を断ては心の行方なし

面照らす少女に逢へり十三夜

桜紅葉ふむや絢爛たる孤独

凍る沼日々鮮らしき芥を捨て

提燈がときに氷れる沼照らす

沼凍り木魂が夜も遊びをる

犬の声樹々にぶつかり沼凍る

河豚の宿海にむかへば燈火なく

もののみな筑紫の夜やふぐと汁

［やぶちゃん注：「ふぐと汁」はママ。］

熱の夜のわが身まわりの雪明り

春月や地上に猫が猫と会ふ

雛の家山にけものゝ夜が来て

雛の家崖は雪ふる業(わざ)やめず

狐暗くこの家の夜を雛います

歩みつゞけ春月の暈(わ)を歩み出ず

凍蝶の辺に人の身の歓喜あり

風邪の身を春の日向に捨てし如

用ありて来し高層の冬の河

蝙蝠のうつうつ醒むる脂粉とく

蝙蝠に行手よぎらる何の予感

地を翔けり蝙蝠夕焼けより遮る

末黒野の粗(あら)草その辺より青む

花過ぎし夜雨音なき沼の方

夕ながきこと切なけれ鹿の斑

松蟬の声の端々かさね来る

［やぶちゃん注：「松蟬」既注。］

蕗切りしあと惨憺と蕗畑出る

こんこんと蟻湧きいづる風大地

青梅に想ひをよせぬ青は佳(よ)し

黴の家没日の刻の真紅にて

黴の中ものも思はず健やかに

夕焼けて牧師の耳朶の女めく

燿ける蜥蜴見てゐて風邪長き

［やぶちゃん注：「燿ける」は「かがやける」と読む。「燿」「輝」に同じであるが、多佳子は実に蜥蜴の妖なる色彩に相応しい字を選んでおり、それが風邪のぼぅっとした意識とこれまたマッチしている。］

黴の中童女片言くりかえす

汐汲みに夏濤頭よりのしかかる

髪切虫押しつけゐれば啼きつゞけ

汗の身に仏体の冷え恐ろしき

僧房に冷水湛え手を冷す

茱萸嚙んではや夏痩の避け難く

淋しきときしきりに来るや祭笛

花莨夜宮囃が夕焼くる

［やぶちゃん注：「花莨」は「はなたばこ」で、ナス目ナス科タバコ属シュッコンタバコ（宿根煙草）*Nicotiana alata* の別名。ウィキの「シュッコンタバコ」によれば、『主として花壇用の草花として栽培され』、『ブラジル原産。通常越冬しない一年草とされているが、強い霜の降りない地方では、越冬して灌木状になることもある。茎は直立して高さ』三〇～九〇センチメートル程『になり、茎は角張っていて稜に翼があり、種名の *alata* は「翼のある」という意味である。葉は下の方のものは大きく、楕円形で、長さ』二十センチメートルにも『なることもある。上部の葉は紡錘形で互生する。花は』七月から十月にかけて開花し、直径二～五センチメートルほどの漏斗形で、先端は星状に五裂する。一つの花の寿命は二日ほどであるが、『総状花序を作って次々に開花する。花色には紅、赤、紫、白、黄色などがあり、香りがあり、とくに夕方から宵にかけて強く香る』とある。多佳子好みの花とみた。実際にタバコの原料ともなるようである。］

羅衣の紅伽藍の端に童女ゐて

月光や古衣すでに匂ひなし

鱗雲の戸をいづ墓地を行先きに

墓地に立つ野分の落葉美しと

秋の沼むかへば北の星ばかり

ぬぎし衣に猫うづくまる野分の夜

つと燈り野分の瑠璃に貌うつる

十三夜仏眼あまたくらがりに

［やぶちゃん注：同年年譜の九月の条に、『津田清子、田中季子』、堀内『薫の四人で、十三夜の月を唐招提寺に見る。無人、無燈、一点の雲もない明月。月に照らし出された金堂の美しさ、多佳子は月明の円柱の袖を手で撫でて愛惜』し、『円柱にかがんでもたれ、静かに月を仰いで、「かねがね来たいと思っていて、実現しなかったが、とうとう来ることが出来ました。」と一人ごとのように言い、泣いているようで』あったと記す。］

月明に金堂の闇くもりけり

こほろぎが一跳びに失せ女身ひとつ

冬濤を見し絶壁へひきかへさず

冬濤を見て絶壁を立ち去れり

寒き崖ちかづく蝶を吹きおとす

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。『七曜』は『天狼』の僚誌として同誌と全く同日の、この年の一月一日に創刊され、『天狼』系の俳誌として当初は橋本多佳子と榎本冬一郎とが指導していたが、二年後の昭和二五（一九五〇）年一月に多佳子の主宰となった（多佳子没年の昭和三八（一九六二）年に師山口誓子主宰となり、今年、二〇一五年三月の第八百号を以って終刊した。因みに『天狼』の方は一九九四年三月の誓子死去後に六月号（通巻五百四十八号）を出して終刊している）。］

鶏頭の炎え盡さむと霜の中

赤子泣き運河の中も雪が降る

熱の夜の障子鮮らしきこと切なし

夜の雪よぎりしものを猫と見る

七面鳥凩に挑み雌（め）にいどむ

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。］

菜殻火か野に炎ゆる火に近づかむ

松あらし夜へつゞくや衣更

燦々と日に蜂飛ぶや人の死後

鮒を追ひ吾帰るとき帰り来ず

薄翅かげろふ墜ちて活字に透きとほり

［やぶちゃん注：「薄翅かげろふ」は、

有翅亜綱新翅下綱内翅上目アミメカゲロウ目ウスバカゲロウ上科ウスバカゲロウ科Myrmeleontidae

に属する**ウスバカゲロウ類**を総称するもので、このウスバカゲロウの仲間は完全変態で、種によってはお馴染みのアリジゴクを経るから、本句群の冒頭に「蟻地獄」の句も出はするのでそれとまず見てもよいのであるが、**ここで多佳子が見たのは、全く異なる種である真のカゲロウ類（後述）である可能性も捨てきれない**と思う。それは**彼女の住んでいるのが奈良市あやめ池で水辺が近く、これはその自邸での嘱目吟であるから**である。まずはウスバカゲロウとしてウスバカゲロウ科の中の一種ウスバカゲロウ *Hagenomyia micans* を例に挙げておくと、羽根が薄く広く、また弱々しく見え、真正のカゲロウ類と非常によく似ている（というよりも昆虫フリークでもない限りは、これらを多くの一般人は区別していない）。ところが、そのそっくりに見える真正の**カゲロウ類**は、

有翅亜綱旧翅下綱 Ephemeropteroidea 上目（カゲロウ）目 Ephemeroptera

に属する、

ヒラタカゲロウ亜目 Schistonota

マダラカゲロウ亜目 Pannota

であって、これらの仲間は総ての幼虫が水棲生活をし、しかも不完全変態（幼虫期は「ニンフ」（nymph）と呼んで完全変態の幼虫「ラーヴァ」（larva）と区別する）である（ここま

では主にウィキの「ウスバカゲロウ」と「カゲロウ」に拠った)。私の偏愛する梶井基次郎の「櫻の樹の下には」の一節に、

＊

二三日前、俺は、ここの溪へ下りて、石の上を傳ひ歩きしてゐた。水のしぶきのなかからは、あちらからもこちらからも、薄羽かげらふがアフロデイツトのやうに生れて來て、溪の空をめがけて舞ひ上がつてゆくのが見えた。お前も知つてゐるとほり、彼らはそこで美しい結婚をするのだ。暫く歩いてゐると、俺は變なものに出喰はした。それは溪の水が乾いた磧へ、小さい水溜を殘してゐる、その水のなかだつた。思ひがけない石油を流したやうな光彩が、一面に浮いてゐるのだ。お前はそれを何だつたと思ふ。それは何萬匹とも數の知れない、薄羽かげらふの屍體だつたのだ。隙間なく水の面を被つてゐる、彼等のかさなりあつた翅が、光にちぢれて油のやうな光彩を流してゐるのだ。そこが、産卵を終つた彼等の墓場だつたのだ。

俺はそれを見たとき、胸が衝かれるやうな氣がした。墓場を發いて屍體を嗜む變質者のやうな慘忍なよろこびを俺は味はつた。

＊

と出るが、**これも実はウスバカゲロウは誤りで真のカゲロウ類であることが、梶井の描写そのものによってお分かり戴けるものと思う**。なお、さらに面倒なことに、他にもやはり非常によく似た形態のものに、卵を「ウドンゲ（憂曇華／優曇華）の花」と呼ぶ、新翅下綱内翅上目脈翅（アミメカゲロウ）目脈翅（アミメカゲロウ）亜目クサカゲロウ科 Chrysopidae

もいるのであるが、これもまたカゲロウ類とは異なり、完全変態で幼虫の形態はアリジゴクに似ている。こちらについてはウィキの「クサカゲロウ」などを参照されたい。

以上、『現代俳句』掲載分。多佳子、四十九歳。]

昭和二十四（一九四九）年

虹の天よびし人の名のぼりゆく

風邪髪のはつれに熱き息かかる

旋の硝子隅々までも雪降りて

瀬を越えて来しかば蝶の翅荒き

遠くよりはや胸ひゞく寒の柝

［やぶちゃん注：「柝」は「たく」と読んでいよう。拍子木を打つことである。］

木の葉髪きぞのごとくに手にひらふ

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「木の葉髪」は晩秋から初冬の頃に頭髪が多く抜けることを木の葉が散るのに譬えた語で冬の季語で、「きぞ」は「昨」「昨夜」で昨日、昨夜の意。］

鶴来るや母の手に子のとどまらず

地を翔ちし寒鶴なればや羽ひくゝ

春の森流れを越えしより怖れず

旅長し雪ふる破璃を指にふき

夜の桜さむければつい吾にかへる

相寄るとき夏鹿の斑のあきらかに

炎天や童女毬つく歌は来ず

髪冷ゆるほどこほろぎの冷えゐるか

月と同じ冷たさまでに身の冷えて

鶏頭の炎ゆるを以て冬近し

縄跳び激し少女に冬日もどり来ず

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。］

毛糸編む少女と隣り伊賀駛る

［やぶちゃん注：「駛る」「はせる」と訓じておく。］

藁塚が見てをり道を迷ひをり

師の部屋を涯とす冬の荒磯に

い寝むとす冬濤ちかく師にちかく

師を措きて冬波措きてかへるかな

［やぶちゃん注：底本年譜の同年の条に、『三月二十日、多佳子は堀内薫を同伴、鼓ヶ浦に誓子を訪い、薫を紹介する。二泊』とあるが、三月では季が合わない。年譜にないが、前年の終りにここを訪ねているか。鼓ヶ浦は既注であるが、現在の三重県鈴鹿市寺家町鼓ヶ浦で、伊勢湾の西岸。誓子はこの前年の十月にここに転居していた。］

子を讃るとき金色に枯木立

氷る沼郵便夫現れいそぎけり

寒三日月記憶そこより断ちきられ

祖母死にて少年狐火を怖る

死にければ人亡し倚れる枯木星

［やぶちゃん注：「枯木星」「かれきぼし」は、枯木の上に輝く星の謂いで冬の季語。］

霜の土死の一角の暁けはじむ

紅（べに）さして大寒の日の身をまもる

［やぶちゃん注：「大寒」（だいかん）は二十四節気の最後で旧暦の十二月中であるが、現行の新暦では一月二十日頃に相当する。但し、期間としてならば次の節気の立春までの、

新暦一月二十日から二月三日までを指す。]

月光にありし蝶ゐず岩明くる

月光が死蝶を照らす岩と共に

凩や老婢の寝丈よこたはる

[やぶちゃん注:「寝丈」聴かぬ語であるが、布団に包まった伸びた寝姿の意で、「ねだけ」と訓じているのであろう。]

抛りあげし蜻蛉翔りてすぐ落ちぬ

藤懸るを天より地まで見下ろしぬ

春日や墓地に在ればめつむりても墓地

[やぶちゃん注:「春日」は「しゅんじつ(しゅんじつ)」と音読みしていよう。にしても、中も下も、ひどい破調である。]

桜吹雪どこまでも夜の地平(つち)ら

何訴ふる桜の幹を猫爪搔(つまが)き

老いし髪ゆたかに花も散らさずに

思ひ出す燕はみんなこちら向く

一歩にて春潮荒らぶ艀の身

［やぶちゃん注：「艀」老婆心乍ら、「はしけ」と読む。「艀舟（はしけぶね）」の略で、河川や港湾などに於いて大型船と陸との間を往復して貨物や乗客を運ぶ小舟。船幅が広く、平底で、見た目、舟というより、毛の生えた筏みたようなものである。］

夏濤にま向ふ吾はいつまで在る

黴の身に一片の香薫きこむる

蝶三つもつれ落ち来る三つは悲し

［やぶちゃん注：理窟を捏ねる気はなく、その感覚にひどく惹かれる句である。］

母ゆ享けし普門品黴たちのぼる

［やぶちゃん注：「ゆ」上代の格助詞で「〜より」「〜から」の意。言わずもがな乍ら、「普門品」は「ふもんぼん」で、法華経第二十五品の観世音菩薩普門品（かんぜおんぼさつふもんぼん）の略称で通称、観音経と呼ぶ。］

蟇闇に女あるじは句を案ず

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「蟇闇に」は「ひき／やみに」で、「蟇」蛙の居る気配、それが庭の「闇に」ある、その「闇」の夜「に」、である。］

わが通りすぐとき沼に銀河あり

郡山古城跡

いかなる日も古城は悲し青蜥蜴

古城といふ美しきもの崖に蜥蜴

［やぶちゃん注：「郡山古城跡」恐らく、奈良県大和郡山市の郡山（こおりやま）城跡であろう。豊臣政権の中初期には秀吉実弟羽柴秀長の居城で、その領国であった大和・紀伊・和泉百万石の中心地であり、江戸時代には郡山藩藩庁が置かれた（十七世紀初頭に領主増田長盛が改易された後、一時廃城となったが、水野勝成入封時に徳川幕府よって改修を受けている）。参照したウィキの「郡山城」によれば、城跡は明治一四（一八八一）年に旧郡山中学校の校舎が二ノ丸に、旧郡山園芸高校が麒麟曲輪に建設されるなどして大きく姿を変え、長らく城跡としては荒廃していたが、昭和三五（一九六〇）年に本丸と毘沙門曲輪が奈良県指定史跡となり、その後、昭和五八（一九八三）年に追手門が、翌年に追手東隅櫓が、昭和六二（一九八七）年には追手向櫓が市民の寄付などによって復元され、ニュース記事によれば現在、二〇一三年より天守台の修復が進行中で、来年二〇一六年末には完成予定とある。多佳子が訪れたのはまさに、その放置荒廃の末期（郡山城の発掘調査が始まったのは昭和五四（一九七九）年以降）であったものと思われる。］

土用粥たぎらせ老婦かたくなに

［やぶちゃん注：「土用粥」夏負け防止の土用丑の日の食伝承は数多いが、熱暑に弱った体や胃にはしっかり熱を加えたあつあつ粥はまた、安全で優しかろう。平凡社「世界大百科

事典」の「土用」には、この日に『静岡市にはユリの根を入れた土用粥を食べる所もある』とある。」

祭笛里居の老婦はや帰れ

螢籠一夜に人の遠くなる

河渡る夏野騎(の)り来し迅さもて

秋の蝶くきくきとわが髪を過ぐ

［やぶちゃん注：「くきくきと」動きがしっかりとしたパターンを持っている感じを表現したオノマトペイアであろう。］

秋ふたゝび黄蝶に逢ふ瞼やせ

夫十三回忌

海近く一本の曼珠沙華流る

［やぶちゃん注：夫豊次郎（昭和一二（一九三七）年没。享年五十歳）の祥月命日は九月三十日。］

雨の鵙姿を見せて啼き去れり

夕炉火を激しく焚かむ吾とがめそ

いのちなき斑猫（はんめう）の身の彩（いろ）湛え

［やぶちゃん注：「斑猫」既注であるが再掲する。鞘翅（コウチュウ）目オサムシ亜目オサムシ上科ハンミョウ科ナミハンミョウ *Cicindela japonica*、所謂、ミチオシエ（道教え）である。背部の彩りが多色で華やかであり、しかもそれが金属的な光沢を持っていて見た目の印象が美しいく、昆虫愛好家の間では日本で最も美しい昆虫とさえ言われる。別名は、人が近づくと一、二メートル程飛んで直ぐ着地するという行動を繰り返し、その過程で度々、後ろを振り返るような動作をする本種の習性に基づくも。なお、「斑猫」全般については、私の「耳嚢　巻之五　毒蝶の事」の注で詳細を述べておいた。是非、参照されたい。］

風花ぐせその時いつも鶲ゐて

［やぶちゃん注：「風花ぐせ」の「風花」「かざはな」「かざばな」は、晴天にちらつく小雪片で、降雪地から山を越えて風に吹かれて飛来してくる小雪を指し、冬の季語である。「ぐせ」はいつもそのようなかんじになることをことを意味する「癖」を接尾語的に用いてそれが濁音化したものと採る。またぞろ、風花がちらついてきそうな気配がすることの謂いと採るということである。大方の御批判を俟つ。

「鶲」は「ひたき」。スズメ目スズメ亜目スズメ小目ヒタキ上科ヒタキ科 Muscicapidae に属するヒタキ類を広く指すが、冬の嘱目吟からは同ヒタキ科（ツグミ科 Turdidae ともする）ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus* か。］

身を入れて霧の燈の輪のあたゝかく

うろこ雲煙一筋つき上ぐる

路線よぎる誰の肩にも鱗雲

祭太鼓雨は激しく子をうつて

月光にわが息ばかりあたゝかく

驟雨の香少年の香のバス駛る

［やぶちゃん注：「駛る」ここも「はせる」と訓じておく。「はしる」でも通るが、何か生理的に痩せた感じがして好きでない。］

青髪をずたずたにしていなびかり

真紅のばらゆるされて折るはゞからず

三日月の地の涯死なは逢ふ夫（つま）か

童子林檎嚙る冬日を落しつゝ

縄跳びはげし少女冬日を炎したり

［やぶちゃん注：「炎したり」は「もやしたり」と訓じたい。］

ふたり子へ二つの愛や菊赤黄

高架ゆく汽車はつきりに時雨る街

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

虫干や美しき帯長く重く

愛さるゝ如油虫ひかり飛ぶ

［やぶちゃん注：この句、その感覚の希有に乾杯！

以上、『現代俳句』掲載分。］

わが前にうしろに野火の炎えて見よ

［やぶちゃん注：これは底本に『「短冊」より』とする一句である。多佳子らしい一句である。多佳子、五十歳。］

昭和二十五（一九五〇）年

櫂を引くいつもうつむく声音して

恵方といふ人の歩みの方へゆく

入学の坂流水と駆け下る

一握の砂にて埋む蟻地獄

露によみはじむ荒息知られぬため

冬の金星吾より先に孤児が見て

枯枝拾ふ疑ひもなきけふの吾

冬の旅屋根のクルスのいつまで見え

霜の上鑿またぎしをあとより怖る

凍蝶や大地日当ること忘れ

いなづまの夜の明けはなれ蝶の骸

嫗の死吾との間に桃盛り

海南風衣袂鳴らして夫の死後

牡丹の緋切りてすなはち左手に重し

［やぶちゃん注：「左手」は「ゆんで」と訓じておく。］

惨酷に刻たつ蟷螂雌に抱かれ

［やぶちゃん注：これは所謂、昆虫綱蟷螂（カマキリ）目 Mantodea のカマキリ類が交尾

行動（実際にはそれ例外の時も起こる）の際に雄を共食いする情景を嘱目、或いは事後のそれを想像した句である。種によって異なるものの、最新の知見ではこの♀による♂の共食いの頻度は必ずしも高くはないという。私は、カマキリの交尾時には、種によっては高い頻度でオスがメスに食われ、それはカマキリが近眼で、交尾時でも通常の際と同様に動くものを反射的に餌として捕食してしまうものと認識していた（実際、私は小学生の時に頭部を交尾をしたカマキリで、一方の（♂の）頭が失われているのを見たことがあったし、サソリのある種では♀が頭胸部の下方に無数の子供を抱いて保育するが、落下して母親の視界に入ってしまうと、彼らは近眼であるために大事に育てているはずの子供を食べてしまう映像を見たことがある）。また、正上位での交尾ではそのリスクが高まるため、近年、♂のカマキリの中には後背位で交尾をする個体が見られるようになったという昆虫学者の記載を読んだこともあって、かつて教師時代、授業でもしばしばそう話したのを記憶している教え子諸君も多いであろう。しかし、ウィキの「カマキリ」の「共食い」の記載の見ると、そこでは幾分、異なるように書かれてある。一応、以下に引用しておきたい。『共食いをしやすいかどうかの傾向は、種によって大きく異なる。極端な種においてはオスはメスに頭部を食べられた刺激で精子嚢をメスに送り込むものがあるが、ほとんどの種の雄は頭部や上半身を失っても交尾が可能なだけであり、自ら進んで捕食されたりすることはない。日本産のカマキリ類ではその傾向が弱く、自然状態でメスがオスを進んで共食いすることはあまり見られないとも言われる。ただし、秋が深まって捕食昆虫が少なくなると他の個体も重要な餌となってくる』『一般に報告されている共食いは飼育状態で高密度に個体が存在したり、餌が不足していた場合のものである。このような人工的な飼育環境に一般的に起こる共食いと交尾時の共食いとが混同されがちである。交尾時の共食いも雌が自分より小さくて動くものに飛びつくという習性に従っているにすぎないと見られる。ただしオスがメスを捕食することはなく、遺伝子を子孫に伝える本能的メカニズムが関係していると考えられる（すなわちメスを捕食してはＤＮＡが子孫に伝わらなくなる）。また、このような習性はクモなど他の肉食性の虫でも見られ、特に珍しいことではない』『また、それらの雌が雄を捕食する虫の場合、雄が本能的にいくつもの雌と交尾をし、体力を使いす

ぎて最後に交尾した雌の餌になっている場合もある』。私の話はカマキリの種によっては誤りではない、と一応の附言はしておきたい。」

群るゝ蝶旅に人の訃追ひ来たる

渦潮に立つ海恋の眼をひらき

露飛び立つ鳥は胸に脚たゝみ

月光より火蛾を聚むる誘蛾燈

白露に硝煙の香の走りたり

蟷螂とゐて盤石の熱(ほて)りはげし

洗ひ髪月明暁にまで及ぶ

二階欲し雪降る天の果て見たく

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。］

林檎嚙む霧笛は研あそびして

林檎嚙る母の歯形のところより

一足(そく)の足袋買ふを鏡うつしてをり

懸け大根オリオンの端地より出で

落ちはづむ木の実に誘はれてひろふ

辛夷の天降り来る雪の隙間なし

女(め)の鹿は妊りゐるか枯はげし

寒牡丹傷つく菅紅犇く

霜夜童女わが手のとゞくところにい寝

はや寝つくか凍夜の枕かへしもせず

ものみなの枯れて了ふ今日以後も生く

坂下る春星いでし高さまで

修二会の闇火採男(ひとりを)身より岳をのばす

［やぶちゃん注：多佳子の好んだ東大寺二月堂の修二会、「お水取り」の、そのクライマックスである「お松明(たいまつ)」の嘱目吟であろう。私は見たことがないので、ウィキの「修二会」の「東大寺修二会（お水取り）」の「お松明」より引く（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した）。『修二会のシンボルのような行事に二月堂の舞台で火のついた松明を振り回す「お松明」がある。この松明は上堂の松明といわれ、本来は、初夜の行

を始めるために練行衆が登り廊を登るときに道明かりとして焚かれるもので、一人の童子が松明をかざして、後に一人の練行衆が続き、入堂された後に、その松明を舞台(欄干）に回り、火を振り回すのである。その後、裏に回り水槽で消され、上がってきた登り廊を降りていく。本行の期間中連日行われるが、十二日は一回り大きな籠松明が出るので見応えがある。また、十二日のみ十一本の松明が上堂する。他の日は十本である。十二日以外の日は、新入は先に上堂して準備をしているため十人、十二日だけは準備をしてから一旦下堂するので十一人の上堂となる。この籠松明は長さ八メートル、重さ七十キログラム前後あり、バランスを取るため、根が付けられている。他の日の松明は長さ六～八メートル、重さは四十キログラムある。『籠松明以外は、使われる日の早朝に担ぐ童子自身が食堂（じきどう）脇で作る。材料は一～二年かけて集める』。（中略）『籠をくくるフジヅルは、滋賀県甲賀市（旧・信楽地区）の江州紫香楽一心講から毎年二百キログラムが寄進されている』『が竹以外は年々調達が難しくなってきている』とある。]

紅梅の一枝を挿して影つよし

梅雨傘をたゝみすなほち波郷の前

てのひらを穂先におかれ泉湧く

藤房の切先揃へ額(ぬか)に来る

負けし子がつかむ黄麦の穂の熱(あつ)く

野分中しづかに言葉うけられて

日盛りや身擦りて匂ふ青柏

まぎれては吾亦紅立つ青野分

息ひそむ野分の蝶蛾と共に住む

老いゆるさず天よりも疾く凌霄灼け

［やぶちゃん注：「凌霄」は「りようせう（りょうしょう）」で凌霄花、落葉性の蔓性木本類であるシソ目ノウゼンカズラ科タチノウゼン連ノウゼンカズラ属ノウゼンカズラ *Campsis grandiflora* のこと。ウィキの「ノウゼンカズラ」によれば（記号の一部を変更・省略した）、『夏から秋にかけ橙色あるいは赤色の大きな美しい花をつけ、気根を出して樹木や壁などの他物に付着してつるを伸ばす』。『中国原産で平安時代には日本に渡来していたと考えられる。夏の季語』。『古名は「ノウセウ（陵苕）」または「ノセウ」で、それが訛って「ノウゼン」となった。また蔓が他の木に絡み攀じ登るため「カズラ」の名がついた。また古くは「まかやき（陵苕）」とも呼ばれた』。『「ノウセウ」については凌霄（りょうしょう）の朝鮮読み「ヌンソ」の訛りとする説もある』。『漢名の凌霄花は「霄（そら）を凌ぐ花」の意で、高いところに攀じ登ることによる命名。漢詩では他物に絡むため愛の象徴となる。また、「陵苕」（リョウチョウ）も本種を表す』とある。］

露に指しびれ来記憶追いつめる

忌の一（ひと）日其後も秋の蚊帳くゞる

［やぶちゃん注：「忌の一日」は推測でしかないが、これはやはり夫豊次郎（昭和一二（一九三七）年没。享年五十歳）の祥月命日九月三十日であろう。この年は十四回忌に当たった。］

蟻地獄一握の砂にて埋め足る

少年のものにて蠶蛾の産卵つゞく

［やぶちゃん注：「蠶蛾」私は「さんが」と音読みしたい。］

折り持つを里子がしびとばなと囃す

［やぶちゃん注：「しびとばな」単子葉植物綱キジカクシ目ヒガンバナ科ヒガンバナ亜科ヒガンバナ連ヒガンバナ属ヒガンバナ *Lycoris radiata* の異名。私のブログ記事「曼珠沙華逍遙」を参照されたい。同年年譜に、『九月二十三日、大野寺に吟行。室生川に沿うて、密生する曼珠沙華に多佳子は狂喜し、その中に寝ころぶ』とある。「里子」の謂いから、この折りに吟行の可能性が高い。奈良県宇陀市室生大野にある楊柳山大野寺は、室生寺の西の大門にある真言宗室生寺派の寺院で本尊は弥勒菩薩、開基は役小角と伝える。宇陀川岸の自然岩に刻まれた弥勒磨崖仏があることで知られる。室生川はその宇陀川の中流部に注ぐ主支流の一つで、この中流域に室生寺がある。］

冬虹の切れ端として地勁（つよ）し

沖波自ら立ち寒き一湾にも溢る

寒潮にいま安んじて群ら鷗

翁斧うつ年木かつかつ自ら割れ

楽しくて蜜柑の酸ゆき嫗の眉

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

にはたづみわが羅に彩(いろ)そむかず

かなかなや朝髪冷ゆる藻の如く

仰臥する顔草高く露高く

蚊帳の夜末をとめにて吾に遺る

家の中部屋のわかれて虫しげし

露寒し仔鹿跳びても跳びても露

雪原の汽笛みぢかく余響なし

雪原の燈のなき汽車とすれちがふ

旅の松夜空に雪用意して立つ

コートぬぐ虫の端に炉火がもえ

雪構へしてぞ母屋をへだて住む

降る雪の音か枕に耳あつる

汲みて賜ぶ雪の井水のゆげ立つを

若さかくさず炉火に歯皓く論つよし

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「皓く」は「しろく」と読む。］

旅の扉のひらかれストーブくれなゐに

雪嶺を雨に隠され訣るゝ日

かりかりと凍雪を噛く虎落笛

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「虎落笛」は「もがりぶえ」と読む。冬の激しい風が竹垣や柵などに吹きつけて発する笛のような音。］

冬旅のオリオン菓子を買ひてをり

ひとの傘の裡の歩みや雪ふみて

風雪を欲れど捨身の旅にあらず

太白と雪山同じ程に暮る

［やぶちゃん注：「太白」老婆心乍ら、金星のこと。］

雪山に汽笛の谺うちあへり

マスク除(と)る大きく息をつかん為め

死はそこに深夜の林檎戛(かつ)と割る

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。多佳子、五十一歳。］

昭和二十六（一九五一）年

雪つぶて手ごたへあつて手がしびる

初蝶の宙にて風につきあたる

地に降りしばかりに蝶の翅汚る

雨激し鶯啼くをやめられず

群衆をぬけ出る花火旺んなとき

一木の落葉はげしくちかよれず

地に着きし前の絮のふたたび飛ぶ

地の窪の木の実ら共に日を失ふ

冬雲雀野の池に雲ぎつしりと

鶴群れ鳴く見ればわが頭(づ)も雪ふれる

深雪の下水一徹に鳴りつゞけ

前田旧邸にて

廃園に立つ雛の日の笹さはぐ

［やぶちゃん注：「前田旧邸」不詳。］

鍵入れて雪の鉄扉の裡ひゞく

雉子鳴くや林中に応へるものなく

旅によごれ雪解光りを身に反す

僧身のさへぎる修二会の油火のび

星なくて修二会の闇の天へつゞく

恋猫に山の月光小枝もかくさず

水中に梳らるゝ洗髪

よるひるの枕や夜は地虫啼く

［やぶちゃん注：「地虫啼く」で秋の季語。その鳴き声の正体は直翅（バッタ）目剣弁（キリギリス）亜目コオロギ上科ケラ科 Gryllotalpidae の螻蛄（けら）類の、土中で「ジー」と鳴く声であり、古くは俗に「蚯蚓（みみず）が鳴く」と誤認して言われた。］

睡りを待つ地虫のこゑのとぎれもせず

流れに髪浸けて濯ぎて畏れもなし

星集りて梅の莚の上通る

梅莚星を疎らに北の天

電光の触れて消えたるガラスのかけら

滴りのつよさ一壺を満たしくる

夏たんぽゝ手をつけば濤とゞろけり

硬山（ぼた）燃ゆ短夜を寝ねばならず寝る

［やぶちゃん注：「硬山（ぼた）」ボタ山。石炭類の採掘に伴って生ずる捨石（ズリ／ボタ）を捨て

た山状を呈した集積場で、特に「ボタ（山）」九州の炭坑での呼称である。これはウイキの「ボタ山」を参照されたいが、因みにそこにも『捨石の中には石炭分が多く含まれることがあるために自然発火することがある』とあるように、そうした景を多佳子は詠んでいるのである。私は中学二年の頃、松本清張の短編「火の記憶」を読んで鮮烈なその映像を幻覚して以来、ずっとこのボタ山の火が自身の経験のように心に刻まれていることを告白しておく。なお、この年譜にはこの年の夏（「短夜」）に福岡に多佳子が行った事実はない。五月に博多で開催された「天狼」三周年記念博多大会に出席し、旧師杉田久女（死後五年）の詠んだ遠賀川などを巡っているが、季が合わない。」

薔夜崩る激しきことの起る如

旅の歩

旅の歩をどんたくしやぎりに切替へる

［やぶちゃん注：「しやぎり」祭りにあって行列が練って行く途中で笛・太鼓・鉦（かね）などが奏するお囃子或いはその集団を指す。むろんここは五月三日と五月四日（前注参照）に催される博多どんたくのそれである。］

干梅に星がかがやく明日（あした）も生きる

破れ蝶身を以つて高さ持しにけり

水汲女ゐていなづまを浴びどほし

蠶のとぶとき不幸見られたる

炎天来る車輪の音にさへ負ける

ほととぎす楽しき顔にかへりたり

洗ふ髪流れにつけてすぐなびく

K氏夫人に数年振りにて会ふ

老いともに西日の電車に袖が透き

［やぶちゃん注：「K氏夫人」不詳。］

何処へかへる群集天の花火轟き

紅毛の子に桔梗の花ゆだねる

一本の桔梗が立つ不幸の中

秋風に身の香なきまで吹かれたる

寝がへりて冥き方なるちゝろ虫

［やぶちゃん注：「ちゝろ虫」蟋蟀（こおろぎ）の古称。］

解纜や寒き船内燈を充たし

［やぶちゃん注：「解纜」複数既出既注。］

逃ぐるとき翡翠の胸緋をかくさぬ

［やぶちゃん注：「翡翠」「かはせみ（かわせみ）」でブッポウソウ目カワセミ科カワセミ亜科カワセミ属カワセミ *Alcedo atthis* 。］

しきりに眠し蟋蟀がこゑとぎらし

寒潮を桶に充たし速歩（はやあし）となる

一羽を憎み刈田の鷺のあらそへり

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。］

ひとり見て生きる銀漢冬もさだか

時雨日洩らすすなはち童女髪金に

紅失せず手燈（たび）向けられし梅疑（もど）き

［やぶちゃん注：「手燈（たび）」手灯は音で「シュトウ」と読めば、狭義には仏道修行の難行苦行の一つである、素手で脂燭（しそく）を掲げたり、掌に油を溜めて灯心を灯したりすることを指すが、ここは手燭及びその灯火である。「手火（たび）」とすれば読みの謂いが知れようか。「梅疑（もど）き」バラ亜綱モチノキ目モチノキ科モチノキ属ウメモドキ（梅擬）*Ilex serrata* 。和名

は葉や花が梅のそれらに似ることに由来する。]

七面鳥雄叫び霏々と雪疾(はや)め

[やぶちゃん注：「霏々と」は通常、雪や雨が降りしきるさまや、細かになった対象物が飛び散るさま（類似性から雲が浮かぶさまも）を形容するが、ここは疳鋭く啼き喚く七面鳥の雄叫びの目に見えぬそれに用いていて実に面白い。]

髪疼(いた)し寒星増えくるとめどなく

雪天にて鷺の細身(ほそみ)の立直る

母と子と鬼追ひしあとしかと締め

悲しきとき頭(づ)勝ちの鳰のすぐ潜る

[やぶちゃん注：老婆心乍ら、「鳰」は古名の「にお」で詠んでいる。無論、鳥綱カイツブリ目カイツブリ科カイツブリ *Tachybaptus ruficollis* のことである。]

雪解雀飛べば一方へ風つよし

野梅ばかりめつむれば昨日(きぞ)梅紅し

紅梅の無言昼となる夜となる

菜穀火燃え吾との間(あひ)の闇ひらく

笑へる雛もつとも低き階につく

［やぶちゃん注：「階」は「きさ」と訓じたい。］

四月盡病みて敷布に蟻はぢく

［やぶちゃん注：「四月盡」は「しがつじん」で、春の最後の月である、本来は旧暦三月最後の日を指す春の季語。］

人へだつともかげろふに透き透きて

粗土（あらつち）を壁がこぼせる牡丹の昼

船ありしあと春潮の隙間なし

青芦原道が断たれてなほゆくべく

薔薇を去る忘れ捨つべき世の如く

衣更さびしき崖の立てりけり

ぶんぶんが夜髪に縋る脚縛らし

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「ぶんぶんが／よがみに　すがる／あし　もつらし」である。］

夜髪解くや花框の香のまたつよく

［やぶちゃん注：「花框」不詳。そのまま読むなら、「はながまち」となるが、自宅の何処かの花形に化粧彫りした框（かまち）というのは私にはイメージ出来ない。当初は「花梱（はなくぬぎ）」の誤植かと思った。ブナ目ブナ科コナラ属クヌギ *Quercus acutissima* は同じブナ科の栗の花と同じとすればこの句は私には氷解するからである。御存じの方も多いと思うが、ブナ科クリ属クリ *Castanea crenata* の花の匂いには、男性の前立腺から分泌するスペルミン $C_{10}H_{26}N_4$ というポリアミンが含まれており、栗の花はしばしば精液の匂いと同じだとされるからである。私のこれがトンデモ解釈で、「花框」が別物であることを御存じの方は御教授あられたい。］

芍薬を嗅がむとするに咳先だつ

［やぶちゃん注：「芍薬」ユキノシタ目ボタン科ボタン属シャクヤク *Paeonia lactiflora* 。］

淋しさが目鼻つきぬけ夏蜜柑

［やぶちゃん注：「夏蜜柑」バラ亜綱ムクロジ目ミカン科ミカン属ナツミカン *Citrus natsudaidai* 。］

咳をして遠賀の芦原旅ゆけり

［やぶちゃん注：前に注した通り、これはこの年の五月に博多で開催された「天狼」三周年記念博多大会に出席し、旧師杉田久女（死後五年）の詠んだ遠賀川などを巡った際の感懐吟である。］

髪結ひて祭の坑婦昼眩しむ

青柏蛙が青きゆゑ泰(やす)し

花ジャガタラ蝶がゆきては蝶たゝす

［やぶちゃん注：「花ジャガタラ」初夏に咲くナス目ナス科ナス属ジャガイモ *Solanum tuberosum* の花のことと思われる。ヒガンバナの異名として「ジャガタラバナ」（愛媛）もあるが前後の句とは季が合わない。］

わが触れし激しき虹を天へ帰す

風荒らく過ぎては嬰栗を散らさずに

夏の風邪蝶に翅音のありにけり

日のひかり月の光蛇の衣(きぬ)透す

［やぶちゃん注：次の句から、「ひの　ひかり／つきの　ひかり　じや（じゃ）の／きぬ　とほす（とおす）」と読める。］

蛇の衣青槇よりおろさば砕けむ

日盛りや翅ひゞかせて蜂かへる

手花火の煙上げしを人に知らる

睡き瞳に花火の天がずり落ちる

梅筵沼より星の移りたり

九月の草野鹿没し吾ゆきて没す

［やぶちゃん注：「没し」「没す」は、私は孰れも「もつし（もっし）」「もつす（もっす）」と訓じたい。］

曼珠沙華唐招提寺すでに日なし

友食べて蟷螂斧を舐めあかぬ

［やぶちゃん注：先行する前年の「惨酷に刻たつ蟷螂雌に抱かれ」の句の私の注を参照されたい。］

一つ椅子寒き餐燈の輪を被る

小猫にて蛇も幼し闘へり

翼張り飛ぶ鵜と航（ゆ）きあひてまた冬海

かわせみの遁れんとするかくれなき

きれぎれに在りていづれも蛇の衣

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

子雀とゐて身の細き母雀

扉（と）が雪に押されて開かず旅一夜

雪の上に引出され山羊の汚れはげし

日充つれど冬田毬つく処でなし

いちはやく雪白くなる崖の傷

風に波立つも氷らむとするも沼

氷解くる音立てゝより沼うとまし

旅かへる手袋片手失ひて

神戸港にて

フランス旗も貨物も曇る巣つくる鳩

［やぶちゃん注：以上、『現代俳句』掲載分。］

暁は夕暮に似て白蛾の翅

さんきらい草刈女また傷つきて

［やぶちゃん注：「さんきらい」「山帰来」で、ここでのそれは、単子葉植物綱ユリ目サルトリイバラ科シオデ属サルトリイバラ *Smilax china* の別称である。同種には棘が所々に生える。］

凩（こがらし）がゆきては星をかき鳴らす

秋燕の一羽一羽のつよき翼

野分渡しつまり難し濁りあふ

翡翠（かわせみ）の濃き彩（いろ）にしてとどまれず

［やぶちゃん注：「翡翠（かわせみ）」のルビはママ。歴史的仮名遣に従うなら「かはせみ」が正しい。本文句集では皆、「かはせみ」と表記してある。不審。］

別々の冬波に乗り漁舟づれ

［やぶちゃん注：「漁舟」「ぎよしう（ぎょしゅう）」と音読みしておく。無論、漁をする小舟の二艘である。］

青と赤の彩（いろ）わかれ独楽（こま）ゆるむ

何もなき冬浜誓子のひとつ燈つく

わが息のみ冬浜の暮れとどまらぬ

［やぶちゃん注：二句ともに現在の三重県鈴鹿市寺家町鼓ヶ浦の山口誓子宅を冬の遅い日暮れに独り海岸の浜辺から多佳子が遠望するという、如何にも意味深長なものである。そこは「何もなき」「わが息のみ」の心象風景としての「冬浜」であり、「誓子」の家のそれは遠くぽつんと孤「燈」としてあってある絶望的な距離感がそこに介在し、その「冬浜の暮れ」は「とどまらぬ」、「暮れ」ゆくある傾斜を「とど」めることが出来ぬと、多佳子は叫んでいる。これを意味深長と言わずして何と言おう。

以上、底本には『文庫版「海彦」より』とある。多佳子、五十二歳。］

昭和二十七（一九五二）年

毛糸の足袋ひとり立つことはじめけり

宇陀野御幸

冬日の畦ゆき逢へるみな君を見し子

［やぶちゃん注：「宇陀野御幸」「宇陀野」は奈良県宇陀郡にあった旧菟田野町（うたのちょう）のことか。二〇〇六年に榛原町・大宇陀町・室生村と合併、現在は宇陀市。推古天皇一九（六一一）年五月五日にこの宇陀の菟田野（うだの）に推古帝が「薬狩り」（女性は薬草摘み。男性は強壮剤とされる若い鹿の角で「鹿茸（ろくじょう）」を狩った）に行幸されたことが「日本書紀」に記されており、その後の古えの皇族が重臣を従えて訪れており、現在の宇陀市大宇陀上新（おおうだかみしん）には現存する日

本最古の民間の薬草園「森野旧薬園」（「森野吉野葛本舗」裏手）がある（サイト「歩く・なら」のこちらに拠った）。しかし、これは現に「君」の「行幸」を「皆」「見し子」であるから、当時の実際の昭和天皇の「御幸」である。調べてみると、スーポンドイツ氏のブログ『「かぎろひを観る会」は1月1日　～大宇陀へお越しください～』によって、この「森野吉野葛本舗」の店には「みゆき」（御幸）の暖簾がかかっていることが写真で判った。しかも、そこには、この暖簾は昭和二六（一九五一）年に『昭和天皇がこちらの工場・薬園の視察に来られた記念として』あるということが記されている。これは恐らく、昭和二一（一九四六）年の神奈川県から始まった昭和二九（一九五四）年の北海道まで延べ八年半かけて行われた昭和天皇の「行幸」（全行程三万三千キロメートル・総日数百六十五日）の一環であったと考えられる。この句はまさに古えの女帝の「行幸」にまで詩想としては遡りつつ、現に人間となった天皇の直近のその「行幸」を詠吟したものと思われる。」

相迫る冬山滾ぎつ瀬をへだて

凩がゐて噴水を憩はしめず

少女となる眉よせ露の反射する

風収まる雪嶺ぴしぴし枝を折る

四方の枯野暮るゝは雨戸締めし後

寒雀一羽失ひし群を率（ゐ）て

母と娘の頭上に桜重きかな

帆綱つかむ前向く燕うしろ向く燕

頭上蔽ふ一樹に椎の花満てる

芽出す籾水層一寸をへだつ

浪の上一蝶のなほ還らざる

向日葵の花のつめたし暁発ちぬ

木下闇仔鹿が駆けて陽漏るゝ

炎天に音なし身ぢろぎもせず

人中へいそぎつつをり花火受く

手花火の火を手花火に継ぎうつす

手花火の尽きるを山の闇が待つ

雄の虻の横暴薔薇に押しあけ入る

少年銭得て葡萄の種吐き吐く

青蚊帳の裡をともしてあと燈なし

虹住む山我住む山のつゞきけり

草に音あり吾に秋雨まだふれず

炎天歩く駝鳥がかすむほど遠く

渡り鳥一羽遅れしまゝの列

祭囃子遠くなる今笛の音のみ

花野過ぎ落葉松林に入りて透く

秋草に浅間嶽隠る下りつゞけ

枯野の汽笛波立つ千曲（ちくま）渡り来て

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。］

童女爪立つ風船の糸伸び切つて

啼きゆく雁夜の沼の光りしならむ

雁を待つ沼夜となる昼となる

過ぐるとき寒星充つる潦

凩が追ひぬきゆけり鶏駆けり

夕焼くる寒雲知れる聖母なし

聖母の咳ひくゝ吾胸ひゞきけり

油火の一つの火立ち馬屋の主（エス）

我手の影聖母の金魚ひるがへる

聖母の歩に寒星しつかに従へり

雪の上に鹿暮る一つ一つ位置占め

風邪の枕低し雪ふりやまぬかな

寒雀の羽音たしかに風邪癒ゆる

雛ふたつ病める畳の上におく

百千鳥鴉おのれの枝摑む

伽藍の屋根尾さげ嬉しき恋雀

春の海粗朶に入り来てやすからず

春日の海堡白波の中白波あげ

冬の河渡る央に照りきはむ

［やぶちゃん注：「央」は通常の訓ならば「なかば」であるが、どうもそれではスケールがやや小さく私は感ずる。私は「まなか」と読みたい。］

青野に鹿群れゐることのやすらかさ

揚羽蝶どこにて揚羽蝶にあふ

紫雲英（げんげん）に足没し立つ遠くの鴉も

［やぶちゃん注：：「げんげん」はマメ目マメ科マメ亜科ゲンゲ属ゲンゲ（紫雲英）*Astragalus sinicus* の別名である。この花を愛する私にはずっとこの年になるまで、正しいのが「レンゲ」であり、「蓮華草（れんげそう）」なのだとずっと思っていたのだが、正式和名はあくまで「ゲンゲ」であり、これは「レンゲ」の転訛などではなく、漢名「翹搖」（ゲウエウ（ギョウヨウ））の音読みに基づくものであることを今回調べてみて初めて知った（「ぎょうよう」と「げんげ」はあんまり似た発音には聴こえんが）。「れんげそう」を偏愛する私は、何だか少し、哀しい気がした。］

雌（め）が招きわが斑猫（みちおしへ）たちまち外れ

［やぶちゃん注：「斑猫（みちおしへ）」複数回既出既注。］

蜥蜴走る光も影も失ひて

醜の翅を日に搏たれたる日蔭蝶

菩提樹花下くゞりて旅の道曇る

寵りゐる燕の尾羽の巣に尖る

揚羽丁星に迷ひ入りしも薄暮のこと

田草とり土地の青に溺れをり

夫の忌燕負ひくる九月の天

［やぶちゃん注：夫豊次郎（昭和一二（一九三七）年没。享年五十歳）の祥月命日は九月三十日。この年は十六回忌。］

花火ひらきつゞく帰ること思はず

池田浩子を悼む

炎天を揚羽翔けいそぐ処女（をとめ）逝きぬ

［やぶちゃん注：「池田浩子」不詳。］

炎天を負ひし面影笑み崩さず

芙蓉にくる褐色のみの田舎の蝶

大足の羽抜鳥にて遁走す

踊り子の眉紅つよしはや暮れよ

身を屈むときに踊りの輪が翳る

使ひにゆく方（かた）へはたはた追ひ飛ばし

葡萄樹下西日が処女さし透す

葡萄採り去りたる畑霧が満つ

虻のこゑ被り身低め葡萄採り

葡萄畑男が走る褐色に

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

天にゐる尾長き凧よ祖母吾が欲る

恋猫に雪がとびつく野の闇より

白鷺あらそへり寒天音もなく

雪降る間いなづま走り乱れ出す

修二会の鐘闇に羽ばたく夜鳥ども

暁(あけ)の嫗髪梳きあかぬかな

炎天にむらさき多し木槿(むくげ)咲き

［やぶちゃん注：「木槿」アオイ目アオイ科アオイ亜科フヨウ連フヨウ属ムクゲ *Hibiscus syriacus*。］

千本の手を秋風に観世音

牛乳に火蛾の飛び入り溺れし疾(はや)さ

［やぶちゃん注：以上、『俳句』掲載分。］

母が焚く炉よがうがうと根本の株

月光に風花さわぎしことも過ぐ

鹿と鹿との間(あひ)に雪降る野にも降る

恋猫のゆく闇何処も雪降れる

鞦韆を父へ漕ぎ寄り母へしりぞき

草木瓜は地(つち)にいこひて見るべき花

［やぶちゃん注：「草木瓜」既注であるが、再掲する。バラ目バラ科サクラ亜科リンゴ連ボケ属 *Chaenomeles* ボケ *Chaenomeles speciosa* の近縁種で本邦固有種であるクサボケ（草木瓜）*Chaenomeles japonica* 。ボケは中国原産で観賞用に栽培されており自生はないのに対し、クサボケは本邦の本州関東地方以西・四国・九州に自生する。樹高は五十センチメートルほどで、『実や枝も小振り。本州や四国の日当たりの良い斜面などに分布。シドミ、ジナシとも呼ばれる。花は朱赤色だが、白い花のものを白花草ボケと呼ぶ場合もある。果実はボケやカリン同様に良い香りを放ち、果実酒の材料として人気がある。減少傾向にある』とウィキの「ボケ」にある。］

帰らむいざ同じ青野を同じ馭者(ぎょしや)

藤たぐり降りる足なほ地に着かず

わが百合(ゆり)に花粉通はせ山の百合

いつぴきの金魚となりていのちながし

万緑や斧うつ音を一時断ち

穂絮(ほわた)いま楽しげにとぶ地を忘れ

［やぶちゃん注：「穂絮」は守旧派にとっては、熟した葦や茅(ちがや)などのの花穂が熟れて生じた白い細毛が風に乗って飛ぶさまを指し、晩秋の季語であるが、これは前後を見ても明らか

に蒲公英(たんぽぽ)などのそれである。」

寧(やす)らかに浮巣が波にゆれつづけ

炎天を乙女駆けりし風一筋

青蚊帳に馬追が啼き青さちがふ

炎天に燕が飛んでかすむなり

秋草に笑ひどほしの乙女撮(うつ)す

祭囃子遠くなる笛の高音のみ

咽喉(のど)裂けて憎まれ鵙の啼きつづく

一眼にて他国者なり胡桃掌(て)に

胡桃割る力のなくて持ちつづけ

雀らに夜がしりぞく霜の上

［やぶちゃん注：以上、『文庫版「海彦」より』とある。多佳子、五十三歳。］

昭和二十八（一九五三）年

虎落笛過ぎし天より鴉下る

急流に泳ぎ落ちゆく頭が見えつつ

冬の山犬吠え研にぎはへり

秋燈移すその部屋を暗闇にして

風邪臥しとみそささい暮れはやきもの

［やぶちゃん注：「みそささい」スズメ目ミソサザイ科ミソサザイ属ミソサザイ *Troglodytes troglodytes*。小林一茶の、

みそさゞいちつといふても日の暮（くる）る

のインスパイアである。引用は丸山一彦校注「新訂　一茶俳句集」（一九九〇年岩波文庫刊）本文。同注では文政版では、

みそさゞいちゝといふても日が暮る

版本題叢では、

みそさゞいちゝといふても日は暮る

であるとする。]

露の中いつまでも燃ゆ岔もつれ

廃墟の階ひとり毯つく子のものにて

水仙の香つよしその部星に寝ず

寒月に従ふ燃ゆる火星にて

天寒し透ける翡翠を身につけて

冬銀河死なばゆくべき道にして

桜大枝切りし男の肩に重し

飛びつゞける翡翠枯るゝ芦花ばかり

冬帽の群にわれ探す瞳と会ふ

洗い髪ぬれをり蟇(ひき)に仕へられ

折れ曲るたびにせゝらぐ春野の川

藤うつりをらむか暗き淵のぞく

梅雨の谷戸僅かに見えて海荒れをり

入日光身伏せて麦を刈りすゝむ

帷子の折目老いの身が清しき

車窓涼風母子の髪のなびき同じ

白露や身うごきもせぬ蟻地獄

地に触れて夕顔ひらく雷のあと

熊ン蜂闘ふ宙より地上に落ち

沼が澄む足もとまでも星満ちて

月光る桶ビシビシ奔る牛乳（ちゝ）享けて

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。］

鵙啼くやつめたき空気に眼を張つて

枯山中午日に犬の毛が灼けて

足遣ればいつも冷たき蒲団の隅

冬浜が日にぬくむまでの千鳥と吾

雪嶺となりたり手のとどくちかさ

雪原をかへる奪はず奪はれず

息あらく枯野を来しがなほなかば

頸うづむ春着の何処もつめたくて

吉祥天女暮れませり寒き光に出る

仏堂に身が冷えきつて暮光に出る

わが飼ひて恋猫かへる雪山より

冬銀河見てゐてつひにあたゝかし

紙漉女老いてまくろき髪の束

桜に一斧一斧わが世見過すまじ

崖なめらか春潮騒けのぼりては落つ

老雲雀日を逐ひ逐ひて高空に

遍路笠海風あふり松風押す

嫗濯ぐそこより尚春水が下る

一蝶の飛翔万緑に消され消され

雨風の日万緑にうちかこまれ

麥かつぎ土堤にのぼれば帰路の足

農夫婦足もと水漬きどこも梅雨

梅雨青葉わかれの刻のあざやかに

春の攝素手にてつかまむとして遁す

浮浪児を追ふ噴水の広場より

麦の束さやさや乙女速歩なる

吉野青し草刈女泳ぐ衣をぬぐ

月輪を蝕みゆくやわが地の翳

沼の波光に執し月欠けゆく

夏書の筆盤若の字劃多きかな

［やぶちゃん注：「筆盤若」底本には「盤」の右に『(ママ)』注記がある。「夏書」は「げがき」で夏安居（げあんご）の間に経文を書写すること、或いは、その書写した経文を指すから、ここはその写経した「般若心経」のことであろうから、誤字か誤植である。］

夏書の筆穂長夫も長身なりき

施餓鬼供御沼の流れの行方なき

［やぶちゃん注：川施餓鬼であるが、どこのロケーションかは不詳。彼女の作では大阪の伝法川のそれがあるが、「御沼」という表現が気になって同定し得ない。識者の御教授を乞う。］

荒草や炎天の雀群さそひ

羽抜鳥地のぬけ羽を嘴（くち）くわへ

羽抜鳥羽落しやまず敵の前

オリオンが頭向け落ちくる露大地

千鳥のむれ散り集（よ）り野分の波の痕（あと）

顔知らぬ雀よ鳴るは坂清水

稲刈る手許夕焼け月も光り出で

ものいへば赤くぬれくる寒き唇（くち）

凍壺継ぐ絵の水鳥の頸あはせ

毛糸にてみどり子裹（つつ）む手も出さずに

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

樹上のをとめ林檎を呉るゝ隈なき紅

露の蝶わすれられゐるやすらかさ

旅一と刻こゑあげ墓地に胡桃拾ふ

脈うつやふところ手もて乳二つ

朝の畳足袋なき足に風当る

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。］

雪野ゆく同じ姿に裾吹かれ

乙女長靴深雪に水汲む吾がために

雪くぐり漉場くぐりて水去りゆく

吾旅人掻く炉ぼこりに馴れきれず

雪焼け子よポケットのパン上から押さへ

雪原をゆけば村ありて

綿つむぐ嫗ものかむ顎うごかし

綿つむぐ嫗耳しひ眼しひ生き

白飯綱天にす霞に鶏汚れ

白飯綱野馬駆くるところ地傷つき

［やぶちゃん注：「白飯綱」長野県長野市の飯縄山（いいづなやま）南麓に広がる飯綱高原のことか。この年の三月、作句に行き詰まって、春雪も深い信州に独り吟行に出かけている。］

雪山見る雪の平らにわが立ちて

雪解（ゆきげ）の裾乾きては又旅ゆけり

雪山雪野五日月なる明るさに

バス照らすは谿よりの樹頭まだ芽吹かず

氷湖(ひこ)解けし諏訪をうとめば虹立ちたり

公魚の漁初まる

春日漁夫真絹の網をひきしぼり

［やぶちゃん注：「公魚」老婆心乍ら、「わかさぎ」と読み、条鰭綱キュウリウオ目キュウリウオ科ワカサギ属ワカサギ *Hypomesus nipponensis* のこと。］

塩尻峠に登れば日本アルプス、
裏富士、八ヶ岳一望に見ゆ

雪凍る嶺に対ふ秒音きざみつつ

林中に入り雪嶺見えざる心寒さ

［やぶちゃん注：以上、『俳句』掲載分。］

枕木に隙く隙く天龍の冬の浪

いそぎ来て諏訪(すはこ)湖の凍てに間にあはぎりし

指浸し氷(ひ)解くる諏訪の濁りに触る

単衣(ひとへ)着て燈ともしてこの寂しさは

淵に泳ぎ処女の髪のまだぬれずに

ちちろ虫汽車過ぎて後まだ啼かず

［やぶちゃん注：「ちちろ虫」老婆心乍ら、蟋蟀（こおろぎ）の別称。］

寒き落暉群羊一つだに残らず

［やぶちゃん注：以上は『文庫版「海彦」より』とある。多佳子、五十四歳。］

昭和二十九（一九五四）年

冬霧に歩みをゆるむ何いそぎゐし

寒き沖忘れむレールまたぎ帰る

［やぶちゃん注：ロケーション不詳。］

雪降るや同じ平らに氷湖凍田

［やぶちゃん注：同年一月十一日に諏訪の凍湖を見に行き、十三日の夜、初めて諏訪湖が凍った（底本年譜に拠る）。］

火の山につゞく雪野に足埋め立つ

［やぶちゃん注：前後の句から見て、この「火の山」は浅間山と推定する。年譜を見ると、一月十四日に諏訪から塩尻峠を越えて松本へ向かい、各所の俳人宅を訪問、二十日に上田、二十一日に小諸、二十二日に軽井沢の天然氷採取場に吟行しているからである。同年五月六日に清子同伴で九州旅行に出て、長崎に三泊、その帰りに『十数年ぶりに阿蘇山に登る』とはあるが、通常ならこの時期では阿蘇の残雪は消えてしまう。］

雪解天竜虹の断片遺（のこ）したり

［やぶちゃん注：前注の同年年初の諏訪行の往路吟か或いは東京発の復路（推定東海道線）での吟か。］

鳴らし売る独楽をしばらく見てゐて買ふ

猛りゐる独楽止（とど）め呉れ我が買ふ

男立つ勝鶏抱き負鶏抱き

一斉に冬鹿の耳怯え立ちぬ

髪老いし仲間羽なす楓の実

緑蔭に部屋あるごとく人隠る

藤濃き森風さわげるを惧れ入らず

百合近し崖を深笹かくしゐて

露無限身の力かけ刃もの研ぐ

わが船路南風の白浪沖にも立つ

精霊舟行方を指せる舳ありけり

いなづまなど豊かなるもの旅に欲る

師の歩みいづくへ向くも青き淡路

［やぶちゃん注：これより後の数句は、年譜の同年『七月、淡路洲本の朝倉十艸に招かれ、誓子と同行、渦潮を見る』の折りの嘱目吟と思われる。］

白雲の峰々翼はゞみをり

地上に降り夏の白雲天にかへす

渦潮を一舟日覆傾け過ぐ

かへり見る南風の門波の渦巻くを

渦の上鱚舟同士ゆれあへり

鱚釣つて八重渦潮の上をいでず

渦と渦のかゝはり南風の鳴門おもしろ

地蔵盆わが赤燭も盃(ほ)をならべ

［やぶちゃん注：「地蔵盆」ウィキの「地蔵盆」によれば、『地蔵菩薩の縁日で厳密には』毎月二十四日で『あるが、一般的には、その中で特にお盆にも近い』旧暦七月二十四日の『ものをいう。ただし、寺院に祀られている地蔵ではなく、道祖神信仰と結びついた「路傍や街角のお地蔵さん」いわゆる「辻地蔵」が対象となっている』とある。この年の旧暦七月二十四日は八月二十二日である。この地蔵盆が新旧孰れであっても（新暦で行う場所が多いが、どちらかといえば、七月ではなく、月遅れの八月二十三、二十四日の方が多いとウィキにはある。年譜上では七、八月のこの頃は自宅にいた可能性が強いので（八月は記載なく不確かではあるが、多佳子は盂蘭盆の頃に旅には出歩かぬと私は思う）、これは多佳子の自宅のある、あやめ池近くでの地蔵盆というよりお盆の嘱目吟の可能性が高いように思われる。］

をどりの衆影を屈して身をかゞめ

思ひのみ生々風邪の衾中に

夜長機(ばた)糸が切れゝば糸継ぎて

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。］

冬日いつぱい追はれるとき緬羊も走り

[やぶちゃん注：以下、数句については、句集「海彦」に、「牧夫――福山牧場にて」と題する以下の類型句七句が載る。

群羊帰る寒き大地を蔽ひかくし
冬野かへる群羊に牧夫ぬきん出て
群羊に押され背見せて寒き牧夫
冬草喰ひ緬羊姙りにも従順
寒き落暉群（むれ）を離るる緬羊なく
ポケットに「新潮」寒き緬羊追ひ
寒き緬羊耳たぶのみ血色して

この「福山牧場」広島県福山市にある牧場と思われ（ネット検索での固有名ではヒットしない）、底本年譜のこの前年の昭和二八（一九五三）年の十月の項に、『福山市の「七曜」支部発表会に出席』とある。この折りの句と考えて間違いなく、回想吟或いは旧吟の発表句であることが判る。]

冬日燦々緬羊の群みな姙る

夫婦・犬緬羊追ひ入れあと冬野

食ふせはし緬羊に寒き落暉のび

除夜の門（と）を閉しオリオンを野に放つ

つく毬の外（そ）れては歌のとぎれとぎれ

わが猫を誘ふ枯野に白猫ゐて

枯るゝ芦かき抱きては鎌を入る

帰るたのしさ月の霧より息白く

めつむれば雪夜の追想戦火にまで

冬旅や白昼の燈(ひ)を燈台に見て

髪洗ふ除夜のラジオの黒人霊歌

寒き湖光切なし凍てゝしまへよ

友の子の風邪の柔髪まさぐりて

桜濃し仰げば雨のひた漏りて

枯笹山蹋めば隠るたはやすく

［やぶちゃん注：「蹋めば」「こごめば」と訓じているか。通常の訓は「せぐくまる」。］

鶯や書けば一日うつむいて

春の畦ゆけば我ためにある如く

若布刈(めか)る男(を)の竿ゆらゆらと眼に高し

［やぶちゃん注：「若布」二字に「め」のルビを振る。ロケーションは不詳。］

桜濃し老いし日輪その上に

われ去れば犬も去りたり桜の園

春苑を見て鉄柵に子がさかしま

旅もどり来ぬあぢさゐの藍と紅

［やぶちゃん注：「旅」同年中ならば、五月の九州行と思われる。］

髪洗ひ立てば蛾が来ぬわが家なる

跳び跳べる仔鹿万緑もて隠る

梅雨はげし鹿総身の雨ふるふ

毛紋かなし濡れて乾きて仔鹿の背

梅雨の川たぎつ底のみの明るさ

暁や蜘蛛のねむりを露とぢて

炎天を仰げば鉾のゆらゆらする

青炎天祇園鉾(ぎをんぼこ)来る笛きこゑ

［やぶちゃん注：「祇園鉾(ぎをんぼこ)」は「ぼこ」と連濁しており、一語として用いている。但し、「祇園鉾(ぎをんぼこ)」という語自体はネット検索する限りでは、七月の京の祇園祭りの山鉾の呼称としては一般的ではないから、多佳子の造語か。］

眼前を祀園鉾過ぐ待たれしもの

鉾囃子(ばやし)近づきてすぐ過ぎゆくもの

［やぶちゃん注：「鉾囃子(ばやし)」これも連濁であるから、一語として用いている。しかし、この「鉾囃子(ばやし)」の方は一語として普通に使われることが、祇園祭の保存会の公式記事の中で現認出来る。］

群集に祇園囃子は高ゆくもの

みづからの鬱に抗ひ葡萄照る

裸子の片言(かたこと)雷雨の端とゞく

蜂の羽音昼寝母子像抱きあひて

雲の峰いつ蹤ききしや捨仔犬

［やぶちゃん注：「蹤ききしや」「つききしや」と訓じているものと思われる。後（あと）をついて来たのか、の意。］

月影をかさね了せず人と人

紅蓮獲て泥足つよし母まで駆け

［やぶちゃん注：「紅蓮」は「ぐれん」。紅色の蓮（はす）の花。紅蓮華（ぐれんげ）。］

夜長機（ばた）涯なく織りて涯思はず

何織らむとするや夜長の機かたかた

猟夫歩み雉子の重さの腰をゆり

白息や子守唄祖母・母より継ぐ

［やぶちゃん注：「白息」は「しらいき」。謂わずもがなであるが、寒い時期に人の吐く息が白く見えることで、冬の季語。

以上、『七曜』掲載分。］

宙にまだ低き翃にて露けき鷹

黒髪のさらさらと秋いつ来てゐし

眼前を過ぐる秋河堰に激(げき)し

秋の暮一詩に執着してをれば

ゆらゆらと風の錦の枝を噛み

息若き新酒つくりよ雪止まずに

雪眩し帯緊(きつ)きことが胸を責め

雪やゝ明し人行く方に鶏鳴して

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。］

冬日の顔ひとつ横向く母の顔

［やぶちゃん注：念のために注しておくが、多佳子の実母は既に昭和一七（一九四二）年十一月七日に享年八十二で亡くなっている。］

掃除婦来て霜の大地の白さ消す

鴛鴦(をし)撃たる雄の紅冠のねらはれて

［やぶちゃん注：「紅冠」「こうくわん（こうかん）」と音よみしているか。］

黄落や日の没る方(かた)に光満ち

[やぶちゃん注：「黄落」は「くわうらく（こうらく）」で木の葉が黄色に色づいて落ちること、「没る」は「いる」（入る）と訓じていよう。]

風吹くに現れては櫨の花ひそむ

[やぶちゃん注：「櫨」は「はぜ」でムクロジ目ウルシ科ウルシ属ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* 。花は円錐花序で五～六月頃に黄緑色の小さな花を咲かせる。]

一瞬の菜殼業火に額焼かる

[やぶちゃん注：句集「海彦」の「長崎行」に、

保養院を出づれば菜殼火盛んなり

一切忘却眼前に菜殼火燃ゆ

菜殼火の燃ゆる見て立つ久女いたむ

菜殼火の火蛾をいたみ久女いたむ

つぎつぎに菜殼火燃ゆる久女のため

菜殼火や入日の中に畝もゆ

の句群を認める。多佳子はこの五月の九州行の長崎からの帰途、杉田久女の『終焉の地、筑紫観音寺にある九大分院、筑紫保養院に行き、久女を弔』（底本年譜）っている。これと次句は、間違いなく、その折りの句である。「橋本多佳子句集「海彦」長崎行（Ⅰ）　久女を弔ふ」も参照されたい。]

入日野に衰ふる菜殼火烈しき菜殼火

増苑やほしいまゝなるアマリヽス

［やぶちゃん注：「増苑」不詳。拡張した花園の謂いか？　識者の御教授を乞う。中七は明らかに久女の名吟、

　　研して山時鳥ほしいまま

のインスパイアであるから、前二句と同じロケーションと考えられ、九大保養院での嘱目吟の可能性が高いか。］

露白光遅れ来たりて十字切る

露の玻璃神父に赤光孤児に紫光

懺悔する跣の蹠揃へ見せ

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「跣」は「はだし」（裸足）、「蹠」は「あうら」と訓じていよう。通常は「あし（の）うら」で、足の裏の意。］

ねぶたさの仔牛の肉鼻阿蘇青し

［やぶちゃん注：以下、前に注した通り、同年五月六日に清子同伴で九州旅行に出て、長崎に三泊、その帰りに『十数年ぶりに阿蘇山に登る』とある折りの句群。］

野の青さかの馬の如吾も暮れつゝか

火口暮る燕のこゑのつばらにして

夏白雲ゆれどうしなるわが翼

［やぶちゃん注：以上、『俳句』掲載分。］

雪頭巾して寝るをとめ顔あげよ

霜腫（ば）れの指折りかぞへ数へ唄

遠き群れそれへ急ぎて鴨（かも）翔ける

われ倦めば寒湖の鴨の水走る

［やぶちゃん注：この前後句は総て、前注の同年一月の諏訪湖行の句と思われる。］

雀の歩しばし寒天造りに蹤（つ）く

雪沓（ゆきぐつ）をはけば新雪切々と

袖あはす胸の隙より雪くゞる

雪の日の厚きぬりごめ糀室

［やぶちゃん注：次の句とともに同年の諏訪湖行の際、一月十三日、『降る雪の中、諏訪地

酒「舞姫」の寒造りを見て、新酒の香に酔う』とある、その嘱目吟である。]

新筵(むしろ)糀が生きる息ぬくし

厠(かはや)に神小餅かさねて燈をかかぐ

わかれゆく寒湖昏(くら)きに鴨が浮く

来るを予期せし寒念仏こゑを断つ

[やぶちゃん注:「寒念仏」は「かんねぶつ」と読む。狭義には、僧が立春前の寒(かん)の三十日の間、明け方に山野に出でて声高く念仏を唱えることであるが、後には在家信者も寒夜に鉦(かね)を打って念仏を唱え、家々の門前で報謝を請い歩いた。冬の季語。同年の立春は二月四日(定気(ていき)法)であるから、諏訪・軽井沢行での一句と読める(旅を終えて東京へ多佳子が着いたのは年譜によれば一月二十二日である。]

涅槃(ねはん)の天暮るる鴉が羽いそぎ

月凍る千曲・犀川(さいかは)車輪にかけ

[やぶちゃん注:「犀川」『長野県内を流れる信濃川水系の一級河川。一般に、松本市島内で奈良井川を合流させて以降の下流部から長野市での千曲川との合流部までを指し、上流部は梓川(あずさがわ)と呼ばれる』(ウィキの「犀川」より)。]

旅の背をかがめる樹氷低ければ

をどり太鼓いまだしづかやばち觸れねば

［やぶちゃん注：「觸」の正字はママ。］

燈を失ひし蛾や月光を得たりけり

木の葉髪白きをまじゆ師と共に

雲の峯わが胸もばら色を消す

醜さがつよさ向日葵逆光に

うろこ雲翼あるもの追ひ追はれ

夜長機筬（をさ）の青糸はた紅糸

［やぶちゃん注：「筬」（をさ）（現代仮名遣は「おさ」）は織機の付属用具の一つ。竹の薄片を櫛の歯のように並べて枠をつけたもので、織物の幅と経（たて）糸を整え、杼（ひ）（緯（よこ）糸を通す用具。シャトル）で打ち込まれた緯糸を押さえて、織り目の密度を決める道具。］

道相似たりまんじゆさげまどはせり

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、上五は「みち／あひ（あい）にたり」と読む。］

全身の濡れ冬鹿の雄の眼見る

［やぶちゃん注：以上、『文庫版「海彦」より』とある。多佳子、五十五歳。］

昭和三十（一九五五）年

黄落を投げうつ如く惜しむが如く

枯青野たぎつ瀬碧瀬水脈走り

寒き宙羽音かさねて鳩の飛翔

寒落暉鳩舎扉開けて鳩を待つ

フィルム負ひし鳩雪嶺の何処か越ゆ

旅鏡ひらく黄落この中に

冬虹の大根や沖に沖ありて

［やぶちゃん注：ロケーション不詳。］

毛糸編む人の孤独に入りゆかず

凍らむと沼朝焼けて夕焼けて

木枯や涙は鹹(しほ)とすぐ乾き

万燈守行きて一燈づつ増やす

人の中万燈の中歩をかへす

万燈籠消ゆるを消ゆるまゝ継がず

風邪の燈の虹彩昼寝て夜覚めて

墓に燈を洩らして母の物書く音

［やぶちゃん注：念のために注しておくが、多佳子の実母は既に昭和一七（一九四二）年十一月七日に享年八十二で亡くなっている。この母は多佳子自身であろう。因みに、この年の六月に四女美代子が結婚、あやめ池の家に多佳子と夫婦で同居を始めているが、季から見て、この句はそれよりも前である。］

狐の鼻いづこを嗅ぐも凍つる檻

［やぶちゃん注：個人的に好きな句である。］

沼波だちて鴉の中知らぬ鴨

蠅化粧(けは)ひあかざるを後(うしろ)より打つ

［やぶちゃん注：個人的に好きな句である。］

海女うかぶ刈りし若布に身を纏(ま)かれ

［やぶちゃん注：次句とともに、底本年譜に、この年の『春、清子同伴にて、志摩に二日間の旅を楽しむ』とある、その折りの嘱目吟か。］

顔老いて春の潮より海女うかぶ

恋敵をいぢめにいぢめ猫かへる

追へば油虫わが句帖の上通る

昏れて野風宮址の石の熱(ほと)びさます

［やぶちゃん注：この句、句集「海彦」の「発掘」の同吟と思われ、ロケーションは平城京跡と思われる。さすれば、「くれてのかぜ／ぐうしのいしの／ほとびさます」と読める。大方の御批判を俟つ。］

手をつきて我遊びをり緑大地

たどりつく寺高草は露乾き

匂ひ失せしをとめ滝よりつれもどる

［やぶちゃん注：底本年譜に『八月二十九日、俳句が出来ないので、津田清子に案内され、赤目の滝に吟行。滝本屋に一泊』とある折りの吟。『句集「海彦」赤目渓』を参照されたい。

今まで注してこなかったが、津田清子（きよこ）（大正九（一九二〇）年～平成二七（二〇一五）年）は「七曜」同人。ウィキの「津田清子」によれば、『奈良県生。奈良女子師範（現在の奈良教育大学）卒。卒業後は小学校教師として勤務。当初は前川佐美雄のもとで短歌を学んでいたが』、昭和二三（一九四八）年に多佳子指導（二年後に主宰となる）の『七曜』の『句会に出席したことをきっかけに俳句に転向。多佳子に師事し「七曜」同人となるとともに、多佳子の師である山口誓子にも師事し』、誓子の『天狼』にも投句を始め、昭和二六（一九五一）年には天狼賞を受賞、四年後の一九五五年に『天狼』同人となっている。多佳子逝去（昭和三八（一九六三）年五月二十九日）後の昭和四六（一九七一）年には『沙羅』を創刊し主宰となる。昭和六一（一九八六）年に『同誌を「圭」に改称』（二〇一二年八月号で終刊）、平成一二（二〇〇〇）年に第六句集『無方』で第三十四回蛇笏賞を受賞している。『代表句に「虹二重神も恋愛したまへり」など。多佳子の激しい叙情性と誓子の知的構成とを受け継ぎ、しばしば「硬質の叙情」と評される』とある。この時、清子は既に満三十五歳であるが、「をとめ」が清子を指すようには読める。]

嫗炊く茶屋つらぬきて滝の白

女リヤカーにまぐろの尾をどらせ

[やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。]

風邪の眼に数へて十二昴星

[やぶちゃん注：「昴星」は「すばるぼし」。おうし座の散開星団プレアデス星団。おうし座は冬の星座の中でも西側に位置し、その目印の一つであるアルデバランの西に星が多く集まって見えるのが「スバル」である。ウィキの「プレアデス星団」によれば、『通常の視力の人が好条件のもとで』、六～七個の『星を数えることができる。大変視力が鋭い人が』

二十五個もの『星を肉眼で見たとする記録が残されている』とあるから、五十六歳の多佳子、相当に目が良かった。」

人の顔近し老い見きおでんのゆげ

おでんのゆげゆらぎて虚ろ抱きけり

赤蠟をともし聖菓に岔乗る

少年のうつ鍬あそぶ大白藤

寒き眼（まなこ）吉祥天女にまたゝきて

万燈籠かりそめの歩を揃へざる

万燈籠急（せ）けば波うち佇てば瞬き

万燈をかへり見るすでに過去の燈多し

万燈を継ぐ油（ゆ）を継ぐ火を老い手にす

万燈守老いの背骨の凍（し）み如何なる

消ゆるとき遠し万燈の万のまたゝき

人の貌見むに万燈の暗さよ

侵されず風邪の衾を盾として

母子の衾界わかたず二月尽

春が来る嵐や生きて何を恋ふ

波津女夫人に

ならび見る冬虹の根の滾々と

［やぶちゃん注：「波津女夫人」山口誓子の妻。本名は梅子。昭和一三（一九三八）年の結婚後に本格的に句作を始め、『馬酔木』同人から夫の主宰する『天狼』同人となった。夫より五つ下であるから、当時、四十九歳。多佳子より七つ年下である。］

憩ふ海女身にかげろふのもゆる知らず

一本の綱若布の底の妻繋ぐ

［やぶちゃん注：正字「纍」はママ。］

若布刈舟を濡れ妻ぐるみ陸へ上ぐ

［やぶちゃん注：前記の春の志摩行の嘱目吟。］

曇天や辛夷の匂ひ地に下る

曇天に辛夷傷つき花ふれあひ

折れば曇る辛夷や母が饐膚(すえはだ)恋ひ

［やぶちゃん注：この「母」は亡き母の追懐であろう。］

曇天の辛夷萎えゆく万花もて

辛夷万来父しらず母のこゑわすれ

［やぶちゃん注：多佳子の父山谷雄司(やまたにゆうじ)は多佳子十歳の明治四二（一九〇九）年七月四日に亡くなっている。］

星合や老婦の楽寝五尺足らず

［やぶちゃん注：「星合」は「ほしあひ（ほしあい）」で陰暦七月七日の夜の牽牛星と織女星の二つの星が出逢う七夕のこと。秋の季語。「楽寝」は「らくね」で、のんびりのびのびと気楽に寝ること。「五尺」は一・五一五メートル。］

麦刈るや泣くみどり児をすぐ聴きわけ

わが殺せしげじげじおけば鶏が来る

碧揚羽刻(とき)だだ洩れに吾あるとき

[やぶちゃん注：「だだ洩れ」名詞・形容動詞「だだ漏れ」で「だだ」は程度の並外れて甚だしい意を添える接頭語、もうやたらめったら漏れ出てしまうこと、際限なく流れ去ってしまうことを指す。]

百合香吐く夜の崖下を通る者

鵜舟追ふわが舸子の意のはげしさ

[やぶちゃん注：「舸子」は「かこ」で楫取り。船を操る人。水主（かこ）。]

漁りの鵜の修羅篝高照らす

[やぶちゃん注：「すなどりの／うのしゆら（しゅら）かがり／たかてらす」であろう。]

鵜の篝どつと近づき鵜ごゑもす

立てば炎天野よりも低く宮地掘る

[やぶちゃん注：以下、先に注した平城京発掘の嘱目吟であろう。]

風化刻々発掘宮址に野のぎす鳴く

照りかへす巻尺礎石の位置のずれ

木菟まろ眼いま覚めきつて月冴えて

何見るも顔より向けて月の木菟

月光へ一と羽ばたきに木菟去りぬ

［やぶちゃん注：三句ともに赤目の滝での嘱目吟。年譜の昭和三〇（一九五五）年の条に、『八月二十九日、俳句が出来ないので、津田清子に案内され、赤目の滝に吟行。滝本屋に一泊。宿の窓にみみずくが止る。幼鳥のときに拾われ、飼われて育ち、成鳥となり山に還されたもの。しかし、腹が空くと、餌をもらいに滝本屋にもどってくる』とある。］

ゴム長にて秋刀魚の藍のなだれ堰く

［やぶちゃん注：以下、年譜に『秋、焼津漁港に行き、「七曜」の武政洋人、田中白夜らの案内で競りを見』た嘱目吟。］

藍ぶちまかれ一つ一つが秋刀魚

［やぶちゃん注：「秋刀魚」は異例として「しうたうぎよ（しゅうとうぎょ）」と音読みしているか。「あきさんま」と無理読みしても鮮烈でなければならない韻律が腰砕けとなる。］

秋刀魚競るにまかす両手無為の海人

陸も野分魚臭うばはれ海人立てり

瑞の秋刀魚なだれなだれて値をくづす

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「瑞」は「みづ（みず）」で、みずみずしいこと。］

藍の秋刀魚選つて若しや唄なくとも

秋刀魚選りゴム長の腰おろし難し

朝日赫々老醜がまぐろ競り落す

赤シャツ見せ老婆の衣紋(えもん)手に落穂

をとめ廿才(はたち)秋刀魚を選りて瞼重(おも)も

風蝶も旅人も貧(ひん)秋刀魚競り場

［やぶちゃん注：「風蝶」は当初、秋の風に翻弄される弱々しい蝶のことと読んでいたが、そうした「風蝶」という語は一般的でないことが判った。さればこれは所謂「クレオメ」、フウチョウソウ目フウチョウソウ科フウチョウソウ属セイヨウフウチョウソウ（西洋風蝶艸）*Cleome hassleriana* のことであろうか？　一般には初夏に独特の花を咲かせるが、ここは既に開花も終り、だから「貧」なのか？　ただ、ガーデニング・サイトを見ると九月下旬まで開花するものもあるようではある。トンデモ解釈かも知れぬ。大方の御叱責を俟つ。］

丈長の稲負ひいよいよ腰曲げる

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

唐招提寺

寒雲が伽藍退く盲ひし像

［やぶちゃん注：言わずもがな、「盲ひし像」は国宝の唐招提寺鑑真和上坐像。］

枯山中戸の開くたびに赤子のこゑ

妻の猫走りて白し枯山中

還らぬ鳩よ大阪に寒き夕焼河

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。］

葡萄樹下母乳とくとく子に通ひ

渦に入り渦を出られず鼻珠沙華

刈田に泣きわめき祖母の唄奪ふ

故なき不安暁みどりにわが衾

藤の枝に手懸けすがれば身が軽し

戦時にて金と見し花南瓜咲く

油虫思慮を深げに触角伏せ

寝なければ寝なければと地虫鳴く

あさがほの雙葉が掌あげ吾頬づゑ

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。］

一舟に昼寝の海女と波の上

金色（こんじき）のほんだはらなほ海女深きへ

濡れ惜しまぬ海女の長髪潮いづる

光の奥冥（くら）しや雲雀落ちし天

土ふまずなしぴったりと麦負ひ立つ

巣燕わめくいま餌を獲しはどの口ぞ

麻衣六十路（むそぢ）の影の鵜の匠（たくみ）

べたべたとぬれ鵜つかれ鵜鳴き歩き

帰燕啼きたまるこゑごゑ天狭め

石蕗（つは）の絮（わた）宙にきらきら二人遍路

［やぶちゃん注：「石蕗の絮」キク亜綱キク目キク科キク亜科ツワブキ属ツワブキ *Farfugium japonicum*　は黄色い花で知られるが、その種子の塊はその後、タンポポ同様に綿毛を持った毬状になり、それが離脱して風に乗って飛ばされていくことはあまり知られていないように思われるので特に注しておく。底本の同年年譜に、『十二月、ＮＨＫの有本氏に招かれ、室戸岬の旅へ誓子と行く。健康を回復した誓子にとっての初めての旅。多佳子が誓子に教えを受けはじめてから三十年にもなるが、お伴して旅に出かけるのは初めてであると、しみじみ述懐』とある、旅での嘱目吟。「二人遍路」は表面上は嘱目であろうが、その実、これは誓子と多佳子の「二人遍路」を密かに含ませていると私は読む。］

冬遍路憩へるに吾何いそぐ

側に五十路（いそぢ）冬日の遍路急がずに

遍路笠の裏（うら）なつかしや冬日にぬぎ

千鳥の跡遍路も足を内輪にふみ

夕焼に眼ひらく遍路笠の裡

冬日蝶翔ちて海風おどろきぬ

ほうほうと石蕗の絮翔つ崖の宙

［やぶちゃん注：「宙」は「そら」であろう。

以上、『文庫版「海彦」より』とある。橋多佳子、五十六歳。］

昭和三十一（一九五六）年

水欲りて日覚む岬の夕暁

仰臥の胸十指に蔽へず崖飛雪

山の冬子供のこゑに日が当る

冬日蝶宙にこゑある如くなり

野の猫がひそむ床下風邪癒らず

猟人の手にて銃身艶めける

［やぶちゃん注：昭和三十一年の年譜に、『二月十九日、猟好きの尼崎の医師の案内で、近江八幡に鴨打ちに行く。清子同伴。自家用車に猟人の運転手、猟銃二挺。その夜は猟師宿（長命寺）に泊り、翌朝四時、雪しまく中、魚舟の中にコンロを持ち込み、筵を被って雪を避けつつ猟場へ』行ったとある。以下『七曜』のそれらしいものもこの折りの句と採ってよかろう。

以上、『天狼』掲載分。］

濤を聴く瞼に冬日ぬくし赤し

濤さわぐ鵜のゐる岩も吾の岩も

洋(わだ)に落つ大日(だいにち)冬濤かきたてて

［やぶちゃん注：この三句は前年十二月の誓子との室戸岬の旅中吟と思われる。］

冬薊句帖に載せて蕊複雑

綿虫の宙に暮れゆく素直さよ

猟舟に瀕死の鷺が羽うちたり

こめかみをがくがく猟犬飯食へり

猟舟に鴨置くすぐに雪つもる

猟夫臭はげしわが髪に浸まずや

猟舟に身低うをりぬ白伊吹

遁るる鴨猟夫の眼中を招くる

鴨のこゑ吹雪千分けて日射したり

［やぶちゃん注：「吹雪千分けて」底本では「千分けて」の右に『(ママ)』注記がある。しかし、中村草田男の句に「花蕎麥や雲を千分けて日の霽るる」があり、これらは**上代語「ちわく」（道別く）で、進路を分け開く、神々しい日の光りがあまたの雑物をざっと引き分けて**

差すの意として、自然に採れるが、如何？］

身がしびる猟夫の殺気ゆるすなり

鵜群見て立つ翼なき黒衣われ

［やぶちゃん注：これは「黒衣」から、底本年譜の昭和三一（一九五六）年の七月の条に、『岐阜「流域」主宰、松井利彦に招かれ、誓子と鵜飼を見る。鵜匠頭（のかみ）の山下幹司の鵜舟に乗り、川下りすることを懇願。古来、女性が鵜舟に乗ることは堅く禁じられていたので困惑。一晩思案の後、黒装束（男装）をつける条件で許さる。上流の津保川より長良川を二里半下る』とある折りの嘱目吟と見る。］

草木瓜のさびしさ女童にも摘ます

羊の毛刈る伏眼のまつげは刈られず

高野の虹そのいのち短しとせず

夕顔のひらく白芯何秘（かく）す

あきらかに左眼に充つる青野分

夏野昃る発掘宮址ともにかげる

［やぶちゃん注：「昃る」は「かげる」と訓じていよう。前年の平城京跡での旧吟。

以上、『七曜』掲載分。］

照る蜜柑千万をもて山低し

蜜柑山我ら下りて夕焼くる

墨すれば蜂とぶ近く巣がありて

肉血にゐる家蜂を怒らさず

［やぶちゃん注：「肉血」不詳。これ、「肉皿」の誤植（原雑誌か底本かは不詳）ではあるまいか？］

いなづまを惜しみて放つ雲立てり

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。］

海蝶に逢へり岩群寂しき中

蕎麦打つて生〻木砧の重たさよ

冬薊葉の斑をもつて我に触る

吾隠れて了うすや冬の千五百厳

［やぶちゃん注：これも前年末の室戸岬の吟か。］

冬遍路きぞの日遠く明日遠く

遍路下るさきに登りし道の険

［やぶちゃん注：以上、『俳句』掲載分。］

青木曽や山墓はみな村へ向く

［やぶちゃん注：本句は『文庫版「海彦」より』とある。多佳子、五十六歳。底本の同年年譜の末尾には、『十一月、心臓発作続く』とある。多佳子はこの四年前の昭和二七（一九五二）年四月に心臓に不調を訴え、診た平畑静塔から心臓ノイローゼの診断を受けている。］

昭和三十二（一九五七）年

海より直風枝纏（ま）きあひて椿林

炎天に父よぶこゑとはだしの音

棒呑みの獲もの翡翠（ひすい）の身に収まる

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。］

泥男鹿あへぐ腹より乾きそむ

泥男鹿岐れし小爪の先までも

泥男鹿恋ひごゑ宙に放ちけり

泥男鹿ひきすゑられて角伐られ

泥男鹿泥毛一塊づつ乾く

手鏡の中に枯崖さかさにあり

雪降る視野楢の荒ゥ膚ばかり立つ

寒三日月双刄鋭し信と疑と

舟漕いで渦潮に乗る妻を低く

「脚下照顧」昼虫のこゑ立ちのぼる

［やぶちゃん注：「脚下照顧」は「きやつかしやうこ（きゃっかしょうこ）」と読む。禅語。「照顧脚下」「看脚下」とも。「脚下」は足元から転じて本来の自分自身、「照顧」は反省し繰り返しよく見、よく考えること。他に向かって悟りを求めずに自身の本性をまずよく見つめ尽くせという意。］

秋の蝶焼きすてしもの黒々と

虫しぐれ懐中燈に血透く指

くつわ虫崖の根ひとの燈に許す

秋蛍崖と樹にゐて照らしあふ

蒟蒻掘る夫の猫背を聳えしめ

蒟蒻太る地上に一葉大破れ

日ざらしに蒟蒻薯よ土塊よ

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。多佳子、五十八歳。］

昭和三十三（一九五八）年

春日燦潮垂る沼井（しぬ）の底おもへ

［やぶちゃん注：「沼井」は調べてみると、防府市教育委員会提供の「防府市歴史用語集」に「沼井（ぬい）」とあり、『塩分のついた砂を集めて、より塩分の濃い塩水をつくるための装置です。沼井に塩分のついた砂を入れ、上から海水をかけて、染み出た塩水を釜屋［かまや］に運びます。染み出た塩水は海水よりも塩分が濃いので、効率よく塩がつくれます』とあった。所謂、上浜式塩田の鹹水（かんすい）（製塩過程で濃縮した食塩濃度の高い水のこと）抽出装置である。幾つか調べて見たが「しい」の読みは出てこない。不審。少なくとも以下これらの塩田の嘱目吟は、句集「命終」の「昭和三十二年　足摺岬・新居浜　他」に出る、前年

の「新居浜」での体験に基づくものと思われる。]

あやまちて穂絮下りくる塩田に

遠夕焼塩屋(しほや)塩水母液たぎち

[やぶちゃん注:「とほ(とお)ゆふやけ(ゆうやけ)/しほや(しおや)しほみづ(しおみず)/ぼえきたぎち」と読んでおく。]

千鳥ばらまく波来ては波退きては

会ふ近し海蔽ひくる渡り鳥

犬の前肢雪掘れば赤土赤土は固し

白鳥の胸下の湖昏れてゐる

友の鳥飛び白鳥の胸下昏れ

万燈群一裸火(はだかび)のへろへろと

下半身ゴム衣海苔採女(め)の授乳

[やぶちゃん注:「かはんしん/ゴムいのりとり/めのじゆにゆう(じゅにゅう)」と読んでおく。「海苔採女」は明らかに造語で一語であるが、「め」は底本では「女」の右上方で、「女」一字のルビなのかそれとも「採女」の二字分で「め」一音なのか分からぬ。「ゴムい

のりめの／じゆにゆう」では「のりめ」の響きが悪く、何だか後の「授乳」の座りもひどく悪い気がする。大方の御批判を俟つものではある。]

人形師ゐて人形の菊匂ふ

香が立ち籠り菊人形完成す

声出さぬ菊人形に強燭向く

[やぶちゃん注：「強燭」読み不詳。強いライトの謂いと思われるが、「がうしよく（ごうしょく）」は如何にも厭な響きではある。但し、あからさまに照らし出してしまうそれを、かくも不快な響きで狙った可能性もなくはなかろう。暫く、それで読んでおく。調べてみると句では弟子の津田清子の句に、「こほろぎに違和の強燭深夜作業」という句があり、用例は他の見知らぬ方の俳句にも複数あって、それらは特殊な読みを附していないから、やはり「ごうしょく」と読んでいるらしい（他に「こはび（こわび）」とか「つよび」の読みもあり得るではあろうが、だったら、ルビを振らないぬのは、諸氏ともに傲慢にして意志不通であろう。しかしまっこと、どれも確かに生理的に厭な響きばかりだ――]

塵なきに掃く菊園に雇はれて

晴天に出る菊人形見終はりて

朝倉路生さん一周忌

路生（みちお）亡き淡路に渡る林檎の荷と

［やぶちゃん注：「朝倉路生」淡路島が詠み込まれていること、朝倉という姓から、句集「海彦」の「淡路島」に出る、『七曜』同人朝倉十艸の本名かと思われる。］

青く近くなり来る淡路路生亡し

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。］

塩凝れる灼土大切沼井に溜め

塩浜子駆ける春日入らざるうち

藤つつじ尾羽しつまらぬ庭雀

うつうつと春蟲苾の一島嶼

［やぶちゃん注：ロケーション不詳。］

菖蒲園花の平らを暮れ鴉

荒地野菊折りゆく幸福溜めてゆく

百合双花盛り見つめて汚れ初む

ベンチ寝の脛に梅雨泥かつと照り

愛は凝視荒地野菊（あれちのぎく）のうすむらさき

蜂一生骸に黄の縞黒の縞

石窟仏白露世界へ蜂放つ

石窟仏露翅の蜂の飛び帰る

［やぶちゃん注：この二句は句集「命終」の「昭和三十三年」の「春日奥山」と同じ、春日山石窟仏での嘱目吟であろう。］

鵙高音愛厚くして生伸す

鵙高音一流水に径断たれ

鹿の毛も椎葉も雨に梳き梳かれ

削げ屑を隠さず朝寒む雀にて

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

浜引の鍬にぎやかに土をどり

［やぶちゃん注：「浜引」は「はまびき」で、入浜式塩田で使用する塩田の地場の塩を掻き混ぜるための道具。防府市教育委員会提供の「防府歴史用語辞典」の「浜引」に『竹の歯がついた浜引［はまびき］で塩田の地場をかきまぜます。さらに、根太［ねだ］と呼ばれた太い木を引き回して、砂をより細かくくだき全体をならしました。太陽熱や風があたる

部分がふえることで、砂が乾くのを助け、塩がつきやすくなります』とある。]

かりかりと灼くる春日塩田ふむ

浜子駈けすなはち塩田筋目つく

[やぶちゃん注：「浜子」は「はまこ」で、子供ではなく、塩田で働く労働者を指す。前記「防府歴史用語辞典」によれば、一つの浜には四人の『浜子がおり、取りまとめ役の庄屋[しょうや]・水門を開けて海水の出し入れをした上脇[じょうわき]・道具などの管理をした三番[さんばん]・炊事係の炊き[かしき]がいました』とある。]

浜引子おのが足跡おのれ消し

鹼水溝蝌蚪生き蜷の途曲る

[やぶちゃん注：「蝌蚪」「かと」で、蛙の子のおたまじゃくし、「蜷」は「にな」で、この場合は腹足類（巻貝）の総称。強烈な塩分濃度の「鹹水溝（かんすいこう）」にも適応する生物がいることへの多佳子の少女のような驚嘆と感慨がある。「途曲る」の力学に、巻貝のしたたかにして確かな、個性的な力強さが良く示されていると貝類フリークの私などは感心するのである。

以上、『俳句研究』掲載分。]

雪渓に無口徹（とほ）して人を恋ふ

[やぶちゃん注：これは底本年譜の昭和三三（一九五八）年七月の条に（十八日以降）、『「流域」の松山利彦に誘われて乗鞍嶽に登る。誓子、利彦ら同行。高山で一泊し、翌朝三千米級の乗鞍三兆近くまで到着。借用の登山服、登山靴で、生まれて初めて雪渓を踏み感激す

る。乗鞍での二日目に台風に遭う。道路決壊し、下山路は途絶。下山不能。山上の山小屋で缶づめとなる。心臓発作おこる。新聞に「病人一人出る。」と出たが、多佳子のことであった。三日後、平湯山嶽部員やリーダーの松井利彦の力により、ザイルを伝い、六里』（凡そ二十四キロメートル弱）『の道を歩いて平湯に下りる。美濃白鳥、郡上八幡を経て岐阜に出』た、とある映画のような経験の中の一句である。「命終」の「昭和三十三年　乗鞍嶽行」の句群も参照されたい。

以上の一句は『俳句』掲載分。多佳子、五十九歳。]

昭和三十四（一九五九）年

金魚繚乱中に一匹よわれるもの

[やぶちゃん注：同年年譜に『初夏、「七曜」吟行句会で、大和郡山市の郡上城趾、金魚養池等に吟行』とあるから、その折りの嘱目吟と考えてよかろう。]

真上より燭の穂のぞき燈籠流す

流燈を放つ放てば還らぬを

率ゐるものありて流燈率ゐられ

遅れたる距離遅れたる流燈ゆく

流燈に言葉托してつき放つ

二流燈互ひに明を保ちつつ

月光界万の流燈行きつぱなし

みづうみに流燈一つだにのこらず

流燈会一精霊を老婆抱く

前燈を抜かず同速流燈にて

流燈群一流燈をまぎれしめ

炎ゆることやすし一流燈焼失

すでに火を入れて流燈重きを担ぐ

密着せる二流燈を風が押す

流燈の消ゆるを冥き湖底待つ

［やぶちゃん注：ロケーション不詳。年譜からも探れない（同年八月の記載がない。多佳子には紀州田辺で見た燈籠流しの句が「紅絲」に載るが、これは十二年も前の昭和二十二年のことで古過ぎ、しかもそれは海岸際でロケーションが全く異なる）。燈籠流しが行われ、或いは当時行われており（現在は海や河川の汚染を問題とし、自治体の中には燈籠を流すことを禁じているケースもある）、しかもそれが「湖」を持つ水系であることが特異的なヒ

ントである。識者の御教授を乞う。

以上、『天狼』掲載分。]

掌でぬぐう泥金色の独楽誕生

天駆ける凧巻向の子が駆ける

[やぶちゃん注：「巻向」は「まきむく」と読み、奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯、巻向川流域の傾斜地を指す、「古事記」「日本書紀」「万葉集」にも出る古くからの地名。旧磯城郡纒向村。正しくは「纒向」であるが、この「まき」の原義は「牧」であったとも考えられている。三世紀頃、弥生末期から古墳前期にかけての「纒向遺跡」がある（一帯は前方後円墳発祥の地とも推定され、また、邪馬台国の中心地に比定する説があり、「卑弥呼の墓」との説もある「箸墓古墳」などの六基もの古墳がある。飛鳥から奈良時代にかけてはこの地域に市が発達し、「大市」と呼ばれた（以上は主にウィキの「纒向遺跡」を参考にした）。]

〆飾の家土でぬりごめ子がわめき

友禅ざらし寒水脛に蟲みつけり

鴨渡るその端の鴨の羽うち急き

寒きシテ女面の裏に眼を瞠き

薪能莚に触る地の固さ

加速度に鎌が疲るゝ豊稲穂

入日池金色重く滲せ河骨

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「河骨」は「かうほね（こうほね）」でスイレン目スイレン科コウホネ属コウホネ *Nuphar japonicum*。和名は根茎が骨のように見えることに由来する。］

芥船水尾かきたつる秋の河

ボート漕ぐ汚れたる河搏ちたのしみ

噴水の力尽きしを風が打つ

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

布晒し彩（いろ）をふみふむ冬の河

雁一連縁につながる葬の尾に

道おしへ道の一キロ短かからず

［やぶちゃん注：「道おしへ」は鞘翅（コウチュウ）目オサムシ亜目オサムシ上科ハンミョウ科ナミハンミョウ *Cicindela japonica* のこと。人が近づくと一、二メートル程飛んで直ぐ着地するという行動を繰り返し、その過程で度々、後ろを振り返るような動作をする本種の習性をうまく詠み込んでいる。なお、「斑猫」全般については、私の「耳嚢　巻之五　毒蝶の事」の注で詳細を述べておいた。是非、参照されたい。］

脱穀機激しや妻もあふりあふり

地にあてて倒れ稲刈る女の鎌

黄落期天の五位鷺翼重(お)も

道仏白露欠けて何か欠け

冬滝山いで来る何を得たりしや

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。多佳子、六十歳。］

昭和三十五（一九六〇）年

寒港を見るや軍港下敷に

［やぶちゃん注：「軍港」呉軍港。次の私の注も参照されたい。この句、句集掲載句ではないが、多佳子が亡くなって五ヶ月後の昭和三八（一九六三）年十月に呉市警固屋音戸の瀬戸公園内に、師誓子の、

天耕(てんかう)の峯に達して峯を越す

の句碑とともに師弟句碑として建っている。なお、参照した「ひろしま文化大百科」のこちらの記載に、この誓子の句については、『山口誓子句集「青銅」の』「広島行」と題する

昭和三七（一九六二）年作の一連十六句の中の一句であるとし、『「倉橋島」の詞書があるので』、この句碑のある場所の対岸の、『今の音戸公園辺りから島の段々畑を遠望しての感慨か』と推定、さらに、『誓子は後に「自選自解」の中で、「天耕」は造語で「耕して天に至る」をつめたものと語り「倉橋島を裾からてっぺんまで見上げると、すっかり耕されている。それどころか、峯を越して裏側にもおよんでいる。そのような天耕ぶりに私は感動した」と述べている』とある。」

牡蠣割女日射せば老いの眼ひらきゐし

牡蠣割の一隅ほつと乳子泣くこゑ

牡蠣割場に一歩無言につきあたる

牡蠣割女休むゴム手套五指ひろげ

なだれる牡蠣一刀もつて牡蠣割女

「やぶちゃん注：これは年譜から、前年の十二月六日に呉で行われた『七曜』支部結成記念俳句大会」に出席した折り、矢野町の牡蠣割場を見学した際の詠吟であろう。この時、広島県呉市吉浦新町の峠で『車を止め、旧要塞の監視台跡から呉軍港を望む』とある。」

昼の苦痛に走馬燈からくり見せ

鉄格子土用赤星真直ぐに容れ

「やぶちゃん注：私はこの句、勝手に杉田久女追懐の夢想句と解していたが、恐らくは多

佳子の入院中（後注参照）の嘱目吟であろう。それでもそこにはやはり久女の幻影が揺らめいているように私は感じている。

以上、『天狼』掲載分。」

川排尿友禅ざらしの水稼ぎ

めし食ふ火寒川に友禅しつめ

友禅ざらし風花にうつむく職

天地寒むしつみ友禅づかづかふみ

暗くぬくきガラス裡深雪より入る

何を叱咤寒き友禅ざらし工

母へ駆く睦火がみんな暮れ尖り

うぐひすや野は火走りし黒遺し

春枯山引きかへさざる鴉の翼（はね）

春の埠頭こゑぬける鉄管に遊び

艀溜り霞みて汚れて陽と襁褓

［やぶちゃん注：老婆心乍ら、「艀溜り」は「はしけだまり」で、河川・運河などの内陸水路や港湾内に於いて重い貨物を積んで航行するために作られた平底の船舶の係留場のこと、「襁褓」は「むつき」で、赤ん坊の「おむつ」である。］

斑猫の誘惑病歩山へかけ

秋さだか重湯（おもゆ）にまじる米の粒

うろこ雲一（ひと）日ベッドになだれなだる

露走り病院ガラスそこが透く

黙つづけ醜きざくろつひに割る

［やぶちゃん注：多佳子はこの年の七月に胆嚢を病んで大阪中之島の大阪回生病院に入院している（三年後の死の直前の開腹手術では肝臓と胆嚢に癌があり、既に周囲リンパ節に転移していたためにそのまま閉腹したことを考えると、この時に既に癌が発症していた可能性が高いかと思われる）が、堀内薫の底本年譜には、この入院を契機として『多佳子俳句の新声、新境地の句』が作られたとして、句集「命終」所載の、

九月来箸をつかんでまた生きる

九月の地蹠（あうら）ぴつたり生きて立つ

を引き、『みずからベッドの上でしゃぼん玉を吹いて遊ぶ』として、同じく「命終」から、

しやぼん玉吹いてみづからふりかぶる

を引く。更に『大喜多冬浪が病気見舞に持参した柘榴を喜ぶ』（大喜多冬浪は「おおきたとうろう」と読む。俳人であること以外は所属など私には不明）として、

紅き実がぎつしり柘榴どこ割つても

深裂けの柘榴一粒だにこぼれず

の二句を同じく引いている（年譜では「割って」もと拗音化してあるが、「命終」に準じた）。この一句もその柘榴の最後の一つででもあったのであろう。

以上、『七曜』掲載分。多佳子、六十一歳。]

昭和三十六（一九六一）年

息かけて何も為さざる手をぬくめる

[やぶちゃん注：この一句は『天狼』掲載分。二年後（昭和三八（一九六三）年）の亡くなる直前の年譜記載に、『右半身の麻痺障害増加』とあり、既にこの頃からそうした症状が出ていたものか。]

枝みかん枝柿ベッドいよいよ狭（せま）

[やぶちゃん注：前年の七月からの入院生活は、十二月十五日の退院で終わっているから、

この句は位置的に見ても前年の入院中の詠である（但し、この年も九月の条に『身体の調子、悪くなる』とある）。以下の始めの方の四句ばかりも、季節から、前年末入院中のものとも思われる。」

仔猫かたまる日溜り落葉吹き溜り

婆婆恋や瞼に秋雨ざんざ降り

冬日雀しやべる嘴（くちばし）実にたのし

冬日浴触れれば蜂の生きてゐる

瀉身を起す爛々除夜の鐘

医家への道焼山が一夜に立つ

鬼追はれつゝ酒の香人の香吐く

鬼平らぎ節分月夜吾立てり

たゆたひて身につく雪一片の大

危を告げる鶯杣の一人仕事

干梅の熱きを天へ投げてうける

干梅の笊西の日に傾けよ

愛母におよばねど梅漬けて干す

道堰きてここにをどりの輪がめぐる

洗ひ髪ゆくところみなしづくして

手足恍惚顔なきをどりの衆

踊り唄太鼓が追うて月の空

ひとの眼も天もまぶしき鵙の朝

青き青き片足ばつた寝屋わけん

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。］

夜の河を遡航エンジン冬来向ふ

こそかさと壁のごきぶり顔見知り

［やぶちゃん注：以上、『俳句』掲載分。多佳子、六十二歳。］

昭和三十七（一九六二）年

着ぶくれておのれを珠のごともてなす

三日来訪の風彦さんに独楽習ふ

独楽習ふかたくな独楽に紐まきては

［やぶちゃん注：「風彦」俳人丘本風彦（おかもとかざひこ）。後に平畑静塔の後を次いで『天狼』編集人となっている人物である。但し、年譜には「三日」ではなく、『元旦』とあり、句集「命終」にも、

元旦、丘本風彦氏来訪。独楽を習ふ。

頭をふつておのれ止らぬ勢ひ独楽

何の躊躇独楽に紐まき投げんとして

掌にまはる独楽の喜悦が身に伝ふ

掌に立ちて独楽の鉄芯吾（あ）をくすぐる

と前書する句が並ぶ。不審である。］

石段をきざみのぼりて泉あり

泉深く尼が十指のかくれなし

日輪が深く全し沼萠ゆる

つくしんぼぞくぞく泣きたければ泣く

桜日日夜は寝昼覚め生残る

［やぶちゃん注：「さくら／ひび／／よはね／ひるさめ／／いきのこる」と訓じておく。個人的に好きな句である。］

桜花にて昼灯つつむ死が過ぎて

生き残り万来の桜身に重く

死に遭ひしあとの重ね着桜の夜々

吾も仔猫捨てたりき戦時なりき

びしよびしよと雨雀ども巣をつくる

盲眼にこの鵜篝の炎えゐるか

盲眼を瞠る鵜篝過ぐるとき

鵜の声すその方へ手を盲鵜匠

［やぶちゃん注：この前年の底本年譜（昭和三六（一九六一）年の七月の条）に、『岐阜長良川河畔の鵜匠山下幹司邸の前庭に、誓子との師弟句碑立つ。両句共に、三十一年七月、鵜舟に乗った時の句。

鵜篝の早瀬を過ぐる大炎上　誓子

早瀬過ぐ鵜飼のもつれもつれるまま　多佳子

除幕式に、誓子、波津子、多佳子、かけい、双々子、薫ら出席。また、東京より三人の娘と三野明彦、武彦。奈良より美代子、稔』とある。山下幹司は既注。この「盲眼」の鵜匠「盲鵜匠」とはこの山下氏を指している。時に誓子満五十九、多佳子満六十二であった。

露の中われは青虫殺し殺し

［やぶちゃん注：以上、『七曜』掲載分。多佳子、六十三歳。］

昭和三十八（一九六三）年

熟柿ありわが寝室（ねや）の冷えとめどなし

ゆげつつむ燈のその下に雉子煮ゆる

熟柿吸ふ咽喉（のど）より冷えが直下して

病者・蟷螂・蜂十一月の日向

昼臥（ひるぶし）やちちろは鈍（にぶ）き疼みに似

豊年の一穂（すゐ）ぬすみぬけ通る

重きに馴腰柿籠を負ひ下る

［やぶちゃん注：以上、『俳句研究』掲載分。］

仰向けの手鏡雪の降りつづく

幽かにてともりたしかに万燈は

万燈会一つ一つの火を点けて

［やぶちゃん注：以上、『天狼』掲載分。多佳子はこの年の五月二十九日午前零時五十一分、満六十四（誕生日は明治三二（一八九九）年一月十五日）で息を引き取った。］

［やぶちゃん注：底本ではこの後、最後に「凩の巻」という西東三鬼と平畑静塔との連句（『俳句研究』昭和二二（一九四七）年九月・十月刊）が所収されているが、平畑静塔の著作権が存続しているので掲載しない。］

橋本多佳子全句集

附やぶちゃん注　完